

第三編  
現

代

# 第一章 政 治

## 第一節 戦後の町政

昭和二十年八月、太平洋戦争が終り、戦後の混乱と人心の不安は全国に及んだ。また、この頃は全国的に食糧不足の時代であったが、同年九月の枕崎台風の余波を受けて、農作物の被害大きく町民の食糧は相当な減収をみた。加えるに内外地よりの引揚者、復員軍人等のため別表のような人口の増加を示し、町当局は食糧の確保に苦勞した。その上敗戦後の思想混乱のため、町政もなかなか容易ではなかった。

昭和十四年八月公選されて以来六年余り、戦争の苦難にたえて町政を担当、ようやく終戦を迎え、これから郷土復興に立ち上がろうとされた森良孝町長は、昭和二十年十月公職追放の余波を受けて退職した。そのあとを受けついで、町長に公選された永田良幹氏は終戦処理、復

員軍人や引揚者の受け入れ、食糧の供出、生活必需品（特に食糧）配給等の事務に心を配り、郷土の再建の陣頭に立った。

こういう戦後の苦しい社会状況の中に、昭和二十年十月十一日婦人参政権が連合軍司令部から指令され、翌二十一年四月十日衆議院議員の選挙が行なわれ、わが牧園町でも初めて婦人が男子の間に交り、選挙投票に参加した。しかし、まだ参政権にあまり関心のない婦人たちにしきりと棄権防止を呼びかけ、棄権防止策を考えたり、全く与えられた参政権、与えられた民主主義といった感じの選挙でもあった。終戦までの国家主義、全体主義が姿を消して、はなばなしくおどり出した民主主義である。戦勝国アメリカのおしつけもあったろうが、今までの強い反動もあった。与えられた感は免かれ得なかったが、ともかく、男女同権の世の中が訪れてきたのである。

前期二十一年四月十日、選出された衆議院議員等による国会では、しきりと新憲法を作るため審議を重ねていたが、ついに、昭和二十一年十一月三日その制定を見た。そして翌二十二年五月三日から施行された。これより、すべての制度が次々に改革されたのである。地方自

治法の制定されたのもその一つであるが、この法律によって地方自治は以前に比べて大きく変わってきた。

## 第二節 地方自治法の制定と牧園

さて、地方自治法の制定で大きく変わったものは、地方自治体の首長（知事、市町村長）は住民の直接投票によること、従来の県市町村会は、議決機関となり、地方の議会の権限が強化されたことである。この地方自治法の制定により、まず昭和二十二年四月五日、知事選挙が行なわれ、重成格氏が第一代民選知事に選ばれた。同時に県下いっせいに、市町村長の選挙も行なわれた。わが牧園町では永田良幹氏が対立候補なく無投票で引続き初代民選町長に選ばれたのであった。また同年四月三十日には町議会議員の選挙が行なわれ、別掲の通り二十六名の議員が決定し、町議会は五月一日から発足をし、議員の中から議長を決めて、議案を決定したのである。議長には松下紀代志氏が就任した。昔から親しまれていた村会、町会の名は町議会となり、町議員は町議会議員と

なり、町議会は議決機関となって執行機関と対等の立場に立ち、地方自治は推進されるようになったのである。

この昭和二十二年には、いわゆる公職追放令も施行され、戦時中に大政翼賛会、翼賛壮年団、在郷軍人分会等の町内における最高の責任者が公職から追放された。

終戦から新しい時代への変化はまことに急激なものであった。生まれ変わった日本、そして牧園も新しい政治にかわっていったが、本章ではそのような変転の中でどのように町政が行なわれたか、議会はどのような働きを示したかについて記述してみる。

地方自治法は昭和二十二年制定され、その後たびたびの改正はあったが、地方公共団体は法人とし、普通公共団体はその公共事務及び法律、またはこれに基く政令により普通地方公共団体に属するもののほか、その区域内におけるその他の行政事務で国の事務に属しないものを処理することとし、次のような例を挙げて市町村自治の方向を示している。

一、地方公共の秩序を維持し、住民及び滞在者の安全、健康及び福祉を保持すること。

二、公園、運動場、広場、緑地、道路、橋梁、河川、運

河、溜池、用排水路、堤防等を設置し、若しくは管理し、またはこれを使用する権利を規制すること。

三、上水道その他の給水事業、下水道事業、電気事業、ガス事業、軌道事業、自動車運送事業、船舶その他の運送事業、その他企業を經營すること。

四、ドック、防波堤、波止場、倉庫、上屋その他の海上または陸上輸送に必要な施設を設置し若しくは管理し、またはこれらを使用する権利を規制すること。

五、学校、研究所、試験場、図書館、公民館、博物館、体育館、美術館、物品陳列所、公会堂、劇場、音楽堂その他の教育、學術、文化、勸業に関する施設を設置し若しくは管理し、またはこれらを使用する権利を規制し、その他教育、學術、文化、勸業に関する事務を行なうこと。

六、病院、隔離病舎、療養所、消毒所、産院、住宅、宿泊所、食堂、浴場、共同便所、公益質屋、授産施設、救護施設等の保護施設、保育所、養護施設、救護院等の児童福祉施設、老人ホーム等の老人福祉施設、身体障害者更生援護施設、留置場、屠場、じんかい処理場、汚物処理場、火葬場、墓地その他の保健衛生、社

会福祉等に関する施設を設置し若しくは管理し、またはこれ等を使用する権利を規制すること。

七、清掃、消毒、美化、公害防止、風俗または清潔を汚す行為の制限その他の環境の整備保全、保健衛生、風俗のじゅん化に関する事項を処理すること。

八、防犯、防災、罹災者の救護、交通安全の保持等を行なうこと。

九、未成年者、生活困窮者、病人、老衰者、寡婦、身体障害者、浮浪者、精神異常者、めいてい者等を救助し、援護し若しくは看護し、または更生させること。

一〇、労働組合、労働爭議の調整、労働教育その他労働関係に関する事務を行なうこと。

一一、森林、牧野、土地、市場、漁場、共同作業場の經營その他公共の福祉を増進するために適當と認められる収益事業を行なうこと。

一二、治山治水事業、農地開発事業、耕地整理事業、公有水面埋立事業、都市計画事業、土地区画整理事業その他の土地改良事業を施行すること。

一三、發明改良または特産物等の保護奨励その他産業の振興に関する事務を行なうこと。

一四、建造物、絵画、芸能、史跡、名勝その他の文化財を保護し、また管理すること。

一五、普通地方公共団体の事務の処理に必要な調査を行ない統計を作成すること。

一六、住民、滞在者その他必要と認める者に関する戸籍、身分証明及び登録に関する事務を行なうこと。

一七、消費者の保護及び貯蓄の奨励並びに計量器及び各種生産物、家畜等の検査を行なうこと。

一八、法律の定めるところにより、建造物の構造、設備、敷地及び周密度、空地地区、住居、商業、工業その他住民の業態に基く地域等に関し制限を設けること。

一九、法律の定めるところにより、地方公共の目的のために動産及び不動産を使用または収用すること。

二〇、当該普通地方公共団体の区域内の公共的団体等の活動の総合調整をすること。

二一、法律の定めるところにより、地方税を賦課徴収し、または分担金、使用料、加入金若しくは手数料を徴収すること。

二二、基金を設置し、または管理すること。

### 第三節 牧園町政四十年のあゆみ

牧園に町制が施行されたのは、昭和十五年四月一日である。初代牧園町長、森 良孝氏。二代、永田 良幹氏。三代、松下 久敬氏。四代、今別府 望氏（昭和五十年五月から現在）へと、既に四十年の歳月が経過している。それは、郷土愛に燃える情熱と、知性のすべてを傾け、日夜全力投球の、ひたむきな歩みの四十年間である。

町制四十周年記念式典が、昭和五十五年十月に盛大に行われ、町企画課で町制施行記念誌「まきぞの四〇」が発行された。この資料により、町制四十年のあゆみを概説してみる。

○昭和十五年……町制施行、牧園町と改称。

牧園町商工会・牧園町観光協会発足

○昭和十六年

三月……牧園町森林組合設立

十二月……太平洋戦争開戦

○昭和十七年

五月……持松・笹段——霧島間道路開通

○昭和二十年

七月……空襲により牧園駅前地区戦災を受く。

八月……終戦。これより郷土再建への苦闘が続く。

十二月……県立加治木中学校・高等女学校として町立青年学校に開設

○昭和二十一年……和氣神社建立成る。(中津川犬飼)

○昭和二十二年……各校区に新制中学校創立

○昭和二十三年

四月……県立加治木中学校・高等女学校の加治木高

校への合併により各分校を合併し、加治木

高校として発足、青年学校廃止により、全

施設を継承。同日、町立定時制牧園高校

(普通科、家庭科)発足

五月……郡農業保険組合より牧園町農業共済組合独

立発足

八月……牧園町農業協同組合設立

○昭和二十四年

八月……加治木高校牧園分校、県立牧園高校として

昇格独立

九月……豪雨による山崩れのため、霧島館全滅の被害を受ける(ジュディス台風)

○昭和二十五年

四月……農林省鹿児島種馬所(高千穂)廃止決定

七月……農林省鹿児島種馬所を払下げ、牧園町営牧場として経営開始

八月……失業対策事業として、総合運動場起工。牧

園町上下水道工事着工

○昭和二十六年

七月……牧園牧場にキャンプ場開設

○昭和二十七年

四月……定時制牧園高校農業科を畜産科に改称

七月……牧園町公営住宅建設始まる。

十一月……牧園牧場に母子寮建築

○昭和二十八年

三月……牧園町営牧場、農林省畜産局競馬部より育成馬十五頭の預託を受け、軽種馬の育成業

務を開始

九月……中津川地区水道施設竣工

○昭和二十九年

三月……牧園高校講堂（現牧園中央公民館）落成

四月……持松、万膳、三体、高千穂の各中学校が独立校となる。

八月……種馬所自治会の高千穂保育園が町立高千穂保育所となる。

。新湯災害発生、死亡者九名

○昭和三十年

三月……関平温泉の源泉を牧園町有として払下げ  
る。

八月……牧園町奨学金制度発足

○昭和三十一年

九月……万膳地区水道施設竣工

十一月……牧園地区水道施設竣工

○昭和三十二年

八月……町営牧場、北海道より綿羊七〇頭購入

。町営牧場、伝書鳩による精液輸送開始

○昭和三十四年

五月……条例改正により議員数を二〇名にする。

○昭和三十五年

一月……塩浸温泉「河鹿荘」オープン（受託者、大

山貴代子）

。町章図案募集

。広報一号発行（県下七七番目）

四月……県農村センター創設（高千穂）

五月……町章決定（万膳落水田、新美清峯さん入選）

十月……国民健康保険制度スタート

。町商工会発足（初代会長、竹下平治）

十一月……町政二十周年記念事業（鹿屋航空自衛隊の  
祝賀飛行）

○昭和三十六年

四月……国民年金制度発足

九月……体協発足（初代会長、佐藤薫）

十月……霧島スカイライン開通（ゲートくえびの間  
五、九八八・七m）

○昭和三十七年

一月……牧園駅を霧島西口駅に改名

五月……皇太子ご夫妻ご来町、林田に一泊

十二月……有線放送開始

○昭和三十九年八月……霧島・屋久国立公園指定

九月……町議友会発足

○昭和四十一年

三月……牧園高校畜産科募集停止

○昭和四十二年

六月……宿窪田く安楽間、バイパス開通

○昭和四十四年

三月……牧園高校畜産科最終卒業式

四月……中学校が統合され、牧園中学校発足

六月……中学校跡に町役場移転

十月……小浜・霧島・牧園三町姉妹盟約

○昭和四十五年

四月……霧島温泉防犯組合発足

十月……町政三十周年。牧園町総合振興計画樹立

○昭和四十六年

二月……大型農道起工

八月……台風による大災害発生（死者七人、損害九億四千万円）

○昭和四十七年

三月……国民休養地建設始まる（三か年計画）

四月……町政週報発刊

十月……国体開催に伴い、体力医学会が本町で開催する。

十一月……牧園・横川町衛生管理組合設立

○昭和四十八年

四月……土地開発公社が発足、本町も加入

五月……国分北消防署開設（当初、分遣所、九月から北署）（高千穂小谷）

。大霧開拓二十五周年記念式典

八月……国民休養地オープン

○昭和四十九年

四月……第一回霧島競馬（牧園牧場にて例年実施）

○昭和五十年

十一月……町長にハガキを出そう運動開始

○昭和五十一年

一月……九面太鼓、神宮奉納で初登場

二月……よろん箱、町内に三十五個設置

四月……住民生活相談室スタート

十月……各校区に公民館組織完成

関平温泉の施設その他一切完全町有となる。



全国植樹祭は、国土緑化運動の中心行事として毎年行われているのであるが、鹿児島県での開催は初めてのことである。それに牧園がえらばれたことは、誠に光栄であり、町発展のために最大の喜びであらう。

#### 第四節 行政機構

わが国は、戦後言語に絶する混乱と貧窮を経験しつつ有史以来の大改革を行ない復興してきた。わが牧園町もそうした渦中から起ちあがり、幾多の苦難を乗り越え、町政を整え、住民福祉増進のため努力してきた。

町のすべての事業は行政に関せぬものはないが、ここでは町政運営の機構について、以下ふれてみたい。

行政機構の変遷（四）をみると、時代の発展進歩にともない、町の行政機構も移り変わり、町政の向上発展のあゆみをうかがい知ることができる。

また、行政嘱託区の変遷（六）をみると、戦前・戦中・戦後とそれぞれの時代に適応した組織がつくられ、町の行政事務や行事への協力態勢がとられている。

昭和三十四年から、自治運営嘱託員制がしかれていたが、このたび牧園町自治公民館長設置規則が定められ、昭和五十四年四月から自治公民館長制となり、現在牧園校区が十区、三体校区が四区、万膳校区が五区、高千穂校区が四区、中津川校区が八区、持松校区が四区にわかれ、町内に三十五人の自治公民館長がいる。

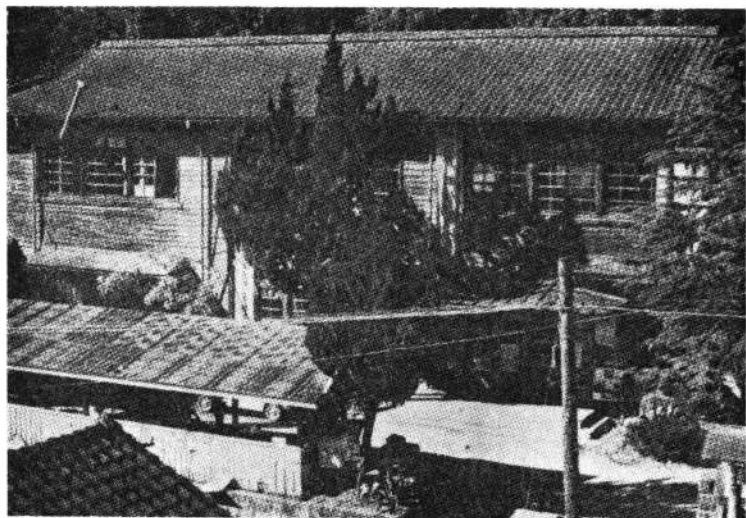
411

(二) 牧 園 町 村 助 役 一 覧 表

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	代
安 橋 長 種 原 山 白 青 橋 池 平 樺 池 山 池 松 松 森	氏  名																	
楽 口 瀬 田 田 口 尾 木 口 田 山 山 田 口 田 下 元																		
安 孝 景 重 慶 郁 寿 佐 友 七 直 祐 尚 研 市																		
雄 二 魁 行 彦 篤 平 郎 介 人 一 重 次 哉 郎 吉 治 介	就  任																	
昭 〃 〃 〃 〃 〃 〃 昭 〃 大 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 明																		
50 42 34 21 21 18 10 5 12 6 42 40 36 34 34 29 25 22																		
・ 6 11 11 11 2 9 6 9 4 11 11 8 8 5 3 4 3 5	退  任																	
昭 〃 〃 〃 〃 〃 〃 昭 〃 大 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 明																		
56 50 42 34 23 21 18 10 5 12 6 42 40 36 34 34 29 25																		
現 在 4 10 4 6 2 9 6 9 4 11 11 8 7 4 3 4 1	在  任																	
7 8 12 2 2 8 4 7 5 8 2 4 2 0 5 4 2																		
・ 5 0 5 4 5 3 9 5 5 0 3 0 2 1 0 0 8																		

(三) 牧 園 町 村 収 入 役 一 覧 表

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	代
坂 柚 川 橋 野 川 永 川 森 種子 須 種子 原 山 永	氏  名														
元 木 畑 口 間 畑 吉 西 直 直 崎 田 田 口 田															
穰 武 照 二 義 一 志 袈 袈 直 直 外 直 重 雄 定															
昭 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 昭 大 〃 〃 〃 〃 明	就  任														
56 50 42 37 28 20 11 9 7 4 40 36 33 25 22															
現 在 6 12 1 11 10 12 1 11 4 4 4 5 5 5															
〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 昭 大 〃 〃 〃 明	退  任														
53 50 42 36 28 20 11 9 7 4 40 36 33 25															
・ 7 4 12 11 11 9 12 1 11 4 4 3 5 5															
3 7 5 8 8 8 2 1 17 8 4 2 8 3	在  任														
・ 1 4 11 0 1 9 11 2 7 0 0 10 0 0															
・ 1 4 11 0 1 9 11 2 7 0 0 10 0 0															



旧町役場全景



現在の町役場

## (四) 牧園町行政機構の変遷 (1)

昭和21年9月 (資料、前町誌)	昭和17年10月 (資料、牧園時報)	昭和11年8月 (資料、牧園時報)
<div>庶務課</div> <div>— 庶務、戸籍、 受付、観光、 赤十字</div>	※初めて課制を設ける  <div>庶務課</div> <div>— 学務、庶務、 戸籍、観光兼 史蹟</div>	<div>庶務係</div> 1人 <div>庶務兼社会係</div> 1人 <div>庶務兼衛生係</div> 2人 <div>会計係</div> 2人 <div>勸業統計係</div> 1人 <div>学務兼社寺係</div> 1人 <div>兵事係</div> 1人 <div>兵事兼戸籍係</div> 1人 <div>戸籍係</div> 1人 <div>税務係</div> 1人 <div>国税係</div> 1人 <div>県税係</div> 1人 <div>村税係</div> 1人 <div>土地係</div> 3人 <div>畜産技手</div> 1人 <div>土木技手</div> 1人 <div>林業技手</div> 1人 <div>村農会</div> <div>— 農林技手 1人 煙草技手 1人 養蚕技手 1人 書記 1人</div>
<div>厚生課</div> <div>— 厚生、学務、 衛生、貯蓄、 復員</div>	<div>総務課</div> <div>— 総務、社会、 貯蓄、兵事、 職業兼衛生</div>	※昭和15年11月より観 光係をおく ※主事制を設け書記補 を廃す(昭15.11月)
<div>経済課</div> <div>— 勸業、配給、 統計、畜産</div>	<div>経済課</div> <div>— 勸業、統計、土畜 統制配給、木、林業、 産</div>	
<div>財務課</div> <div>— 国税、県税、 町税、会計</div>	<div>財務課</div> <div>— 国税、県税、 町税、会計、 土地</div>	
<div>管理課</div> <div>— 土木、土地、 林野</div>	<div>収入役</div> <div>—</div>	
<div>収入役</div> <div>—</div>	※昭和18年5月より教 育主事をおく	

牧 園 町 行 政 機 構 の 変 遷 (2)

昭和33年12月 (資料、町役場)	昭和29年 (資料、町勢要覧)
<div>総務課</div> <div>庶務、受付、統計、営繕建築、住民登録、戸籍、運転手</div>	<div>総務課</div> <div>庶務、受付、戸籍、林野、観光、住民登録</div>
<div>厚生課</div> <div>厚生、消防、自衛隊、保健衛生、失業対策</div>	<div>厚生課</div> <div>厚生、広報社寺、学務、保健衛生、消防、建築</div>
<div>財務課</div> <div>税務、会計</div>	<div>経済課</div> <div>配給、商工、水産、統計</div>
<div>土木課</div> <div>庶務、土木、耕地、水道</div>	<div>財務課</div> <div>税務、土地、会計</div>
<div>農務課</div> <div>勸業、畜産、養蚕、茶業、農事兼漁業</div>	<div>土木課</div> <div>土木、耕地、砂防、上水道</div>
<div>林務課</div> <div>林野、土地</div>	<div>農務課</div> <div>勸業、畜産、養蚕、茶業、開拓</div>
<div>牧場</div> <div>庶務、家畜、耕作</div>	<div>牧場</div> <div>庶務、家畜、耕作、営繕</div>
<div>収入役</div> <div>・教育委員会—教育長—事務局 ・議 会—事務局 ・選挙管理委員会—事務局 ・公平委員会—事務局 ・農業委員会—事務局</div>	<div>収入役</div> <div>・教育委員会—教育長—事務局 ・議 会—事務局 ・選挙管理委員会—事務局 ・公平委員会—事務局 ・農業委員会—事務局</div>

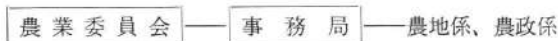
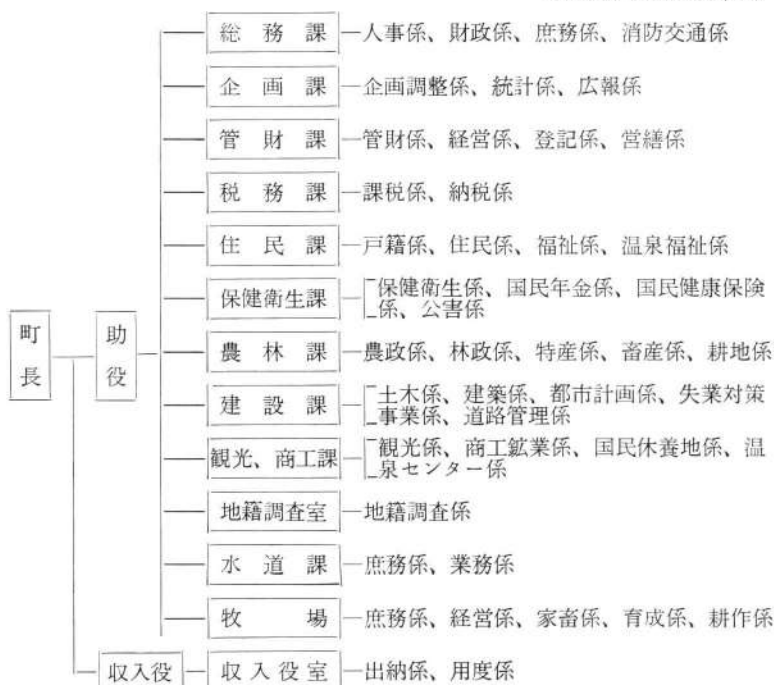
## 牧 園 町 行 政 機 構 の 変 遷 (3)

昭和50年度 (資料、町勢要覧)	昭和42年度 (資料、前町誌)
総 務 課 — 財政、庶務、人事、消防、企画、統計、広報	総 務 課 — 庶務、財務
観光商工課 — 観光商工、国民休養地	企 画 室 — 企画、統計、広報
保健衛生課 — 保健衛生、国保、国民年金	観光商工課 — 観光、商工
住 民 課 — 戸籍、住民、福祉	住 民 課 — 戸籍、住民、国民年金、消防自衛隊
税 務 課 — 課税、納税	税 務 課 — 課税徴収、固定資産評価
建 築 課 — 建築	建 設 課 — 土木耕地、失業対策、建築
土 木 課 — 土木、失業対策、車両	水 道 課 — 水道
水 道 課 — 庶務、業務	農 政 課 — 農業振興、技術
管 財 課 — 林政、財産管理、林業構造改善	林 政 課 — 管理、林業振興
農 政 課 — 農政、特産、畜産、耕地	農業機構改善室 — 企画調査、農業機械
地籍調査室 — 地籍調査	民 生 課 — 福祉、国保、授産所、母子寮、保育所
牧 場 — 庶務、営繕、育成、家畜、耕作	牧 場 — 庶務、種馬、種牛、耕作、育成馬
収 入 役 — 収入役室—出納、用度	収 入 役 — 収入役室—会計、用度
・教育委員—教育長—学校教育課 —社会教育課	・教育委員会—教育長—社会教育、庶務
・議 会—事務局	・議 会—事務局
・選挙管理委員会—事務局	・選挙管理委員会—事務局
・農業委員会—事務局	・農業委員会—事務局
・監査委員—事務局	・監査委員—事務局

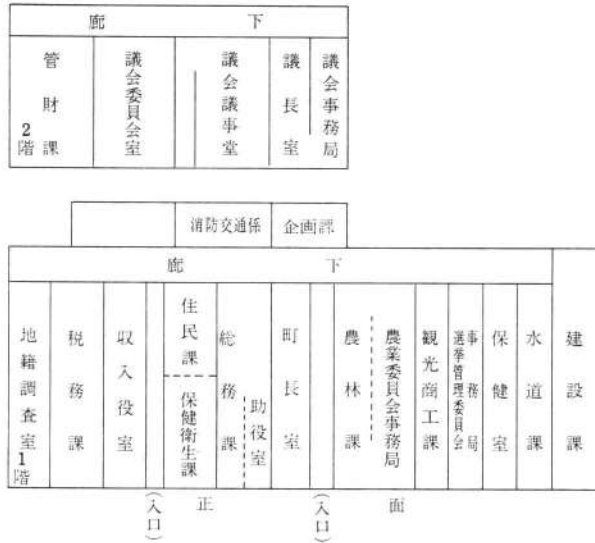
# 第1章 政 治

## 牧 園 町 役 場 機 構

(昭和55年企画課資料)



役場の機構配置図



※ 役場職員は公僕として常に次の4.Sを信条として職務にあたります。

1. Smile(スマイル) ほほえみ
2. Sincerity(シンシリティ) まごころ
3. Speedy(スピーディ) 迅 速 仕
4. Service(サービス) 奉 仕



(五) 牧園町役場処務細則 (牧園町例規集より)

第一章 分課(室) 分掌

第一条 各課の事務を分掌するため次の課等に係を置く。

地籍調査室 地籍調査係  
水道課 庶務係、業務係

第二条 各課等の分掌事項は次のとおりとする。

●総務課

- (一) 典礼儀式に関する事
- (二) 人事給与に関する事
- (三) 予算に関する事
- (四) 条例および規則に関する事
- (五) 法規に関する事
- (六) 文書に関する事
- (七) 職印に関する事
- (八) 電話・暖房に関する事
- (九) 消防・水防・防災に関する事
- (十) 交通安全に関する事
- (十一) 自衛隊に関する事
- (十二) その他、他課に属しない事項

●企画課

- (一) 町政の総合計画ならびに調整に関する事
- (二) 特命事項の調査に関する事
- (三) 土地利用対策に関する事
- (四) 統計調査に関する事
- (五) 広報に関する事
- (六) 町村土地開発公社に関する事

- (七) その他企画調整に関する事

- (八) 課長会に関する事

- (九) 条例および規則に関する事

●管財課

- (一) 町有財産の取得処分および貸貸借に伴う契約に関する事

- (二) 財産台帳の整理ならびに登記に関する事

- (三) 町有住宅の管理に関する事

- (四) 町有造営物の営繕に関する事

- (五) 町有林の育成・管理ならびに立木に関する事

- (六) 町有地の地籍調査に関する事

- (七) 条例および規則に関する事

●税務課

- (一) 町税および国民健康保険税の賦課、徴収に関する事

- (二) 土地台帳、家屋台帳および地籍図・字絵図に関する事

- (三) 納税組合の設立育成に関する事

- (四) 税務関係の諸証明に関する事

- (五) 土地および家屋の評価に関する事

(六) 条例および規則に関すること

●住民課

(一) 配給に関すること

(二) 戸籍に関すること

(三) 住民登録に関すること

(四) 転入・転出に関すること

(五) 犯罪人名簿に関すること

(六) 身元・印鑑・住所の証明に関すること

(七) 人口動態調査に関すること

(八) 外国人登録に関すること

(九) 社会福祉に関すること

(十) 授産所・母子寮および保育所に関すること

(十一) 行路病人・死亡人に関すること

(十二) 軍人恩給に関すること

(十三) 戦傷者、戦歿者に関すること

(十四) 身体障害者に関すること

(十五) 老人福祉センターに関すること

(十六) 関平温泉に関すること

(十七) 条例および規則に関すること

●保健衛生課

(一) 保健衛生思想の普及および保健指導に関すること

(二) 母子保健衛生に関すること

(三) 伝染病予防に関すること

(四) 公衆環境衛生に関すること

(五) 公害に関すること

(六) 国民健康保険事業に関すること

(七) 国民年金に関すること

(八) 牧園・横川町衛生管理組合に関すること

(九) 北始良清掃センター管理組合に関すること

(十) 始良・伊佐環境保全センター管理組合に関すること

こと

(十一) その他保健衛生に関すること

(十二) 条例および規則に関すること

●農林課

(一) 農林業振興に関すること

(二) 農林産物流通対策に関すること

(三) 畜産に関すること

(四) 養蚕に関すること

(五) 茶業に関すること

- (六) 内水面漁業に関すること
  - (七) 森林資源に関すること
  - (八) 治山・砂防・農林道および森林開発に関すること
  - (九) 民有林の育成指導に関すること
  - (十) 森林病虫害の防除および狩猟に関すること
  - (一) 耕地事業および土地改良事業に関すること
  - (二) 海外移住に関すること
  - (三) 農村婦人の家に関すること
  - (四) 生活改善センターに関すること
  - (五) 条例および規則に関すること
- 建設課
- (一) 道路に関すること
  - (二) 河川に関すること
  - (三) 都市計画に関すること
  - (四) 町有建物の建築に関すること
  - (五) 建築指導および申請に関すること
  - (六) がけ地危険住宅に関すること
  - (七) 失業対策事業に関すること
  - (八) 日雇労働者健康保険に関すること
  - (九) 職業の紹介斡旋に関すること

- (十) 各種車両の管理運営に関すること
- (一) その他一般土木に関すること
- (二) 条例および規則に関すること

●観光商工課

- (一) 観光に関すること
- (二) 商工業に関すること
- (三) 鉱業に関すること
- (四) 国民休養地に関すること
- (五) 温泉センターに関すること
- (六) 条例および規則に関すること

●地籍調査室

- (一) 地籍調査に関すること
- (二) 条例および規則に関すること

●水道課

- (一) 水道に関すること
- (二) 条例および規則に関すること

第三条 臨時または特例の事務については、前条の分掌によらないで別に委員または係長を定め処理させることができる。

第四条 以下略

六 行政嘱託区（員）の変遷

年 月	事 項
昭和9年12月	<ul style="list-style-type: none"> <li>町主催で、区長、付属員会が開催され、町より通知、伝達、報告があり、諸調査が依頼されている。</li> </ul>
昭和13年	<ul style="list-style-type: none"> <li>嘱託区は次のとおり（20区） 宿窪田 1区～4区、三体堂 1区～3区、万膳 1区～3区、下中津川 1区～6区、上中津川 1区～2区、持松 1区～2区</li> </ul>
昭和15年4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>牧園に町制施行さる。</li> </ul>
昭和15年10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>部落会が設置され、各校区に連合会長1人。副会長2、3人おかれ、町常会が毎月行われている。</li> </ul>
昭和17年10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>町常会が毎月1日町役場で開催</li> <li>校区連合常会が毎月5日、各校区毎に開催</li> <li>各部落常会が毎月5日～10日の間に開催されている。</li> </ul>
昭和22年9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>下中津川の飛地を割き大字高千穂と改称 六大字を七大字とする。</li> </ul>
昭和28年9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>各校区の嘱託区は次のとおり（33区） 牧園校区 1区～9区、三体校区 1区～3区、高千穂校区 1区～4区、万膳校区 1区～5区、中津川校区 1区～8区、持松校区 1区～4区</li> </ul>
昭和34年4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>自治運営嘱託員制となる。</li> </ul>
昭和42年4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>各校区の嘱託区は次のとおり（34区） 牧園校区 1区～10区、三体校区 1区～4区、高千穂校区 1区～3区、万膳校区 1区～5区、中津川校区 1区～8区、持松校区 1区～4区</li> </ul>
昭和52年	<ul style="list-style-type: none"> <li>各校区に校区公民館長をおく。</li> </ul>
昭和54年4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>自治公民館長制となる。</li> <li>高千穂校区に1区増、自治公民館（区）長35となる。</li> </ul>
昭和55年	<ul style="list-style-type: none"> <li>高千穂校区は、自治公民館区の再編成に取り組み、従来の4区から8区に編成替、昭和56年4月よりスタートの予定 町自治公民館数は39となる予定である。</li> </ul>

資料、牧園時報、町勢要覧による。

(七) 牧園町自治公民館長設置規則

第一条 本町の町行政の円滑なる運営を期するため公民館長を置くものとする。

第二条 公民館長の定数は三十五名とし、任期は二か年（自四月至翌翌年三月）とする。ただし、再任を妨げない。

第三条 公民館長は、別表に定める地域内に居住する世帯主が当該地域内において選出したる区長に対し、町長がこれを嘱託する。

第四条 公民館長において欠員を生じたときは、前条の選出方法により選出された区長を嘱託補充するものとする。ただし任期は、前任者の残任期間とする。

第五条 公民館長は、町長の指揮命令により当該地域内にある諸委員と緊密なる連けいを保ちつつ地方自治法に示された行政運営の万全を期するものとするが概ね次の業務を行なう。

- (一) 文書、その他通知の伝達配布に関すること
- (二) 各種調査報告に関すること
- (三) 納税に関すること

(四) 住民基本台帳法に関すること

(五) 教育・衛生・土木に関すること

(六) 防犯防災・交通安全に関すること

(七) その他一般行政事務に関すること

第六条 公民館長には、牧園町報酬および費用弁償等に関する条例による報酬、費用弁償を支給する。

第七条 公民館長が職務怠慢により行政運営に大なる支障があると認めたとき、町長がこれを免職することができる。

(八) 自治公民館と担当区域

公民館名	担 当 地 域
牧園 第一区	前塩浸・後塩浸・下塩浸・日之出・発電所
牧園 第二区	川原・城山・間手原
牧園 第三区	牧園・城ヶ後
牧園 第四区	下宿窪田・中宿窪田・上宿窪田・堂ノ下・麓・ひばりが丘(1)・ひばりが丘(2)・ひばりが丘(3)・ひばりが丘(4)
牧園 第五区	上瀬戸口・下瀬戸口・田原・上原・真角上・真角下

牧園 第六区	上石坂・中石坂・下石坂・石坂・坂元
牧園 第七区	落水田・中落水田・上芦谷原・中芦谷原 山・中芦谷原中・中芦谷原山・上停車場・ 下停車場
牧園 第八区	川津原・川影・下芦・元芦・北脇・七又・ 七又住宅
牧園 第九区	中福良・中郡・穂・鹿屋・尾谷口
牧園 第十区	西寺原・中寺原・東寺原・轟木A・轟木B
三体 第一区	川床・田方・上宇都口・下宇都口
三体 第二区	上中野・下中野・中野上・中野下・学校住 宅
三体 第三区	坂下・内野々・一本松
三体 第四区	銀湯・大霧下・大霧中・大霧上
万膳 第一区	有村・前有村・後有村
万膳 第二区	東古屋志・西古屋志・古屋志・川窪・和 田・中國・松原・女田・渡瀬・吉原
万膳 第三区	鍔河・新改・成政・九日田・上扇之迫・中 扇之迫・下扇之迫・中福良・西郷・町営住 宅

万膳 第四区	上大窪・中大窪・大窪・府島・永野・下府 島
万膳 第五区	浅谷・水堀A・水堀B
高千穂第一区	林田・硫黄谷附近
高千穂第二区	主として丸尾附近
高千穂第三区	国道二二三号線・小谷川・殿湯川で囲まれ た北側部分
高千穂第四区	国道二二三号線・町道母が野線・高千穂小 々町グランド教員住宅前道路へ雇用促進 住宅横の道路で囲まれた部分
高千穂第五区	町道母が野線と旭が丘住宅を含む殿湯川で 囲まれた部分
高千穂第六区	小谷川より北側
高千穂第七区	小谷川・国道二二三号線・町道母が野線で 囲まれた部分
高千穂第八区	母が野・栗川地区(旧一区)
中津川第一区	下安楽・上安楽
中津川第二区	妙見・折橋
中津川第三区	下犬飼・中大飼・上犬飼・新川・田代

中津川第四区	下荒田・上荒田・戸ノ迫・深谷・古道
中津川第五区	上改田口 <sup>(山)</sup> ・上改田口 <sup>(下)</sup> ・下改田口 <sup>(山)</sup> ・下改田口 <sup>(下)</sup>
中津川第六区	溝口・下越・上越・上荒瀬・中荒瀬・下荒瀬
中津川第七区	通山前・通山後・上湯之元・下湯之元・上鶴・下鶴・健崎下・健崎上
中津川第八区	横瀬西・上湯窪・下湯窪・上馬場・下馬場・下板小屋・中板小屋・上板小屋
持松 第一区	真方上・真方中・真方下・白崎上・白崎中・白崎下
持松 第二区	持松西・持松東・持松中・持松北
持松 第三区	下笹段・中笹段・上笹西・上笹南・川久保・高天原・崩渡・伊勢谷
持松 第四区	東下村・下村・上村・西市後柄・大渡・中春・黒岩

◆高千穂校区の自治公民館区の再編成について  
高千穂校区においては、従来四区の自治公民館区であったが、各区毎の世帯数が余りにも多かったため、昭和

五十五年度の校区公民館事業の一環として、自治公民館区の編成替を取り上げ、鋭意努力中であつたが、このたび新しい自治公民館区（八区）が決まり、昭和五十六年四月から八区の自治公民館としてスタートすることになつてゐる。

◆昭和五十五年度、校区公民館長

牧園校区公民館長・前田 俊明。自治公民館長	十名
三体校区	三名
新宅 宗守。	四名
倉田 一利。	四名
高千穂校区	四名
西園 正雄。	五名
万膳校区	五名
久保寅太郎。	八名
中津川校区	八名
池田 操。	四名
持松校区	四名

第五節 選挙

(一) 選挙権

選挙権については、地方自治法第十八条に次のように明記してある。

日本国民たる年齢満二十年以上の者で、引き続き三箇

月以上市町村の区域内に住所を有するものは、別に法律の定めるところにより、その属する普通地方公共団体の議会の議員及び長の選挙権を有する。

戦後の新しい政治で特に注目すべきことは、女子に参政権が与えられたことである。

## (二) 被選挙権

被選挙権については、公職選挙法第十条に次のように明記してある。

日本国民は、各号の区分に従い、それぞれ当該議員又は長の被選挙権を有する。

- 1、衆議院議員については年齢満二十五年以上の者。
- 2、参議院議員については年齢満三十年以上の者。
- 3、都道府県の議会の議員については、その選挙権を有する者で年齢満二十五年以上のもの
- 4、都道府県知事については、年齢満三十年以上の者。
- 5、市町村の議会の議員については、その選挙権を有する者で年齢満二十五年以上のもの
- 6、市町村長については、年齢満二十五年以上の者と定められ、男女の性別によって選挙権・被選挙権の

区別を受けないようになり、有権者の数は急激に増加した。現在の選挙は、昭和二十五年四月十五日公布せられた公職選挙法により、実施されている。

## (三) 選挙管理委員会

公職選挙法により選挙の事務を遂行するため、牧園町選挙管理委員会が設置されている。現在この委員会は、選挙権を有する者で、人格が高潔で、政治及び選挙に関し公正な識見を有するものの中から、町議会において選挙された四名の選挙管理委員によって構成される。

これは、地方自治法第一八一条、第一八二条の規定に基くものである。また委員を補充するために同じく四名の補充員も選挙される。これらの委員・補充員の任期は、はじめは三年となっていたが、法の改正により現在は任期四年に改められた(地方自治法第一八三条)

選挙管理委員会は、互選によって委員長を定め、合議によって事務を処理し、書記その他の職員を指揮して選挙事務の推進をはかっている。

補充員は、欠員が生じた場合、順次に繰り上がって委員になり事務をすすめる。

最近の委員の交替任期は、次の通りになっている。

昭和三十一年三月より昭和三十四年三月まで 三カ年  
 昭和三十四年三月より昭和三十七年三月まで 三カ年  
 昭和三十七年三月より昭和四十年三月まで 三カ年  
 昭和四十年三月より昭和四十五年現在まで 四カ年

。牧園町選挙管理委員会では、「きれいな選挙、五つの誓い」や標語をかけたたり、棄権防止を呼びかけたりして、明るい選挙推進のための努力がなされている。

#### 四 投票所並びにその変遷

牧園町は、有権者数はさほど多くはないが、広域に分かれていたので、各校区とも一か所の投票所では、投票に不便であり、投票率の低下を招くおそれもあるので、現在十三箇所に投票所を設置している。

#### ◆投票所の変遷、その他

・昭和十年以前は、牧園小学校に一か所、投票所があり、選挙の時は有権者のすべてが牧園小学校まで行って投票している。

・昭和十年九月十五日、投票所を二か所増設「本村に於ては、従来一投票所に於て選挙を行いおりしも、今回左記の通り投票所を増設し、成るべく棄権を少くするようせり」(資料、牧園時報)

。第一投票所Ⅱ牧園小学校、区域、大字宿窪田。大字三  
 体堂。大字下中津川飛地

。第二投票所Ⅱ中津川小学校、区域、大字下中津川の  
 下。大字上中津川。大字持松

。第三投票所Ⅱ万膳小学校、区域大字万膳

1、右投票所により、九月二十五日執行の、県議会議員選挙より投票を行う。

2、租税(国・県・村)滞納処分中の者は、県議員になる資格なく、村長・助役・村会議員等に就職されず、尚その任期中滞納処分をうけると、すぐ失格し、又はその職を失うこととなれり。

尚、昭和十年頃の選挙肅正申合事項として、九月十五日発行の「牧園時報」によると、

1、ブローカーの部落潜入を排除し、その乗すべき余地なきを期すること。

2、買収、響応をなさず、又は之に応ぜざること。

3、部落より、違反者を一名も出さざること。

4、必ず投票すること。

5、投票用紙に、雑事を記載せざること。とあり、右投票所増設に伴い行われた、県議会議員選挙投票の結果

果は、次のようになっている。

◆昭和十年九月県会議員選挙投票率調

大字別	有権者	投票数	棄権数	投票歩合
宿 窪 田	四九一	三六五	一二六	七割四分
三 体 堂	二六四	二〇一	六三	七割六分
万 膳	三六〇	二六三	九七	七割三分
下中津川下	二六九	二〇〇	七〇	七割七分
下中津川上	三二四	二一八	一〇六	六割七分
上 中 津 川	二〇二	一五五	四七	七割六分
持 松	二八三	一三〇	一五三	四割五分
計	二、一九三一	一、五三三	六六一	七割弱

(資料・牧園時報昭和11・2・15号)

・昭和二十二年四月行われた、町議会議員選挙から、投票所は十二か所になっている。これは、婦人に参政権が与えられて、有権者数が急増したためであろう。

・現在(昭和五十五年)の投票所は下表のとおり。

公選法第17条第3項の規定に基づき牧園町における投票区は次のように定められています。

(昭和55年現在)

投 票 区	投 票 場 所	投 票 区 域
第 1 投票所	牧園中央公民館	牧園1～6区、9区
“ 2 “	駅前公民館	牧園7・8区、万膳1区
“ 3 “	万膳小学校	万膳2～4区
“ 4 “	坂下公民館	三体3区、万膳5区
“ 5 “	三体小学校	三体1・2区
“ 6 “	高千穂小学校	高千穂1～4区
“ 7 “	林田集会所	林田、硫黄谷、栄之尾、新湯
“ 8 “	下村公民館	持松3・4区、崩渡、谷門
“ 9 “	横瀬公民館	牧園10区、中津川7・8区
“ 10 “	持松小学校	持松1・2区
“ 11 “	中津川小学校	中津川3～6区
“ 12 “	安楽公民館	日之出、中津川1・2区
“ 13 “	大霧公民館	三体4区

# 第1章 政 治

## ㊦ 牧園町における有権者数と投票率

### (1) 町長、町議選挙

選挙期日	選挙当日の有権者			投 票 者			投 票 率		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
昭和 34. 4.30			8,216			7,087			86.26
〃 38. 4.30			7,909			7,387			93.40
〃 42. 4.28	3,482	4,395	7,877			7,195			91.35
〃 46. 4.25	3,516	4,380	7,896	3,145	3,918	7,063	89.45	89.45	89.45
〃 50. 4.27	3,636	4,463	8,099	3,369	4,111	7,480	92.66	92.11	92.36
〃 54. 4.22	3,794	4,491	8,285	3,485	4,120	7,605	91.86	91.74	91.79

※ 昭和42、46、54年は、町長無投票、町議選のみ

### (2) 知事、県議選挙

選挙期日	選挙当日の有権者			投 票 者			投 票 率		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
昭和 34. 4.23			8,299			7,159			86.26
〃 38. 4.17			7,901			6,529			82.64
〃 42. 4.15	3,570	4,560	8,130			5,920			72.82
※ 〃 46. 4.11	3,584	4,367	7,915	2,301	2,673	4,794	64.85	61.21	62.84
〃 50. 4.13	3,628	4,483	8,111	2,967	3,423	6,390	81.78	76.36	78.78
※ 〃 52. 2.27	3,730	4,548	8,278	2,149	2,402	4,551	57.61	52.81	54.98
※ 〃 54. 4. 8	3,816	4,484	8,300	2,889	3,298	6,187	75.71	73.55	74.54

※ 昭和46、県議無投票。昭和52、知事選のみ。昭和54、県議選のみ。

## (3) 衆議院、参議院選挙

	選挙期日	選挙当日の有権者			投 票 者			投 票 率		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計
衆議院	昭和 35. 11. 20			8,394			6,694			79.75
	" 38. 11. 21			8,255			6,074			73.58
	" 42. 1. 29	3,588	4,516	8,104			6,373			78.64
	" 44. 12. 27	3,667	4,508	8,175	2,740	3,208	5,948	74.72	71.16	72.76
	" 47. 12. 10	3,744	4,752	8,496	2,899	3,474	6,373	77.43	73.11	75.01
	" 51. 12. 5	3,744	4,556	8,300	2,953	3,441	6,394	78.87	75.53	77.04
	" 54. 10. 7	3,928	4,601	8,529	3,221	3,668	6,889	82.74	80.53	81.55
	" 55. 6. 22	3,950	4,618	8,568	3,136	3,641	6,777	79.57	79.10	79.32
参議院	昭和 34. 6. 2			8,459			5,611			66.33
	" 37. 7. 1			8,958			6,449			71.99
	" 40. 7. 4	3,451	4,272	7,723			5,563			72.03
	" 43. 7. 7	3,612	4,527	8,139	2,745	3,064	5,809	76.00	67.68	71.37
	" 46. 6. 27	3,645	4,553	8,198	2,590	2,895	5,485	71.06	63.58	66.91
	" 49. 7. 7	3,801	4,698	8,499	3,034	3,640	6,674	79.82	77.48	78.53
	" 50. 9. 21	3,716	4,530	8,246	1,993	2,148	4,141	53.63	47.42	50.22
	" 52. 7. 10	3,781	4,577	8,358	3,018	3,506	6,524	79.82	76.60	78.06
	" 55. 6. 22	3,950	4,618	8,568	3,135	3,641	6,776	79.55	79.10	79.31

※ 昭和55、衆参同日選挙

(六) 県議會議員（始良郡関係）（資料鹿兒島県史）

◆昭和二十二年四月三十日選出

日高 広為（無） 柏木 栄（無） 別府 孝夫（社） 秋丸 光良（国協） 森山 重志（無） 松下 哲志（無）

戦後第一回、第二回の県議會議員の選挙で、牧園町の森山重志氏が当選している。

◆昭和二十六年四月三十日

秋丸 光良（無） 木原 一夫（無） 柏木 栄（無） 日高 広為（無） 吉満 三次郎（無） 石原田 治雄（無） 森山 重志（自）

◆昭和三十年四月二十三日選出

日高 広為（無） 池田 盛孝（無） 村山 喜一（無） 福村 厚行（無） 中村 義種（無） 東 政則（右社）

◆昭和三十四年四月二十三日

秋丸 光良（自） 村山 喜一（社） 小里 貞利（無） 吉留 元（社） 森 安男（無）

◆昭和三十八年四月十七日

秋丸 光良（自） 吉留 元（社） 松下 兼武（社） 小里 貞利（自）

◆昭和四十二年四月十五日選出

小里 貞利（自） 松下 兼武（社） 秋丸 光良（自） 吉留 元（社）

◆昭和四十六年四月十一日

始良郡区は無投票

◆昭和五十年四月十三日選出

小里 貞利（自） 溝口 宏二（自） 松下 兼武（社） 吉留 元（社）

◆昭和五十四年四月八日選出

小里 貞利（自） 溝口 宏二（自） 浜田 稔（社） 吉留 元（社）

(七) 国會議員 （資料・鹿兒島県史）

◎衆議院議員（鹿兒島県第二区の分）

◆昭和三十五年十一月二十日選出

中馬 辰猪（自） 村山 喜一（社） 池田 清志（自）

◆昭和三十八年十一月二十一日選出

村山 喜一（社） 池田 清志（自） 中馬 辰猪（自）

◆昭和四十二年一月二十九日選出

中馬 辰猪（自） 村山 喜一（社） 池田 清志（自） ◆昭和四十四年十二月二十七日選出

中馬 辰猪（自） 池田 清志（自） 有馬 元治（無）

◆昭和四十七年十二月十日選出

村山 喜一(社) 中尾 宏(無) 中馬 辰猪(自)

◆昭和五十一年十二月五日選出

中馬 辰猪(自) 村山 喜一(社) 有馬 元治(自)

◆昭和五十四年十月七日選出

当選者の牧園町における得票数は次のとおりである。

る。

小里 貞利(自) 三、四五六。村山 喜一(社) 一、五

〇五。有馬 元治(自) 四二一。

◆昭和五十五年六月二十二日選出

当選者の牧園町における得票数は、次のとおりである。

る。

小里 貞利(自) 三、九二一。村山 喜一(社) 一、六

二〇。有馬 元治(自) 九三六。

◎参議院議員(地方区の方)

◆昭和三十四年六月二日選出

西郷 吉之助(自) 谷口 慶吉(自)

◆昭和三十七年七月一日選出

田中 茂穂(自) 佐多 忠隆(社)

◆昭和四十年七月四日選出

西郷 吉之助(自) 谷口 慶吉(自)

◆昭和四十三年七月七日選出

田中 茂穂(自) 川上 為治(自)

◆昭和四十六年六月二十七日選出

柴立 芳文(自) 鶴園 哲夫(社)

◆昭和四十九年七月七日選出

井上 吉夫(自) 久保 亘(社)

◆昭和五十二年七月十日選出

金丸 三郎(自) 田原 武雄(自)

◆昭和五十五年六月二十二日選出

当選者の牧園町における得票数は、次のとおりである。

る。

井上 吉夫(自) 三、一三〇。

川原 新次郎(自) 九三五。

(ハ) 明治の選挙(牧園事件) (鹿児島県政党史より)

。第五区(河島対高橋) 民党・史党の競争

第五区即ち、始良、伊佐の二郡は、民党の河島醇と、史党の高橋為清とが打って出た。この区における民党の根拠地は、旧桑原郡の栗野・横川・牧園方面であって、栗野の有村連・横川の折田甚平・牧園の森市介・吉松の

古川重近などが、民党の驍將として大いに奮戦努力したから、この地方に於ける民党の勢力は八十九部を占めていた。そこで、吏党側にては、この本拠を打ちこわさねば到底勝算覓えなしとみてとって、一にも二にも、警官の干涉圧迫に待つこととしたから、非常なる惨劇が演ぜられたのであった。

かくて、争奪戦がいよいよ激しくなつてくると、両派の壮士は、路傍に張番をして往来の人を捉へ、お前は民党か、吏党かと誰可する。若し反対側であつたら、威嚇して我に加担を盟わする。或は抑留して諾と云うまで積さぬという騒ぎなので、全然戦闘場裡にあるかのよう、甚だ不穩の状態となつた。すると警官は民党側の主なる連中に対して、予戒令を執行し、出入行動の自由を制するなど、あらゆる圧迫を加えるので、民党の警官を嫉視する益々甚だしく、しばしば警官と民党との間に、椿事を惹起せんとする形勢となつたから、民党候補者河島醇は、大いに憂慮し、かくの如く警官が極端なる干涉暴虐を敢てする以上は、いかなる罪名をくつつけて、候補者までも、羅織せんとも限らぬから、吾党は、少し競争の手を緩ふすべく壮士を戒しめた位であつた。如何に激戦で

あつたかは推知さるるであらう。

干涉の暴力斯の如く、激甚を加えて来たので、自然民党の壘も多少潰えたのであつたが、而かも民党側は、大局の上からみて、六十余票の差で勝を制するの形勢なので、加治木に於ける吏党側の飛將軍落合仲之助は、十数名の壮士を率いて同地方に乗り込み、投票箱の奪取を企てたから、さなきだに殺気立ちたる民党壮士は、何を猪口才なとばかり一斉に起つて、敵党に打ってかかり、棍棒飛び、剣戟閃めくの修羅場を現出して、幾多の負傷者を生じ、犯罪者を出したので、後に至るまで牧園事件と伝え、有名な騒ぎであつた。

(資料・鹿児島県政党史・薩藩史料調査会編。明治二十五年二月、第二回衆議院選挙の折の記録より)

## 第六節 議 会

### (一) 牧園町議會

明治二十二年町村制実施により、踊郷は牧園村と改称し、従前の宿窪田村、三休堂村、万膳村、下中津川村、

上中津川村、持松村の六ヶ村は、六つの大字となった。

牧園村議会議員の第一回選挙は、明治二十二年八月に執行された。第二回から大正十年階級制撤廃まで、他町村においては、一級議員、二級議員と階級制による半数改選の選挙が行われているが、本村の場合その辺の事情はわかっていない。

議員定数は後記のとおりであるが、牧園町においては昭和十七年に選挙された町会議員二十四人が、終戦後も引続き在職し、戦後の町行政のあり方につき検討し、終戦処理、郷土復興のために尽力した。

町議会の議長は、従来町長がつとめてきたのであるが昭和二十一年十一月三十日より、町長が議長になることをやめ、橋口郁介氏を議長とした。また、この間に新しく選挙管理委員会設置のことも議決した。

昭和二十一年四月十日に、衆議院議員の総選挙、翌二十二年四月五日、知事選挙と同時に町長の選挙も実施されたが、牧園町では町長の立候補者が、前町長永田良幹氏一名のみで、無投票当選となり、知事選挙のみ実施した。

引続き、昭和二十二年四月三十日始めて新しい選挙制

度による町議会議員の選挙が行なわれ、二十六名の議員が選出された。そして議長には松下紀代志氏、副議長に改元金蔵氏が選ばれた。

その後、議員定数、減少条例によって、町議会議員の定数が減り、昭和三十四年五月の選挙からは、二十名の議員を選出することになり、現在に至っている。議員の任期は四か年と定められており、議会が議決しなければならぬ事件、案件は地方自治法に次のように定めてある。

。条例を設け、または改廃すること。

。予算を定めること。

。決算を認定すること。

。法律またはこれに基づく政令に規定するものを除くほか、地方税の賦課徴収または分担金、使用料、加入金、若しくは手数料の徴収に関すること。

。その種類及び金額について政令で定める基礎に従い

条例で定める契約を締結すること。

。条例で定める場合を除くほか、財産を交換し、出資の目的とし、若しくは支払い手段として使用し、または適正な対価なくしてこれを譲渡し、若しくは貸

し付けること。

。前号に定める場合を除くほか、その種類及び金額について、政令で定める基準に従い条例で定める財産の取得または処分をすること。

。負担付きの寄附または贈与を受けること。

。法律若しくはこれに基づく政令または条例に、特別の定めがある場合を除くほか、権利を放棄すること。

。条例で定める重要な公の施設につき、条例で定める長期かつ独占的な利用をさせること。

。普通地方公共団体が、その当事者である審査請求その他の不服申し立て、訴えの提起・和解・斡旋・調停及び仲裁に関すること。

。法律上その義務に属する、損害賠償の額を定めること。

。普通地方公共団体の、区域内の公共的団体等の活動の総合調整に関すること。

。その他法律またはこれに基づく政令により議会の権限に属すること。

。右に定めるものを除くほか、普通地方公共団体は、条例で普通地方公共団体に関する事件につき議会の

議決すべきものを定めることができる。

議会の招集は町長が行なう。議員定数の四分の一以上の者から、会議に付議すべき事件を示して、臨時会の招集の請求があれば、町長はこれを招集しなければならない。この招集は開会の日の前三日までに、告示しなければならない。規定であるが、急を要する場合はこの限りではない。

町議会は、定例会と臨時会とに区別し、定例会は年四回と条例で定めてある。

町議会は、議長及び副議長を各一名、議員の選挙により定める。議長は議場の秩序を維持し、議事を整理し、議会の事務を統理し、議会を代表するものである。副議長は議長事故あるとき、または議長が欠けた場合に、議長の職務を行なう。

議長、副議長ともに事故あるときは、仮議長を選挙でたて、議長の職務を行なわせることもあり、年長の議員が、臨時議長として、議長、副議長、仮議長の選挙を進める場合もある。

議会には、常任委員会がおかれている。常任委員会には、議員がそれぞれ一箇の常任委員になることになって

おり、会期の始めに議会で選任する。常任委員会は、その部門に属する町の事務に関する調査を行い、議案・陳情等を審査する。また予算その他重要な議案・陳情等について、公聴会を開き、真に利害関係を有する者、または、学識経験者から意見をきくことができる。

本町議会には、条例によって事務局がおかれ、事務局長がいて議長の命を受けて、議会の庶務を掌理し、書記その他の職員も、上司の指揮を受けて、議会の庶務に従事している。

明治二十二年以降の議員名は次のとおりであるが、明治以降今日までの議員数五二一名中、唯一人の女性の名が、昭和二十二年選出議員の中に見える。戦後女子の参政権が認められた直後、女性の議会進出は、牧園町にとって特記さるべきことであらう。

(二) 歴代議員名

◎明治二十二年八月選出 12人

松元 研治 荒武 馮輔 田島 源八  
貴島 彦二 種子田 雄介 松下 源七郎  
春田 幸藏 原田 重頼 池田 武二

津曲 兼治 森 市介 永田 定介

◎明治二十三年二月選出 12人

西田 矢次郎 荒武 馮輔 田島 源八  
貴島 彦二 種子田 雄介 松下 源七郎  
春田 幸藏 原田 重頼 池田 武二  
津曲 兼治 森 市介 池田 平真

◎明治二十五年三月選出 18人

津曲 兼治 池田 平真 小原 堅一郎  
唐仁原 藤之進 種子田 雄介 荒武 馮輔  
田島 源八 池田 武二 南 半四郎  
迫 金次郎 木佐貫 七太郎 松下 源七郎  
中村 十郎 池上 矢次郎 原田 重頼  
川原 平太 春田 幸藏 西田 矢次郎

◎明治二十九年三月選出 18人

山口 直哉 春田 幸藏 山下 弥五右エ門  
津曲 兼治 田島 源八 野間口 十左エ門  
川原 平太 木佐貫 七太郎 松下 源七郎

第1章 政治

荒武 馮輔 永山 十郎 池上 矢次郎  
迫 金次郎 南 半四郎 末野 直二  
松下 直吉 小原 憲一郎 唐仁原 藤之進

◎明治三十一年四月選出 18人

津曲 兼治 松下 源七郎 唐仁原 藤之進  
野間口 十左エ門 荒武 馮輔 池田 六郎次郎  
田島 源八 山下 弥五右エ門 湯窪 源四郎  
永山 十郎 春田 幸藏 池上 矢次郎  
種子田 雄介 迫 金次郎 山元 万左エ門  
末野 直二 川原 平太 木佐貫 七太郎

◎明治三十四年四月選出 18人

辺田 伝兵衛 川路 太郎左エ門 湯窪 源四郎  
山元 万左エ門 木佐貫 嘉左エ門 木佐貫 彦太郎  
池田 六郎次郎 永田 貞雄 青木 孝次郎  
春田 幸藏 松下 源七郎 松下 四郎次  
木佐貫 善兵衛 永山 十郎 津曲 兼治  
瀬戸口 伊兵衛 田島 源八 種子田 雄介

◎明治三十七年四月選出 18人

德永 利兵衛 森 市介 西田 平吉  
永山 十郎 板越 信輔 青木 孝次郎  
田島 源八 木佐貫 善兵衛 種子田 雄介  
刀迫 勇助 川路 太郎左エ門 永田 貞雄  
松下 四郎次 辺田 伝兵衛 松下 源七郎  
迫 金次郎 瀬戸口 伊平次 木佐貫 嘉左エ門

◎明治四十年四月選出 18人

松下 尚吉 山下 住恒 迫 金次郎  
山口 正太郎 刀迫 勇助 板越 信輔  
木佐貫 嘉左エ門 森 市介 種子田 雄介  
樺山 友重 唐仁原 五兵衛 青木 孝次郎  
德永 利兵衛 松下 源七郎 田島 源八  
松下 四郎次 通山 末太郎 西田 平吉

◎明治四十三年四月選出 18人

田島 源八 山口 直哉 辺田 袈裟次郎  
山田 早藏 松下 源七郎 樺山 友重  
池田 寿一 通山 末太郎 唐仁原 五兵衛

代 現 編 第3

德永利兵次 境田袈裟助 松下尚吉  
畦地吉左エ門 種子田直知 谷口清之助  
本村次助 唐仁原雄一 森市介

◎大正二年四月選出 18人

松下直吉 松下紀代志 田島源八  
樺山友重 通山末太郎 本村次助  
山下弥五エ門 辺田袈裟市 和田喜太郎  
池田寿一 下石坂八太郎 池田七次  
津曲湊 厚地善兵衛 猪木袈裟助  
前田市助 大山武二 唐仁原雄一

◎大正六年四月選出 18人

松田新助 南仁八 本村次助  
宮原佐熊 和田喜太郎 樺山友重  
宇都寅助 森直一 猪木袈裟助  
山口直哉 池田半助 松下紀代志  
松下尚吉 須崎外助 安栖喜次郎  
小原熊右衛門 中小路十助 木佐貫善兵衛

◎大正十年四月選出 18人

黒岩東吉 宮原種満 田島源一  
松下紀代志 安栖喜次郎 森直一  
山下利松 宮原左熊 澤七郎  
黒江甚右衛門 市来勇吉 津曲湊  
有馬次左衛門 本村袈裟次郎 堀之内甚助  
樺山友重 須崎外助 永岩雄助

◎大正十四年四月選出 24人

田島助太郎 板越信輔 黒岩東吉  
宮原種満 有馬綱吉 野元八之進  
富田重治 神田次郎助 中小路五兵衛  
猪木袈裟助 森山重志 田島源一  
安栖権右衛門 永田実 永岩雄助  
山元喜助 樺山友重 長崎末吉  
宮原左熊 堀切末彦 森直一  
松下紀代志 澤七郎 床次栄熊

◎昭和四年四月選出 24人

宮原種満 木佐貫邦二 堀之内三之助

第1章 政治

改元金藏 岩田敬造 篠宮時吉  
田島源一 森山重志 平山仙兵衛  
堀切末彦 山元喜助 森直一  
種子田淳一 山口喜兵次 神田次郎助  
永田安愛 市来勇吉 安栖権右衛門  
園田市彦 荒木仁次郎 長崎利兵衛  
永田実 松下紀代志 松田新三  
(繰上当選) 山下盛太

◎昭和八年四月選出 (資料・牧園時報) 23人

宮原種満 改元金藏 岩田敬造  
篠宮時吉 森山重志 堀切末彦  
市来勇吉 荒木仁次郎 長崎利兵衛  
松下紀代志 山下盛太 窪田仲市  
長崎末吉 南仁八 早水松彦  
前田市助 松田新三 池上栄治  
田島休次郎 猪木袈裟助 小谷正吉  
永岩雄助 通山仁八

◎昭和十二年四月選出 (資料・牧園時報) 24人

宮原種満 南仁八 通山仁八  
改元金藏 池上栄治 松下紀代志  
森山重志 松田新三 黒江清  
猪木袈裟助 小谷正吉 福田三熊  
大窪清吉 有馬綱吉 窪田仲市  
時任宗熊 市来勇吉 池田貞義  
池田兼盛 中園義盛 早水松彦  
永岩雄助 小原重行 長崎利兵衛

昭和十二年の村会議員選挙は、四月十一日行われている。立候補者数三十八名余り、当選者の最高得票数が

有権者数	投票者数	有効投票	無効投票	投票率
二、二六三	一、九三四	一、八五一	八三	八五%

九二票、最低は三八票で当選している(昭和十二年五月十五日号牧園時報による)

◎昭和十七年五月選出 (町会議員選挙)

森山重志 池田宗吉 梶原茂樹  
白尾平 中村逸志 改元金藏  
牧園時報 24人

現代編第3

塚田直吉 床波栄熊 西長吉  
田方高 清山 下勇助 樺山蘇吉  
木佐貫宗近 永野勇吉 福村利雄  
松下紀代志 永田安愛 種子田莊九郎  
鎌田朔郎 橋口郁介 堀切末彦  
槐島栄吉 西藤尚道 正市熊右衛門

◎昭和二十二年四月選出 26人

山口兼明 隈元重利 鶴ヶ野吉左エ門

酒瀬川愛熊 湯原岩助 黒葛原整二

重信重雄 山下静 木佐貫ミナ

田島辰二 田島秀行 鳥丸重義

堀切清行 宇都武熊 三宅文雄

中國義盛 松下紀代志 井丸勇敏

川西袈裟助 神之村政雄 池上栄助

改元金藏 永田芳理 上野輝男

市来勇雄 黒木芳則

◎昭和二十六年四月選出 26人

大山勇吉 永田理 甲斐清市

池上栄助 鯨坂慶二 川西袈裟助  
西園正雄 間手原玲爾 安楽文吉  
池田貞義 重水喜兵衛 前田嘉次郎  
神之村政雄 森広良 改元金藏  
重信佐熊 井丸勇敏 新宅宗守  
小谷喜一 前田濟 松下記代志  
上野輝男 安栖武二 篠原政義  
南郷武吉 正市熊右衛門

◎昭和三十年四月選出 26人

正市熊右衛門 池田貞義 小谷喜一

池上栄助 改元金藏 西園正雄

川西栄 高木清信 前田嘉次郎

山下益男 甲斐清市 南郷武吉

市来勇雄 重水喜兵衛 原田重之

東福浅吉 白尾平 原田重彦

松下久敬 池田光重 重信佐熊

森広良 永田理 間手原玲爾

前田直吉 川崎正則 上野輝男

(川崎正則転出のため退職・上野輝男繰上就任)

第1章 政治

池上栄助	竹下平治	高木清信	高木清信	園田貞雄	塚田操	芝原憲一	西園正雄	池上栄助	竹下平治	高木清信	高木清信	園田貞雄	塚田操	芝原憲一	西園正雄	◎昭和三十四年四月選出 20人
唐仁原重満	西園正雄	梶原茂樹	安栖豊	竹下平治	橋元英雄	下南耕夫	白尾平	上野輝男	永田輝理	永田輝理	永田輝理	新宅宗守	永江早見	森廣良	直香	◎昭和三十八年四月選出 20人
福村操	山下益男	森廣良	田中盛夫	永田耕一	永峯清信	福村操	山下益男	永田輝理	永田輝理	永田輝理	永田輝理	新宅宗守	永江早見	森廣良	直香	◎昭和四十二年四月選出 20人
黒木芳則	南郷武吉	大保清	蔵前壯吉	永峯清信	永峯清信	川西榮	早水貞二	改元繁樹	改元繁樹	改元繁樹	改元繁樹	蔵前壯吉	永峯清信	永峯清信	永峯清信	◎昭和四十六年四月選出 20人(年令順)
塚田操	神之村政雄	高木清信	甲斐清市	塚田虎二	竹下平治	高木清信	下園軍吉	西園正雄	西園正雄	西園正雄	西園正雄	甲斐清市	塚田虎二	竹下平治	新宅宗守	◎昭和五十年四月選出 20人(年令順)
馬場正道	橋元英雄	飯田重政	馬場正道	橋元英雄	飯田重政	馬場正道	橋元英雄	飯田重政	馬場正道	橋元英雄	飯田重政	馬場正道	橋元英雄	飯田重政	馬場正道	◎昭和五十四年四月選出 20人(年令順)
梶原茂樹	南郷武吉	池上孝重	新宅宗守	永江早見	飯田重政	梶原茂樹	南郷武吉	池上孝重	新宅宗守	永江早見	飯田重政	梶原茂樹	南郷武吉	池上孝重	新宅宗守	◎昭和五十八年四月選出 20人(年令順)

森 飯 永  
田 瀬  
廣 重 魁  
良 政 阿  
瀬 隈 多  
戸 元 一  
口 兼 雄  
幸 義  
森 川 永  
脇 上 江  
勝 莊 早  
美 一 見

◎昭和五十四年四月選出 20人(年令順)

職・川上莊一 50・6・28(就任)



牧園町議会議員

森 廣 良  
藏 前 壯 吉  
瀬 戸 口 幸  
池 田 操  
猪 木 満 徳  
永 中 盛 夫  
田 耕 一  
永 田 一  
本 田 実  
隈 元 吉 男  
大 坪 明  
川 上 莊 一  
50・6・24 辞  
(瀬戸口幸)

氏 名	就任年月日	退任年月日
橋 口 郁 介	昭和 21・11・30	昭和 22・4・30
松 下 紀 代 志	昭和 22・6・14	昭和 26・4・30
池 上 栄 助	昭和 26・7・3	昭和 38・4・30
竹 下 平 治	昭和 38・5・10	昭和 54・4・30

1 歴代議長

戦前は、町村長が議長を兼務していたが、昭和二十一年十一月地方制度改正により、議長は議会において、議員の中より選出することになった。  
歴代議長・副議長は次のとおり

(三) 歴代議長・副議長  
総務委員会(六名・池田・猪木)  
経済建設委員会(七名・本田・阿多)  
文教厚生委員会(六名・大坪・飯田)

◎常任委員会(定数・委員長・副委員長) 54・5・5

56・5・5

池 田 操 猪 木 満 徳 中 野 茂  
田 中 盛 夫 永 田 耕 一 本 田 実  
今 東 庸 浩 栗 山 輝 昭 隈 元 吉 男  
北 野 長 年 大 坪 明

議員定数	年	代	備	考
一二名	明治22・3	明治25・2		
一八名	明治25・3	大正14・3		
二四名	大正14・4	昭和22・3		
二六名	昭和22・4	昭和34・3		
一〇名	昭和34・4	現在		定数減少条例による。

(四) 牧園町議会議員定数の変遷

氏 名	就任年月日	退任年月日
山口 兼明	昭和21・11・30	昭和22・4・30
改元 金藏	昭和22・6・14	昭和26・4・30
永田 理蔵	昭和26・7・3	昭和36・5・11
竹下 平治	昭和36・5・11	昭和38・4・30
西園 正雄	昭和38・5・10	昭和40・4・20
上野 輝男	昭和40・4・24	昭和42・4・30
森野 広良	昭和42・5・9	昭和52・5・30
新宅 宗守	昭和52・5・10	昭和54・4・30
永江 早見	昭和54・5・8	現在

2 歴代副議長

森 広良	昭和54・5・8	現在
------	----------	----

(五) 常任委員会の機構変遷

常 任 委 員 会 名	備	考
農林	昭和26・4・31	9
総務・経済・土木・厚生・財務・		
農林		
総務・文教厚生・農林土木	昭和31・10	1
総務・文教厚生・建設経済	昭和36・5・5	5
総務文教・農林民生・建設商工	昭和40・5・5	5
総務文教・農林住民・建設商工	昭和44・6・5	5
総務文教・農林住民・建設観光	昭和50・5・5	5
総務・経済建設・文教厚生	昭和54・5・5	5

(六) 昭和五十五年町議会議案

- 1、牧園町立牧園牧場設置条例の一部改正について。
- 2、固定資産評価員の選任について。
- 3、牧園町振興計画審議会条例の一部改正について。
- 4、牧園町総合開発審議会条例の一部改正について。
- 5、昭和五十四年度牧園町一般会計補正予算(第九号)
- 6、昭和五十四年度牧園町国民健康保険事業特別会計補正予算(第三号)
- 7、昭和五十四年度牧園町水道事業特別会計補正予算(第四号)



牧園町議会風景

- 8、昭和五十四年度牧園町塩浸温泉センター事業特別会計補正予算（第三号）
- 9、昭和五十四年度牧園町国民休養地事業特別会計補正予算（第四号）
- 10、牧園町立牧園牧場設置条例の一部改正について。
- 11、牧園町報酬および費用弁償等に関する条例の一部改正について。
- 12、町長等の給与等に関する条例の一部改正について。
- 13、教育長の給与等に関する条例の一部改正について。
- 14、職員等の旅費に関する条例の一部改正について。
- 15、牧園町消防団員の定員、任免、給与、服務および設備資材条例の一部改正について。
- 16、牧園町用品調達基金の設置、管理および処分に関する条例の一部改正について。
- 17、牧園町分担金徴収条例の一部改正について。
- 18、牧園町営塩浸温泉センター設置および管理に関する条例の一部改正について。
- 19、牧園町児童養育手当支給条例の一部改正について。
- 20、霧島高原国民休養地設置および管理に関する条例の一部改正について。
- 21、牧園町農業構造改善事業協議会設置条例の廃止について。
- 22、牧園町農村婦人の家設置および管理に関する条例の一部改正について。
- 23、牧園町水道事業給水条例の一部改正について。
- 24、牧園町減債基金の設置、管理および処分に関する条例の制定について。
- 25、牧園町総合振興計画基本構想の制定について。
- 26、鹿児島県市町村自治会館管理組合規約の一部変更について。

- 27、昭和五十五年牧園町一般会計予算
- 28、昭和五十五年牧園町国民健康保険事業特別会計予算
- 29、昭和五十五年牧園町牧場事業特別会計予算
- 30、昭和五十五年牧園町水道事業特別会計予算
- 31、昭和五十五年牧園町塩浸温泉センター事業特別会計予算
- 32、昭和五十五年牧園町国民休養地事業特別会計予算
- 33、牧園町庁舎建設基金の設置・管理および処分に関する条例の一部改正について。
- 34、牧園町道路線の廃止について。
- 35、牧園町道路線の認定について。
- 36、昭和五十五年牧園町一般会計補正予算(第一〇号)
- 37、昭和五十四年度牧園町水道事業特別会計補正予算
- 38、専決処分の承認を求めることについて。
- 39、専決処分の承認を求めることについて。
- 40、専決処分の承認を求めることについて。
- 41、牧園町報酬および費用弁償等に関する条例の一部改正について。
- 42、昭和五十五年牧園町一般会計補正予算(第一号)
- 43、牧園町分担金徴収条例の一部改正について。
- 44、牧園町国民健康保険税条例の一部改正について。
- 45、牧園町生活改善センター設置および管理に関する条例の制定について。
- 46、財産の無償貸付について。
- 47、水道施設無償譲り受けに伴う牧園町高千穂地区簡易水道事業施設の一部給水区域の拡張について。
- 48、昭和五十五年牧園町一般会計補正予算(第二号)
- 49、昭和五十五年牧園町水道事業特別会計補正予算
- 50、昭和五十五年牧園町塩浸温泉センター事業特別会計補正予算(第一号)
- 51、昭和五十五年牧園町国民休養地事業特別会計補正予算(第一号)
- 52、牧園町公の施設に関する条例の一部改正について。
- 53、牧園町議会委員会条例の一部改正について。
- 54、昭和五十五年牧園町一般会計補正予算(第三号)特別委員会の設置について(空港、霧島間道路整備促進特別委員会)。
- 特別委員会の設置について(議会報発行特別委員会)。

- 鹿兒島空港く霧島間道路整備促進に関する決議
- 55、牧園町妙見地区飲料水供給施設工事請負契約について。
- 56、昭和五十五年度牧園町一般会計補正予算（第四号）
- 57、牧園町持松校区公民館新築本体工事請負契約について。
- 58、教育委員会委員の任命について。
- 59、教育委員会委員の任命について。
- 60、牧園町分担金徴収条例の一部改正について。
- 61、牧園町公営住宅管理条例の一部改正について。
- 62、牧園町立牧園牧場設置条例の一部改正について。
- 63、市町村道整備事業万膳線改良工事請負契約について。
- 64、併用林道の認定について。
- 65、昭和五十四年度牧園町歳入歳出決算認定について。
- 66、昭和五十五年度牧園町一般会計補正予算（第五号）
- 67、昭和五十五年度牧園町国民健康保険事業特別会計補正予算（第一号）
- 68、昭和五十五年度牧園町牧場事業特別会計補正予算
- 69、牧園町辺地総合整備計画書の一部変更について。
- 70、町民憲章制定について。
- 71、町民歌・町民音頭の制定について。
- 72、昭和五十四年度鹿兒島県土地開発公社牧園支社の事業報告について。
- 73、牧園町道路線の認定について。
- 74、併用林道の認定について。
- 75、持松小学校屋内運動場新築本体工事請負契約について（黒江工務店）。
- 76、昭和五十五年度牧園町一般会計補正予算（第六号）
- 77、昭和五十五年度牧園町水道事業特別会計補正予算
- 78、牧園町分担金徴収条例の一部改正について。
- 79、牧園町営関平温泉設置および管理に関する条例の一部改正について。
- 80、牧園町老人福祉センター設置および管理に関する条例の一部改正について。
- 81、霧島高原国民休養地設置および管理に関する条例の一部改正について。
- 82、牧園町公の施設に関する条例の一部改正について。
- 83、牧園町職員の給与に関する条例の一部改正について。

- 84、B G 財団牧園海洋センター管理運営に関する条例の制定について。
- 85、牧園町妙見地区飲料水供給施設工事請負額の変更に  
ついて。
- 86、損害賠償額の決定について。
- 87、鹿児島県町村職員退職手当組合理約の一部変更につ  
いて。
- 88、鹿児島県町村非常勤職員公務災害補償等組合理約の  
一部変更について。
- 89、国分地区消防組合理約の一部変更について。
- 90、昭和五十五年牧園町一般会計補正予算（第七号）
- 91、昭和五十五年牧園町国民健康保険事業特別会計補  
正予算（第二号）
- 92、昭和五十五年牧園町牧場事業特別会計補正予算
- 93、昭和五十五年牧園町水道事業特別会計補正予算
- 94、昭和五十五年牧園町塩浸温泉センター事業特別会  
計補正予算（第二号）
- 95、昭和五十五年牧園町国民休養地事業特別会計補正  
予算（第二号）
- 96、牧園・横川町衛生管理組合理約の一部変更につい

て。

97、昭和五十五年牧園町一般会計補正予算（第八号）

北方領土早期復帰実現に関する決議

道路特定財源の転用反対に関する意見書

◆「牧園町議会だより」発行

牧園町議会においては、議員がどのような姿勢で議会にのぞみ、どのような発言をし、審議審査をいかに進めているか、また、その論議された案件が町の発展と、どのような関係をもっているか等を、議会の一般質問や、委員会の審査等の記録をもとに、条例で定められた三月・六月・九月・十二月の四回の定例会の状況を主に、町民に知らせる目的で、議会報を発行することになり、その第一号が昭和五十五年五月二十日に発行され、町内全家庭に配付された。

## 第二章 経 済

### 第一節 財 政

#### 一 町 予 算

本町の財政状況は戦前は比較的順調であったが、終戦後は歴大な経済変動による人件費、物件費等が増大したため財政需要額が急激に膨張した。いっぽう、財源は地方自治法、地方財政法の施行、地方税制の改革、地方財政平衡交付金（地方交付税）制度の設定等地方公共団体の自主性の強化及びこれに伴う自主的財源の確保がはかられたが、風水害の復旧費、六三制教育予算、年毎に実施される給与ベースの改訂による人件費の激増、低位生産業の振興等必要経費は増加の一途を辿り、自主財源の乏しい本町としては国県費に依存する度合が大きかった。

終戦後の町予算は前述の通り、毎年その額が増加し、

昭和二十八年年度予算において、遂に一億円を超えた。

昭和三十年代には経済の高度成長に伴い、産業の大都市集中による過疎の弊害があらわれ、地域格差の是正、地域の均衡ある発展が問題となった。

昭和四十年代になると高度成長のひずみが増す顕著となり、公害問題が新たにでてくるようになった。

このような状況の中で本町の財政状況は年々義務的経費、さらに物的量的豊さより、質的、精神的豊かさを求める住民の生活価値観の変化、生活福祉優先の時代にあつて生活環境施設整備事業、義務教育施設整備事業等の経費が増大した。一方財源については町税、地方交付税、国県支出金・諸収入等の増収に努めながら財政の健全化をはかってきた。昭和五十四年度の予算においては二十五億を超えその中で税収一七・五%地方交付税三四%国県支出金二〇・六%と依存する財源の度合が大き

い。

次に戦後および最近の歳入歳出決算額を挙げてこれを比較してみよう。

第2章 経 済

○一般会計歳入歳出決算

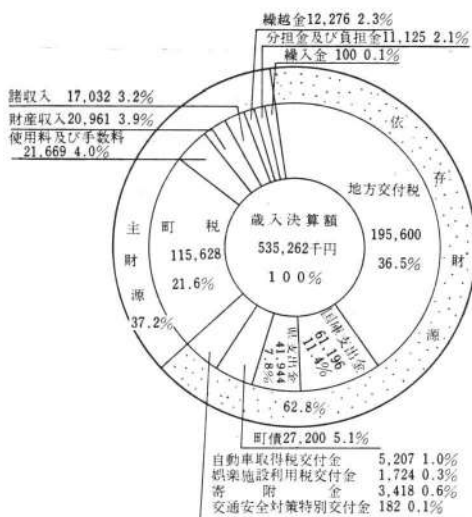
昭和21年度

○歳 入			○歳 出		
科 目	決 算 額	構成比	科 目	決 算 額	構成比
国 税 附 加 税	62,241.80	4.4	教 育 費	136,006.05	9.6
道府県 附 加 税	27,251.00	1.9	土 木 費	200.00	0
独 立 分 与 税	135,656.14	9.6	衛 生 費	9,394.00	0.7
地 方 収 入 税	99,761.00	7.0	社 会 費	2,929.85	0.2
財 産 収 入 料	203,369.08	14.3	業 務 費	556,738.65	32.9
使 用 料、手 数 料	4,721.40	0.3	事 務 費	353,281.15	24.9
庫 存 補 給 付	693,239.34	48.8	場 所 費	3,860.90	0.3
金 庫 補 給 付 金	71,104.65	5.0	警 防 費	6,934.00	0.5
県 補 助 補 給 付 金	57,350.60	4.1	公 債 費	680.25	0
寄 附 金	46,512.86	3.3	積 立 及 び 基 本 財 産	16,554.64	1.2
市 町 村 繰 越 金	18,800.00	1.3	造 成 費 の 他	332,788.49	23.4
前 年 財 産 売 入 の 他	188.82	0			
合 計	1,420,196.69	100.0	合 計	1,419,367.90	100.0
差 引 残 高	828.73				

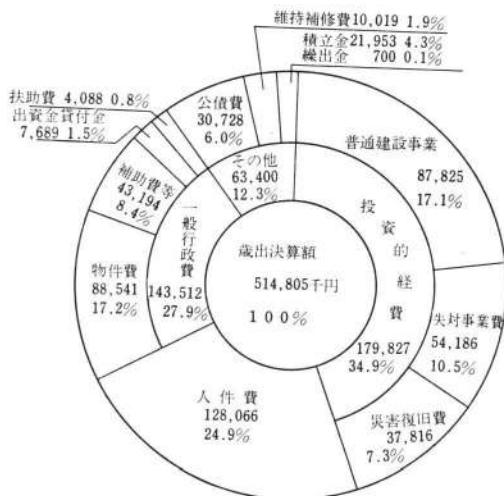
昭和33年度

○歳 入			○歳 出		
科 目	決 算 額	構成比	科 目	決 算 額	構成比
地 方 税 附 加 税	41,511,000	37.4	議 会 費	1,614,000	0.8
地 方 交 付 税	20,746,000	18.7	役 場 費	32,559,000	16.9
庫 支 出 金	15,903,000	14.3	消 防 費	1,653,000	0.9
国 庫 支 出 料	1,980,000	1.8	土 木 費	9,356,000	4.9
県 庫 支 出 料	3,135,000	2.8	社 会 及 び 勞 働 施 設	16,559,000	8.6
使 用 料、手 数 料	9,600,000	8.8	費 保 健 衛 生 費	870,000	0.5
地 方 財 産 売 入 の 他	18,140,000	16.4	業 務 費	3,512,000	1.8
			公 債 費	14,219,000	7.4
			前 年 度 繰 上 げ 充 用	61,111,000	31.8
合 計	111,015,000		の 他	31,895,000	16.6
差 引 残 金	△ 81,122,000		合 計	192,137,000	

昭和45年度 歳入決算の状況

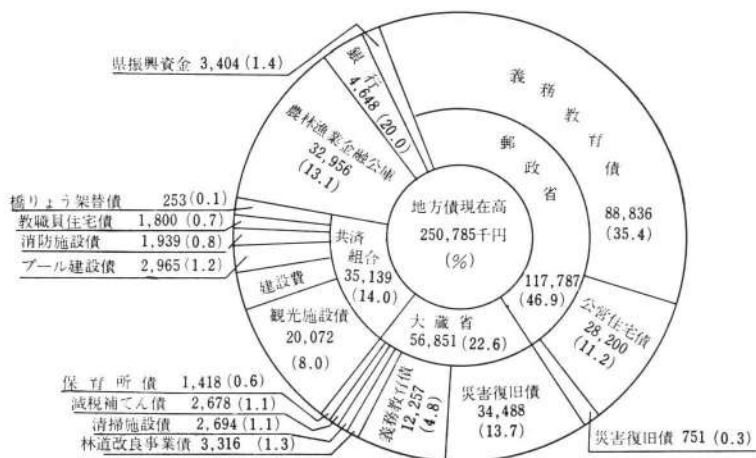


昭和45年度 歳出決算の状況  
性 質 別

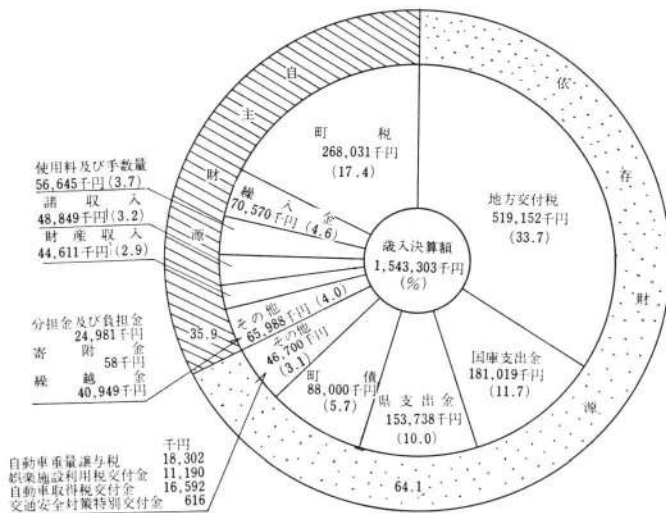


## 第2章 経 済

### 昭和45年度 地方債現在高の状況

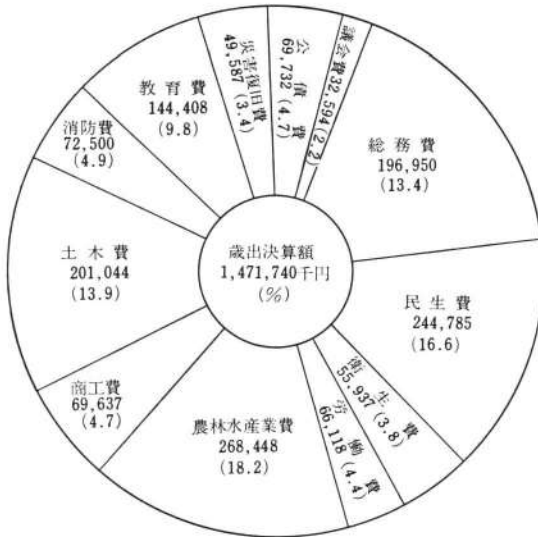


### 昭和50年度 歳入決算状況



昭和50年度 歳出決算の状況

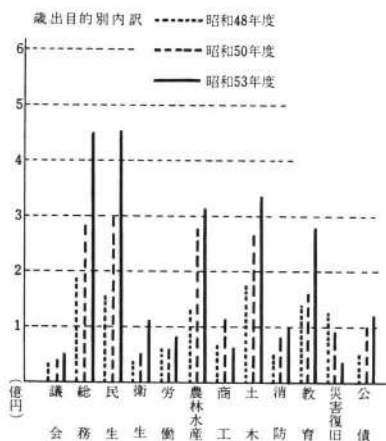
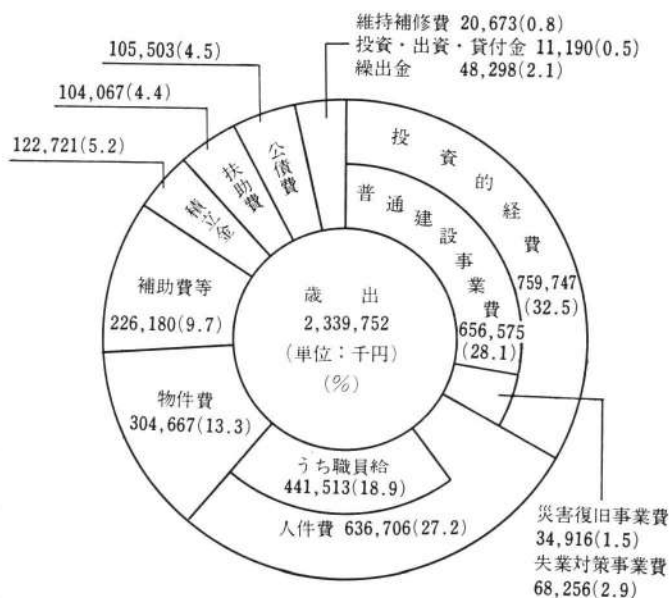
第2図 (目 的 別)



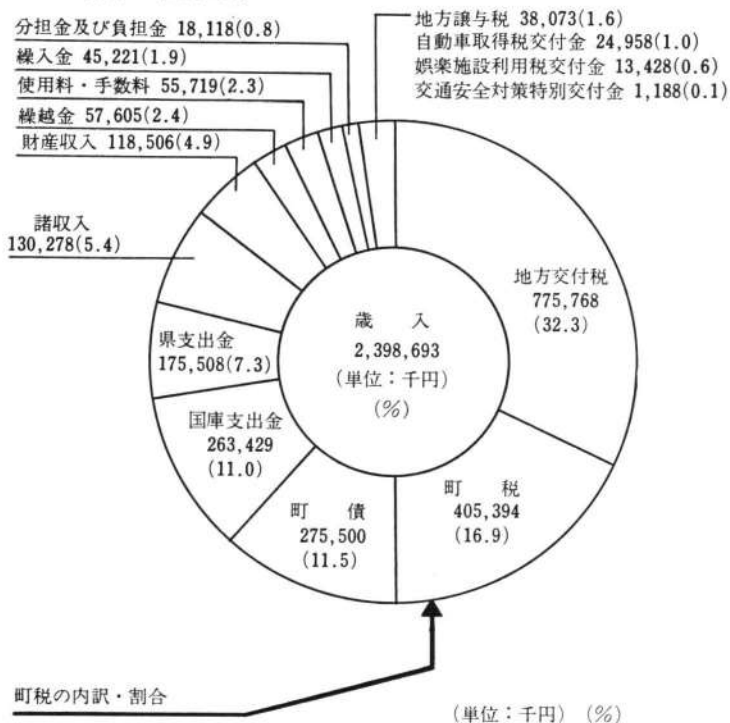
一般会計決算の推移

(単位：千円)

年 度	歳 入	歳 出
43	521,738	513,014
44	546,772	531,196
45	535,261	514,805
46	795,300	769,118
47	1,184,434	1,148,654
48	1,179,217	1,153,847
49	1,314,638	1,268,689
50	1,543,303	1,471,740
51	1,856,896	1,788,320
52	1,999,830	1,937,225
53	2,398,693	2,339,752



(昭和53年度決算)



固定資産税	入湯税	町民税	たばこ消費税		
176,666 (43.6)	79,061 (19.5)	77,399 (19.1)			

38,716(9.6)

電気税 16,308(4.0)

特別土地保有税 11,595(2.9)

軽自動車税 5,329(1.3)

木材引取税 320(0.0)

53年度・財政力

(単位：千円)

基準財政 需要額	基準財政 収入額	普通地方 交付税	財政力指数	標準税 収 入 額	公債費 比率
1,006,465	308,463	700,735	0.31	398,692	6.7

## 第2章 経 済

### 歳入規模に対する税収入

歳入規模と税収の状況については、(別表1)のとおりで、年々拡大の方向にある。昭和49年度から昭和53年度の歳入規模の伸びは、182%であるのに対し、税収入の伸びは152%と他の収入の伸びに比較して伸びていない。また、歳入規模に対する税収の割合をみると、昭和49年度が20.2%であったものが昭和53年度は16.9%と年々低下している。

(別表1)

歳入総額に対する税収割合 (単位 千円)

年度	歳 入 合 計		町 税			
	決 算 額	49年度に 対する割合	決 算 額	収入割合	49年度に 対する割合	歳入合計に 対する割合
49	1,314,638	100%	265,846	98.4%	100%	20.2%
50	1,543,303	117	268,031	96.6	101	17.3
51	1,856,896	141	314,356	97.7	118	16.9
52	2,012,213	153	346,310	96.6	130	17.2
53	2,398,693	182	405,397	97.0	152	16.9

(別表2)

過去5ヶ年の町税収入状況 (単位 千円)

年度	調 定 額	収 入 済 額	不納欠損額	繰 越 額	収入割合
49	270,145,560	265,846,475	0	4,299,085	98.40
50	277,204,103	268,030,955	0	9,173,148	96.69
51	321,614,965	314,356,011	2,404,520	4,854,434	97.74
52	358,257,059	346,310,226	0	11,946,833	96.66
53	417,833,880	405,394,091	0	12,439,789	97.02

### ○特別会計歳入歳出決算

○国民健康保険事業 (単位 千円)

年 度	昭和50年度	51	52	53
歳入決算額	254,445,748	337,930	393,045	482,599
歳出決算額	241,085,379	322,582	357,883	443,414

### ○牧 場 事 業

年 度	昭和50年度	51	52	53
歳入決算額	71,832,918	58,014	64,062	63,595
歳出決算額	71,832,918	58,014	64,062	63,595

## ○水 道 事 業

年 度	昭和50年度	51	52	53
歳入決算額	企業会計	97,778	234,243	115,995
歳出決算額	〃	96,486	234,243	115,995

## ○塩浸センター事業

年 度	昭和50年度	51	52	53
歳入決算額	一般会計	一般会計	28,959	25,514
歳出決算額	〃	〃	28,959	25,514

## ○国民休養地事業

年 度	昭和50年度	51	52	53
歳入決算額	一般会計	一般会計	45,659	48,540
歳出決算額	〃	〃	45,659	48,540

## 二 町 有 財 産

町有財産は、これを行政財産と普通財産とに分類されている。

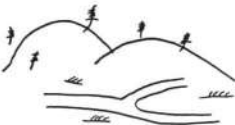
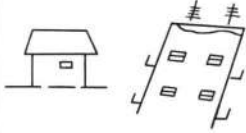
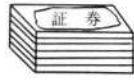
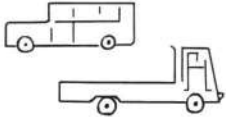
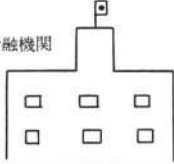


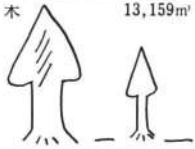
行政財産とは、町において公用又は公共用に供し、又は供することと決定した財産をいい、普通財産とは、行政財産以外の一切の公有財産をいう。

町有財産の状況は、次の通りである。

## 第2章 経 済

### 町 有 財 産

(昭和54年5月末現在)

<p>土 地 19,531,819㎡</p> 	<p>建物延 47,830㎡</p> 	<p>有価証券 4,675千円</p> 
<p>車 両 48台</p> 	<p>基 金 302,740千円</p> <p>金融機関</p> 	<p>債 権 2,006千円</p> 
<p>動 産 8 頭</p> 	<p>出資による権利 6,015千円</p> <p>県農業信用協会 森 林 組 合</p>	<p>預 託 金 320千円</p> <p>国民健康保険 診療報酬支払基金</p>
<p>立 木 13,159㎡</p> 		

## 町 有 財 産

昭和54年度決算書より

	区 分	土地(面積) 昭和54年度 末 現 在	建物(延面積) 昭和54年度 末 現 在	説 明
①行政財産		$m^2$	$m^2$	
	庁 舎	7,410	2,019	役場、牧場
	学 校	105,882	17,771	牧小外6校
	公 営 住 宅	61,387	10,375	321戸
	母 子 寮	1,526	477	
	授 産 所	—	—	
	保 育 所	11,915	1,661	幼稚園含む7ヶ所
	そ の 他 の 施 設	908,255	11,200	関平温泉外11ヶ所
	計	1,096,375	43,503	
②普通財産		$m^2$	$m^2$	
	住 宅	9,531	2,234	〔一般分 13戸
	そ の 他 の 施 設	4,110	1,347	〔教職員分 17戸
	貸 付 地	991,662	913	10ヶ所
	山 林	8,455,734	—	推定蓄積量13,159 $m^3$
	原 野	8,774,980	—	
	田 地	211	—	
	畑 地	178,219	—	
	宅 地	20,708	—	
	鉱 泉 地	289	—	
	計	18,435,444	4,494	
① + ②	合 計	19,531,819	47,997	

## 第2章 経 済

### 1 決算の状況（54年度）

昭和54年度一般会計の決算は歳入総額 2,616,516 千円、歳出総額 2,559,421 千円で前年度に比較して歳入で217,824千円（9.1%）、歳出で219,669千円（9.4%）の増となっており実質収支（決算剰余金）は、58,941千円で前年度に比し7,379千円の減となっている。

昭和54年度 決算状況

第1表

（単位：千円）

区 分	歳入総額	歳出総額	歳入歳出 差 引 額	翌年度へ繰越 すべく財源	実質収支
一 般 会 計	2,616,516	2,559,421	57,095	0	57,095
特 別 会 計	815,581	767,172	48,409	0	48,409
内 { 国 民 健 康 保 険	519,703	471,294	48,409	0	48,409
牧 場 事 業	67,330	67,330	0	0	0
水 道 事 業	147,908	147,908	0	0	0
塩 浸 温 泉 セ ン タ ー	26,003	26,003	0	0	0
国 民 休 養 地	54,637	54,637	0	0	0
合 計	3,432,097	3,326,593	105,504	0	105,504

### 2 一般会計の状況（54年度）

#### (1) 歳入歳出決算の状況

第2表は、54年度の決算状況を前年度と比較したもので、歳入においては地方譲与税、自動車取得税交付金、分担金及び負担金、国県支出金等が大幅な伸びを示しており、歳出においては扶助費、災害復旧事業等が大幅に伸びておる。

第2表 歳入歳出決算

#### (1) 歳 入

（単位：千円）

区 分	昭和54年度		昭和53年度		比 較	
	決 算 額	構成比	決 算 額	構成比	増 減	伸率
町 税	443,294	17.0	405,394	16.9	37,900	9.3
地 方 譲 与 税	54,080	2.1	38,073	1.6	16,007	42.0
娯 楽 施 設 利 用 税 交 付 金	13,834	0.5	13,428	0.6	406	3.0
自 動 車 取 得 税 交 付 金	30,762	1.2	24,958	1.1	5,804	23.3
地 方 交 付 税	851,292	32.6	775,768	32.3	75,524	9.7
交 通 安 全 対 策 特 別 交 付 金	1,031	—	1,188	—	△157	△15.2
分 担 金 及 び 負 担 金	23,862	0.9	18,118	0.8	5,744	31.7
使 用 料 及 び 手 数 料	61,510	2.4	55,719	2.3	5,791	10.4
国 庫 支 出 金	309,599	11.8	263,429	11.0	46,170	17.5
県 支 出 金	207,276	7.9	175,508	7.3	31,768	18.1

区 分	昭和54年度		昭和53年度		比 較	
	決 算 額	構成比	決 算 額	構成比	増 減	伸率
財 産 収 入	60,809	2.3	118,506	5.0	△57,697	△94.9
寄 附 金	3,000	0.1	0	—	3,000	100.0
繰 入 金	102,901	3.9	45,221	1.9	57,680	27.6
繰 越 金	41,940	1.6	57,604	2.4	△15,664	△37.3
諸 収 入	154,926	5.9	130,278	5.4	24,648	18.9
町 債	256,400	9.8	275,500	11.4	△19,100	△7.4
歳 入 合 計	2,616,516	100.0	2,398,692	100.0	217,824	9.1

## (2) 歳 出

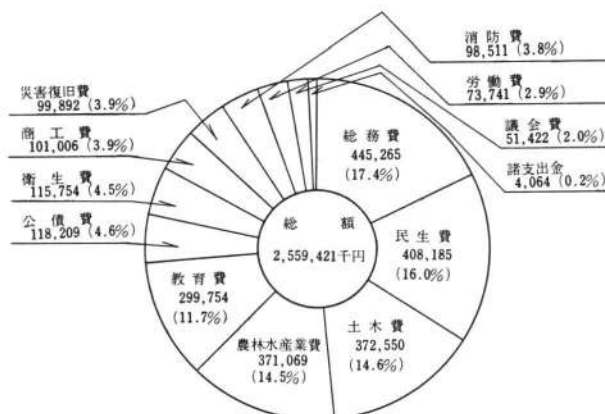
(単位：千円)

区 分	昭和54年度		昭和53年度		比 較	
	決 算 額	構成比	決 算 額	構成比	増 減	伸率
人 件 費	618,295	24.2	636,706	27.2	△18,411	△2.8
物 件 費	396,576	15.5	304,667	13.3	91,909	30.2
維 持 補 修 費	22,919	0.9	20,673	0.8	2,246	10.9
扶 助 費	161,555	6.3	104,067	4.4	57,488	55.2
補 助 費	243,359	9.5	226,180	9.7	17,179	7.6
普 通 建 設 事 業 費	662,890	25.9	656,575	28.1	6,315	1.0
災 害 復 旧 事 業 費	99,892	3.9	34,916	1.5	64,976	86.1
失 業 対 策 事 業 費	68,386	2.7	68,256	2.9	130	0.2
公 債 費	118,185	4.6	105,503	4.3	12,682	12.0
積 立 金	95,776	3.7	122,721	5.2	△26,945	△28.1
投 資、出 資、貸 付 金	11,580	0.5	11,190	0.5	390	3.5
繰 出 金	60,008	2.3	48,298	2.1	11,710	24.2
歳 出 合 計	2,559,421	100.0	2,339,752	100.0	219,669	9.4

歳出決算を目的別に見ると、第1図のとおりで総務費が最も多く総体の17.4%を占め、次いで民生費(16.0%)、土木費(14.6%)、農林水産業費(14.5%)、教育費(11.7%)の順となっておる。

## 第2章 経 済

第一図 目的別歳出の状況（54年度）



### (3) 町税の状況

昭和54年、町税の調定額、収入額、徴収率を各税目別にみると次表のとおりで、町税総額460,300千円の調定に対し、収入額は443,295千円で96.3%になっている。これを前年度と比較すると町税総体で0.7%低くなっている。国民健康保険税は133,393千円の調定に対し、127,255千円の収入額で95.4%の徴収率で前年度より1.8%低くなっている。

#### 昭和54年度 町税の状況

（単位：千円）

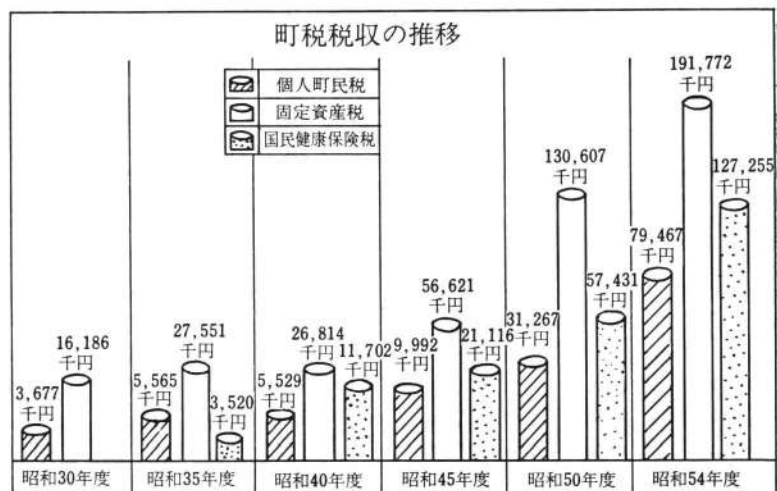
税 目	調 定 額 (A)	収 入 額 (B)	徴 収 率	
			$\frac{(B)}{(A)} \times 100$	前 年 度
町 民 税	95,092	90,153	94.8	96.3
固 定 資 産 税	200,428	191,772	95.7	96.0
軽 自 動 車 税	6,241	6,012	96.3	97.1
たばこ消費税	39,780	39,780	100.0	100.0
電 気 税	18,841	18,841	100.0	100.0
木材引取税	2	2	100.0	100.0
特別土地保有税	11,200	9,364	83.6	86.5
入 湯 税	88,716	87,371	98.5	99.7
計	460,300	443,295	96.3	97.0
国民健康保険税	133,393	127,255	95.4	97.2

住民の負担割合（54年度）

税 目	現年課税分	納税義務者数	一人当たりの負担額	備 考
	円	人	円	
個 人 町 民 税	78,487,025	3,927	19,986	
法 人 町 民 税	10,674,100	108	98,834	
固 定 資 産 税	57,268,710	3,552	16,122	
国民健康保険税	126,684,830	6,253	20,259	

税目別収入額構成比ならびに近傍町との比較（52年度）（単位 千円）

区 分	町民税	固 定 資産税	軽 自 動車税	たばこ 消費税	電気税	木 材 引取税	入湯税	特 別 土 地 保有税	合 計
牧園町	59,879	159,686	5,062	37,553	15,111	104	56,556	12,359	346,310
構成比	17.3	46.1	1.5	10.8	4.4	—	16.3	3.6	100%
横川町	31,979	51,432	3,114	16,420	6,198	259	0	239	109,641
構成比	29.2	46.9	2.8	15.0	5.7	0.2	0	0.2	100%
栗野町	56,294	61,640	5,687	23,498	12,772	538	379	1,835	162,643
構成比	34.6	37.9	3.5	14.5	7.9	0.3	0.2	1.1	100%
霧島町	44,018	62,730	2,498	16,367	6,208	347	8,696	53,056	193,920
構成比	22.7	32.3	1.3	8.4	3.2	0.2	4.5	27.4	100%
県平均	45.2	36.9	1.5	10.2	4.3	0.1	0.4	1.4	100%

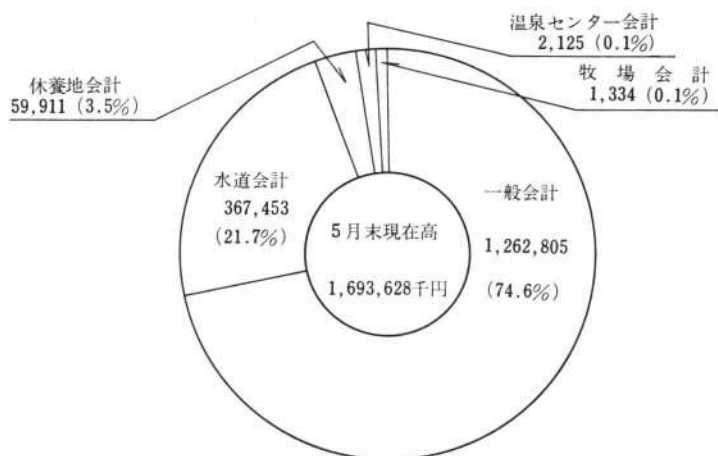


## 第2章 経 済

### (4) 町債の状況（54年度末現在）

第2図は会計別に現在高を現わしたもので、5月末現在で1,693,628千円となっている。昨年度と比較すると211,526千円（14.3%）の増となっている。

第2図



### 3 特別会計の状況（54年度）

#### (1) 国民健康保険特別会計の状況

昭和54年度決算及び55年度予算状況

（単位：千円）

歳 入			歳 出		
款	54年度 決算額	予算現額	款	54年度 決算額	予算現額
国民健康保険税	127,255	122,627	総務費	15,552	16,810
使用料及び手数料	121	110	保険給付費	450,176	492,604
国庫支出金	348,233	373,401	保険施設費	2,338	3,220
財産収入	2,199	20	積立金	3,000	
繰入金	0		諸支出金	228	15
繰越金	39,185	21,921	公債費	0	230
諸収入	2,710	800	予備費	0	6,000
計	519,703	518,879	計	471,294	518,879

## (2) 牧場事業特別会計の状況

昭和54年度決算及び55年度予算状況

(単位：千円)

歳 入			歳 出		
款	54年度 決算額	予算現額	款	54年度 決算額	予算現額
事業収入	57,892	61,231	総務費	67,064	101,035
財産収入	6,471		公債費	266	267
繰入金	2,782	17,311			
諸収入	185	50			
県支出金		1,010			
町債		21,700			
計	67,330	101,302	計	67,330	101,302

## (3) 国民休養地事業特別会計の状況

昭和54年度決算及び55年度予算状況

(単位：千円)

歳 入			歳 出		
款	54年度 決算額	予算現額	款	54年度 決算額	予算現額
使用料及び手数料	29,074	28,489	総務費	42,800	44,773
繰入金	25,223	27,655	公債費	11,837	11,481
諸収入	340	110			
計	54,637	56,254	計	54,637	56,254

## (4) 塩浸温泉センター事業特別会計の状況

昭和54年度決算及び55年度予算状況

(単位：千円)

歳 入			歳 出		
款	54年度 決算額	予算現額	款	54年度 決算額	予算現額
使用料及び手数料	12,236	22,542	総務費	25,578	25,479
繰入金	1,705	425	公債費	425	425
諸収入	12,062	2,937			
計	26,003	25,904	計	26,003	25,904

## 第2章 経 済

### (5) 水道事業特別会計の状況

昭和54年度決算及び55年度予算状況

(単位：千円)

歳 入			歳 出		
款	54年度 決算額	予算現額	款	54年度 決算額	予算現額
事業収入	75,257	102,118	総務費	117,462	233,075
国庫支出金	12,660	45,150	公債費	30,446	32,471
県庫支出金	7,419	3,672	予備費		300
繰入金	17,711	27,306			
諸収入	500	300			
財産収入	261				
町債	34,100	87,300			
計	147,908	265,846	計	147,908	265,846

## 第二節 産 業

### 一 農地改革

明治維新の土地改革は、明治六年の地租改正条例及びそれに伴う一連の法制措置と行政措置によって実施せられ、明治三十一年の民法施行によって漸く整備した。ところが民法の所有権規定はいわゆる地主的土地所有の保護に偏し、契約自由の原則で公平に結ばるべき小作契約は、分配関係、生産関係その他に幾多の矛盾と不合理を内蔵し、小作人の地位を隷属化せしめた。即ち田畑の小作料として、その収穫高の半ば以上を物納するところもあるような高額で、風水害、病虫害で収穫減少の年も勘案されることがない場合もあり、翌年までその不足分を補わなければならないこともあったという。そのため自家用の食糧米は小作料を納める前後で殆んど無くなり、その上、肥料代の支払いにも困る年もあったようである。

全国的にはこのような事情が原因となって小作争議が

起ったり、地主と小作人組合の対立というような事態が  
あちらこちらで起り、社会経済上の不安を増大させてい  
た。

政府はその矛盾と不合理は正のため種々の調査を行な  
い、大正十三年小作調停法を成立させた。しかし当時の  
農村は単に小作制度の不備から来た小作農の没落のみで  
なく、自作農も分解転落し始めていたから、大正十五年  
農林省令を以て自作農創設維持補助規則を制定したが、  
これは微温的で規模も小さかったので、自作農創設維持  
事業の拡大強化を試みたり、小作法を用意したりするう  
ちに昭和六年、満洲事変が勃発した。それ以後事変が引  
き続き、時局は年と共に重大となった。その戦時態勢強  
化の上で最も強く要請されたのは農業生産力の増大であ  
り、その要請に応えるためには是が非でもその従来の封  
建的な土地所有制に対決せねばならなかった。これによ  
って政府は昭和十二年農地法案を提出したが、議会の解  
散によって流産したので、従来の自作農創設維持補助規  
則を自作農創設維持補助規則に切り替え、昭和十三  
年には農地調整法を成立させた。この農地調整法は出征  
応召者の農地管理、自作農の創設維持、小作権の強化、

農地調整制度、農地委員会制度を規定し、戦時立法の色  
彩を持たせてあったが、小作権確保の途としては僅か二  
か条を設けているにすぎなかった。

昭和十三年頃戦争長期化の傾向が見えると、ますます  
農業生産力の維持増大が必要となったので、昭和十四年  
小作料統制令、十六年に臨時農地価格統制令、ついで臨  
時農地管理令を制定したが、政府は広汎な自作農創設を  
訴え、根本的にこれを解決するため、内々に不在地主の  
土地及び在村地主の五町歩以上の土地を強制収用し、自  
作農創設を大規模に進める計画を準備した。しかしそれ  
は内部案にとどまり昭和十六年第二次世界大戦に突入す  
ることになり、二十五か年計画で既墾地約百五十万町歩  
開発地五十万町歩を自作農化しようとする第三次自作農  
創設維持拡充事業に着手した。

終戦前の小作関係の調整と自作農創設維持政策は交互  
に政策の具体化がとり上げられて来たが、半面また重要  
な戦時食糧政策も取り上げられた。即ち食糧の国家管理  
であったが、昭和十五年臨時米穀配給統制規則、米穀管  
理規則を制定し、翌々十七年には食糧管理法でこの二規  
則を吸収強化したが、この規則に基づく画期的供出制度の

米価対策と、前述の小作料統制の矛盾は遂に政府をして生産者価格と地主価格の二重米価制を採用せしむるに至った。そのため小作料は強制代金納制におきかえられ、生産者に対する生産奨励金の逐年増加は生産者価格と地主価格を大きく引き離し、小作料は実質的に低下を意味するものに押し進められていった。そのことは明治以降の現物小作料制に全く重大な意味を与えていて、昭和二十年六月戦時緊急措置法に基く国内戦場化に伴う食糧政策は、遂に小作料金納制も立法化しようと企図されていたが、実現せずに終戦を迎えた。

戦後、農林省は農地改革要綱案を検討し、昭和二十年十一月農地調整法改正の形で議会に提案し十二月八日にはこれが成立した。即ち第一次農地改革と称せられるものである。これには連合軍の要求がその成立を容易ならしめた。連合軍の占領下に軍国主義の絶滅と民主主義の助長をねらいとして行なわれたものの中で、この農地改革は最も大きな改革の一つであった。日本の民主化の遅れた原因の一つは、明治以後封建的小作制度が維持され農村は地主の勢力に左右され、小作人は封建的主従関係にしばられ、自主性を持たず、従って農民の生活程度の

低さが低賃金のもとであり、商品のはけ口求めが帝国主義をとる一因であると考えられていたからであろう。

政府が立法措置をとった農地調整法改正により昭和十一年四月一日から、多額の物納であった小作料の金納化が実施された。農民解放を急ぐマ司令部の「三月十五日までに提出せよ。」との要求で提出した政府の第一次農地改革案は、突っ込み方が生ぬるいということで一蹴された。そこで政府は対日理事会にかけた英国案を参考に、思い切って自作農創設特別措置法を新しく作りあげ、これに依じて農地調整法もまた改正した。これは昭和二十一年十月二十一日公布、一か月後に施行された。

その主な内容は

(一) 二百万町歩以上の全国小作地につき二ヶ年内に自作農を創設すること。方法は国が地主から強制買取しこれを小作農に売り渡し、地主、小作人の相対売買は認めない。

(二) 買取の対象となる農地は、いっさいの不在地主の所有地、在村地主の所有する小作地一町歩（本県では七反歩とした）を越えるもの、自作、小作合わせて三町歩（本県では二町歩）を越えた部分の小作地

である。

(三) 地主に対する買収地代は一部は現金(四千円まで)他は農地証券(二十四年均等償還)で行なう。小作人の支払いは、二十四年以内の年賦を認める。

(四) 農地の買収および売り渡しは市町村農地委員会が計画し、県農地委員会の承認を経て効力を生じ知事が買収、売渡しの手続きを行なう。市町村農地委員会の構成は、小作五、地主三、自作二とする。

(五) 未墾地開放を行ない既墾地に準じて強制買収する。

(六) 地主の土地取り上げの制限を強化して、耕作権の移動は当分知事の許可制とする。

この農地改革の指導組織として昭和二十一年十一月県に農地部、地方事務所に農地課が設けられた。十二月には民主的選挙の先頭を切って、農地委員会委員の選挙が行なわれた。翌昭和二十二年二月に改革の基本資料である農地の一筆ごとの調査が始まった。

小作農を地主の搾取から解放しなければ、民主化は不可能とする占領軍は、農地改革の進行をぐんぐん迫っていた。日本の土地制度史上画期的な強制農地買収は一九

四八年(昭和二十三年)三月から始まり一九五二年(昭和二十七年)九月まで数回行なわれ買収農地はその都度売り渡された。

昭和二十七年に農地法が制定公布された。この法律は、強制譲渡による農地改革の諸原則(保有制限)の継続を目的とするいわゆるポツダム政令と、自作農創設特別措置法、農地調整法の三つの法律の諸原則を体系化して一本にまとめた恒久法である。

農地法は現在日本農地のあり方を規制した法律で、自作農維持の方針で一貫し、保有制限によって移動を統制し耕作権の保護・経営の安定を前提としている。

この方針を経済的に裏打するために、昭和三十年に自作農創設維持資金融通法が成立した。これは自作地を維持したは自作農となるために国が長期低利の資金を農家に貸しつけるものである。これによって新しい農地制度の諸体系は完成されたといつてよい。

## 二 農業委員会

自作農創設特別措置法が制定され昭和二十一年十月二

十一日公布となった。

国においてはこの農地改革遂行のため、農林省内に農地部を県においても農地部を新設して市町村の農地改革遂行の指導を行なった。

市町村には民主的手統で改組された農地委員会が設置された。その構成は小作人代表五人、地主代表二人、自作代表三人の十名からなつて初代会長に互選で荒田二男氏が就任した。事務局は町役場内に設置され、坂元書記長以下七名の専任職員と雇二、三名でこの新しい農地委員会は発足した。

当時激発していた地主の土地取上事件の処理と農地一筆調査そしてまもなく第一回農地買収が開始された。本町においては第一次から第十八次までに田約八〇〇筆九六町歩、畑二五〇〇筆七〇〇町歩を買収し一方これの売渡しが行なわれ、自作農が数多く生れたのである。その間に農地の買収、売渡しに伴なう経理事務が始まり、また昭和二十三年には牧野解放と登記事務、そして昭和二十四年には小作契約の文書化が実施され職員は多忙をきわめた。

昭和二十五年には農地の強制譲渡が新たな農地委員会

の任務となった。その間にも農地を巡る幾多の複雑な調整事務は絶えることはなかった。

しかしその運営は農地委員の任務ですべて会議を通じ或いは二、三の委員に委託して執行するなどして当時は月に多い時は五、六回、年に六十回以上の会議が開かれこれらを処理してきたのである。

委員会の会議で処理に困難した具体的事件は一般的には遡及買収異議申し立て、小作調停仮想、自作の認定、地主保有地の決定等であつた。

食糧事情の緩和に伴ない戦後強制買収された未墾地から耕地になったものも昭和三十三年頃から再び荒廃し始め無断転用或いは手統きを経て毎年七、十一町歩位が植林又は宅地に転用され創設地が約六十八町歩減反となっている。

農家戸数も昭和二十八年二一九戸が昭和四十年には二〇〇一戸に減り、うち高卒の子弟も自営に留る者は年に十名位になり農家労働力は毎年老齡化する一方である。

現行の農地法は昭和二十七年七月十五日法律第二百二十九号で制定され、この法律に基いて買収売渡或は農地

移動の制限、小作農の保護がなされている。

農業委員会は前述の農地委員会と農業食糧調整委員会を一つの機関として公選による委員（本町一〇名）と町長の選任する委員（五名以内）で構成され、昭和二十九年七月から発足したのである。

主として農地委員会が行なっていた農地行政が専属的事務であるがその他農家の経営合理化及び農民生活に関する調査研究を行なっている。

### （一）農地法改正

農業の規模拡大と近代化の必要性から、時代の要請に即応し、効率的な利用によって生産性を高め、農家の経営安定を図るため、昭和四十五年十月一日から、農地法の大幅改正が行われ施行された。その内容は次のとおりである。

#### （1）農地の移動の許可権

農地の売買許可は、その町村の農業委員会で、できるようにになった。但し他町村の農地の取得は、従来通り。

#### （2）農地、採草放牧地の権利移動統制の変更

上、下限の制限が緩和された。上限、最高面積の制

限がはずされたが、自家労力で耕作することが条件。又下限上限がはずされた反面、下限の面積は三十アール（三反）を五十アール（五反）に引き上げられた。

（3）不在地主も、七十アールまでの所有を認められた。但し七十アールをこえた場合、小作に出さず不在地主となった場合は、従来通り不在地主の摘要を付ける。

#### （4）小作料の最高限の制限の撤廃

#### （5）農地の山林、宅地の無断転用の罰則規定

（6）賃借権の解除（小作地の取り上げ）合意解約は、地元農委で処理できるなどである。

### （二）農業委員会歴代会長氏名

就任期間	会長氏名	出身地	委員数
自昭二一、 至〇二二、	荒田 二男	大字下中津川	一五
自二二、 至二六、	井 丸 勇 敏	大字宿窪田	一五
自二六、 至二九、	馬 場 正 道	大字宿窪田	一五
自二九、 至三五、	永 田 良 幹	大字宿窪田	一五
自三五、 至三七、	白 尾 平	大字宿窪田	一五

◎農業委員会委員名

◎昭和五十三年七月選出 15人

馬場 正道	木佐貫信男	本村 義治	厚地 秀雄
中村 永年	久保 虎次	北野 長年	隈元 吉男
木佐貫輝男	松本 義治	本田 実	今東 庸浩
隈元 兼義	川西 七吉	加藤 好夫	

至自 五、四、六	至自 五、四、六	至自 五、二、九	至自 五、〇、七	至自 四、八、一	至自 三、八、七	至自 三、七、三
馬場 正道	森 広良	永峰 清信	川西 七吉	西 吉之助	松下 久敬	松 下 久 敬
大字宿窪田	大字宿窪田	大字持松	大字下中津川	大字万膳	大字宿窪田	大字宿窪田
一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五

三 農地の買収と売渡し状況

(自昭和二十二年十月至昭和三十三年十一月) 町農委調

種 目	買 収		売 渡 し	
	筆 数	面 積	筆 数	面 積
田	二、〇四六筆	一、七五四・四八八 $m^2$	二、二二三筆	一、六七六・六八八 $m^2$
畑	三、三三四	四、三〇八・八八八	三、五〇〇	四、三九七・九〇三
採草地	二七四	一、三八八・五三四	二〇〇	一、〇三九・七四四
計	五、六五四	七、四五一・八〇〇	五、八九三	七、三三五・三三五

年度別農地転用状況

町農委調べ

年度別		44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	
区分	件数	164	185	219	196	175	156	149	134	133	123	
面積	山林へ	2,902	3,240	3,627	2,693	2,912	2,311	1,637	1,558	1,538	1,221	82%
	宅地へ	455	594	230	518	302	273	215	170	224	219	15%
	道その他	69	11	24	39	50	76	76	119	104	40	3%
	計	3,426	3,845	3,881	3,250	3,264	2,660	1,928	1,847	1,866	1,480	100%

山林への転用が82%あり、労働力不足や、生産性の低い山間地帯に進行が著しい。また、最近宅地への転用も多く、全体の15%を占めている。

#### 農地の状況

農地は、水稻の減反政策により水田の荒廃が多く、畑地においても地形的な不理と労働力の劣悪化による耕作放棄、転用が目立ち減少の一途をたどっている。

兼業化の進行による小規模農家の転用が多いが規模拡大、専業自立農家への土地流動は、農地の資産視化により、実際には行なわれにくい現状である。

また最近、住宅地域における住宅化、観光開発など農地の虫くい状況、農家の経営上の理由による農地規制に対する農業振興地域の整備に関する法律(農振法)の見直しなどの意見もあるが、農振法の目的を尊重し、指定の適地性、広がり の妥当性が国においても検討されつつある。

#### 四 食糧供出制度と増産

昭和十七年二月食糧管理法が制定され、末端農家への出荷割り当ては町農会が行い、市町村へは地方長官が指示し農家は自家保有米を控除した全量を供出し、配給機構は中央食糧営団、県食糧営団、市町村食糧営団に統一し配給と集荷売買と輸送の業務まで一手に行った。昭和十八年より個人割り当てを部落の責任供出制へ移行し、昭和十九年には報奨制度による事前割当制がとられ、戦時中唯一「勝つための供出」が要請され、所期の目標が達成されたのである。

##### (1) 昭和二十年

外地からの食糧輸入杜絶、戦争による農業生産力の減退は、同年産米の大減収を来たし食糧事情は悪化をたどり危機に類したとき終戦となった。

この食糧危機をのり越えるために総合供出制を取り、米、麦、いも、雑穀の作物別割り当て量を定め、米と麦類の割り当て量に対してのみ、代替供

出を認め、米の代替えとして屑米・雑穀・食用切干甘藷の代替え供出を無制限に認め、生甘藷類のほか、くず、甘藷莖葉、桑葉等々の未利用資源までも代替え供出することを認め、配給基準量は二合三勺の一割切り下げを行い「国民を飢えさせない」供出に切替えられ、部落責任制から個人責任制に復する措置が取られた。

当時生産者米価は石当り九二円五〇銭であったが十一月十七日の閣議で一五〇円に引上げられ翌年三月には更に三〇〇円に引き上げられた。

肥料、資材の配給事情、供出割当の不均衡、復員引揚げによる食糧需要の急増はついに食糧危機を招来するにいたった。

## (2) 昭和二十一年

遅配は発生するし食糧の売買はほとんど無警察状態の様相を呈し、三月には米価引き上げ「食糧緊急措置令」による供出督励のため強権が行なわれ、厩から納屋まで食糧隠とく物資の調査が行なわれたもの頃からである。そこでこの年の四月米国は占領政策遂行上止むなく輸入食糧の放出を行なった。六月政府は供出制度の根本的改革にせまれ「食糧調整委員会」制度を設け供出割

り当てに関する審議協力機関を発足せしめた。

## (3) 昭和二十二年一月

更に遅配現象が起つたので再度強権発動をするようになり、七月には「食糧緊急対策」をはじめとする縁故米制度、救援米制度の施策を講じ八月には、農業生産の調整及び主要食糧の供出調整要綱を決定し、供出と生産の密接な連携による食糧確保をはかうとした。この間輸入食糧の大放出が行われ、かろうじて食糧危機を脱することが出来た。

このように食糧事情が悪化し供出が困難を極めたので「供出完遂運動」を展開し、供出の督励に努めた。

(米価は一・七五六円に引き上げられた)

十二月には食糧配給公団が設立され一元的全国配給機関とされたが、集荷については農民の自由意志による登録によって集荷取り扱い者が選定された。

## (4) 昭和二十三年

これまでにおける食糧事情の危機により「食糧の増産」は国民的課題であったので、戦後食糧増産問題が真剣に取組まれた時期でもあった。そこで「食糧一割増産国民運動」が発足したが種子消毒、病虫害防除、健苗育成の

普及宣伝、必要資材の確保、農業団体の活動補助等が主で増産の基盤にふれたものではなく、又肥料工業の未復活等のため結果的には、食糧増産のための精神運動的性格のものであった。

(5) 昭和二十五年

六月に勃発した朝鮮動乱は世界の食糧需給に大きい影響を与え、各国備蓄買い付けをはじめたので、わが国の食糧事情の安定に非常な危ぐを与えることとなった。

八月「食糧自給態勢確立」の方針に基き一割増産興農運動が展開されたけれど、供出が強化されるのでは、という農民の不安から、支持は得られず自然消滅してしまつた。

(6) 昭和二十六年

食糧事情の好転により二十五年産甘藷から統制が撤廃され、二十六年二月には雜穀も撤廃されるにいたつた。

この年始めて農家経済は黒字に転じ、米作労働所得が都市労働者の所得と均衡水準に達したと推定された。このような情勢になったため食糧の国家管理の全廃論が台頭しはじめた。

(7) 昭和二十七年以降

四月（日本の独立）食糧国家管理全廃の基本方針が確認されたが、ドッジ勧告で麦類の撤廃は二十七年産から行うが（二十七年から間接統制）米は当分延期になつた。

このように食糧の危機から緩和へ幾多の紆余曲折を経て今日にいたつたが、この間生産と消費の米価を中心に論議は政治的にも活発化してきた。

## 五 農業基本法の制定

農業は国民に食糧の供給をする重要な産業でありながら、我が国の経済が高度に成長発展しているなかで、農業と他産業との所得の格差は大きく、農業と農家は次第に社会の下積みにされようとしているとき、農業を振興しその繁栄を期し、農家の所得を高め生活を向上し、農業従事者の幸福を増大するために、昭和三十六年六月六日農業の憲法である農業基本法が成立制定され、国が責任をもって農業の振興、農業従事者の幸福増進のための施策が講ぜられ、わが国農業の恒久的な発展が期待されるようになった。

## 六 農村三作運動(昭和三十八年十月設定)

わが国の経済は著しく発展を続け、農業と他産業との生産性および所得の格差が拡大の傾向にあるなかで、本県の農業者は悪条件を克服しつつ、農業所得の向上に努力し、かなりの成果をあげてきたにもかかわらず、本県のもつ相対的低位性は依然として解決されず、しかも国民経済の高度成長に伴ない、農村の労働力は急速に減少し商品生産農業の伸展は、本県の農業を激しい産地間競争に追いこんでしまった。このような情勢に対処し、農業所得をよりいっそう高めるには、農業構造改善の諸施策を強力に遂行し、農業者の自立意識と企業能力を養い農業の近代化を促進する意欲と気運をつくりあげるために、次の三項目を目標にこの運動を展開した。

- 1 新しい農業者の仲間を作ろう。「仲間づくり」
- 2 商品性の高い物をつくろう。「物づくり」
- 3 住みよい働きよい環境をつくろう。「環境づくり」

農業者は自主的に機能集団を組織し、協同学習や実践

活動を行ない、町は農村三作運動推進協議会を設置してこの運動の推進をはかった。

この頃が経済成長のまったただ中。農村の若者だけでなく老人まで工業へ都会へと吸い込まれていった。青少年のいなくなった村は深刻な後継者探しに悩まされた。又「もうかる農業」として売り出したミカン作りの増殖ブームが各地で始まる。

## 七 農業構造改善事業

昭和四十年から実施された農業構造改善事業は、農業の近代化するわち農業を新しい時代に即応するように改め、国民生活において増大する農畜産物の需要に応えるとともに、農民の生活と地位の向上を図ること、具体的にはその土地に最も適した農畜産物の栽培飼養をすること、栽培飼養の規模を拡大すること、機械化、省力化を図ること、協同化をはかることなどを目標にするものであるが、この改善事業には総合的計画的に且つ熱意をもって実施する町村に対しては国の助成がなされた。

戦後実施された農地改革は、農村の民主化とともに、

農業生産力の発展を目指していたけれども、その実施後はいよいよ極端な零細農型となり、生産増大への問題をかかえている本町でも農家一戸当り耕地は田二二アール畑四八アール計七〇アールであり農家戸数二、〇〇一戸のうち専業農家は五五二戸（二七・五％）に過ぎない。

県は農業改良普及員、生活改良普及員を派遣し、町経済課、農協技術員等と共に農業経営並びに技術指導に当らせた。またこれらの普及員、技術員らは町内農家の人人と何回となく話し合いを進め、真剣に本町農業の今後の方向について検討に検討を重ねた結果、主幹作物として酪農、養蚕、緑茶を選定し経営規模の拡大と近代化を目ざして農家経済の向上を期することになった。また前記三つの中心作物を伸ばすために、補完作物として水稻、甘藷、煙草、和牛、そさいの増産をはかることとした。

事業実施の推進組織として、町長の部局に農業構造改善室を設置、専任職員、兼務職員（町関係職員、農業委員、農協職員、農業共済組合職員、県出先機関の職員等を委嘱）を配置し計画の樹立、事業

農業構造改善事業（47年版町勢要らんより）

区 分	事 業 名	施行か所	事 業 量	事 業 費	事業年度
補	土地盤整備 基礎	3	35.66ha	15,949千円	昭和43年度
	茶園造成改良 桑園造成改良 小計	2	20.61	6,750 22,699	43
助 事 業	経営近代化施設	1		54,041	42、43
		3	32.8ha	3,824	43
		2	495m <sup>2</sup>	3,567	43
		1	62.17m <sup>2</sup>	14,504	43
		1	530.7m <sup>2</sup>	19,702	44
		2	15.9ha	1,136	43
	小計			96,774	
	計			119,473	
融 資 単 独	協業	1	1	948	42
		1	40頭	9,800 10,748	42、43
合	計			130,221	

実施ならびに経営指導にあたらせた。また推進協議会として農業構造改善事業推進協議会が設置された。

## 八 米の生産調整と農業振興地域整備法

### (一) 米の生産調整

(1) 経過 日本人の生活から切離すことの出来ない主要食糧である米は、土地改良事業、河川改修、品種改良、施肥改善、病害虫防除など、農業の技術改良進歩によって単位面積当たりの増収は著しく、昭和四十二年度には、一四四万トンという史上例のない生産量に達した。(一〇アール当り<sup>昭和四十七年四〇七</sup><sub>昭和四十四年四四九</sub>)米の増収の反面、米の消費にも変化を生じた。

所得の向上にともない、食生活も豊かになり牛乳、肉類、果実、野菜などの消費が増加するにしたがい、米の消費量が減少し(国民一人当りの年間消費量は、昭和三十七年一八・三kgを最高に年々減少し、昭和四十三年には一〇〇・一kgとなり今後更に減少の見込みである。このように米がありあまる状態になり、政府手持ちの古米在庫は、四十四年十月

末に配給量の約十ヶ月分に相当する約五六〇万トンになりこのままの状態では年々一五〇万トンの過剰米が積重ねられることになるので、これを解決するため政府は緊急措置として一五〇万トンの米の生産調整を昭和四十五年度において実施した。

### (2) 牧園町における転作

米は、本町の基幹作目であり、この生産を減らすことは、本町農業がはじめて経験することであり、農家経済、生活の上からも極めてきびしい状態であった。然し農家にとっては、将来とも食糧制度を維持し稲作の経営安定を図るため、長期的展望にたつてこれに理解と協力を示しこの困難な事業を切抜けてきた。

### (3) 本町の転作を推進するための問題点

本町の水田は、河川流域や起伏するおかの谷間に棚状に展開し湿地地帯が多い。転作作物は湿地

転作の割当面積と実績

年度	区分	割当面積	実績
年度		ha	ha
51		30	26
52		30	26
53		39	43
54		39	43
55		46	46

町農林課調

に弱いため排水条件整備が必要である。今後は、基盤整備をなし計画的な転作の集団化を推進しなければならない。

## (二) 農業振興地域整備法

(1) あらゆる農業振興に関する施策を総合的に進め、地域農業の施策に大わくを定める役割を果させようとして、昭和四十四年六月農業振興地域整備法が制定され、同年九月二十七日より施行された。

## (2) 牧園町の農業振興地域整備計画

急激な経済の成長のため農村の労働力が都市に流れ、工業開発、交通網の整備は大へん進んだ反面、優良農地がつぶされたり、農作業の非効率化や土地利用度の低下、または農業施設の破損、都市公害など、農業にとって好ましくない問題が次第に都市周辺から農村にも波及して来たので、農業振興の地域をあきらかにし、農業用地利用の高度化と農業の近代化を進めるために、昭和四十五年七月農業振興地域促進協議会を組織し、農家の啓発に努め、整備計画の策定作業を進め、昭和四十六年六月一日牧園町農業振興整備計画が樹立施行された。

## 九 農業の概況

本町は鹿児島県の東北部に位置し、農業は本町産業上最も重要な地位を占めている。

耕地面積は一、三〇七ヘクタールで町全面積の一〇％にあたり耕地の田畑割合は、田四八％畑五二％となっている。

土壌については霧島火山系の生産性の極めて低い火山灰土壌が主であり、特に上場（標高四〇〇メートル以上）は重粘質の黒色火山灰土壌に覆われ、表土は乾燥しやすい。下場（標高四〇〇メートル未満）はシラス及び赤ボッコを含む土壌が多く、肥料養分の流失溶脱が甚だしい。

本町の水田は霧島火山脈の南端に位置する韓国岳、高千穂峰、大浪池に発する四河川（万膳川、石坂川、三体川、中津川）の両岸に棚状に展開している。

水田の六〇％は山間部の冷水湿地帯であり地力に乏しくその上毎年梅雨時の豪雨、あるいは台風時の出水等により流失・埋没・浸水・冠水等その被害は甚大なもの

がある。

畑は山岳の傾斜面地帯に散在し、耕作条件が極めて悪い。

本町の農業は立地条件からして生産性が低く農業所得は県水準にも達しない状況である。(対県七五・一六%)しかし、畜産、茶、やさいなどの主要作物は順調な伸びを示している。

昭和四八年秋の石油危機は本町の産業経済にも多大の影響を及ぼしてきている。若年労働力の流出・兼業化の進行、それに米の減反政策、農産物の価格の不安定等さまざまな問題を抱え農業に対する意欲は大きく後退しつつある。こういう中において農村振興運動と公民館活動と一体となって話し合い活動を基本に農業振興・農民の健康・農村文化・スポーツの振興等をはかりなごやかな連帯感あふれる町づくり運動が展開されている。

## 十 水 稲

### (一) 米の歴史

(1) わが国へ伝えられた米

稲作の起源をたどれば、五千年ほど前、インドで野生の稲をまきつけたことに始まる。

わが国に米が伝えられたのは、縄文式文化時代の末期から弥生式文化時代の初期で、紀元前三〇〇年〜一〇〇年のころであろうといわれている。その伝来経路には諸説があるが、中国の江南地方から北九州および現在の韓国地域に移入されたという説が有力になっている。

わが国に渡ってきた米の国内の伝播の経路は、北九州から南九州と中国地方へ、中国地方から畿内を経て伊勢湾沿岸、さらに東海地方へ、そして東海地方から二手に分かれ、一方は信濃路に入り松本方面へ、もう一方は静岡から東京方面、房総半島、茨

城県を通り東北白河地方を経て青森県にまで達した。青森県の津軽地方の弥生式文化時代



米の伝来経路

の遺跡からも多量の米が発見されており、その伝播は意外に早く紀元三〇〇年〜四〇〇年ころまでに日本の各地へ広がったものと思われる。

(2) 古代から室町時代

稲作には多量の水を必要とするので、当時の人々は丘陵や高原地帯に住み、住居地近くの小さな湿地に直まきしては収穫時に穂をつむか、または抜きとるといった粗放な稲作を行っていたものと思われる。

後期弥生式文化時代になると、土木技術も発達してかんがい施設もでき、水田は平野部に広がって行った。

三世紀前後から古墳時代になると、九州から古代的連合国家が造られ、続いて四〜五世紀初めにかけて、大和王朝のような権力国家が形成されると、多くの民衆を動員して河川の堤防を築いて流域平野に水田が開かれ、米の生産力は著しく高まっていた。

しかし、室町時代までは、米は国民の主食とはなっていない。鎌倉時代には水田の裏作として麦類の栽培を奨励しており、麦類や雑穀が一般民衆の主食であった。

(3) 江戸時代の米作り

徳川時代になると、米は各藩の財源であったので、各

藩はこぞって水利事業などに力を入れて水田の開墾を進めた。

また、このころから魚かすやナタネかすなどの購入肥料が使われるようになった。それまで肥料は山野の草やたい肥、厩肥と人糞尿だけであった。

しかし、冷害や干ばつ、病虫害などによって、三年に一回くらいの割合で凶作となり、流通が不円滑なことからその都度、大飢きんとなって、多くの人々が餓死するといった状態であった。そうしたこともあって、人口も徳川時代を通じて二、七〇〇万人程度にとどまった。

(4) 明治時代から現在まで

明治以後になって、さらに開田が進み、農業技術も進歩して、米の収穫量は大いに増加し、豊作のときは輸出することもあるが、三〇年ごろになると、人口が増えたりしたため、毎年外米を輸入しなければならなくなってきた。

殊に第一次世界大戦によりわが国の経済は急激に発展したが、米の需要も急速に増加し、そのために米の値段も暴騰した。その結果各地で米よこせの大暴動が起こったりした。大正七年の米騒動がそれである。

そこで、国が買い入れて貯蔵して米価を安定させる方策をとったり、また朝鮮には日本の種を入れ、台湾の氣候に合った日本型米の新しい品種を作って大增産が図られた。

その結果、朝鮮・台湾から日本型米がどんどん移入されるようになったが、それが昭和の大恐慌とぶつかって、米価は大暴落し、農村恐慌となつてしまつた。

第二次世界大戦になると、朝鮮・台湾からの移入も減り、米の需要も増加したため、米も足りなくなり、足りない米を公平に分け合おうということで、供出制度と配給制度がしかれることになった。

戦争末期から終戦後にかけて非常な食糧難の時代であつた。イモやカボチャはもちろん、大豆かす、さらにはイモづるや桑の葉っぱまで粉にして食べて飢えをしのがねばならなかつた。

しかし日本経済が回復しさらに発展するに伴つて、米も品種の改良や栽培技術の急速な進歩によって増産され、生産量も戦前の五〇%以上も上回るほどになった。しかし、最近では他の食料が豊富になつたこともあつて、消費量は減少し、米は余るようになってしまつた。

そして米の減産を行うことが必要となり、現在では作付制限の措置がとられるようになった。

# (5) 平均反収と消費量

大和王朝の頃、田植えが盛んとなり、今の水田面積の約三分の一に当る一〇五万haが造成されている。推定では当時の平均反収(一〇a)は一〇〇kg室町時代一五〇kg、江戸末期が一八〇kg、大正八年三〇〇kg、昭和八年には三四五kgに達している。

一方消費の面を見ると明治七年の年間一人当り消費量は一〇〇kg、大正年間には平均して一五八kgにも増え、同一〇年には一六三kgと史上最高を記録した。

終戦直後の昭和二年には食糧難で七七kgまで落ちこんだものの三七年には一一八kgまで回復した。

その後、米離れが進んで、いまや八二kgと大正一〇年の約半分に落ち込んだ。

水稲は本町農業の首位を占める作物であり、人間の主食である。昔は、農家の人達は作るだけで、めつたに米の飯は食べられなかつた。農家の人々が、米の飯を食べられたのは、祝事が葬儀、或いは病気になつたときぐらいだつた。

當時は雑穀か、甘藷が主食であり、白米が常食となつたのは戦後のことである。

## (二) 米つくりと農作業

従来農作業の中で米つくり程、苦勞する作物はなく、中でも田植えと真夏の草取りと稲刈りは、一番きつい作業であつた。しかし換金作物の中で、経済性が高く有利な作物も米であつた。この稲作も時の流れとともに幾多の変遷を経て機械化された農作業になつた。鎌による「田打ち」「代かき」から牛馬耕になり耕耘機から田植機、農業用トラクター・バインダー・コンバインと變化した。

技術革新にあわせて、作式改善・品種改良・施肥改善・農業薬剤の改良による病害虫の駆除など、あらゆるものが改良・機械化されて來たが、今後更に農業の機械化は発達するであらうし、それとともに、農家の機械貧乏も進んでいくだろう。

## (三) 作 式

昔、苗植えが始まるまでは、種子のばらまきによる直まきであつたが、苗代をつくるようになってからは、苗

代の作り方も研究改良され、作式も苗植えから、正条植え・並木植え・型付植え・機械田植えなどと変わったが、現今型付植えが行なわれて植縄や、目印をした竹等には、農家から姿を消した。

## (四) 品 種

大正時代 神力・朝日

昭和時代 農林十二号・農林十八号・タチカラ・セン

ダイ・アリアケ・レイホウ・コガネマサリ

## (五) 除 草

(1) 昔は手で除草を行なつた。今でも「ひえ」抜き或いは草が繁茂しているときは手取りをする。

(2) がん爪

雁の爪に似ているので「がんづめ」と言つたらしい。三〇糶位の鉄を五本位せんたんを曲げて、木の柄をすげたもので両手にもつて交互に土中に打込んで反転除草をした。(中耕の役目も果した。)

(3) 大正の末頃「田車」という除草中耕機が出現した。畦間を前方に押して廻転させ、土を反転して除草、中耕を行なうもので、もっぱらこれに変わり、今日でも時折使用されている。

(4) 昭和二十五年頃から「二四D」という除草剤が使用されるようになりその後「PCP」「サタンM」に変わり今日まで使用されていたが、農薬の使用が原因で被害が出始めたので、昭和四十二年から農薬等の使用禁止が行われ最近では、昆虫・魚介類が次第に生息するようになった。

⑥ 昭和四十二年水銀製粉乳剤、四十四年パラチオン製剤、四十六年BHC、DDT剤、ドリソ剤などが使用禁止された。

## (六) 稲刈り、乾燥

(1) 手 刈 り

刈取りは三条か（並木植えの場合）、五―六条（正常植えの場合）ずつ五―六株を鎌で刈取り晴天続きのときで、三日間位、地干しにしてよく乾いたところで「いで」をもって、結束し、水田に「稲こずみ」する。（反当一〇〇把位）

(2) 機械刈り（バインダー）

最近（昭和四十五年頃）動力用、バインダーの刈取り機械が考案されたので次第に農家に普及しつつある。

## (七) 脱 穀（稲こぎ）

⑥ 以前は地干しが多かったが現在は殆んど掛干しである。その理由は、掛干しにすると、米質がよく天候の悪いときでも、発芽の心配がなく、又脱穀後乾燥する必要がないためである。

(1) 金 く だ

昔は金くだを使用した。平たい巾二cm長さ三〇cm位の鉄製の先端を三角形にとがしたものを、横に十五本並べたもので、両手で穂たばを取り稲の穂先ぎを「金くだ」の金の間にのせかけて、手前に引くと粃がはなれるようになっていた。

(2) 足踏脱穀機（一人用と二人用とあり）

大正の末期から足踏用の脱穀機が入り、木製の円筒形のものに針金をV型に曲げた高さ五cm位の釘にしたものを、銅の板に等間隔に打込み、足で踏んで円筒を回転させ、両手に一束ずつ取って、回転する円筒の上に稲穂を乗せかけると、針金に当って粃が脱粒するようになっていた。三十五年頃まではほとんどの農家が使用していた。

(3) 動力脱穀機

昭和38年  
自昭和55年  
至  
年次別米出荷量  
昭和55年農協調べ

年 度	俵 数	金 額
		千円
55	8,600	76,440
54	9,176	81,386
53	9,500	79,858
52	10,450	90,200
51	9,500	78,515
50	10,100	78,523
49	9,300	62,736
48	8,500	43,790
47	5,586	24,991
46	5,300	22,683
45	12,300	50,751
44	15,632	63,669
43	9,387	68,752
42	10,210	78,185
41	8,050	56,338
40	10,530	33,171
39	9,800	28,325
38	10,430	26,232

## 九 米の出荷量

戦後、軍需工場は平和産業に変わり農業用機械も次々と改良が加えられ、昭和三十七・八年頃から動力用の脱穀機も農家一般に普及するようになった。昭和の初期頃まで農家は、農作業の合間・雨の日か、夜間に「臼」で踏んで精白していた。また「サコンタロウ」といって水力で精白しているところもありここに見られた。その後動力による精米機が町内各所に設備されたので、これを利用して精米するようになった。

## (八) 精 米

麦は米と共に農家の食糧と、冬作の換金作物として作付けされてきたが、価格が安く、引き合わない作物の代表的なものとされつつも、外に代わるものがなかったのやむなく耕作が続けられてきた。昭和四十年の作付け面積は畑作中二位、一、八〇〇ha（一位は甘藷）であったがその後養蚕、畜産の進出によって昭和五十三年には、一六・二haと急降下し僅かに家畜の飼料程度のものが作付けされている。

## 十一 麦

## 十二 甘 藷

甘藷は農家の食糧と家畜の飼料として、昔から耕作してきた。昭和十一年始良郡内に澱粉工場が設立されてからは、作付面積も増大し更に昭和十二年日支事変の勃発により、工業用や食糧増産の一環として増産が進められた。特に昭和二十年終戦後の食糧不足時代には、主食を補

う作物として果した役割は大きい。当時国民は甘藷によって餓死をまぬがれたといっても過言ではなからう。その後昭和四十年頃までは、災害に強い作物でもあるので順調に延びたが、養蚕や畜産に押され、又澱粉が国際的影響を受けたりして急激に作付が減少した。

昭和四十年作付け面積 五五〇ha

同 五十三年      "      四二ha

### 十三 大豆・粟

夏作の代表的な作物であったが昭和二十五年〜三十年二四三ha前後を頂点にその後仲よく降下の一途をたっている。労力を要する割に価格が安く需要も少なく、畜産や養蚕の進出によって姿を消して来た。しかし農家が自給自足をしていた時代には農家に於ける主要な作物であった。

大豆はみそ、醤油の原料とし、終戦当時は主食を補うために重要な役割りをした。

粟は米を節約するために甘藷と共に毎食混入され、その度合いが貧富の差の尺度にもされていた。現在は鳥の

飼料程度の作付けがされている。

### 十四 そ ば

播種期が八月下旬であるため、大豆の後作か、たばこの後作に作付けされ、そば汁として主食を補うものとして利用された。昭和二十八年の作付け面積は、八二haであったが現在（五五年）ほとんど見られなくなった。

### 十五 農業の振興

#### 基本方針

農業振興の方向として基本的には農家の現状と食糧自給率、所得向上をふまえ、従来基幹作物としてきた茶・養蚕・畜産をすすめ補完的には、たばこ、野菜など耕種部門の推進拡大を図り、自然気象条件の有利性を生かし主産地化を強力にすすめ、農業の基盤であるほ場・農道・水利施設等の整備を従来にましてすすめる。本町の地形・転在する農地の条件から、これを結ぶ大型基幹農道を中心とする関連農道、一般農道の整備を最重点にす

すめ、また面的な広がりをもつは場の整備・農地の保全・かんがい排水施設および生産施設整備と農村振興運動による話しあい運動の展開、校区公民館、自治公民館組織の充実をはかり、農村に住む人すべてが希望をもって生活できるよう農業の生産力をため集落整備による生活基盤施設の充実など定住条件を整え農村社会の活力を高める運動を展開し関係機関団体組織との有機的な連携協調を保ちつつ農業振興施策の推進を図る。また観光の町としての有利性を生かしその協調をはかり相互依存関係を強め、新しい営農体系を整備し、特異性のある農業を模索（観光、農業一体となった）しながら施策の推進をはかる。

#### (一) 米・麦

耕地の三〇%を占める稲作は依然として栽培志向が強い。全国的な過剰から「うまい米」づくりを基本にして優良品種の導入をはかり消費拡大と同時に米の生産を計画的に調整し五十三年度より実施している水田利用再編対策により絶対的な自給率向上が求められる飼料作物、大豆等に重点をおいた転作を推進する。転作への条件として、また将来の営農を考え、土地基盤の整備、技術の

改善、機械導入を進め、転作の定着をはかると同時に高齢、婦女子化による水田の荒廃化を防ぎ機械銀行等による請負作業の普及をはかる。

麦については栽培面積も減少し、生産技術や種子の確保も困難な状況となっているが食糧自給及び飼料の面からも再認識し集団省力栽培技術体系を確立し推進をはかる。

#### (二) 園 芸

野菜については交通網の発達により輸送野菜産地が競合し、あわせて稲転が拍車をかけ流通事情は厳しい。このようななかで国の指定産地の適用をうけるか否かで今後の野菜農業が左右される。本町は高冷地として気象条件を生かした夏、秋野菜の適産地であるキャベツ・レタス・キヌサヤ栽培を重点に新産地育成事業ならびに指定産地の指定をうけるべく水田利用再編対策とからめて推進をはかる。

果樹としては、みるべきものがないが栗が主体である。栽培面積三七ヘクタールであり規模も小さいが今後観光との結びつきを求め推進する。また特産観光土産品の開発をはかるためアンズ・桃桜等の試植をし結果によ

つては全町的な植栽をすすめる。

花き類については、本町のもつ特性を生かしたグラジオラスの球根栽培、イチゴの山上げ育苗、菊類の集約的な経営を育成する。

### (三) 甘 藷

近年栽培面積も減少し、原料用甘しょとしては郡内に澱粉工場が一所であり、能力的に限界があり、勢い面積拡大はできないが代替エネルギー源としての見直し論も台頭しているなかで今後の動向によっては省力的で防災作物としての活路も見出せる。また青果用としての甘しょ栽培も有望であり、新たな用途開発を見極めながら推進をはかる。

### (四) 雑穀類（大豆・そば等）

栽培面積は極端に減少し、農家の自家消費にも充たないが、水田利用再編対策による転作作物として脚光を浴びるようになり、四九年大豆生産振興地域に指定されて販売については確保されているが、その生産性、労働力からして栽培面積は拡大されないのが実情であり、国外輸入依存度が高いが、今後の食糧自給体制を考えると貴重な植物性蛋白源として、技術確保をはかり推進す

る。

## 十六 農業技術のうつりかわり

### (一) 田 植 え

#### (1) 選種と浸種

稲種は穂揃いを選び、カマゲ（かます）に入れて別においておいた。タネツケ（浸種）の前に、むかしは水の中に入れて浮んだシラを取り除くだけであったが、明治中年以後は水に塩を少し入れ、浮いた半ジラをシヨケ（ざる）ですくって取り、沈んでいるのを種にした。浸種は新暦五月初めに、桶に水を入れてそれにしめた。水はかえなくてもよい。四・五日してシヨケに取りあげ、水を切ってからまく。又早く芽出しをさせる場合は、川など流水の所にしめた。

#### (2) 苗代準備と播種

苗代（なえとこ）は二度、牛馬でスキ（耕耘）、ヨン（碎土、地均し）であとに、野山の草木の芽をわら切りで二寸位に刻んだものと、大根（苗代用）を苗代にふり散らして田下駄で踏み、三・四日そのままにしておく。

その間に若芽等は腐ってしまうので、その上を鋤でならしておく。苗代に踏み込む草木は、新暦の四月末に芽の出るものであれば何でもよいが、ナラなどのように、若芽の早く芽出つのがよいとされていた。

新芽を踏み込み三・四日したあと、水をハカして（出して）苗代を日干しする。二日ほど日干ししたあと、夕方をカケて（入れて）おき、明朝早く風が出ないうちに種粃をまく。まき付けは、明治の末年まで目見当で畦の上からまきつける撒播（さくば）をしていた。揚げ床にして種をまく方法に改善されて普及したのは、大正初年のころからであった。

(3) 苗の手入れ

虫（ウンカの類）が発生したときは油を入れた。油は終戦後まで豊年油を使っていたが、油は朝早く露のあるうちに入れるものだという指導がなされていた。

(4) 本田準備と植え付け

○ 植え付け準備

一番スキ（耕耘）は、オコシ（鋤）で左から二回、右から二回スキ合わせる。二番スキは「芯ナシ」ともいって、さらに一番スキでできた畦をスキ分けて、オコシが

通らない部分がないようにする。つぎは「アラグレ」（荒い土塊を砕く）をする。アラグレは水を入れて馬鋤でヨム（碎土）仕事である。アラグレがすむと「カシキ」（草木の葉）を入れてからナカスキをする。カシキは、本田の唯一の肥料になるもので、全農家ではカシキを切るのが大きな仕事であった。ナカスキは先づ水田の周囲をぐるぐるまわりスキをしたあと、全面をスキ・カシキをスキ込んだ。ナカスキがすむと「ウエゼロ」といって植え付けができるようにヨミ、植え付け準備を終わる。

○ 植え付け

苗は播種後四十五日経った苗が、最も良いとされていた。（現在は三十日苗）したがって種のまき付けは、植え付け予定日から逆算してまき付けられた。

植え付けは、苗を本田に持って行ってから、一コテ（一束）に一にぎりの骨粉を稲の根にもみつけ、田舟で運んで植えた。苗の根につける骨粉の量は一升マキの面積（約五十歩）に対し二升から三升位で、本田の肥料は、カシキ（一升マキに約六束）と苗の根につけた骨粉だけである。

植え方は、明治四十年ごろまでは無正条植えであった

が、それ以後「ゴ」をきって植えるようになった。綱植<sup>ツナ</sup>えをはじめたようになったのは、大正初年のころからである。

○ ユイとサナボイ（サノボイ）

町内ほとんどの部落で植え付けは「ユイ」（共同作業）をしていたが、食事は自家であった。ユイで自家の田植えがすむと、自家だけでボタ餅をつくり、残り苗を神仏の左右に各一束を供えて豊作を祈った。全戸植え終ったあと、部落のサナボイを行なった。

○ 本田の手入れ

植え付け後二・三週間してから「ガンヅメ打ち」をした。そのあと二週間前後に「ガンヅメ直し」をし、さらに一回草取りをして本田の手入れを終るのが普通であった。出穂直前に最後のヒエ取り作業があるが、それ以後は稲田に入って稲の根を踏み切つてはいけないといわれていた。正条植えが普及して、雑草に田車を使うようになったのは、大正二・三年ごろである。

○ 収穫・脱穀調製

稲刈りはユイでなく各家で刈った。乾田は地干しにし、湿田だけ掛け干しをしていたのであるが、昭和に入

ると乾田でも掛け干しをするようになった。

脱穀は金クダ<sup>かな</sup>（千歯コギ）・唐箕・モミ通しを使っていたのに、大正の末ごろから足踏み脱穀機が普及したとにより、能率が飛躍的に高まった。

○ 余 録

本田の肥料は苗代には草木の若芽、本田には野山の草木であった。苗代つくり、本田準備のころになると、カシキ切りで忙しかった。

古老の話によると、牧園地方に水田肥料として骨粉を使うようになったのは、明治初年ごろからで、同じく三十年ごろにはレンゲ草が作られるようになった。青刈大豆が水田肥料として普及したのは、大正中年ごろからだという。

(二) ソバ植え

(1) 播種準備

昔からソバの種子をまくことを「ソバを植える」とよんだ。ソバを植える畑は、何度も耕耘して、土を日にさらした方がよい。これは、ソバは湿気を嫌うからである。雨年はソバの収穫が少なかった。

(2) 手入れ・収穫

ソバは植え付けてから七十五日といわれるように、最も短期間に収穫する作物で、その間手入れはしない。

花盛りのとき霜に打たれると収穫はない。また早く植えて過ぎるとカラ（草丈）ばかり栄えて実にならない。

実になるころ、天氣が二・三日続くと実の入りが非常によい。

収穫は鎌で刈り、十日から十五日位刈り株の上で乾燥させた後、天氣のよい日の午前中にかえして乾燥させ、午後むしろを敷いてメグイボー（回り棒）で打ち、脱穀した。ソマの価格は、カマス一俵十二貫入りで一元（明治の末）であった。

### (3) 食 べ 方

ソバを石臼でひいて粉にし、これを「フリ」（粉ふるい）を通してから、つぎのようにして食べる。

#### ○ソバカキ

お湯をたぎらかして（わかして）、お湯で「かいて」醬油を少しつけて食べる。「かいて」（かく）というのは、ソバ粉に熱湯をそそぎながらシャモジまたは箸でかきまぜ、団子をつくれる状態にすることである。「いろり」にかけて熱湯で「かいて」よく食べるものであったとい

う。

#### ○ソバキ

ソバ粉を水で練って団子をつくり、それを棒で薄く押し広げる。広げたものを折りたたんで包丁で切る。ハガマにお湯を沸かし、切ったものを入れていでの。（ゆでること）それをざるにとりあげ水を切り「タレ」につけて食べる。

#### ○ソマンドゴ（ソバ団子）

まづ、生甘藷の皮を包丁でむいてハガマに入れて茹で、からいものが煮えたとき、それにソマソ粉を入れてまぜ、団子をつくれるようにこね、少し塩を入れて味をつけてから団子をにぎる。（今の餅より少し大きくつくった。団子をにぎるとは、手で円い形につくこと）

翌日いろりの「オキ」（灰火）で焼き、代用食または間食として食べた。

#### (三) 畑作物の作付け

畑作の主なものは、甘藷・陸稲・麦・粟・大豆・菜種・ソバなどであった。このうち主食は県下中農以下の農民はみな同じで、米に粟、甘藷を混ぜたご飯で三食のうち一食は代用食とした家も多かった。

植之五月下旬收穫

。麦は十一月中旬にまき六月上旬に収穫

これらの作物は、戦前から戦中、戦後の食糧増産が叫ばれていた時期を通して、本地方の主要畑作であったが、現在ではこの七種ともに斜陽作物となり、農業人口の流出と併行して、兼業化の方向をたどっている。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
<hr/>												
				大		豆						
								粟				
					甘		諸					
						陸		稻				
菜				種				ソバ				菜種
麦												麦

次に本町の畑作体系の一例を挙げる。

大豆は四月下旬にま

いて八月中旬收穫

。粟は七月中旬にまき

十一月中旬に收穫

○甘藷は五月下旬に植

え十一月上旬に収穫

。陸稲は五月下旬にま

き十月下旬に収穫

。ソバは九月上旬に

百十日前)にまき

十一月上旬收穫

。菜種は十一月中旬に

十七 茶業

### (一) 茶業の推移

- (1) 鹿児島県茶業は明治の中期頃までは一般に自家用主義であつたので広い畑地のそこかしこに点々と畦畔茶園を見受け自家で釜いり茶や竹製の茶取籠をもつて製茶するのが大部分で中には日乾製を見るの状态であつた。

(2) 牧園町茶業については、大正の初め正市熊右衛門氏（下中津川改田口85才）が隼人町松永の茶業伝習所において焙炉（ほいろ）による製茶技術を習得し昭和十年に現在地に工場を建てられたのがおこりである。正市氏はその年に初めて畑に三反歩の茶の実植えを行なった（それまではすべて畦畔茶園であった）その後毎年増殖を実施し今では茶園面積二・五haに達している。

また三休堂地区にきりしま茶生産の基礎をつくったのが故宇都口規余志氏である。三休堂地区は気候風土共に茶の生産に適し、県が茶産地として指定し

茶工場も町内一八工場のうち一三工場は三体堂地区にある。

三体堂中野宇都口氏の茶園の入口に建立されている茶業の顕彰碑を紹介しよう。

#### 碑 文

「目的に向つて燃えよ されば成就す。」

(きりしま茶の礎石をつくつた宇都口規余志翁の言葉) 宇都口氏は日本農業祭受賞者である。

昭和五十二年十二月二十日

きりしま茶業振興会有志一同

- (3) 戦後茶は輸出農産物としての価値が高かつたので本町としては既存の茶園や畦畔茶園の肥培管理と復元をはかりまた町営の優良茶園を作り振興に努めたので生産量も増加の一途をたどつた。

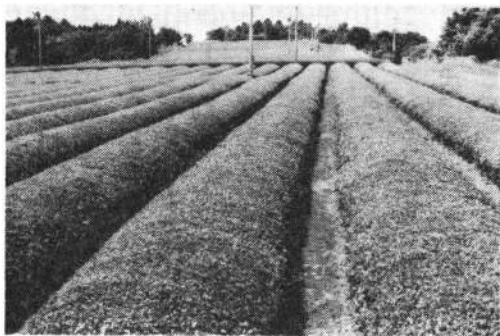
- (4) 本町の茶は天恵の条件に恵まれ品質優秀でしかも将来性のあることから本町農業の主幹作物に選定し農業構造改善事業で昭和四十三年度において集団茶園造成改良事業三五・六六ha植栽、昭和四十四年度において緑茶共同加工施設を設置してから年々工場

数、緑茶面積共に急速に増加した。

#### (二) 茶業の現況と振興方針

##### 霧島山麓の立地

条件に合致し、優良茶として「きりしま茶」の評価を高めつつある。しかし最近好況に推移しているとはいへ全国的に過剰生産の不安がおこりつつあり、これに対応できる産地態勢を確立すべきである。現状では大量契約に対応できる規模でなく、茶団地の造成拡大をはかり量、質ともに「きりしま茶」の真価を発揮できる産地づくりをすすめる。また天恵の条件に加えて生産技術の改善、生産管理の近代化をすすめる品質格差をなくし統一的品質になる銘柄確立と農協の出荷調整センターを拠点に流通販売シス



茶 園 (三体堂)



日本一の大茶樹（持松）

テムを確立し、相場変動の少ない再製仕上による小売販売を促進し県外消費地の農協直接販売と消費拡大のための宣伝をすすめ、基幹作物としての強力な推進をはかる。

### （三）日本一の大茶樹

本町下中津川稼原に古い歴史を誇る大茶樹があった。

この大茶樹は昭和十五年文部省から天然記念物に指定されたもので、樹は

三株からなり、樹冠のひろがりには南北九・六m、東西七・五mにおよび、高さは四・五mに達する壮大なもので当時日本一といわれた。

この大茶樹は今年より三百余年前（寛永年間）下中津川荒田の木佐貫

時満氏の祖先が挿木したもので、年と共に益々増大しつつあった。

また各地方より来訪視察者も多く昭和十一年六月には日本茶道にゆかりの大谷光瑞氏一行が視察せられた。

戦前までは青年学校や女子青年

団から選ばれた四〇人の男女により一番茶を摘み、霧島・鹿児島両神宮に奉納していた。

この大茶樹は昭和二十年に枯死し現在は二代目大茶樹が保存されている。これは持松真方の久留袈裟太郎（八四）が二九才の時日本一の茶の木を挿したもので現在すくすくと成長している。高さ七m、枝張一三mの巨木に達し初代に劣らぬ旺盛な成育を見せている。



茶園と広域農道

この茶は飲むときいつまでも緑色が変わらないので、昔から不老長寿のお茶として町民に親しまれている。今年も奥さんら一〇人が茶樹にヤグラを組んで八時間ばかりで新茶を摘んだ。町ではこの優れた品質を保護すると共にきりしま茶の宣伝用に使用している。

## 十八 養 蚕

### (一) 養蚕の推移

薩摩藩における養蚕は発達がおくれ、生糸は殆んど他領産を用いていた。元禄元年（一、六八八年）藩は一般農民に対し蚕の飼育をすすめ女子に白糸の取り方を習わせ藩用として差出すよう達している。

島津重豪（一、七五五年）になって絹織物の織局を建て養蚕を奨励した。また技術者と女工を招いて各郷に伝習させたと史料に見えている。

牧園町では明治の初頃から飼育されていたと思われる。その頃は商品としてではなく、桑は山桑を利用し蚕種も自家製で繭も自家用として使用していた。その頃の繭の価格はマス目で売買され繭一升二五銭で米の数倍の

価格で取引されていたのでその有利性に着目し町内一般に拡大された。

戦時経済下に入ってから、繭価格の暴落、主食糧の重点生産、労力不足などから繭生産は次第に減少していった。戦後になって合成繊維におされ、一方食糧事情から桑園は減反の方向をたどっていたが、その後経済の成長に伴ない絹糸の需用も伸び防災営農の奨励と農村経済の窮乏を背景としながら、再び芽を吹きはじめ昭和四十年本町の基幹作目として取上げ養蚕の振興をはかった。

その後年を経るごとに価格もよく、飼育技術も改良、省力化し専業養蚕農家の増加、面積の拡大、産繭量の増収により農家経済の安定が図られた。

### (二) 養蚕の現況と振興方針

養蚕経営は多様な形態規模で行なわれ一部専業農家のぞき、それぞれ経営内容により適正な組合せ（複合型）が多い。生産、収益性を高めるため生産基盤、養蚕集落、生産組織の整備をはかり、他作物との有機性を高め冬期間の蚕室利用、桑園間作等をすすめ安定した養蚕の確立をはかる。

### (三) 養蚕功労者早水貞夫氏（宿窪田坂元八三才）

早水氏は大正四年一七才の時養蚕を始めた。当時はお座敷養蚕で丸バラの棚飼いであって部屋一杯にバラを広げ寝る場所もない位であった。その後年々増殖し終戦前は桑園面積五〇a、産繭量百K近くに達した。

戦時中主食糧の重点生産等のため桑を抜根し十年間養蚕経営を休業していたが昭和三十年から再び経営を始め昭和五十年(七九才)まで五十二年間養蚕一筋に生きた人である。これまで方々から受賞されているのでその一部を紹介しよう。

# 賞 状

鹿児島県始良郡牧園町

早 水 貞 夫

蚕糸技術の改良と経営の合理化に力を尽し繭の増産と生産向上の実を挙げて他の模範となり、蚕糸業の健全な発達に寄与した功労は、まことに著しい、よって養蚕功労者表彰規程に従い養蚕功労賞を贈ってこれを表彰します。

昭和五十二年五月十八日

財団法人大日本蚕糸会総裁 高松宮宣仁親王 図

## (四) 蚕業指導所

名称 鹿児島県中部蚕業指導所

管轄区域 国分市、大口市、始良郡、伊佐郡

所管事項

- (1) 蚕業の奨励に関すること
- (2) 蚕業改良普及事業に関すること
- (3) その他蚕糸業の改善発達に関すること

沿革

。昭和二十五年十一月三十日鹿児島県始良蚕業技術指導所として牧園町役場内に仮事務所をおき発足、始良郡一円を管轄する。

。昭和二十六年五月十日牧園町宿窪田一、二四二番地において地鎮祭執行、開設工事に着工する。

。昭和二十六年十二月十六日工事完了し新築の事務所へ移転する。(土地一、一九〇m<sup>2</sup>、建物三三〇m<sup>2</sup>、桑園三四a)

。昭和二十七年十二月十七日落成開所式を挙行する。

。昭和二十八年三月三十一日建物を牧園町長から鹿児島県へ寄附採納する。

。昭和三十年十二月二十六日蚕業技術指導所を蚕業

指導所と改称する。

。昭和四十一年四月一日蚕業指導体制の広域化により始良、伊佐両蚕業指導所を合併し中部蚕業指導所と改称、始良、伊佐区域を管轄し伊佐地区に伊佐支所をおく。

。昭和五十五年三月三十一日事務所を加治木合同庁舎に移転し土地、建物は牧園町に返還する。

開所以降の所長氏名

年 度	所 の 名 称	代 氏 名
昭和二六年	始良郡蚕業技術指導所	東晴二
昭和三二年	始良蚕業指導所	宮脇好美
昭和四一年	中部蚕業指導所	松元清香
昭和四四年		加藤純雄
昭和五〇年		西武純正
昭和五二年		高取純道
昭和五五年		岩崎純雄

## 十九 たばこ

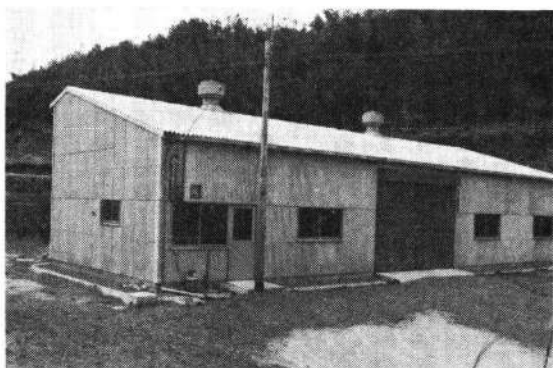
### (一) 沿革

明治十一年刊行薩隅煙草録によれば、服部左近衛門宗重によって初めて国分煙草の耕作技術が開けたとされている。服部は島津義久の家臣で義久の大隅の国分への移住にしたがい国分梅木に移り住んだが前から煙草を愛好していた。慶長十一年（一、六〇六年）義久の許可を得、梅木の地一反歩に試作したその結果良品を得たので義久に認められ煙草奉行に任ぜられ各地に栽培法を伝えた。これは後年の名品国分煙草の技術的開発の起源に関するもの（煙草耕作の起源ではない）である。

鹿児島県のたばこ耕作は、昭和七年に転換期をむかえた。従来のも在来種をこの年から耕作面積の三〇％が黄色種となった。そして昭和十二年には耕作面積の七〇％が黄色種で占められるようになった。

### (二) 戦後のたばこ耕作

昭和二十二年から耕作面積は急に増加した。これは当時専売局の方針が、生産の量さえ多ければ種類は問わな



たばこ共同乾燥施設

いという主義であったので在来種が息をふきかえし増加したもので全体的量はふえたが品質は悪かった。

昭和二十五年ごろから、品質に重点をおくことと、黄色種をのぼす方針にかえられた。そのほか、適地適作のため産地厳選主義がとられ「たばこ耕作許可制」がとられるようになった。

た。品種改良なども行なわれて品質は、いちじるしく向上した。

### (三) 現況と振興方針

本町の葉たばこは質量ともに特にすぐれ、郡内においても最高の反収をあげている。専売品として生産規制

をうけている反面、安定した作物である。しかし、外国産の輸入により圧迫をうけていることも事実である。本町の作付面積を堅持するには、より一層、良質なものを生産し、反収増をはからなければならない、大型葉をなくすることが最大の条件とされている。五十二年度葉たばこ共同乾燥施設の建設により、乾燥施設不足の解消と一貫した共同作業により、質量ともにすぐれた葉たばこ生産体制ができた。今後適期収穫の推進をはかり、共同乾燥場利用による品質の斉一化を促進する。

## 二十 畜 産

### (一) 畜産の概況

明治三十年前後、まだ交通の便の悪い頃ほとんどのが農業を営んでいたもので、牛馬頭数は、約三、〇〇〇頭を数え一戸あたり二・四・五頭（多いところで一〇頭）を飼育していた。春先きには、放牧する習慣であったので村内各大字には、数十町あるいは数百町歩の放牧場をもっていた。これらの牧野に部落総動員で火入れを行ない一面に萌出た草原に牛馬の群れ遊ぶ姿はすばらしい景

観であり、さすが畜産地帯としての感をいだかせるものがあった。

鉄道が開通して交通の便がよくなるにつれ、農業をやめて商工業に転職するものや、出稼ぎ、給料生活へ変わる者が次第に多くなり、また養蚕、たばこ、その他の副業に切りかえるのがめだつて来たため、昭和元年の総牛馬頭数は、馬一、〇二四頭、牛一、一六八頭と減少したため子馬、子牛の生産も年々少なくなった。

牧園は、畜産の好適地として古くより踊馬の名声が高く競馬に、共進会に数多くの駿馬を輩出するなど、県下における馬産地としての定評があった。

## (二) 戦後の畜産

戦前は馬を中心とした畜産であったが戦後は専ら牛に変わり、馬は年々減少し、今ではわずかに荷役用として数頭いるに過ぎない。この他豚、鶏、兎、山羊、綿羊等が飼育されていた。これらの家畜は農耕用、堆肥増産、副業として飼養されていた。時代の進むにつれ、農業の機械化、飼養技術の改良発達、食生活の改善にともない畜産経営の形態も専業化し、拡大されたが経済の変動は飼料、家畜の価格に影響し経営に恐慌を来している。

## (三) 馬

昭和に入り馬は日中事変の拡大するに従い、軍用馬として需用は増大し、馬の増産は急務となったが生産馬まで徴用されたので生産頭数は減少した。

昭和二十年終戦と同時に馬の需用も減じ、軍用馬から農耕馬に変わり、現在町内には数頭しか残存していない。

## (四) 肉用牛

馬が減少するに従い牛の飼育熱が高まり、昭和元年には遂に牛の頭数が馬の頭数を上回るようになった。

本町は恵まれた立地条件を活かし優れた元牛を作りこれを保留の対象とするため鳥取牛を導入するなどして和牛の改良をはかった。

町では昭和四十年から実施された農業構造改善事業において和牛を補完作目として選定すると共に

優良牛保留補助(優良子牛に対し補助金を支給し町外流出を防止するもの)

草地改良事業補助、和牛振興会補助等を実施した。

。農協においては

肉用繁殖素畜導入事業(県の助成により肉用繁殖素畜

を集团的に導入しこれを組合員に貸付け肉用牛生産団地を育成しようとするもの。和牛貸付事業等実施し町、農協一体となって、優良牛の導入、飼育技術の改善里山利用による多頭飼育などをはかり和牛の振興に努めた結果その頭数も飛躍的に増加した。

### (五) 種雄牛（山丸号）について

寺原、六観音の境内に「種雄牛、山丸号之碑」が建立されているその内容を紹介しよう。

「碑文

種雄牛 山丸号

生年月日 昭和二十九年二月一日

登録番号 黒 四七九三号 得点数 七七・三六六

産 地 鳥取県八頭郡船岡町 山丸九丸

飼育地 牧園牧場

供用期間 昭和三十年十月から四十二年三月まで

生産頭数四、二二五頭うち七七七点以上七六頭基本登録

牛一、二〇〇頭

右記のように本地区の肉用造成と生産基盤の確立に寄与した功績を称えてここに記念碑を建立した。

昭和四十二年四月八日

牧園町和牛改良振興会長

松下久敬

牧園牧場長

赤塚勝一

牧園和牛人口授精組合長

西園正雄

この碑文のとおり鳥取県産の種雄牛の導入により牧園町和牛の資質は向上し市場でも有利に取引きされた。

山丸号は十二ヶ年にわたり人口授精をなし子牛四、二二五頭が生産されているので子牛一頭一〇万円とすれば山丸号は一代において四億二、二五〇万円を稼いだ事になる。

### (六) 畜産の現況と振興方針

畜産は町農業の基幹であり、肉用牛を中心に農業生産額の四〇％を占めている。しかし所得率は、価格変動等により必ずしも一定しないが農業経営の絶対的要素として位置づけ推進する。また霧島山麓の草資源、山林原野、遊休農地を活用し、水田裏作、転作利用による自給粗飼料対策をすすめる生産コストの低減をはかり、資質の改善、能力向上、飼養技術の改善による輸入外圧に対応できる生産性の高い畜産の展開をはかる。

### (七) 乳用牛

霧島山麓の広大な土地および草資源を活用した專業酪

農として発展してきたが、一農事組合法人一四戸の個別農家で構成され、頭数的には適正規模として経営され、比較的に安定経営の方向である。しかし最近の消費不振、酪製品の入等により過剰生産傾向から酪農減反の動きもあり、高能力牛による生産性の向上、自給飼料確



天高く乳牛肥ゆ

180頭第一牧場に草をはむ

平均標高 800 m、118 haの雄大なスロープを描く霧島第一牧場、年間を通じて放牧された180頭のホルスタインがゆう然と草をはむ。日量1600kgの牛乳が生産され人々のノドをうるおしている。



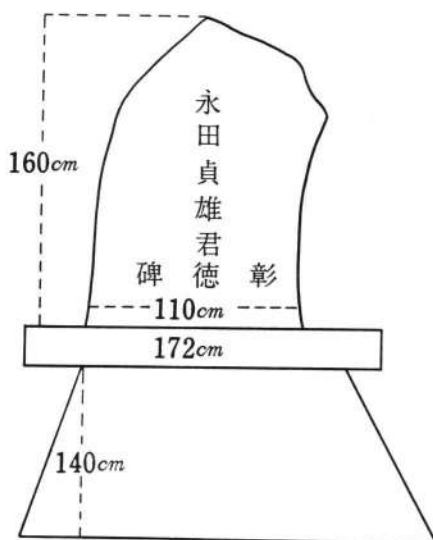
種雄牛 山丸号之碑

保、飼育技術の改善等によるコストの低減をはかるなど、一方では酪農協同組織の再編により消費協同組織との連携による消費拡大を推進し酪農の基本的な問題を再検討し諸情勢に対応できる力をつける施策の推進をはかる。

#### (ハ) 寺原六観音

寺原畜産広場の一角に馬頭観音をお祭りした神社がある。この神社の由来については、境内に建立されている永田貞雄氏（五代牧園村長）の彰徳碑に記入されているのでその碑文を紹介しよう。

「碑文」 石碑(1)の裏面

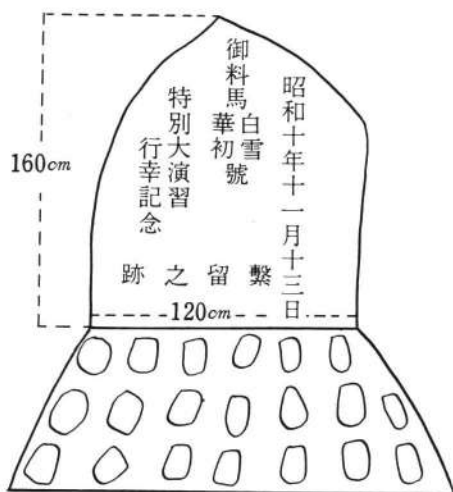


石 碑 (1)

「本村は古来産馬地としての名あり然るに牛、馬の守護神なきを遺憾とし、永田氏率先唱導有志の賛同を得、大正二年六月社殿を新築八月、六観音の分祀を請く、ここに碑を建て氏の徳を永久にたたう。  
昭和五年七月建之  
始良郡畜産組合 牧園村支所」

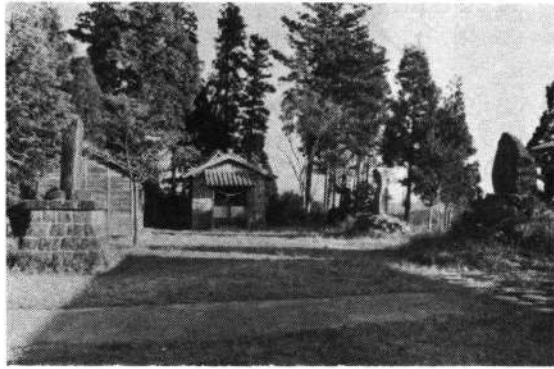
註 六観音は、えびの高原の北方にあって性空上人の勧請によるという伝説あり。

石碑(2)は、昭和十年特別大演習で行幸されたとき御料



石 碑 (2)

馬をこの地に繫留した記念碑である。  
寺原に六観音の神社ができてから、畜産の神様として参拝者が多かった。特に四月八日の例祭には郡内は勿論郡外からも畜産農家の人人が絵馬を持って集り良馬、良牛の出産を祈願した。広場では馬踊り、棒踊り、手踊り出店等が軒をつらね盛況を呈した。  
現在広場では、畜産品評会、登録牛検査等年間を通じて種々の行事が実施されている。



寺 原 六 観 音

## 九 統 計 資 料

## 就 業 構 造

就業者数をみると過去15年間（昭和35年対50年）に、第1次産業が36.2%も減少し、第3次産業が30.5%のびてきている。

これは、社会、経済構造の変革にともなうもので対県比にすると、本町の特性がよくうかがえる。第3次産業が断然のび観光の町を象徴している。

昭和50年度全国と対比しても上回っている。

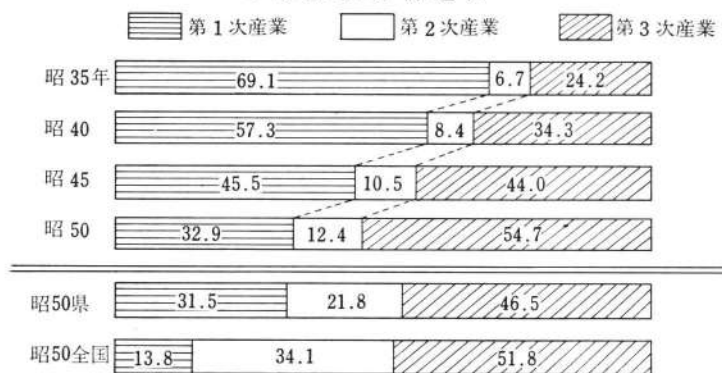
対県比就業構造 %

国調資料

年度	項目	第 1 次 産 業		第 2 次 産 業		第 3 次 産 業	
		町	県	町	県	町	県
昭 35		69.1	60.4	6.7	12.1	24.2	27.5
" 40		57.3	50.6	8.4	15.8	34.3	33.5
" 45		45.5	42.3	10.5	17.8	44.0	39.9
" 50		32.9	31.5	12.4	21.8	54.7	46.4

（就業者中分類不能を除く）

年次別就業構造図



産 業 別 男 女 就 業 者 数

国調資料

年 性 別	昭和 35 年			昭和 40 年			昭和 45 年			昭和 50 年		
産 業 別	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
第一次産業												
農 業	2,293	2,516	4,809	1,742	1,955	3,697	1,217	1,584	2,801	929	958	1,887
林 業	116	24	140	40	6	46	58	5	63	65	17	82
漁 業	6		6	2		2	7		7	5	1	6
計	2,415	2,540	4,955	1,784	1,961	3,745	1,282	1,589	2,871	999	976	1,975
第二次産業												
鉄 建 設	5	1	6	10	5	15	7	3	10	7	2	9
製 造 業	236	95	331	274	103	377	430	70	500	452	62	514
計	89	51	140	85	70	155	92	63	155	110	113	223
	330	147	477	369	178	547	529	136	665	569	177	746
第三次産業												
卸 小 売 保 険 業	210	252	462	210	275	485	218	335	553	263	433	696
金 融 動 産 信 道	8	4	12	13	5	18	14	14	28	15	11	26
不 運 輸 ガス 水 道	166	43	209	191	52	243	238	49	287	18	3	21
電 気 サ ー ビ ス 業 務	35		35	30		30	24	3	27	11	2	13
計	387	526	913	567	781	1,348	675	984	1,659	896	1,151	2,047
	88	13	101	100	24	124	136	76	212	162	59	221
	894	838	1,732	1,111	1,137	2,248	1,313	1,461	2,774	1,596	1,687	3,283
分 類 不 能 計	2	1	3		2	2	2	1	3	11	27	38
合 計	3,641	3,526	7,167	3,264	3,278	6,542	3,126	3,187	6,313	3,175	2,867	6,042

## 町内産業別純生産・町民所得調

単位：千円 下段は対前年(%)

年次	45	46	47	48	49	50	51	52	平均成長率 45～52
第1次産業 農業	730,985	629,571	887,192	1,080,535	1,356,086	1,624,855	1,961,262	2,091,406	16.2%
農林水産業	507,194	418,617	551,434	617,653	804,411	927,941	1,242,417	1,301,873	14.4%
林業	220,365	205,110	328,848	457,822	548,314	691,869	712,886	784,274	19.9%
水産業	3,426	5,844	6,910	5,060	3,361	5,045	5,959	5,259	6.3%
第2次産業 工業	512,136	571,457	1,543,278	1,678,583	1,047,824	971,443	1,274,241	1,551,159	17.1%
鉱業	12,747	16,305	20,842	48,148	42,307	41,466	54,075	97,214	33.7%
建設業	411,194	461,134	1,406,360	1,467,730	795,582	691,986	952,990	1,130,874	15.5%
製造業	88,195	94,018	116,076	162,705	209,935	237,991	267,176	323,071	20.3%
第3次産業 商業	2,656,758	2,942,323	3,513,414	4,305,732	5,967,071	6,796,513	7,575,036	9,177,274	19.3%
町内純生産	3,899,879	4,143,351 + 6.2	5,943,884 + 43.5	7,064,850 + 18.9	8,370,981 + 18.5	9,392,811 + 12.2	10,810,539 + 15.1	12,819,839 + 18.6	18.5%
町民所得	3,951,695	4,165,578	5,118,110	6,162,520	8,414,229	9,352,749	10,730,412	12,585,160	18.0%
町人口(人)	12,285	12,013	12,197	12,091	11,935	11,854	11,699	11,796	
1人あたり町民所得(円)	321,668	346,756 + 7.8	419,620 + 21.0	509,678 + 21.5	705,005 + 38.3	788,995 + 11.9	917,208 + 16.3	1,066,901 + 16.3	18.7%
1人あたり県民所得(円)	341,704	356,479	439,770	560,302	780,800	787,576	923,843	1,063,200	
格差(%)	94.1	97.3	95.4	91.0	90.3	100.2	99.3	100.3	

注：町内純生産と町民所得の差額は町外からの純所得である。

(資料：県統計協会所得推計による)

## 農家戸数および農家人口の推移

県統計年鑑より

区分 年度	総戸数	農 家 戸 数				農 家 人 口		
		専 業	第 一 兼 種	第 二 兼 種	計	男	女	計
50	3,561	339	390	848	1,577	2,769	2,943	5,712
51	3,533	339	379	843	1,561	2,725	2,894	5,619
52	3,586	295	415	846	1,556	2,522	3,080	5,602
53	3,549	295	415	845	1,555	2,530	3,091	5,621

昭和50年（国調）の農家比率44.3%で県35.5%全国15.4%と比べると非常に高い。一種二種兼業農家が多く、専業農家は農家戸数の20%程度にしかすぎない。農家一戸当り耕地面積は67アールで県が79.6アール、全国が112.5アールと少なく、零細的な営農基盤である。（草地面積を除く）

## 農家一戸当り所得割合

(昭<sup>上段51</sup><sub>下段52</sub>年度)

町・県・国	町	県	全 国
所 得	千円	千円	千円
農 家 所 得	2,046 2,405	2,122 2,352	3,662 4,124
農 業 所 得	484 587	648 781	1,040 1,078
農 外 所 得	1,562 1,717	1,528 1,571	2,506 3,046
農家所得に占める農業所得の割合	23.7% 24.4	28.0% 33.2	28.4% 26.1

## 専兼別農家戸数

(農業センサス)

年次	農家 戸数	専業	兼業		經營規模別(ha)						例 外
			一種	二種	0.5 未	0.5 1.5	1.5 2.0	20 25	25 以上		
昭和35年	2,209	914	869	426	850						
昭和40年	2,001	552	719	670	823	764	299	91	19	5	0
昭和45年	1,898	445	640	813	906	631	228	77	29	20	7
昭和50年	1,577	339	390	848	815	472	141	72	26	37	14

## 第2章 経 済

### 年次別耕地の状況

町農林課資料

年 次		49	50	51	52	53
区 分						
水	田	459 (343)	445 (337)	442 (350)	400 (350)	398 (333)
畑	普 通 畑	506	450	452	430	423
	樹 園 地 (茶、桑、栗)	263	269	259	241	256
	草 地	283	230	230	230	230
計		1,511 (343)	1,394 (337)	1,383 (350)	1,301 (350)	1,307 (333)

( )は水稻作付面積

水稻の生産調整により、作付面積が減少し転作がなされているが、山間狭あい地においては荒廃水田が多い。

たばこ

農林課資料

年度	区分	耕作人員	面積	量目	収納代金	一〇a 当り代金
昭和二五年度		一、〇〇一人	五八・五 <sub>ha</sub>	六八・〇七九 <sub>K</sub>	一〇、二七五、〇〇〇千円	五九、九四〇円
三五		一八九	三七・一八	七一・六二五	二二、二九〇、〇〇〇	一〇四、〇〇〇
四〇		一二五	四一・四五	八三・〇八三	四三、二〇一、〇〇〇	一二七、〇〇〇
四五		七二	三六・八四	七〇・一二	四六、八四八、〇〇〇	三七四、〇〇〇
五〇		三七	三〇・五	八〇・一	一一四、三五五、〇〇〇	五〇一、〇〇〇
五三		三五	二九・五	八七・九	一四八、〇四七、〇〇〇	四二四、〇〇〇
五四		三四	二八・二	七一・〇	二〇、八四二、〇〇〇	

備考 昭和五二・五三年度における一〇a 当り代金は、国分管内第一位である。

製茶工場・茶園面積・生産量調

農林課資料

年度	区分	製茶工場	茶園面積	生産量	生産額	栽培農家数	摘	要
昭和三五年度		一〇	五九 <sub>ha</sub>	三八、九〇六 <sub>kg</sub>	六、八四七千円	一二〇戸		町農林課資料
四〇		一〇	五八	二二五、五〇〇	一六、四四〇	一二〇		"
四五		一一	一三〇	一二四、三八六	六二、一九三	三〇〇		"
五〇		一一	一六五	二四七、〇〇〇	三一二、〇〇〇	五三〇		"
五四		一九	一六八	三〇七、〇〇〇	四五七、六六〇	一六五		"

牛馬年次別頭数調

牛 馬		明治三十三年	大正一四年	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和九年
牛	馬	二、一〇〇頭	一、〇四二 六七二	一、〇二四 一、一六八	一、〇二八 一、〇六三	九九三 一、一〇二	牛馬計 二、〇九九 (一・四)

( ) 内は二戸当り頭数

養 蚕

町農林課資料

年度	区分	養蚕農家数	桑園面積	生産高	生産額
昭和三五年度		一二〇人	二五 ha	八、六一七 K	四、四八〇 千円
四〇		一四五	四八	一五、〇〇〇	一〇、二〇〇
四五		一四二	七四	三三、六二一	三六、三一〇
五〇		七二	六三	四一、二七六	六四、四三六
五四		四五	四四	四一、〇〇〇	八六、六三三

家畜等飼養頭羽数

市町村別統計・町農林課資料

年度	区分	乳用牛	役肉用牛	馬	豚	にわとり	山羊	めん羊
昭和二五年度		三八頭	一、六九〇頭	五三二頭	二四六頭	八、八九三羽	三三三頭	二二頭
三五		八六	一、四八三	四七〇	五一六	一五、三〇〇	一四二	一五九

米価のうごき

年	西 暦	石 当 たり 米 価	米価のうごき
明治元年	一八六八	五・九八 <sup>円</sup>	一四八
二	一八六九	九・〇二	一八
三	一八七〇	九・二〇	一八
四	一八七一	五・六三	一三四
五	一八七二	三・八八	二二
六	一八七三	四・七二	三、八七五
七	一八七四	七・二八	二〇、九四八
八	一八七五	七・二八	三三、〇〇〇
九	一八七六	五・〇一	一三、六〇〇
一〇	一八七七	五・五五	八五、三〇〇
一一	一八七九	七・九〇	二五
一二	一八八〇	一〇・四七	一三三
一三	一八八一	一〇・四九	一三三
一四	一八八二	八・八六	
一五	一八八四	五・一一	
一七	一八八四	四・九一	
二一	一八八八		

米価統制令  
米不作・政府輸入米買い上げ  
豊作  
廃藩置県・租米代の金納許す  
田畑永代売買解禁  
農民一揆頻発  
米穀取引所創立準則発布  
貯蓄米条例布く  
各地十四ヶ所に取引所設置  
西南役勃発（米価乱高下）  
インフレ進行（米価騰貴）  
農商務省設立  
デフレ時代米外農産物価下落  
米価暴落

大正 二年	一八八九	六・〇五	帝国憲法制定（米価変動大）
三	一八九〇	八・九一	国会開設
四	一八九三	七・四〇	
五	一八九四	八・八〇	日清戦争勃発
	一八九五	八・八七	講和成立
	一八九六	九・五四	
	一八九七	一・八八	県営米穀検査事業開始
	一八九八	一四・六八	戦後恐慌（銀行の支払い停止等）
	一八九九	九・九九	農会法公布、機械精米始まる。
	一九〇〇	一一・九〇	戦後第二恐慌、外米輸入甚し
	一九〇一	一二・三四	金融恐慌つづく
	一九〇二	一二・六七	米不作甚し
	一九〇三	一四・四三	前年凶作を受け高勢品種改良開始
	一九〇四	一三・二二	日露戦争勃発 豊作
	一九〇五	一二・八四	日露戦争講和
	一九〇七	一六・四二	戦後恐慌
	一九〇九	一三・一九	大豊作
	一九一〇	一三・二七	産業組合中央会設立
	一九一一	一七・三四	
	一九一二	二〇・六九	朝鮮米代用認可、帝国農会設立
	一九一三	一一・四四	帝国農会設立
	一九一四	一六・一五	第一次世界大戦勃発
	一九一五	一三・〇六	米価調節調査会設立
	一九一六	一三・六六	米麦品種改良奨励規則制定



一七	一九四二	消生	四九・〇〇	食糧管理法・食糧管理局設置・食糧営団設立・銘柄格差縮小
一八	一九四三	消生	六二・五〇	米の代替えとして麦・いも・豆類配給、米集荷手数料を農業団体に支払う
一九	一九四四	消生	六二・五〇	米供出の事前割り当て制採用・大豆配給増大
二〇	一九四五	消生	三〇・〇〇 二五・〇〇円	戦争終結・占領軍下に入る・配給基準量一割切下げ・食券
二一	一九四六	消生 一月	五五・〇〇 二八・五一	強権発動始る、供出農家に物資特配、全面不作、パリティ米価方式
二二	一九四七	消生 七月一、 一月二、	七五・六 四三・〇五	消費基準量二合五勺に増量、供米完遂、超過供出奨励金
二三	一九四八	消生 七月三、 一月五、	六四・六 一五・〇〇	事前割当、還元配給、作報事務所、食糧公団発足
二四	一九四九	消生	四三・四八 五・八〇九	いも類配給統制撤廃・米価審議会設置・シャウブ税制勧告
二五	一九五〇	消生	五・四二〇 六・三八二	いも類を食管法から外す、朝鮮動乱
二六	一九五一	消生	七・七〇五 七・三八六	食糧公団廃止・民営米屋誕生・雑穀統制廃止
二七	一九五二	消生	七・五〇〇 七・三八六	米供出後自由販売特別集荷制度実施・麦類間接統制に移行
二八	一九五三	消生	九・二五五 九・二八二	凶作・農産物価格安定法
二九	一九五四	消生 一〇、 四四二	九・二六二 四・四二〇	好景気(神武)・豊作・黄変米配給

三〇	三一	三二	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五	四六
一九五五	一九五六	一九五七	一九五九	一九六〇	一九六一	一九六二	一九六三	一九六四	一九六五	一九六六	一九六七	一九六八	一九六九	一九七〇	一九七一
消生	消生	消生	消生	消生	消生	消生	消生	消生	消生	消生	消生	消生	生	生	生
一〇、九四五			一、五七一五	一〇、四七五	一一、六七二	一二、一七七	一三、二〇四	一五、〇〇七	一六、三七五	一七、八七七	一八、三二五	一九、五二五	二〇、六五〇	二〇、三三〇	二〇、九三六
米穀予約売り渡し制	三〇年産米につき臨時匿名集荷制度	代表者売り渡し制度実施	政府買入れ価格に生産費所得補償方式・外米自由販売	日米安保条約改訂	農業基本法制定	消費者米価一二%値上げ・特選米制度実施	農村三作運動（仲間づくり・物づくり・環境づくり）	余剰傾向始る	カントリエレベーター設置し粃の買上実施（北海道、新潟、秋田、石川）	消費者米価値上（一月一日）	史上空前の大豊作	生産者米価・消費者米価引上げ	農業振興地域整備法制定	米の生産調整	大はば生産調整・牧園町農業振興整備計画樹立

種 別	数 量	価 格	種 別	数 量	価 格
裸 小 菜 用 煙 椎 大 牛 甘 蚕 種 粟 米	一、三〇五石 三、二〇〇メ 一、三六二 一、四〇二石 三六、五三〇石 一七、七〇〇メ 三、八〇〇 二、四〇四石 八〇六、四〇〇メ 一四、一八四石	三一、三二〇 三三、〇〇〇 三七、四五五 三八、二五四 四一、二九五 四五、〇〇〇 五三、一〇〇 五七、〇〇〇 八四、〇四〇 八九、七七四 一二〇、九六〇 六〇三、六五九円	其 類魚 蕎 生 里 竹 菓 薪 計 ナ 大 茶 炭	一、五二〇メ 一、〇〇〇石 一〇〇、八〇〇 一、三三〇メ 二六、〇〇〇メ 一七、三〇〇 二四、五五〇石	一、三八一、五八三 三四、九八一 九、一二〇 一〇、〇〇〇 一〇、〇八〇 一三、三二五 一三、九二〇 一五、三〇〇 一五、五〇〇 二四、五〇〇円

主要物産生産価格表

五五 五四 五三 五二 五一 五〇 四九 四八 四七	一九八〇 一九七九 一九七八 一九七七 一九七六 一九七五 一九七四 一九七三 一九七二	生 生 生 生 生 生 生 生 生	二二、〇一三 二五、七五三 三四、〇三八 三八、九二五 四一、四三〇 四三、〇八〇 四三、一二七 四三、一四〇 四四、二五二
食管制度改善に大論議、石油危機			

(昭和一五年度町勢要覧)

農業生産額及び農業所得額調

町農林課調 昭和45年度

項目	世帯数	面積又は 頭数	10ヘクタール 当り生産 量	総生産量	総生産額	所得額	計算基礎		備考
							計 単	備 所得率	
普通作目	1,684 650 1,100 680 300 700 1,800	390.4 70.0 200 100 20 120 110	412 190 1,400 174 125 120 2,200	1,608,448 133,000 2,800,000 174,000 25,000 144,000 2,420,000	221,644 18,221 32,200 9,987 1,575 9,360 72,600	161,800 12,754 22,540 5,293 1,071 5,148 39,930	137.80 137 11.50 57.40 63 65 30	73 70 70 53 68 55 55	
水陸甘麦 陸稲類 雑穀類 雑穀類 雑穀類 雑穀類 雑穀類	計				365,587				
特別作目	72 300 142 120	36.84 120.57 73.5 35	190 100 46 32	70,121 124,386 33,621 12,000	46,848 62,193 36,310 2,400	29,045 41,819 24,710 1,920	668 500 1,080 200	62 68 68 80	
たばこ 緑茶 養蚕 小計	計				147,751				
畜産	35 829 191 15 20	396 1,340 201 380 1,689	生乳 牛乳	1,058,440 189 794 201 380 1,689	52,922 1,512 68,150 22,782 3,380 36,624	23,814 680 27,260 2,539 1,014 5,343	50 8,000 85,830 316,800 9,000 21,600	45 45 40 25 30 15	
乳牛 肉用牛 豚 子豚 子豚 子豚 子豚									

輕種馬 種馬 { 鶏 鶏 卵 計 小	9	48	20	20,000	10,000	1,000,000	50
	1,400	20,000 13,000	200,000 195,000 ケ	3,600 19,500 228,470	720 3,900	180 10	20 20
合 計				741,808	421,300		
農家一戸当り				402,740円	228,967円		

年 度	総戸数	総人口	農家戸数	農家人口	農家一戸 当り粗収 人	農家一戸 当り所得 額	農 家 所 得 内 訳		
							農 業	林 業	農 外
44 年	戸 3,595	人 12,468	戸 1,898	人 7,548	円 786,922	円 624,196	円 232,196	円 72,000	円 320,000
45 年	戸 3,437	人 12,295	戸 1,840	人 7,360	円 832,740	円 658,967	円 228,967	円 75,000	円 355,000
									人 5,361
									人 5,152

農 業 生 産 額 及 び 農 業 所 得 額 調 査

町農林課調 昭和50年度

作目名	項 目	世帯数	面積又は 項目	10ヘール 当り生産 量	総生産量	総生産額	所 得 額	計 算 基 礎		備 考
								単 価	所得率	
普 通 水陸 陸 甘 麦 麦 雑 麦 作 雑 田 小	稲 稲	1,437	337	435	1,466	千円 375,296	千円 175,638	256	46.8	
	諸 類	223	69	199	137	33,935	15,881	247	46.8	
	麦 類	400	74	2,000	1,480	39,368	21,179	26	53.8	
	雑 穀	400	60	171	99.7	10,101	6,010	103	59.5	
	た ね									
	毀 損									
	い 計	1,050	75	123	37	3,955	2,175	147	55	
	小 計	120	30	3,200	961	31,779	20,656	33	65	
						494,434				



第2章 経 済

農 畜 産 物 生 産 高 (昭和53年度)

(町勢要覧)

区 分 作物名			作付面積 ha	生 産 量 t	生 産 額 (千円)	計 算 基 礎	
						1 kg当り 単価(円)	所得率 %
食糧作物	水 稲	稲	365	1,498.5	430,819	288	72.3
	陸 稲	稲	55	115.5	31,763	275	34.1
	麦	類	16.2	29.1	5,188	178	37.1
	雑 穀	穀	65	83.0	15,841	191	59.9
	甘 藷	藷	42	105	33,495	319	63.1
工芸作物	煙 草	草	29.5	87.9	148,047	1,684	70.0
	茶	茶	166	315	417,000	1,324	55.0
	花 木	木	0.5	12,500本	3,300	264	70.0
やさしい類	キヌサヤエンドウ	豆	0.6	45	4,785	1,063	76.6
	レ タ ス	ス	5.0	125	17,250	138	60.0
	キ ャ ペ ツ	ツ	15.0	450	24,750	55	60.0
	そ の 他	他	7.5	33.7	24,995	2,223	60.0
果樹	く り	り	36	62.5	21,563	345	60.0
養 蚕		蚕	44.8	39.1	86,930	2,223	60.0
畜 産 物	乳 用 牛	牛	子 牛	216 頭			
			生 乳	1,301 t	139,114		45.0
	肉 用 牛	牛	子 牛	751 頭			
			肥 育	113.2 t	386,845		40.0
	豚	豚	子 豚	3,000 頭	220,900		25.0
			肉 豚	245 t			
採 卵 鶏	採 卵 鶏	鶏		2.7	540	200	20.0
	ブ ロ イ ラ	ラ		20	53,400	267	15.0
	馬	馬		16頭	17,856	1,116,000	50.0

## 二十一 牧園牧場

### (一) 概要

牧園牧場は創立は遠く明治二十九年五月に遡り、はじめは農商務省所管九州種馬場として種馬の繁殖育成をおこない明治四十年には農林省所管鹿児島種馬所と改名され種馬業務が主であったが更に昭和二十一年五月鹿児島種畜牧場と改名され従来の種馬業務から、和牛、豚の育成繁殖の牧場になり南九州の畜産指導の本拠として特に鹿児島県産馬の基礎を確立した業績は実に偉大なもので、昭和十年には天皇陛下の行幸を迎えるなど今日でも当時往日の盛況を追想し得るものである。然しながら時代の要請に伴い昭和二十五年四月廃場となりこの由緒ある広大な施設を有し又桜の名所として知られ観光客絶賛の的である当牧場を昭和二十五年七月一日を以って町営に移管し牧園牧場と改名発足し多大の犠牲を払いつつも軽種馬育成牧場として、中央競馬会抽せん馬育成を主体に毎年七〇頭余の育成馬を全国に送り出している。又霧島の豊富な温泉を利用した競走馬温浴場も昭和五十五年

一月に完成し全国の優勝たちの温泉休養牧場としても脚光を浴びている。

### (二) 沿革

明治二十九年 五月 農商務省九州種馬牧場として創設

明治四十年 八月 馬政局鹿児島種馬所（陸軍省・農商務省・農林省と夫々所管替となる）と改称

昭和二十一年 五月 農林省鹿児島種畜牧場と改称

昭和二十五年 四月 農林省鹿児島種畜牧場廃場

昭和二十五年 七月 牧園町立牧園牧場として再発足

1 用地四五〇ha（耕作地三〇ha 採草樹林植林地三八〇ha その他四〇haの払下げ）

2 建物一九棟 農機具 獣医療具 什器等の払下げ

3 家畜使役馬八頭払下げ、種牡牛和種一頭（旭号）種牡山羊一頭借受

昭和二十五年十一月 福島県より緬羊牝三三頭、山羊牝一〇頭、肉緬羊四頭、アンゴラ種牝兎一〇頭、種牝一頭を購入し

緬羊山羊養兔の飼育業務を開始する。

昭和二十五年十二月 酪農業務を開始する。

昭和二十六年 四月 養鶏業務を開始する。

昭和二十六年 十月 家畜人工授精所開設

昭和二十六年十二月 牛乳殺菌室設置

昭和二十七年 四月 牧園高等学校校定時制農業科、別

科、家庭科課程を廃し畜産科課程に代替え定員三〇名募集を行い牧場を実習場使用せしむ。

昭和二十七年 五月 繁殖牡馬三頭購入

昭和二十七年 七月 牛乳処理所開設 牛乳の市販開始

昭和二十八年 三月 農林省畜産局競馬部より育成馬

一五頭の預託を受け軽種馬の育成業務を開始する。

昭和三十年 三月 国営競馬廃止に伴ない国有預託

馬は日本中央競馬会に名義変更する。

昭和三十三年 八月 北海道より緬羊七〇頭購入

十一月 乳牛精液輸送用(敷根種畜場間)

鳩舎出水郡より移管、伝書鳩による精液輸送を開始する。

昭和三十五年 六月 鹿児島県立農村センター開庁

式、用地一五haを無償貸与する。

九月 ウッド式、スタート機、日本中央競馬会より借受

昭和三十六年 七月 緬羊五〇頭長崎県島原市より購入

入

十月 牛舎をスタン、チョン式に改造

昭和三十七年 二月 桜の苗木五〇〇本植樹

四月 軽種二才糶市本年より場内の開設休止

仔馬は岩川糶市に出場せしむ。乳

牛の飼養管理休止

五月 育成和牛八頭 贈與郡志布志町

糶市にて購入

七月 緬羊七十二頭 島原市にて購入

八月 緬羊四六頭長崎県島原市にて購入

入

昭和三十三年 九月 育成和牛八頭 町内農家に売却  
四月 岩川軽種羅市にて仔馬四頭売却

昭和四十年 五月 育成和牛七頭購入  
五月 育成和牛七頭購入  
八月 緬羊二頭 島原市にて購入

昭和四十一年 十月 育成和牛七頭 町内農家に売却  
四月 岩川軽種羅市にて仔馬二頭売却

五月 育成和牛八頭購入  
八月 緬羊二三頭 島原にて購入

九月 育成和牛八頭売却

昭和四十二年 八月 明二才馬一頭売却

昭和四十六年 八月 中央競馬会助成による新厩舎落

成

昭和四十七年 三月 種牡牛緬羊廃止し競走馬のみの

育成牧場となる。

昭和四十八年 三月 八〇〇m調教馬場完成する。

昭和五十二年 九月 基礎牝牛育成開始し農家への私

下げ事業が始まる。

昭和五十五年 二月 競走馬温浴場開設される。

(三) 競走馬温浴施設

近年競走馬のうち長期療養を必要とする馬を温泉療法によりすみやかに回復せしめることや運動疾患によるものを温浴させることが非常に効果顯著である事實は周知のとおりである。当場では時代の要望にそい中央競馬会はじめ各方面の御指導御援助をうけ全国でも珍しい温浴場がきりしまの豊富な温泉を利用して施設された。これに温浴させ更に年間を通じて生牧草を給草し専用パトックで休養させ多くの優勝たちが一日も早く完全に回復し競走に復帰することを願っている。

温浴場施設

温浴槽 二基 シャワー 二コ

洗場 一ヶ所 専用パトック 二〇頭分

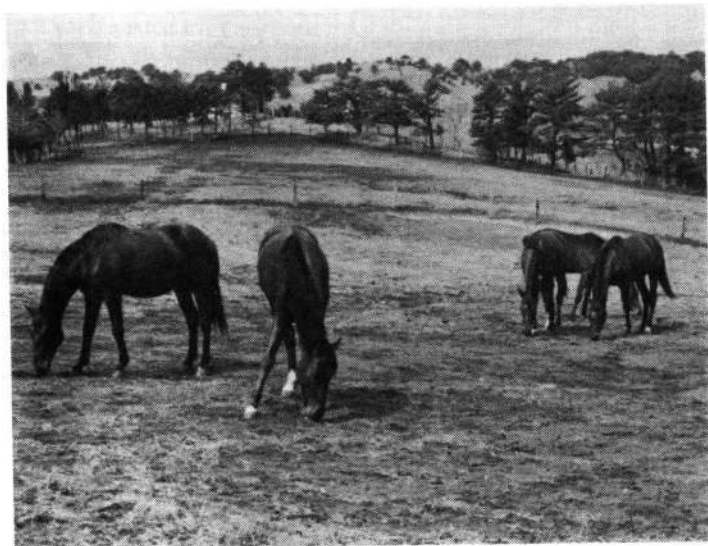


牧場施設内容		デスクハロー	2台
建物敷地	2ha	ロータリーテッダー	2 "
厩舎建物	1,650m <sup>2</sup> (80頭収容)	3連プラウ	2 "
放牧場	14ha	ヘーペーラー	1 "
採草地	18ha	ヘイコンデショナー	1 "
調教馬場	800m	フロントローダー	1 "
		マニアスプレッダー	2 "
大型農機具		ブロードキャストター	1 "
トラクター	3台	トレーラー	1 "
デスクモアー	2 "	トラック	3 "

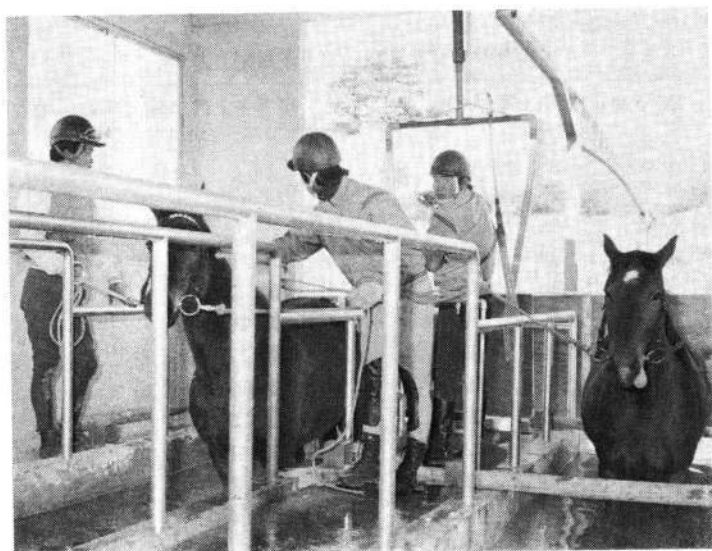
年度別飼育頭数及職員数、仔馬売上調べ

年 度	抽せん馬	個人馬	合 計	仔馬売上代	職 員 数	和 牛
	頭	頭	頭	千円	人	頭
42	16	21	37			
43	13	25	38			
44	14	(20)27	41		20	
45	14	(19)32	46	7頭 6,075	19	
46	13	(15)38	51	7頭 7,375	21	
47	16	(20)33	49	6頭 10,680	23	
48	19	(20)36	55	6頭 17,750	24	
49	17	(20)35	52	5頭 15,500	24	
50	20	(15)36	56	6頭 5,660	22	
51	16	(13)47	63	4頭 4,140	21	
52	13	(11)50	63	7頭 7,710	16	10
53	12	( 9)56	68	3頭 4,000	18	18
54	12	( 9)58	70	3頭 5,000	18	12

個人馬のらんの( )書は町有の頭数で個人馬の中に含まれている。



放 牧 風 景



馬 溫 浴 風 景

## 二十二 農業団体

### (一) 農会

系統農会の基準法である農会法が明治三十二年六月に制定公布され県下市町村農会がすべて設立された。

牧園村農会もこのとき設立されたものと思われる。

農会は農業に従事するものを以って組織する独立の自治体にして村農業経営の主体となりて経営の主義方針を示し村内各部落には農事小組合を置き村農業の振興改良発展を期するものである。事務所を牧園村役場に置き左の役員により諸行事および諸事務の遂行を実施してきた。

#### 役員

1 農会長 一名 副会長 一名 書記 一名  
2 農会評議員 八名

3 農会総代 二四名

4 小組合長 各部落 一名

外に指導員として普通農業技手、煙草耕作技手を置き農業の伸展を期した。

#### 活動状況

##### 1 農会

イ 総会

ロ 評議員会

ハ 総代会

ニ 小組合長会

ホ 農作物共同販売

ヘ 農具改良

ト 肥料共同購入

チ 農事視察

リ 副業奨励

ヌ 農作物品評会

ル 深耕競犁会

ヲ 堆肥品評会

ワ 低利資金貸与等

##### 2 農事小組合

昭和十年四月十二日改選による。

農会長 村長 小谷正吉

副会長 山口 篤

### (二) 産業組合

牧園産業組合は昭和九年十二月高千穂信用販売購買利用組合（大正八年四月七日設立）を引継ぎ区域を村一円に拡大して牧園信用販売購買利用組合と変更したものである。引継ぎ当初は事業の経営はすこぶる不振にして幾多の波乱を生じ組合は瀕死の危機に遭遇したが役職員・組合員の献身的努力の結果遂に挽回し以後組合の目的達成のため着々として進展をとげてきた。

組 合 員 一、七六六人（昭和十六年）

出資総口数 一、九二六口

組合の事業（昭和十六年分）

販売高

玄米	九、〇〇〇俵	一五四、八〇〇円
粃 <sup>※</sup>	二〇〇俵	二、〇〇〇円
麦類	六、八二〇俵	八一、八四〇円
大豆	一、八五〇俵	二七、七五〇円
菜種	三、九八〇俵	五一、七四〇円
木炭	七〇、〇〇〇俵	一六一、〇〇〇円
計		四七九、一三〇円

購買高

肥料	一九、三二五畝	一〇三、九〇〇円
----	---------	----------

その他農機具雜費 一五四、六〇五円

計 二五八、五〇五円

昭和十六年十二月九日現在における組合事業成績は次の通りである。

出資金	二九、〇〇〇円
貯 金	一八二、六一六円
借入金	七三、〇〇〇円
預 金	三五、〇〇〇円

初代組合長 村長 小谷 正吉

### （三）農業会

農業に関する国策に即応するため、全国を通じ従来の農会、産業組合、養蚕組合等を解散し新たに農業会が設立されることになり牧園町においても多年の歴史を有し産業および経済発展に大きな功績を残した町農会、産業組合、養蚕組合も政府の方針により解散された。

昭和十九年三月十六日設立総会が開会され新しい農業会が発足した。

農業会は国策に基き農業の整備発達を計り、会員の農業および経済の発展に必要な事業を行うため、農業の指導奨励調査研究、農産物その他の販売購買加工施設、農

業資金の貸付、貯金の受入れ等農業者の福利増進を計ることを目的としている。

初代会長（町長） 森 良孝

事務機構

総務部 指導部 経済部 食糧営団 倉庫係 自動  
車部 木炭組合 煙草組合 薬工場

#### （四）農業協同組合

本町農業協同組合（前の農業会）は昭和二十二年十一月十九日公布同年十二月十五日より施行された農業協同組合法によって設立されたものである。

この法律の目的は、組合員が協同してその農業の生産能力をあげ経済状態を改善し社会的経済的地位を向上させるのを目的としその事業内容はすべて定款にうたわれている。

牧園町農業協同組合は昭和二十三年設立、発起人山下盛太ほか三十一名によって設立準備委員会を開き井九勇畝外十七名を定款作成委員に選定し同委員において定款の作成があったので昭和二十三年二月十一日創立総会を開き定款の承認を受けて理事および監事を選挙した。

昭和二十三年四月三十日鹿児島県知事重成格より組合

設立の認可を受け、理事前田清外十三名がその事務の引渡しを受け、昭和二十三年五月二十五日出資の払込みを完了設立の登記を終了した。

。事業内容

- (1) 組合員の事業又は生活に必要な資金の貸付
- (2) 組合員の貯金の受入れ
- (3) 組合員の事業又は生活に必要な物資の供給又は共同利用施設の設置
- (4) 農作業の協同化、その他農業労働



農 業 協 同 組 合

働の効率を増進するための施設

(5) 農業の目的に供される土地の造成改良若しくは管理又は農業水利施設の設置若しくは管理

(6) 組合員の生産する物資の運搬、加工、貯蔵又は販売並びに畜産、養蚕、薪炭、園芸、茶業、その他農業の生産奨励施設

(7) 農村工業に関する施設

(8) 農業上の災害又はその他の災害の共済に関する施設

(9) 農村の生活及び文化の改善に関する施設

(10) 農業技術及び組合事業に関する組合員の知識の向上を図るため、教育並びに組合員に対する一般的情報の提供に関する施設

(11) 組合員の経済的地位の改善のためにする団体協約の締結

(12) 前各号の事業に附帯する事業

。昭和二十四年六月二十四日定款の変更、万膳支所設置

。昭和二十四年九月三十日中津川支所設置

。昭和二十六年農協再建整備法発令。法の適用を受け

再建整備の第一歩を踏み出す。

。昭和二十八年五月三十一日一部理事監事辞任

理事 福村 操 前田嘉次郎 永田良幹 原田重之

監事 東福浅吉

同年七月五日理事 早水松彦 宮野栄治 重信佐熊

監事 木佐貫信夫辞任

。昭和三十年六月二十五日従たる事務所設置

(1) 三体支所（三体堂一、三七八番地）

(2) 上中津川支所（横瀬上中津川七三〇番地）

(3) 高千穂支所（高千穂三、八五五、四三）

(4) 宿窪田支所（宿窪田七八一番地）

。昭和三十三年農協再建整備特別措置法発令、再建整備不達成のため再度当該法の適用を受け第二次再建整備に踏み出す。

。昭和三十七年四月二十日理事、長崎重治辞任、新たに荒瀬親盛、東福正利選任

。昭和三十八年四月十五日理事、東福正利辞任、新たに田代影選任

。昭和三十九年九月四日理事、松田昇、帖佐勇助辞任

し新たに山下徳男、福満好男就任

同年第二次再建整備達成ならず紆余曲折の末、

の再建策として県農協整備促進要綱の適用を受け同

年十月県連合会より派遣参事として重田秀吉、金融

課長山口久男、經濟課長野間隆男着任

○組合設立数年後より赤字経営の連続であったが臥薪

嘗胆漸く努力の甲斐があつて昭和四十三年度事業年

度末（四十四年二月末日）において欠損金完全消化

のピリオドが打たれた。

○昭和五十二年四月組合長の導入預金問題で理事会紛

糾

○昭和五十二年五月二日音川清治組合長辞任し永峯清

信組合長就任

。昭和五十二年八月役員体制のみだれから貯金引落し

年次別牧園農業協同組合役員名

が相継ぎ運転資金はもとより、貯払資金もなく、職員は資金結集に全力を上げたが効果なく、中央会経

營指導課小宮課長外三名指導に來所し相互援助資金

借入により窮地をのがれる。

昭和五十二年八月十三日組合員三七〇名により役員

改選請求書提出

昭和五十二年八月十六日役員総辞職

昭和五十二年八月二十九日役員総辞職による選挙、

七名当選定員に達せず。

○昭和五十二年九月八日補欠選挙

○昭和五十二年九月十六日春、別府参事転任、村岡参

事就任

○昭和五十四年二月十五日、高千穂支所開設

。昭和五十二年九月以降役員体制も健全化され、貯金

を初め各種事業も順調に伸びつつある。

年次別	役職名	氏名
昭和二三、二、一一	組合長	前田 濟
理事	種子田 莊九郎	專務 唐仁原 重満
	原田 重之	中村 逸志
		正市 熊右門

[illegible]

[illegible]

[illegible]

昭和五一、 四、一〇		昭和五一、 四、一三		昭和五一、 二、一		昭和五一、 八、二九		昭和五一、 九、八	
西川参事転任、春別府参事就任		理事補欠選挙により市来軍平選任		組合長		理事		補欠選挙	
音川 清治		永峯 清信		須崎 常雄		中村 永年		池上 孝重	
矢野 寅雄		松田 孝重		池上 孝重		矢野 寅雄		湯ノ上 清隆	
木佐貫 信男		西 勉		黒葛原 整二		篠宮 重吉		黒葛原 整二	
限元 吉男		永田 耕一		西 勉					

## 近年 10 年 の 事 業 の 伸 び

千円

事業名	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53
貯 金	226,689	276,681	342,692	433,448	548,555	682,295	903,761	1,019,983	1,088,985	1,386,287
貸 付 金	406,423	484,482	596,959	624,454	715,792	796,171	973,188	1,018,120	1,009,855	1,196,332
販売事業	260,713	294,311	271,114	345,475	533,058	539,656	647,863	664,166	814,625	884,577
購買事業	128,447	189,101	194,769	215,162	302,159	362,268	408,396	510,936	580,404	618,147
共済事業	1,131,500	1,406,100	1,598,740	1,925,510	2,310,450	3,080,450	4,143,950	5,527,000	7,111,550	8,688,500
組合員数	1,261	1,254	1,200	1,202	1,185	1,199	1,198	1,210	1,261	1,281
職 員 数	40	39	37	37	40	36	40	45	44	47



## (五) 農業共済組合

農業共済組合が行なっている農業共済事業は、昭和二十二年十二月十五日公布の法律第一八五号に基くものである。

### 目的

農業者が不慮の事故に因って受けることのある損失を補填して農業経営の安定を図り、農業生産力の発展に資することを目的としている。

### 共済事業の種類

農作物共済、蚕繭共済、家畜共済、果樹（みかん）

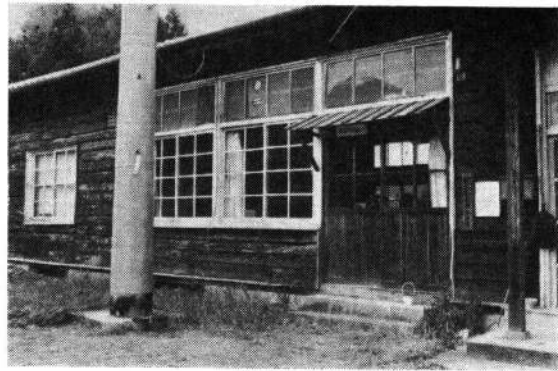
共済、建物共済、畑作（大豆、馬鈴薯）共済

### 1 沿革

戦時中、農業会で実施していた農業保険、家屋保険および畜産組合で管理していた家畜保険、この三者を整備統合して、新たに、農業共済組合を設立することになり、昭和二十三年三月二十二日発起人会を開催し、昭和二十三年四月六日設立準備会を開催して、定款作成委員を各校区から選任した。

2 創立総会の開催（昭和二十三年四月一日）

3 昭和二十三年四月三十日県知事から設立認可を受



農 業 共 済 組 合

を任命、診療業務を開始した。

4 昭和二十六年七月六日事務所建築に着工、同年十月三十日完成する。

5 昭和三十六年九月十六日組合長南仁八死去につき組合葬

く。業務として、

農作物共

済（水稲、

陸稲、麦）

蚕業共済

（春蚕繭、

夏秋蚕

繭）家畜

共済の事

業を開

始、家畜

診療所を

併設し獣

医師一名

6 昭和三十八年八月一日家畜診療所整備強化補助を

受け単独の家畜診療所を建築し、整備強化を図る。

7 昭和四十九年四月一日始良郡内十一町合併し始良

地区農業共済組合となり本町は牧園出張所となる。

共済事業実績書（昭和五十四年度）

農作物共済

区分	項目	組合員	面積	引受収量	共済金額
水稲	陸稲	1,801人	10,969.9a	93,105kg	356,101,334円
麦	陸稲	71	355.0	18,533	5,104,631
	麦	29	355.0	5,247	871,100

蚕繭共済

春蚕	夏蚕	初秋蚕	晩秋蚕	晩々秋蚕
3人	3人	3人	4人	3人
37箱	170	170	170	170
17,000,000円	6,100,000	5,800,000	9,900,000	8,600,000

家畜共済

乳用牛	肉用牛	肥育牛	馬
3人	3人	3人	3人
29頭	1,077	342	9
3,600,000円	1,800,000	3,100,000	2,500,000

年次別役員名

昭和五十五年四月一日現在

年次別	役員名	氏名	役員名	氏名
昭和二三四一	組合長	前田 濟	副組合長	高橋 盛秀
二四五一	〃	前田 濟	〃	南 仁八
二六五一	〃	南 仁八	〃	山下 盛太
二九五一	〃	南 仁八	〃	山下 盛太
三二五一	〃	南 仁八	〃	池上 孝重
三五五一	〃	南 仁八	〃	池上 孝重
三六五一	〃	池上 孝重	〃	西園 政雄
三八五一	〃	池上 孝重	〃	西園 政雄
四二五	〃	池上 孝重	〃	西園 政雄
四五五	〃	池上 孝重	〃	改元 繁樹
四八五	〃	池上 孝重	〃	改元 繁樹
四九五	〃	池上 孝重	〃	宮原 範行
五二五	理事	長谷川 一雄	理事	久保 虎二

(六) 開拓事業

牧園町開拓地は、銀湯・銀湯拡張・内之野・高千穂・西霧島・高天原の六ヶ所で町の北部から東部にかけての丘陵地帯に点在している。昭和二十二年から入植が始まり昭和四十五年現在入植者七十八戸となっている。入植者は大てい引揚者で、農業の経験など全くない人

が多かった。入植してすぐ住宅から建てなければならず衣食住共に不自由で水道電灯は勿論なくあらゆる困難と戦わねばならなかった。終戦後の混乱期には、日本人全部が苦しい生活をしたのであるが、その中でもこれらの開拓者たちは一段と苦労したのであった。入植後、原野を開墾して、陸稲、甘藷、蔬菜等を植えたが、時によっては豊作の時もあったが、高冷地であること肥料、農機具の不足、台風被害等で十分の収穫をあげることができず生活に困るとともに、借入金返済も滞り勝となり、中にはついに脱落して他へ去る人もあった。しかし大部分の人たちは歯を食いしばって困難にたえ、農協を設立して協力態勢を整えたり、又現地に適した畜産を取り入れるなど、営農方法を研究し続けたので、入植後十年を経た昭和三十二、三年頃から生活も次第に安定して来た。

○開拓事業の概況



地区名	所在地	年度入植	戸現数在	総面積 <sup>a</sup>	一戸当り面積 <sup>a</sup>	営農形態	組合長
銀湯	牧園町万膳	二二	二二	五、〇五七	四二二	酪農五戸、和牛・畑作七	南原 操
銀湯	万膳	三五	二五	一、一〇五	二二二	和牛・畑作三、和牛・養蚕二	井手上 豊
内之野	三体堂	二七	二二	一、一九〇	五九五	和牛・畑作一、和牛・茶一	山下 武志
高千穂	高千穂	二六	二九	五、〇二五	一七三	酪農二、和牛・畑作一七	走塚 勝一
西霧島	持松	二三	二八	六、四二一	二九二	酪農五、和牛・畑作一七	池田 政晴
高天原	持松	二八	二八	一、四九〇	一八六	酪農一、和牛・畑作七	池田 芳久
計			七八	二〇、二八八	二六〇		

○銀湯（大霧）開拓のあゆみ

大霧の開拓がはじまったのは、終戦翌年の昭和二十一年七月からであった。当初八戸の入植者により始められたのであるが、当時の苦勞と経過の概要を、一開拓民の記録から紹介する。

昭和二十一年九月先づ開拓の場所として、万膳国有林を選定し、土地取得のため営林署と折衝を始めたが、国有林の模範造林地、という事で交渉は困難をきわめ、到底許可される状況ではなかった。入植した人達は住むに家なく、食糧もなく、一日も早く食糧の自給体制を確立

昭和四十五年十二月現在 町農林課資料

する必要があった。そのため営林署に日参し、必死となつて交渉を重ねた結果、昭和二十二年一月営林署から、十町六反の土地利用許可がおりた。その後さらに五十九町の土地が解放された。これからが本当の開拓の始まりである。そのとき初めて開拓者の編成をした。

入植者 十六戸 増反 二戸 計 十八戸

その年の十月大霧開拓組合と命名した。

当時この附近は原始林の真ん中で昼なお暗く、道とてなく、唯人間がやっと歩いて通る程度の細い道が一本あるだけであつた。この様な状況からして、生活道路の建設を痛感し、開拓道路計画をたて着工した。

昭和二十四年、組合員の労力奉仕と負担金によって栗野側開拓道路が開通した。

次に入植者の住宅を建設することになったが、家もなく、食糧もないこの山間僻地に大工として来てくれる人はいなかった。方々探しやっと都合つけ、一年近く仕事をして貰い、昭和二十五年五月までに十戸の住宅を完成した。

昭和二十八年六月県、町、並びに関係者の協力により奥地林道（小谷く大霧）が開通した。

作物としては、そ菜を中心とした。その理由としては当時、人参一K四五〇円、ホーレン草一K八百円という高値で取引されていたからである。

昭和二十九年には、そ菜の作付を拡大したがたびたびの台風に徹底的に痛めつけられ、大欠損となり肥料代と種子代だけで百八十万円の赤字を出した。

昭和三十三年銀湯事業所（当時三千数戸あり）電気導入

昭和三十五年大霧開拓電気導入

毎日毎日電柱運びや穴掘りに励み、入植以来十五年にして、やっと電気がついたときは思わず万才と叫び余りの嬉しさに涙が出てきた。

昭和三十九年、そ菜だけではどうしても生計が立たないので、放牧形態として酪農を導入する。

昭和四十年本格的畜産（酪農、和牛）事業に移行し現在に至っている。入植当時を想起すれば、食糧はなく、水と野山で得られるものを取って食べ空腹と戦いながら開墾を続け又自分たちの生活すら満足に出来ない中で、奉仕作業、負担金など文字通り血のにじむ様な苦勞の連続であつた。

業 林 三 二 十 二

(一) 林業の概要

本町の全面積一二、九四八ヘクタールのうち、林野面積は九、九三四ヘクタールで総面積の七七%を占めている。これを所有別に見ると、

国有林、二、二四六ヘクタール、県有林、一六七ヘクタール、町有林、一、六一九ヘクタール、私有林、五、六七〇ヘクタール、原野、二三二ヘクタール

となっており、また林野戸数の九五%が農家であることから、農業と林業の関係は密接なつながりのあることが判然とする。特に林野を占める面積の多い本町においては林業は極めて重要な産業であり、林業立町として恥しくない土地環境にある。

(二) 林業の振興

森林、林業の役割は、木材、林産物の供給ばかりでなく国土の保全、水資源の涵養、自然環境の保全、保健休養の場の提供など多面にわたりますますます重要となっている。こうしたなかで本町は国有林野との関係を密にし、

国有林の活用をはかり、水資源の確保ならびに下流の保全対策、林業経営の拡大、特殊林産物の流通改善整備をはかり長期的視点に立って森林のもつ公益的機能と観光との密着をはかり調和のとれた林業の振興を進めていく。

(三) 林業生産額および経営規模

本町林野のうち民有林五、六七〇ヘクタールで全林野の五七%を占め、林業生産額一〇億一千万円（昭和五十三年）で林家数二、〇一九戸、人工林率七四%杉桧が主である。

私有林経営規模は零細で一ヘクタール未満保有林家が六七%でほとんどが幼齡林である。

特用林産物としてのしいたけ生産がさかんで出荷量は乾燥で六〇トン、生で四〇トンあり県下でも主要産地である。今後山村の自然環境に合致した林産物としてますますその経済効果が期待される。

(四) 除伐間伐の推進

若齡林の健全な育成のため林家集落ぐるみに除間伐の励行を推進する。また間伐材の計画的生産と安定流通を確保するため、新たに間伐指導員の設置により技術指導

の徹底をはかる。

#### (五) 森林保護の推進

森林資源として重要な松林の保護を徹底するため松くい虫特別防除（地上散布）を重点的、計画的に実施すると共に観光風致のうえからこれら資源を保護する。また総体的に調和のとれた保護施策の推進をはかる。

#### (六) 林道作業道の整備

林道、作業道は林業経営管理にとって欠くことのできない基幹施設でありまた農村振興に大きく寄与するもので開設を積極的に推進する。

#### (七) 水資源対策の推進

近年の水需要はのび、水需要の必要性は本町としても重要な問題であり流域の水資源確保が必要である。そこで森林の水源かん養機能を高度に發揮させるため治山事業による水源山地整備をはかり水資源の確保を強力に推進する。

#### (八) 豊かな森林の環境づくり

霧島山系一帯、本町においては春夏秋冬、緑のたえる事なく恵まれた森林を持ち、さらに森林の持つ大切な機能を推進するため、緑化ならびに森林愛護思想をたかめ

観光地としてみどり豊かな町づくりを推進する。

#### 九 林業構造改善事業

。一次林業構造改善事業

昭和三十九年七月林業基本法が公布施行され国は林業構造改善のための施策を講ずることになった。

本町においては四十一年度事業の指定を受け四十二年度から四十四年度まで三ケ年に林道開設等の事業を実施した。

#### 追加林業構造改善事業

。一次事業の終了地域を対象に一次事業のも規模の事業を追加実施することになり、四十七年度から四十八年度まで二ケ年林道開設等の事業を実施した。

#### 。二次林業構造改善事業

昭和四十七年八月二次林業構造改善事業促進対策の要綱および実施基準が定められ、林業をめぐる諸情勢に対応した新しい内容をもつ二次林業構造改善事業が発足した。

この事業の特色は、これまで地域林業の生産対策を中心に進めてきたのに対し今回はそうした地域林業振興対策に加え、広域対策、保健休養など森林の公益機能の発

自昭和42年度  
至 " 52 "

## 林 業 構 造 改 善 事 業

農林課資料

年度	区 分	事 業 内 容	事 業 費	備 考
昭 42～44	第一次林業 構造改善事 業	林道開設事業 ト ラ ッ ク 人 員 輸 送 車 椎草生産施設等	7 線 7,722m 1 台 1 "	円 60,000,000 林道 宿窪田～ひ ばりが丘線 万膳、佐賀利 山線
47～48	追加 "	林道開設事業 クレーン付トラ ック ウインチ付 ハンドドーザー 人 員 輸 送 車	2 線 1,790m 1 台 1 " 2 "	23,540,000 林道鯖河線 扇ノ 迫線
49	2 次 "	機械保管倉庫 乾 燥 用 建 物 乾 燥 機 スプリングラー ダ ンプ トラクターショ ベル 林内集材機（デ ルビス）	154.8m <sup>2</sup> 97.2m <sup>2</sup> 1 台 1 " 1 " 1 " 2 "	22,046,000 森林組合使用
50	" "	林道開設事業 タイヤショベル	2 線 1,668m 1 台	62,978,000 林道 田原～扇ノ 迫線 " 鉾投線
51	"	林道開設事業	3 線 2,475m	75,657,000 林道 城山線、鉾 投線、田原～ 扇ノ迫線
52	"	林道開設事業 新 植 枝 打 下 刈 ダンプトラック (4 t)	1 線 980 10ha 30 " 5 " 1 台	26,000,000 林道 城山線
合 計			270,221,000	

揮にも配慮を払い林業経営の合理化、生産性の向上と林家の所得増進を図るものである。

本町においては、林業構造改善協議会を設け四十九年度から五十二年度まで四ヶ年にわたり事業を実施した。

#### (十) 椎茸

牧園町椎茸の始りは詳らかでないが古老の話を総合すると、明治の末期から大正の初期にかけ地元の有志者四、五名が農業の傍ら栽培を始めていた。昭和十五年に大分の先進地から專業者が移住され両者は技術、経営の交流を図り一体となって振興に努力した結果今日の発展を見るに至ったものと思われる。

中村逸志さん(三体堂内野々)は早くから椎茸栽培に取組み昭和二十二年には鹿児島県椎茸協同組合を設立し初代組合長に就任された。

宮崎盛さん(宿窪田瀬戸口)は昭和十年十一月天皇陛下が特別大演習御統監のため鹿児島に行幸された際陛下の食膳に椎茸を献上された。

終戦後椎茸は、健康食として欠かせない食糧品となりその需要は年々増加していった。

本町は気候温暖にして、しかも山林、原野が多く(林

野率七七%)椎茸の栽培に最適であることから椎茸振興会(会員五〇名)を組織しその普及に努力した結果現在では質、量共に勝れた県下有数の産地となった。

專業者十一人 青年部十四人 年産額 二億八千万円

#### (十一) 町有林所有の沿革

明治初年地租改正に伴ない土地を官民有別の区分に際して、旧来の個人、部落有および霧島温泉地二、五〇〇haを除く森林原野は、明治三十九年七月十四日付当時の大林区署(国)から一、六四六haの払下げを受け、また昭和八年三月県知事の許可を得て、部落有財産の統一を図り、五四haを村有林に編入し、面積二、一八六haを村基本財産として管理され、資源育成に努力が払われた。

しかし、戦時中軍需材供給のため森林の経営は混乱した。その後、昭和二十五年、農林省種馬所の廃止に伴ない約四〇〇haが町に払下げられ、更に昭和三十年三月国有林野整備措置法により、国有林一〇六haの払下げを受け、合計面積二、二九二haとなった。その後一部を民有縁故地として払下げたので現在(昭和五十四年十二月)一、六一九haが管理されているのである。

。経営計画編成の沿革としては、昭和三十四年公有林野

経営計画の第一期として（昭和三十六年度から四十年年度まで五年間）第二期（昭和四十一年度から四十五年度まで五年間）第三期（昭和四十六年度から五十年度まで五年間）第四期（昭和五十一年度から五十年間）の経営計画を樹立施策中である。

### (三) 町有林の状況

町有林については、昭和三十四年度以降公有林整備事業（新植、改良、保育）によって逐次整備をすすめ、その間に延べ新植二三六・一ha、補植二三九・八三ha、保育二、九五八・九二haを施業している。なかでも昭和五十一年施業の次代検定林（万膳字湯ノ迫）は順調な成育を続けている。また林業構造改善事業による宿窪田、城山地域における高度集約育林事業の新植（五十二年度）四・九六ha、技打七・四二haも計画どおり順調に目標をめざしている。このほか特用樹林造成事業の導入によりクヌギ林の造林拡大につとめ良質のしいたけ原木を確保し特産としてのしいたけの振興をはかる等して、町有財産の造成と町民の福祉に寄与している。

### (1) 森林害虫防除

森林害虫のうち、松くい虫は年々拡大し標高の高い

霧島山麓にも侵入し、地上防除も含め昭和五十年年度から空中防除を毎年一〇〇haずつ実施しているが被害の地域は広域化している。今後とも継続的に実施し森林の保護につとめている。

### (2) 管理見緯

町有地は町内九八一の小字のほとんどの地内に所在する土地の適正な管理（盗伐、誤伐、無断使用、被害防除、立木の状況等）を期するため昭和三十七年度に町有土地見緯人の制度を設け、それぞれの担当地内を巡視して、定期、臨機の処置を行なっているが町民の財産を守り育てるため健全で適正な運用をすすめている。

### (三) 国土調査（地籍調査）

昭和四十七年度より国土調査法にもとづいて地籍調査を実施しているが町内の土地を正確に、科学的に調査は握し地籍、面積、境界の明確化により境界紛争の公租、賦課の不均衡解消など土地利用計画の基本となるものとして年次的に町土全体について継続実施する昭和五十四年度までの終了地区は宿窪田、中津川地区である。

実施済および年度別計画表は次のとおりである。

地籍調査事業年度別計画表

実施すゝみ																											
昭47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64										
<i>km</i> 3.91	6.90	—	2.41	2.39	5.00	6.51	8.31	6.23	6.57	7.02	7.97	7.56	6.79	4.60	9.37	9.14	5.93										
宿 窪 田				下中津川				上中津川				三休堂				万 膳				持 松				高千穂			



伸 び る 森 林

(4)

りもって国民経  
済の発展に資す  
る。

森林組合が行う

事業

ア 森林の経営指

導・または施業

イ 病害虫の防除

その他森林の保

護に関する施設

ウ 林業に必要な

資金の貸付けお

よび物資の供給

エ 組合員の生産

する林産物および林産物以外の森林の産物の運

搬、加工、保管または販売

オ 組合員の行う林業に必要な種苗の採取、育成、

林道の設置その他共同利用に関する施設

カ 組合員の福利厚生に関する施設

キ その他、等である。

## 過去5ヶ年間の主な事業実績

## 組合員及び出資金

区 分 \ 年 度	49 年	50	51	52	53
組 合 員 数	1,917人	1,923人	1,952人	1,995人	2,019人
出 資 金	8,780千円	9,566千円	10,253千円	11,356千円	11,882千円
組合員所有面積	6,216ha	6,316ha	6,456ha	6,516ha	6,569ha
職 員 数	8人	8人	8人	8人	9人
専 従 作 業 員	42人	37人	36人	37人	38人

## 事業の概要

## 販売事業、林産事業（取扱量）

区 分 \ 年 度	49	50	51	52	53
木 材	7,114m <sup>3</sup>	9,142m <sup>3</sup>	9,191m <sup>3</sup>	11,050m <sup>3</sup>	8,677m <sup>3</sup>
乾 しい た け	1,280kg	1,608kg	1,614kg	1,688kg	1,285kg

## 第2章 経 済

### 購買事業（取扱量及び売上）

（単位 千円）

区 分 \ 年 度	49	50	51	52	53
山 行 苗	(297千本) 8,616	(141千本) 4,910	(172千本) 6,078	(170千本) 7,737	(202千本) 8,438
林業機械及部品	6,407	6,585	10,819	8,517	7,015
肥 料	(33,060kg) 2,273	(22,590kg) 2,045	(23,385kg) 2,189	(24,030kg) 2,258	(32,475kg) 3,041
薬 剤	1,567	4,446	3,344	2,426	5,083
椎茸種駒	(590千個) 869	(715千個) 1,380	(824千個) 1,635	(1,126千個) 2,206	(1,545千個) 2,973
そ の 他	583	1,100	749	447	1,646

### 養 苗 事 業

（単位千円）

区 分 \ 年 度	49	50	51	52	53
山 行 苗	(87千本) 2,738	(114千本) 3,733	(68千本) 2,760	(102千本) 2,800	(95千本) 3,502

### 森林造成受託

（ヘクタール）

区 分 \ 年 度	49	50	51	52	53
新 植	22ha	14ha	22ha	50ha	51ha
保 育	314	390	583	435	364

### 金 融 事 業

区分 \ 年度	49 年		50		51		52		53	
伐調資金	件 13	千円 940	件 9	千円 689	件 1	千円 34	件 1	千円 34	件 1	千円 34
林経資金	50	20,571	49	19,971	51	20,921	46	18,881	43	17,666
森担資金	38	356,380	33	301,700	32	248,420	26	226,500	22	333,900
計	101	377,891	91	322,360	84	269,375	73	245,415	66	351,600

## 歴代組合長

初代	森	良	孝	自昭和16年3月31日 至〃 20. 11. 10
二代	永	田	良	幹 自〃 20. 11. 11 至〃 23. 5. 25
三代	改	元	金	蔵 自〃 23. 5. 26 至〃 30. 5. 31
四代	永	田	良	幹 自〃 30. 6. 1 至〃 36. 5. 31
五代	松	下	久	敬 自〃 36. 6. 1 至〃 50. 8. 31
六代	中	西	伊三男	自〃 50. 9. 1 至〃 〃 現 在

## (七) 統計資料

## 林 野 面 積 (昭和49年) (町勢要覧)

単位 *ha*

区 分	総面積	林 野 面 積					田 畑 そ の 他
		国有林	県営林	町営林	私有林	計	
面 積	12,948	2,435	134.5	1,598	5,816	9,983.5	2,964.5
比 率	100	19	1	10	45	77	23
◇町有林の内訳							
官行造林		200.02 <i>ha</i>	県行造林	35.82 <i>ha</i>	分収林	147.11 <i>ha</i>	
貸付林		155.13 <i>ha</i>	直営林	1,059.95 <i>ha</i>			
◇人工林率		6.6%					

## 林 産 物 生 産 状 況 (昭和49年)

区 分	生産量	生産額	販売量	販売額	比 率
椎 茸	<i>kg</i> 62,000	千円 280,000	<i>k</i> 55,800	千円 252,000	% 37.0
素 材	<i>m<sup>3</sup></i> 10,932	218,640	<i>m<sup>3</sup></i> 8,745.6	174,912	26.0
製 材 品	<i>m<sup>3</sup></i> 3,500	210,000	<i>m<sup>3</sup></i> 3,500	210,000	30.9
チ ッ プ	<i>m<sup>3</sup></i> 2,750	33,000	<i>m<sup>3</sup></i> 2,750	33,000	4.5
竹林・たけのこ		4,500		3,150	0.1
苗 木	本 347,000	9,605	本 347,000	9,605	1.4
木 炭	<i>kg</i> 15,000	1,500	<i>k</i> 7,500	750	0.1
計		757,245		683,417	100.0

林 産 物 生 産 状 況 (昭和53年度)

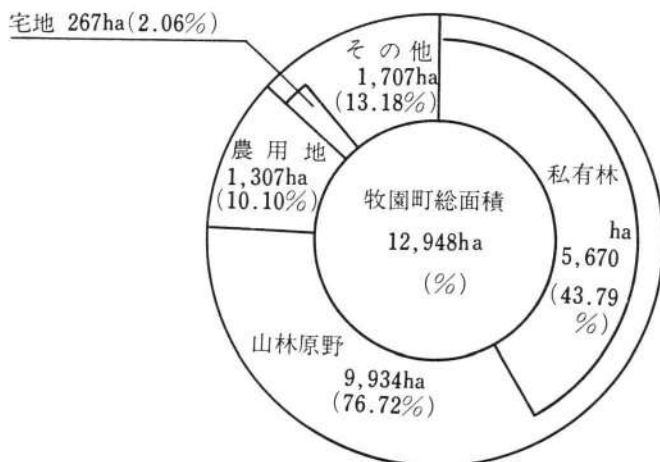
区 分	生 産 量	生 産 額	単 価	所 得 率
椎 茸 { 生 乾	15,000kg	10,500千円	700円	60.0%
素 材	47,000kg	211,500	4,500	60.0
製 材	2,859m <sup>3</sup>	135,752		
チ ヅ ブ	1,120m <sup>3</sup>	61,600		
苗 木	242m <sup>3</sup>	1,044		
	168,750本	6,750	40	

土 地 の 利 用 状 況

54.12.1調 単位: ha、%

区 分	面 積	割 合	区 分 別 割 合
1 農 用 地	1,307	10.10	100.00
2 { 私 有 林	5,670	43.79	57.08
町 有 林	1,619	12.50	16.30
山 県 有 林	167	1.29	1.68
林 国 有 林	2,246	17.35	22.61
原 原 野	232	1.79	2.33
野 小 計	9,934	76.72	100.00
3 そ の 他	1,707	13.18	100.00
合 計	12,948	100.00	—

(資料 町振興計画)



## 町 有 林 の 現 況 (ha)

官行造林	県行造林	分 収 林	学 校 林	直 営 林	計
200	37	185	55	1,142	1,619
営 林 署	鹿児島県	日 赤 部 落 そ の 他	小 学 校		

町有林は直営林のほか分収林、学校林、官行造林等がある。

## 直 営 林 の 内 訳 (ha)

人 工 林				天 然 林				他	計
す	ぎ	ひのき	ま っ つかぬぎ	ま っ つかぬぎ	広葉樹	竹	無立木地		
60	218	217	151	96	82	252	7	59	1,142
6	19	19	13	8	7	22	1	1	100%

## 町 直 営 林 の 造 林 実 績 (ha)

年度別 種目別	49	50	51	52	53	計
新 植	3.00		5.50	4.30	7.00	19.80
補 植		3.00	1.60	6.50	11.46	22.56
保 育	120.54	151.50	135.80	142.20	156.28	706.32
計	123.54	154.50	142.90	153.00	174.74	748.68

資料 管財課

現 在 林 齢	樹 種	面 積(ha)	材 積(m <sup>3</sup> )
1     ~     5	すひまく のぬ他	1.40	236
		27.32	
		85.20	
		67.15	
6     ~     10	すひまく のぬ他	6.50	878 348
		99.20	
		43.72	
		68.16 20.44	
11    ~    15	すひまく のぬ他	9.58	792 2,153 5,244 2,064 3,658
		32.85	
		70.41	
		48.26 73.08	
16    ~    20	すひまく のぬ他	19.12	2,624 4,740 12,084 1,827 7,136
		43.48	
		118.31	
		21.41 86.08	
21    ~    30	すひまく のぬ他	12.27	2,473 2,064 10,104 1,058 6,832
		14.14	
		79.70	
		10.08 65.30	
30 年 以 上	すひまく のぬ他	11.07	3,592 310 258 15 810
		1.31	
		0.95	
		0.12 5.92	
計	すひまく のぬ他	59.94	9,481 9,267 27,690 5,842 19,070
		218.30	
		313.09	
		233.23 317.97	
計		1,142.53	71,350

## 森林保護の強化 松くい虫防除の実績

項 目	航 空 防 除 (単位; ha)					立木駆除(単位; m <sup>3</sup> )			
	51	52	53	54	55	51	52	53	54
牧 園 町	100	100	100	300	40	100	100	100	273

## 林道、作業道の実績

事業名	事業主体	路線	総延長	事業費
林構林道	町	13	14,739 <sup>m</sup>	321,861 <sup>千円</sup>
作業道	町	16	13,460	4,038
林道舗装	町	16	300	2,500

## 学 校 林 の 現 況 (ha)

牧 園	三 体	万 膳	中 津 川	持 松	計
13.26	13.03	10.43	7.30	10.74	54.76



椎 茸 原 木



森 林 組 合

## 二十四 水産業

### (一) 推移

本町の水産業は河川漁業で漁獲種類、漁獲数量も極めて少なく、零細で年間を通じての専業者はなく、夏期の趣味として糸を垂れる者が多いというだけの状態である。

昭和九年電力需要の必要性に迫られ、河川に堰堤を設定、発電所設置をみてから、魚族の潮上が停止されるという状態におかれたので、その後、上流河川には放流事業により、ようやく魚族の杜絶をまぬがれていた。また昭和二十五年さらに水力発電用の堰堤が設置され、魚道はあっても魚族の潮上が殆んど無いため、年々相当な費用を投じて

		自昭和50年度 至54年度				
		放	流	実	績	
種別	年度	50年度	51	52	53	54
あこ うな やま	ゆいぎめ	85k	160	150	220	200
	いぎ	—	—	—	150	240
	な	90k	43	42	69	69
	マ	—	—	—	四 5,000	5,000

放流しているが、大体八〇%位の歩どまりしか考えられない状態で、これにより生計を維持することは望めず、動物性蛋白質の補給源の一部にしかすぎない。放流魚族は、主としてあゆ、うなぎ、こい等である。

昭和十年の記録によると、牧園村下中津川で川マス二万九千五百粒を人工孵化飼育、七月十、十一日の二日間にかけて塩浸川上流、霧島川上流、栄之尾川、大浪の池の四か所に放流し、成長しつつある旨新聞報道にのったとある。これは数年間捕獲禁止の上保護され、国立公園への客達を喜ばせる目的でなされたものである。

このほか、川内川上流にある漁業組合が宮崎から鯉を、球磨川から鰻を取り寄せ放流したといわれる。

### (二) 現況および振興方針

天降川は早くから「あゆ」の産地として地域住民のレクリエーション、観光地としての重要な役割を果してきた。しかし最近河川上流の開発、生活、産業排水による水質汚濁など、魚族の生そくが困難な状況となっている。この要因を防止し河川の美化、愛護運動を展開し自然環境保全につとめ、魚族の繁殖、増加期上をはかる、また稚ごい、稚あゆ、子うなぎを放流し乱獲防止と魚族

の保護につとめる。

## 二十五 商 業

### (一) 商業の概要

町内の商店規模は、総体的に小さく卸売業は少なくは

とんどが小売業である。主として食料品、日用品であり一店舗当りの販売額（昭和五十一年）をみると、郡平均の四九%、県平均の二三%程度にしか及ばず、購買力の低さと商店経営の非効率性がうかがえる。しかし



商 工 会

これも大半が潜在的な町外流出購買の激しさと推定される。

### (二) 商業の現況と振興

本町の商業活動は、最寄品を主として日用品的商業活動が主であり、地理的立地からして地域の生活実態からおこった商店形式である。従って商店街が点在し、まとまりを欠き、賑いも少なく活動もやや低調である。買回品については、殆んど町外流出の傾向が強い。このような厳しい経営環境のなかで振興をはかるには商業者の連帯による体質改善を進め、近代化を促進し、組織の強化、共同化等による流通改善、経営診断の実施、制度資金の拡充、都市計画事業と関連して商店街の整備、駐車場の確保など楽しく買えるものができる商店街づくりを進め、商品の量的選択、高品質、価格等の点でも対応できる施策を商業者、商工会一体となって振興をはかる必要がある。

### (三) 商工会

昭和三十五年五月二十日商工会の組織等に関する法律が制定され既存の任意商工会を解散し法人格のある商工会へ組織された。

(1) 法の主旨

「市町村における商工業の総合的な改善発達を図り事業活動を促進するための措置を講じもって国民経済の健全な発展に寄与する」となっている。

(2) あゆみ

昭和三十五年十月七日中央公民館において設立総会を開催し、定款の承認、事業計画、収支予算、諸規約の承認、役員を選任等を決議した。

初代会長

竹下平治 副会長 神之村政雄 佐藤金人

外理事一八名 監事二名

昭和三十六年度から経営指導員および補助員配置される。

昭和五十五年三月末現在、経営指導員二名、補助員一名、記帳専任職員一名、記帳指導職員一名、計五名で事業の指導にあたっている。

現在の会長 竹下平治 副会長 田中盛夫 青山清照

外に理事一八名、監事二名、計二三人の役員構成である。

(3) 町内事業者の状況(昭和五十五年三月三十一日現在)

町内商工業者数 四五七名(内小規模事業者数四一

(四)

商工会員数 三二二名(内法人九四)

(4) 商工会の事業活動

① 五四年度予算 六八、〇三〇千円

② 金融のあっせん額 八億二、五〇〇万円

③ 委託業務 内会館建設費 四六、〇九〇千円

④ 記帳委託者 七三人

⑤ 労働保険委託者 六四人

⑥ 小規模事業主退職金加入者 一〇三人

⑦ 貯蓄共済退職金加入者 一四二人

⑧ 指導員による指導件数 年一、五六六回

⑨ 講習会の開催 七回参加者 二五七人

⑩ 珠算検定 年三回

この外に青年部員三七名、婦人部員一六名組織で自己の経営改善と、地域経済の発展に努力している。

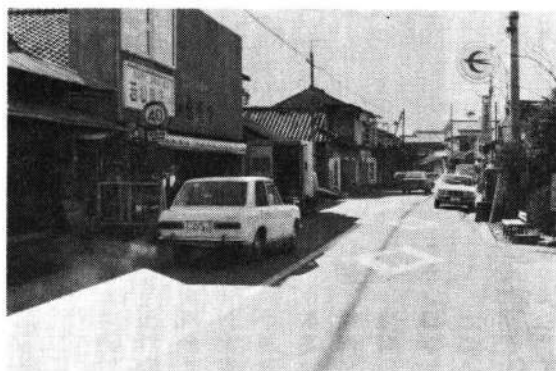
(四) 金融

(昭和五十四年十月現在)

町内金融機関は、普通銀行一、農業協同組合一、郵便局五で外に信用金庫が入っている。



麓地区商店街



駅前商店街



丸尾商店街

## 第2章 経 済

### 業 種 別 51年町勢要らん

農 林 漁 業	鉱 業	建設業	製 造 業	卸小売業	金融保険
3	2	21	22	217	3
不動産業	運輸通信	電気、ガス、水道	サ ー ビ ス	計	
3	11	5	138	425	

一店舗当り年次別平均売上高 千円

区分 年度	牧 園 町	郡	県
41	2,875	4,163	8,844
43	4,634	5,574	13,840
45	5,675	7,211	17,596
47	6,532	8,586	20,553
49	8,431	15,265	34,101
51	11,088	22,562	48,605

資料県統計年鑑

預金残高 八六五、七〇一万円  
貸出高 三九八、九六七万円  
貯貸率 四六・一％で資金運用においてかなり  
余裕ある経済活動が行なわれている。

### 業種別商店数、従業者数、販売額

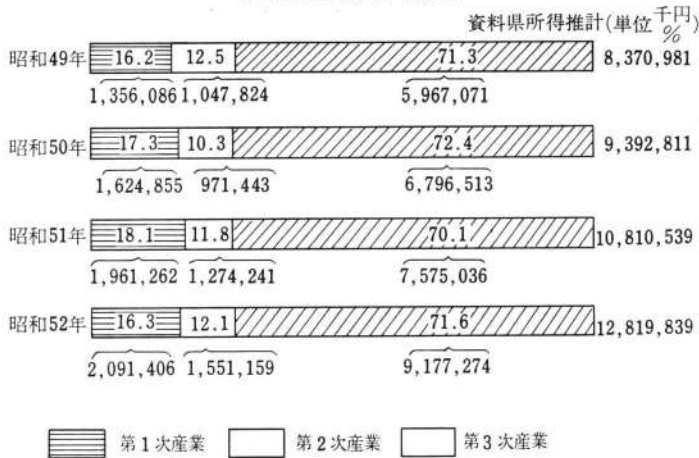
区分 年度	総 数			卸 売 業			小売業(一般)			衣類身まわり品 小売業		
	商店 数	従業 者数	販売額	商店 数	従業 者数	販売額	商店 数	従業 者数	販売額	商店 数	従業 者数	販売額
47	202	513	131,956	3	15	5,780	29	92	28,990	6	35	19,170
49	194	500	163,564	5	22	12,840	30	115	44,294	6	25	13,292
51	230	593	255,018	7	43	29,305	34	112	89,398	7	31	17,104
区分 年度	食料品小売業			飲 食 店			自動車 小売業			家具建具計器 小売業		
	商店 数	従業 者数	販売額	商店 数	従業 者数	販売額	商店 数	従業 者数	販売額	商店 数	従業 者数	販売額
47	114	232	56,851	34	100	11,640	7	14	3,565	9	20	5,732
49	106	207	68,246	34	106	15,308	6	11	4,801	6	10	3,580
51	112	234	89,469	51	136	19,382	7	15	4,973	11	22	5,387

資料県統計年鑑

### 経 済 金 融

町内所得の構成比をみると、およそ71％が第三次産業、12％が第二次産業、第一次産業が17％となっている。

## 町内純生産額及び構成比



## (五) 物 価

## 生活関連物資のねだん

物価情報連絡員調べ

調査日 (55年11月15日)

(単位: 円)

品 目	規 格	県平均	前年同月 比 (%)	本土 平均	離島 平均
ち り 紙	古紙使用 700枚	180	120.0	173	200
トイレットペーパー	55m 4 個 1 組	184	125.2	179	199
洗たく用合成洗剤	「新ニュービーズ」 1.66kg 1 箱	756	118.7	748	784
化粧石ケン	「エメロン」 85g 1 個	75	108.7	74	78
台所用合成洗剤	「チェリーナ」 380mm 1 本	156	113.0	155	157
ノートブック	B 5 版 30枚 1 冊	96	110.3	95	99
鉛 筆	黒芯・HB 1 ダース	327	119.8	328	324
砂 糖	上白糖・袋入り 1 kg	288	121.5	281	307
食 用 油	サラダ油 1.8ℓ	618	101.3	613	632
し ょ う 油	濃口「キッコーマン」 1.8ℓ	470	113.5	464	486
小 麦 粉	「日清フラワー」 1 kg	183	114.4	180	193
即 席 め ん	「出前一丁」 1 袋	60	113.2	59	64
食 パ ン	普通品 7 枚袋入り	133	122.0	131	139
マ ヨ ネ ー ズ	300g 1 本	196	102.1	191	210
み そ	普通品 1 kg 袋入り	353	119.7	351	360
さ ば 缶 詰	味付 6 号缶 1 個	81	119.1	78	89
マ ー ガ リ ン	「雪印ネオソフト」 225g	191	101.1	188	198
グルタミン酸ソーダ	「味の素」 120g 1 袋	267	107.7	267	265
家 庭 用 バ タ ー	「雪印バター」 225g	363	101.1	359	375

## 第2章 経 済

### 石 油 価 格 (単位:円)

品 目	規 格	55 年 11 月 5 日			
		県 平 均	前年同期 比 (%)	本土平均	離島平均
灯 油	店頭渡し 18ℓ	1,494	133.5	1,454	1,629
ガ ソ リ ン	現金売り 無鉛 1ℓ	154	110.0	150	166
軽 油	現金売り 1ℓ	110	120.9	107	120
A 重 油	現金売り 1ℓ	84	133.3	82	94
液化石油ガス	体積売り 5m³	2,544	123.9	2,454	2,872

### 項目別消費者物価指数 (昭和50年=100)

	総 合	食 料	住 居	光 熱	被 服	雑 費	季節商品 を除く総合
指 数	141.2	135.3	140.1	167.3	135.9	148.0	138.5
前月比(%)	0.3	0.4	0.3	-0.1	-0.1	0.3	0.7
前年同月比 (%)	9.1	9.8	7.4	38.3	3.4	7.6	7.9

55年11月現在

## 二十六 地 熱 開 発

地球の内部に包蔵している巨大な熱量は一、〇〇〇℃から中心部は数千度といわれている。地熱エネルギー資源は地殻に含まれる天然のエネルギーであり、石油が貯留層に濃縮されているのと同じように自然条件によって、造られた地熱貯留層が資源としての対象である。そして此の高温で、しかも比較的浅いところにある地熱貯留層は経済的にエネルギー供給源として利用することができる。現在行われている地熱開発は、この温度の高い熱水を地上に導き出すことによって、エネルギーとして利用するものである。

### (1) 地熱利用の優位性

- (ア) 地熱資源は純国産であり、海外の事情や天候などに左右されず、しかも地下に豊富に包蔵されているので、その安定性・永続性で最も優れている。
- (イ) 地熱発電は非常に利用効率が高いのが特徴である。水力発電の利用率は四五％程度、地熱発電はエネルギー供給源が安定しているので九〇％程度

と効率が低い。

(ウ) 運転保守が極めて容易であり、火力、原子力等と比べて地球がボイラーの役目を果たし、気圧温度も低く設備が簡単で運転保守にも安全で事故もほとんどない。

(エ) 経済性も高く燃料費が不要でほとんど固定費のみで、コストが安く、まさに今後のエネルギー対策としての旗頭である。

## (2) 地熱開発による有利性

住民の理解の上に立ちこれの開発が成功すると地熱エネルギーの活用は発電が主であるが、これにもなう本町に及ぼす有利性は地形を変えず比較的自熱環境を保全しながら、できることで次のようなことが考察される。

(ア) 地上に導き出した地熱は蒸気と熱水に分け、蒸気はタービンへ送られ発電機を駆動し発電し、さらに冷却されて温水となり、さらに復水器の冷却水となって、循環再利用されるのほとんど自前で電力生産ができ大きなエネルギー対策となる。

(イ) 分離された多量の熱水は熱交換器を通り地下に還元されるが、交換熱水は地域暖房や、温泉給湯、農業用温室、養魚など幅広く使われ産業の振興はもとより生活の向上に役立ち、新しい豊かな町づくりの展望が広がってゆくことも決して夢ではない。むしろこの面が期待されるところである。

## (3) 地熱発電開発が及ぼす諸影響

地熱資源開発適地は自然公園地内が多く、開発には貴重な優れた景観や風致、自然環境に慎重な配慮が必要である。従って自然保護、環境保全のために関係機関、地元住民との話し合いによる開発が最も必要である。

(ア) 蒸気や熱水の中に含まれる有毒成分が環境を汚染することのないよう充分調査配慮し、これらの防止除去施設を完璧にしてすめなければならぬ。

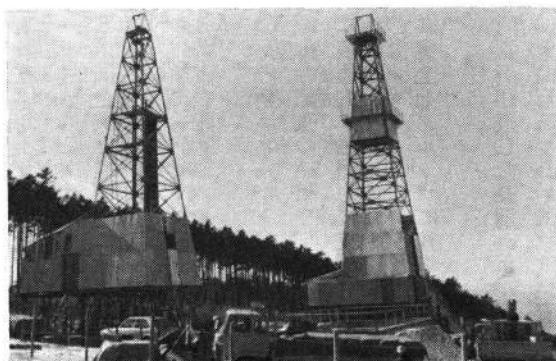
(イ) 熱交換温水のため河川、地表水の取入により、従来の農業用水等に不足を来さないか充分な検討を行ない、慣行水利の調査、受益者との話し合い

資源

を充分実施してすめなければならない。  
(ウ) 多目的に利用された温配水や、既存の温泉との関係も検討し深度において影響はないと、いわゆるまでに充分配慮してすめなければならない。  
(4) 国の施設として民間及び第三セクターの地熱開発センターが試掘調査を実施するが、地域住民とのコンセンサスをはかりながら対応する。

その他の地下

霧島山系に多くの鉱種が賦存し、数多くの鉱業権が設定されている。種類としては、金銀鉄、硫化鉄、



大霧の地熱開発

硫黄、耐火粘土、けい石、長石、亜鉛など全般に及んでいる。資源のない我が国にとって、これらの地下資源を活用することは大事なことであるが、本町の特性として立地を充分検討し自然環境保全を最重点に、自然災害となるような開発は防止し、万全の対策を講じ慎重な対応を計らなければならない。

霧島地区における、地熱開発の推進

霧島地区におけるこのたびの調査活動の成果は、わが国における地熱エネルギー利用の将来に向けて、着実な一歩を進めることが期待される。

(新日本製鉄株式会社)

昭和五十五年十二月

地熱開発で長期方針

通産省新日鉄グループなど中心に

(南日本新聞 昭和五十五年六月二十六日)

通産省、資源エネルギー庁は二十五日までに、我が国最大の国産エネルギーである地熱開発を加速度的に推進するため、散発的だったこれまでの地熱開発方式を百八十度転換させる「長期開発基本方針」を固めた。

それによると、(1)強力な民間企業の開発体制を目指し

て、地熱開発企業を新日鉄グループなど七グループに集約する。(2)ユニオン・オイルなど地熱の探査、開発技術で最先端をいっている米国企業と積極的に技術提携をはかる。(3)九州、豊肥地区などでは地元自治体や電力会社を加えた「第三セクター方式」を検討するなど、全く新しい内容となっている。

同省では十月一日発足の新エネルギー総合開発機構が実施する全国地熱資源総合調査の結果や、各種補助金制度をこの七グループに積極的に活用して支援する方針だが、今回の長期基本方針の策定により、今後のわが国の地熱開発の主力は、事実上七グループに絞られる見通しとなった。

脱石油を目指して同省が作製した長期エネルギー需給暫定見通しによると、火山列島のわが国は地熱資源に非常に恵まれており、昭和七十年には現在の四十三倍に当る七百万キロワット（石油換算千四百万キロワット）の開発利用が見込まれている。

同省は、こうした加速度的な利用拡大の実現には、従来の企業ごとの開発体制では不十分と判断し、技術や人員、資金、開発意欲などの面で強力な開発体制をつくる

ことをねらい、関係方面との協議を行っていた。

今回の方針で、各グループがそれぞれ七十年代百万キロリットル、全体で七百万キロリットルの計画を実現する段取となる。

七グループとは、(1)新日鉄グループ（新日鉄、日本重化学工業など）、(2)出光グループ、(3)三菱グループ、(4)三井グループ、(5)石油資源開発グループ、(6)九州電力、(7)電源開発である。

# 第三章 社会

## 第一節 交通

### 一 道路

道路は文化の尺度と思われる。道路の良く整備された地域は、文化の進んだ心豊かな所と思われる。

しかし道路の整備は交通量の増加に追いつかない。先人はその整備に部落総出で努力を重ねて来たが、作業は人手ばかりであったので急坂あり、狭少であり紆余曲折した所が多かったが、荷物の運搬は牛馬であり、人力であり、旅は駕籠であったので大した不便は感じなかったが、文化の進むに従って不便を感じるようになりだんだん道路の整備がなされるようになり、現在は大機械が使用されて大がかりな道路工事が至る所で行われている。

#### (一) 旧藩時代―明治時代の道路

国分から古道坂、中津川、宿窪田、芦谷原、横川に通ずるのが幹線で、それに各部落に通ずる支線を作っていた。明治二十七年に西国分、隼人から新川沿いに、安楽妙見大飼に出て、宿窪田、横川に通る踊街道が出来た。

明治二十九年には九州種馬牧場の設置と、霧島温泉の名声は本町の道路網の発達を促した。明治四十三年牧園駅（今の霧島西口駅）の開設と共に県道高千穂街道が開け、鉄道、自動車の連絡が密になり本町の道路網が開かれた。

#### (二) 現在の道路

現在国道二二三号が（小林隼人線）新川沿いに通じ、牧園麓より県道、牧園―宮ノ城があり、又霧島の丸尾三叉路より霧島、小林線が延び、大飼を起点として霧島神宮駅に通ずる道路も開けた。

大型基幹農道は小谷、三休、万膳、栗野町の上場を貫通し、現在小谷から霧島町に通ずる大型農道を建設整備中で、その接点二二三号線は小谷であり、完成すると国道と交差し将来志布志湾開発に伴って重要な路線となり、これに通ずる町道関連道路が縦横に走り、農林畜産

物流通の円滑化をもち、九州自動車道路の栗野、横川のインターとの結合で、観光交流にも役立つものである。これに空港——霧島間の直通道路の建設整備がなされると、本町の産業経済の流通も大きく変わることが予想される。

最近の自動車交通の状況は高度経済成長以来驚異的な伸びで車の普及も今や世界一流国なみとなり、まさに狭い国土にひしめき合い交通戦争の時代となった。また一方では車は生活の必需品となり今後ますます増加するものと推定される。このような状況の中で町内基幹道路は、これに追従できず整備がおくれている。将来の交通量、利用度を想定し効率的な道路網体系を確立し、産業や文化の発展に寄与し町民にとって安全で利用性の高い道路となるよう整備する必要がある。

また道路は交通需要への対応だけでなく、地域の開発整備に大きく寄与するもので、その有機的な関連にも配慮がなされ産業経済活動の均衡をはかるための誘導力として活用していくことが要請される。

本町の立地的優位性を生かし、観光地としての流通ネットワークの形成を促進するため九州縦貫自動車道、大

隅開発にともなう大型基幹農道、鹿児島空港間道路建設など、積極的に早期実現を推進しこれら基幹交通体系が十分機能し併せて、これと連結する町内主要道の整備をはかり広域経済生活圏の一体化をすすめる。

次に町道の現況は次の如くである。

# 道 路 交 通 体 系

道路の現況（国、県、町道）

町建設課資料(54. 4. 1)

区 分	路線数	延 長	舗 装	未 舗 装	舗 装 率
国 道	1	22,861 <sup>m</sup>	22,861 <sup>m</sup>		100 %
県 道	3	28,217	16,870	11,347	59.8
町 道	1 級 道	7	36,467	1,692	95.6
	2 級 道	15	51,503	7,135	87.83
	一 般 道	102	86,911	44,632	66.07
	計	129	174,881	53,459	76.58
総 数	133	279,418	214,612	64,806	76.8

# 第3章 社 会

## 町道の幅員

町建設課資料

区分 年次	総 数	3.5m未満	3.5m以上	4.5m以上	5.5m以上
昭和53年	229,037	31,478	89,494	62,907	45,158

## 橋梁の現況

町建設課資料

区分	総 数			永 久 橋			木 橋		
	橋数	延 長 m	面 積 m <sup>2</sup>	橋数	延 長 m	面 積 m <sup>2</sup>	橋数	延長 m	面 積 m <sup>2</sup>
国道	11	328.0	2,592.5	11	328.0	2,592.5			
県道	8	80.1	500.2	8	80.1	500.2			
町道	78	976.0	3,696.8	77	961.0	3,651.8	1	15	45.0
総数	97	1,384.1	6,789.5	96	1,369.1	6,744.5	1	15	45.0

一級町道		町道の現況				
路線番号	路線名	起 点	終 点	延 長	幅員	摘要
一	牧園中央線	うわ床原	崩渡	一七六、五、九	七、〇	
二	三三三三堂線	宿窪田岩崎 三三三三番地先	三三三三堂内野々	八〇五、五	五、六	
三	三三三三膳線	横川町中ノ 下植村	井手原	五〇三、五	五、五	
四	石坂線	星ヶ迫 三三三三番地先	黒岩	七二七、五	五、〇	
五	宿窪田線	牧園 二四二二番地先	滝ノ上 七九番地先	四二〇、五	六、二	
六	持松線	持松六方辻	飯屋田 三六八番地先	二八三、〇	四、五	
七	真方線	真方	白崎	八七、〇	三、八	
八	寺原線	平原前 三三三三番地先	崩迫 五〇一七番地先	九四、〇	五、五	
九	健崎線	小塚原 三三三三番地先	湯窪 三三三三番地先	五八四、〇	六、七	
二	横瀬橋線	窪前 一四二二番地先	下中津川 四二五二番地先	三七八、〇	六、五	
二	落水田橋線	落水田	井手元	三〇四、〇	六、〇	

三 万膳	前田	湯原	四三、二、四、六
三 有村	有村	上水堀迫	四六、二、六、五、五
三 水堀線	三八番地先		
四 三体堂	鬼ヶ窪	浅谷	三〇六、四、〇
五 浅谷線	五八番地先		
五 大霧線	高野	銀湯	六九〇、〇、五、〇
六 中福良	万膳住宅	越ヶ谷	二四〇、〇、四、七
七 越ヶ谷線	六七一番地先		
七 七曲	横射場	永山	九六、三、七、五、〇
八 靖河線	五五番地先	五九番地先	二二〇、〇、四、〇
八 川津原線	ウケノクチ	松ヶ迫	
九 ひばりヶ丘	二〇二番地先	三三九番地先	
九 西後線	三三七番地先	二五八番地先	一八元、九、四、三
一〇 宿窪田	行司知行	溝口	三三、五、一、三、七
一〇 溝口線	三三六番地先	一番地先	
一〇 荒田線	下中津川	下中津川	一〇〇、〇、四、五
三 観音坂線	一四〇番地先	六二番地先	
三 柳ヶ平	下中津川	下中津川	三四〇、〇、五、五
三 手洗線	元興一番地先	二四六番地先	
四 中野	佐木段	手洗	三六五、四、六、五
四 内野々線	多々羅迫	三九七番地先	一五九、〇、四、五
五 批把首線	川床	内野々	二二七、〇、四、二
六 宇都口線	七十走り	佐木段	二九六、〇、四、五
	田方		

三 吉原線	中國	吉原	八七、〇、五、四、三
三 古屋志	川窪	扇之迫	一六七、二、四、三
三 扇之迫線	扇之迫	彦道	八六、六、四、三
三 成政	成政	扇之迫	六〇、二、四、二
三 新改	成政	九日田	七二九、九、四、五
三 九日田線	成政	成政	七三、二、六、五
三 成政	成政	成政	一四七、〇、五、五
三 成政線	成政	成政	五六、〇、四、五
三 成政	成政	成政	五二、〇、四、五
三 成政	成政	成政	三八二、四、〇
三 成政	成政	成政	三六九、四、三、六
三 成政	成政	成政	七〇、三、三、五
三 成政	成政	成政	六九九、九、四、七

その他町道 一〇一路線

三 牧场	牧场	真頭	二七八、五、六、〇
三 真頭線	牧场	真頭	
三 龍石線	龍石	小塚原	七五九、七、四、六
三 栗川線	丸尾	栗川	二七九、四、四、〇
三 母ヶ野線	岩下	一本木	二九四、九、四、〇

# 第3章 社 会

四第一牧場線	高塚	椎祭志	三六、〇	六、二
四 大霧B 開拓線	太良谷	丸尾	四九、八	三、六
四 内野々線	内野々	内野々	九八、三	三、七
四 内野々 中通り線	内野々	高野	五〇、九	三、四
四 坂下線	湯原頭(四九一) 五番地先	坂下	一二、二	四、五
四 坂下 水堀線	坂下	水堀	一五七、八	三、七
五 浅谷 梁瀬塚線	浅谷	梁瀬塚	五九、五	三、五
五 高野線	湯原 (四六)四番地先	内野々	一六〇、〇	四、五
五 宮田 内野々線	宮田	老本松	四八、〇	五、〇
五 中川床線	堂地	豆打原	五三、五	四、八
五 中野 川床線	中野	川床	五〇、五	五、〇
五 宇都口 中野線	宇都口	提段	八八、三	四、〇
五 宇都口 荒平線	荒平	宇都口	六九、〇	三、四
五 宇都口 寺原線	桑木前	高千穂寺原 三〇番地先	二四九、九	四、五
五 轟木鼻線	平原	轟木	一一〇、五	四、四
五 轟木滝線	平原	高岡	一一〇、五	四、〇

六 轟木 健崎線	轟木山	鉾山	一〇三、〇	四、三
六 荒平線	有村	荒平	一七五、五	二、三
六 堂山 大迫線	堂山	大迫	一六九、九	三、八
六 七俣 浅谷線	七俣	藤之段	三三九、〇	三、五
六 田原 大迫線	上ノ原 六四番地先	大迫	一〇五、五	五、五
六 田原 七俣線	上ノ原 六四番地先	市塚	三三、四	四、二
六 川津原 赤水線	貫ノ口 二〇番地先	貫ノ口	六三、五	三、〇
六 牧園 中学校線	沓ヶ迫 七八番地先	沓ヶ迫	三七、七	六、〇
六 瀬戸口線	雀ヶ原山 三六番地先	瀬戸口	二七九、五	五、二
六 坂元線	雀ヶ原山 三六番地先	池田	八八、三	三、三
六 真澄線	下牧 三六番地先	池田	一六八、五	三、七
六 牧園 テレビ線	鬼沢津 二六番地先	鬼沢津	二四九、二	四、四
六 麓線	宿窪田 三六番地先	前田	二五七、三	八、〇
六 麓二号線	前田 三八番地先	牧園	四一〇、五	四、五
六 牧園 馬場線	城ヶ後 一八番地先	城ヶ後	三〇〇、一	三、五

七 荒田 戸の迫線	六 中津川 テレビ線	六 中津川 之迫線	六 改田口線	六 宿窪田 改田口線	六 大飼 鬼ヶ瀬戸線	六 寺原 六観音線	六 上石坂線	六 塩浸線	七 川原 日の出線	六 問手原線	七 川原線	六 真米線	七 城ヶ後線
下中津川 元六番地先	下中津川 元六番地先	下中津川 三六番地先	下中津川 二六番地先	下中津川 三六番地先	下中津川 二六番地先	下中津川 三六番地先	下中津川 三六番地先	下中津川 三六番地先	上ノ迫 六六番地先	問手原 一六番地先	轟平 六四七番地先	網掛 一五六番地先	城ヶ後 一九三番地先
下中津川 五五一番地先	上中津川 四五一番地先	下中津川 元九一番地先	下中津川 九二一番地先	下中津川 九二一番地先	下中津川 七六一番地先	上中津川 六六番地先	上中津川 六六番地先	湯窪 三六八番地先	平落 三六六番地先	桑鶴 三六六番地先	川原前迫 三六六番地先	真米 六六一番地先	城ヶ後 二〇二番地先
七二〇、四〇	七二〇、三〇	一三三、四二八	一四一、三三五	一四一、三三五	二五〇、五五三	三〇六、五〇〇	三八三、五五三	七九五、〇四、五	二二六、七三〇	三三〇、八三七	五〇〇、〇四、五	一〇八、五〇四、五	四〇〇、五三、五

一三 荒瀬 聖原線	一三 板小屋 西谷線	一三 板小屋 西谷線	一三 板小屋 西谷線	一三 板小屋 西谷線	一三 板小屋 西谷線	一三 板小屋 西谷線	一三 板小屋 西谷線	一三 板小屋 西谷線	一三 板小屋 西谷線	一三 板小屋 西谷線	一三 板小屋 西谷線	一三 板小屋 西谷線	一三 板小屋 西谷線
上中津川 六四一四番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先
上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先	上中津川 七六一番地先
八〇〇、三三八	三三三、〇四、二	三三三、〇四、二	三三三、〇四、二	三三三、〇四、二	三三三、〇四、二	三三三、〇四、二	三三三、〇四、二	三三三、〇四、二	三三三、〇四、二	三三三、〇四、二	三三三、〇四、二	三三三、〇四、二	三三三、〇四、二

# 第3章 社 会

二〇四 荒瀬線	井手原	上中津川 六九八番地先	一〇四、三、三〇
二〇五 六方辻 市後柄線	砂走 三六番地先	崩渡	一七六、二、四、二
二〇六 下村 市後柄線	下村	市後柄	一五四、二、四、五
二〇七 谷門線	内窪	岡原	一四六、一、五、〇
二〇八 崩渡線	崩渡	崩渡	三四、五、四、〇
二〇九 甲辺 所平線	下村	所迫	一五〇、一、四、〇
二一〇 母ヶ野 岩下線	母ヶ野	岩下	一八、〇、四、五
二一一 市後柄 黒岩線	市後柄	黒岩	二四五、二、五、三
二一二 市後柄線	向中原	市後柄	五八、二、三、五
二一三 黒岩線	市後柄	泉原三八 一七番地先	三四三、七、四、五
二一四 栗川 八丁線	栗川	所迫	二九四、〇、五、〇
二一五 南牧場線	小塚原三八 一七番地先	真頭	八四二、二、四、〇
二一六 牧場 龍石線	龍石三八 一七番地先	龍石	四三、二、四、五
二一七 小谷 牧場線	小谷三八 九番地先	牧場三八 一七番地先	七〇、三、四、五
二一八 殿湯線	龍石 六五番地先	栗川	二五、三、四、三
二一九 坪湯原線	殿湯	栗川	九八、七、五、七

## (三) 計画の内容

### 第一 生活と産業を支える交通基盤づくり

1 国道 町土を縦貫する国道二二三号線は町の動脈幹線道として一応整備は終っているが、霧島温泉市街地は現在の車輛の大型化と交通量の増加に伴い再

二〇〇 手洗線	硫黄谷	殿湯	一五〇、〇、五、〇
二〇一 硫黄谷線	硫黄谷	硫黄谷	一四四、〇、四、五
二〇二 新湯線	新床国有林	新床国有林	四〇〇、〇、四、五
二〇三 山口線	真頭三八 六番地先	真頭	七〇、三、三、五
二〇四 横瀬	窪前	窪前	二八、五、三、五
二〇五 中通り線	一五番地先	一五番地先	二七、三、四、〇
二〇六 中福良線	無物田	前田	四〇〇、七、四、〇
二〇七 上坂下線	坂下	立山	一五〇、〇、三、五
二〇八 落水田線	落水田	踏切まで	七〇、〇、四、五
二〇九 栗川 大瀬戸線	三本木	三本木	四八、三、三、五
二一〇 南内野々線	内野々 八五番地先	内野々	六五、四、三、〇
二一一 北内野々線	内野々	内野々	一四〇、〇、四、〇
二一二 大霧 永野線	太良ヶ谷	丸尾	三六、五、〇、〇
計			

整備をすすめる。

2 主要地方道 主要地方道は、九州縦貫自動車道、国道に連結する骨格路線で本町にとって観光交通の主要道であるので、未改良部の早期拡充と整備をする。

3 一般県道 一般県道は主要地方道に準じて町内の要所を通過し、主要な町内幹線道路であるが未改良区間があり、幅員が狭少で急カーブが多い。又認定路線で拡幅改良のため未供用区間等の新設改良整備を促進する。

4 町道 町道は町民の日常生活と産業振興の基盤として、又地域の環境施設的人格もあり、必要度、依存度も高い。しかし整備状況がおくれている。

5 道路の開発 鹿児島空港——霧島温泉郷を結ぶ最短距離路線、宮ノ城Ⅱ牧園線の整備を促進する。

## 道 路 の 開 発

### (1) 国道整備計画

路 線 名	整 備 カ 所	整 備 内 容
223号線	丸尾地区ほか	2次改良、歩道設置ほか局部改良

### (2) 主要地方道の整備計画

路 線 名	整 備 ケ 所	整 備 内 容	摘 要
小林、えびの高原～牧園 同 上	明礬温泉～林田 林田下～丸尾上	2次改良、舗装 2次改良、舗装	2車線確保 カーブ改良
宮ノ城～牧園 同 上	上芦谷原～七又 役場前～国道迄	2次改良、舗装 歩道設置 同 上	2車線確保 同 上

### (3) 一般県道整備計画

路 線 名	整 備 カ 所	整 備 内 容	摘 要
犬飼～霧島神宮停車場線	全 線	改良、舗装	幅員狭少区間、急カーブの 拡幅、改良舗装
紫尾田～牧園線	〃	〃	道路拡幅改良
豊後迫～隼人線	〃	〃	未供用区間、白崎～小鹿野 間の新設と白崎～皆越間の 新設改良

### 第3章 社 会

#### (4) 町道整備計画

事 業 名	整 備 力 所
市町村道整備事業 万膳線新設改良工事	全線 一期工事 59年度完成
特定交通安全施設等整備事業 自転車歩行者道工事	牧場～市後柄線 55年度完成
交通安全施設整備事業 平面交差点視巨路肩改良工事	交差点改良 寺原～健崎線外3件 視巨改良 寺原～健崎線外11件
辺地道路整備事業 道路改良舗装工事	栗川線外5線
広域市町村圏道路整備事業 道路改良舗装工事	石坂～黒岩線外5件
町単独橋梁整備事業	硫黄谷橋外11件
町単独道路整備事業 道路改良舗装工事	宿窪田線外21件
町単独道路整備事業 道路排水工事	南牧場線外34件

#### 農 道 整 備 状 況

農林課資料(54. 8)

路 線 事 業 名	延 長	舗 装 率
広 域 農 道	13,087m	100%
広 域 関 連 農 道	4,137	100
農地保全シラス対策関連農道	1,148	100
一 般 農 道	70,697	4.03
関 連 農 道 開 拓 整 備 事 業	2,389	100
農 免 道	33,990	100

町道編入分を含む(事業実施済)

#### (四) 農 道

本町の営農基盤の整備は山間、台地に耕地が散在するため、農道整備を最重要点としてすすめられて来た。これは必然的に生活道としての性格も具備し、広域農道と、および関連農道、土地保全シラス対策関連農道整備事業にかかる農道等も整備がなされ次第町道に編入がなされ

ている。その他一般道路についても逐次整備がなされている。農道整備状況は上の通り。

## 二 鉄 道

### (一) 日本鉄道の起源

江戸幕府も終りに近い一八二五年にイギリスではスチ  
ンソンが時速十六キロの汽車を走らせた。



広域農道開通式風景（於小谷）

日本では、それより四十七年もおくれて一八七二年（明治五年）に東京の新橋と横浜間二十九kmの鉄道が布かれた。これが日本鉄道の最初の鉄道である。

その後一八八九年に東海道線が全通し国有鉄道と言われた。

民間資本に依る完全な私設鉄道の功労者は本県出身の五代友厚である。彼は一八八二年（明治十五年）に新橋——日本橋間に東京馬車鉄道株式会社を創立した。これはレールの上を馬車が走るもので、本格的な私鉄は一八八五年暮れに開通した阪堺鉄道である。この鉄道は一八九八年（明治三十五年）に南海鉄道となった。

### (二) 九州の鉄道

明治初年から人力車があった。しかし一八七八年（明治十一年）に二百台に達せず一八九一年にやっと千台を越したという。人力車は近距離輸送の機関であり、さして交通の発達に重要な役割は担うべくはなかった。明治時代になって政府は道路工事にも意を用いたが、一八八一年に国庫からの支給中止となり、土木費は県費でまかなわねばならぬ状態になり道路は昔のまま放置された。しかし一八八六年に渡辺知事が道路五か年計画を県会に

提出して承認された。そこで一八九一年、鹿児島を中心に出水、都城、吉松、枕崎、加世田、鹿屋の各方面に現在のような国道、県道が開通したのである。馬車、荷馬車もこの頃から漸次増えはじめた。一八九四年頃には乗合馬車も百台を越した。しかしこれは定員六名であり、長距離輸送には困難であって、陸上交通はやはり不便であった。そこで鉄道が脚光を浴びたのである。

### (三) 鉄道論議

北九州に鉄道敷設の頃、本県でも鉄道建設が論議された。政府は鹿児島は第二期工事に計画されていたが、これを第一期工事に繰り入れてもらうよう鹿児島市鉄道敷設委員会が設置され、二か年間にわたり委員が上京して第一期工事に繰入れてもらう事に成功、一八九七年から六か年計画で鉄道建設が着工の運びとなった。

(一八九七年は明治三十四年)

いよいよ着工の段になると海岸線にするか、山間線にするかが国会でも論争された。串木野出身の代議士長谷場純孝は海岸線設置を強く主張した。海岸線は山間線に比べて工事も易い上人口も多いとの主張であった。一方人吉の旧藩主相良氏は山間線を強く主張した。

又山間線に近い宮崎県も山間線を主張して、なかなか決定をみなかった。ところがこの論争に軍部が参加した。其の主張するところは、いざ戦争となった場合外国の軍艦が海岸線を攻撃することは容易であるので、国防上から山間線を主張した。この軍部の主張により、もめぬいた論議は終止符が打たれ、我が牧園町を通る線路の設置が決定したのである。

この工事決定に伴い鉄道作業局(運輸省)鹿児島出張所が一八九九年に設置され鹿児島側から、国道磯街道沿いに工事が着工され一九〇三年九月五日に吉松まで開通した。(明治四十年)

牧園駅は観光客の誘致に一役買い霧島西口駅(昭和三十七年一月十五日改名)と改称、現在新しい波に乗って活躍している。

### (四) 霧島西口駅

霧島西口駅は明治四十一年七月十一日鹿児島本線牧園駅と称し貨物専用駅として発足した。当時は霧島国有林の大樹を伐採して万膳水堀の国立製材所に素材のまま輸送して、ここで製品として牧園駅までトロッコで送ったので駅の構内は木材の製品や丸太の大樹が一杯であつ

た。(閑話休題)

牧園町を通過する鉄道敷設は最初の計画では隼人、日当山、妙見温泉郷をつないで町の中心地麓地区を経て横川町に出るルートが考えられていたが、当時の村民が先祖代々の土地を失いたくない、農作物が岡蒸気の振動の爲枯死する、牛馬が驚いて危険であるなどの反対がはげしく用地買収が困難な様相になったので、工事むずかしくしも人里はなれた山間を通るようになったとか古老の話が残っている。人口の多い麓地区、犬飼、安楽、妙見、日当山を避けて山の中を通るようになったのは誠に残念で牧園駅(霧島西口駅)が町の中心を3kmも離れて、横川町境に在ることは町民の不便及び文化経済の発展の爲大きな支障である。

開業の翌年、明治四十二年十一月二十六日旅客営業が開始された。当時の列車回数は貨客混合列車のみで一日わずか二往復であった。其の後年々列車回数も増加し、ループ線で有名な矢岳トンネルを通過して門司、鹿児島間を急行列車が走るようになった。

昭和二年十月十七日当時の川内線が鹿児島本線となったので、現在まで鹿児島本線と呼ばれてきたこの線は肥

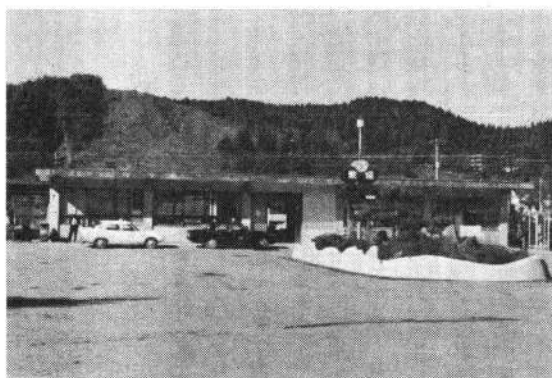
薩線となり、支線の一つとなり急行列車も姿を消した。終戦後は一時、旅客列車も五往復となってしまった。

しかし「観光霧島」の西玄関口として昭和三十七年一月十五日駅名を「霧島西口」と改称、急行も停車し列車の回数も一日、二十三回となりダイヤルが主体となり、鹿児島市まで一時間で走るようになった。

霧島温泉郷は収容力三千人以上となり七階建の偉容を誇る林田温泉をはじめ、霧島ホテル、国際ホテル、プリンスホテル等々十指以上のホテル、旅館が近代化された設備をもっており汽車やバス自家用車などで年間百万人以上の観光客が全国各地から訪れている。しかしこれ等の客は汽車を利用する人は僅少で営業成績は昭和五十三年度の調査によれば、四五六、二五〇人で、昭和四十六年度以降、平均四・二%ずつの減少を見ている。これは自動車の普及と、日豊本線霧島神宮駅に客を取られたのではないか、しかし朝夕の通学、通勤列車は繁雑をきわめている。今は旅客本位の駅である。

次に霧島西口駅の主な記録を抜き出して見る。  
明治四十一年三月 貨物取扱駅

この設置につき鉄道作業局鹿児島出張所長及び当時



の村長森市介氏が運動をなす。敷地は村が提供し作業奉仕をなす。

明治四十一年五月

馬政局軍馬育成の為、駅構内を拡大し敷地を設く。

軍馬駅に指定す。

明治四十一年十月

霧島西口駅

駅の開設  
番地 宿窪田一

駅待合所新  
設 客は扱  
はず 祝賀  
大会

六九番地  
の三

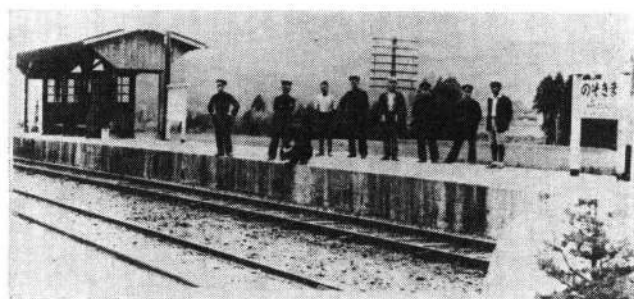
宿舎 右同

明治四十二年十

一月二十六日

一般運輸営業

開始



旧牧園駅

明治四十二年十一月

二十一日 新駅舎

落成

昭和十五年十一月

紀元二千六百年事

業として駅前に公

園を設く。昭和三

十八年現在駅舎完

工す。

昭和三十七年

一月四日 日本国

有鉄道公示第一号

により牧園駅を霧

島西口駅と改称

す。

### 三 バ ス

#### (一) 草わけ時代

県内をバスが初めて走るようになったのは、大正元年で、鹿児島市の今村太平次氏が会社を創設してフオードを鹿児島市と川内間を結び、旅客運送を始めたが旅客も少く道路も悪く会社はつぶれた。

大正七年十月林田熊一氏は熊本から六人乗りのフォードを購入して、十一月から川内、宮ノ城間の三六軒の路線を獲得して営業を始めた。大正八年には新車四台を購入し川内、阿久根間の営業を始め翌大正九年には都城、志布志間へと路線を広げた。昭和五年には鹿児島自動車KKを買収し、鹿児島自動車として鹿児島市内バスの営業を始めた。

#### (二) 昭和初期時代

昭和四年には現在の林田温泉一帯の土地三九万六千㎡を、林田熊一氏が鹿児島在住の地主川井田半左門氏から買いとり（当時の金で七万円）自分で道路の設計にあたり仕事をなし、温泉旅館の建設にかかり一年でこれを

完成しバスの運行をはじめた。昭和九年頃には霧島が国立公園に指定されて観光客も増え道路も整備されバスの運行回数もふえた。

#### (三) 戦時中のバス

昭和十二年日支戦争がはじまり、昭和十四年頃になると、ガソリンが切符制になり車は木炭車と変り燃料不足のため、バスの運行も減少した。霧島、鹿児島間も一日一往復しかなかった。

#### (四) 戦後のバス

昭和二十三年頃より、ようやく戦災復興につれて新しいバスが走るようになり漸次その回数もふえて来た。昭和二十六年頃には川内、宮ノ城方面、また出水、牧園霧島を結ぶ線も走るようになり、次いで水俣、都城線も運行するようになった。昭和二十三年、霧島有料道路の完成により林田、高千穂河原、霧島神宮駅線十六、八軒、昭和三十三年十一月より定期運行が開始された。次いで昭和三十六年、えびの有料道路の完成により鹿児島・霧島・えびのの間が結ばれて小林、宮崎へとバス路線が広がった。

バスは霧島を訪れる観光客の主要な足となって来た

が、マイカーの普及、レンタカー、貸切バスが、とってかわり、定期バスも利用客が少く地方路線補助事業の運用を受けている状況である。

本町は林田産業交通が霧島に営業所を設け、営業路線のほとんどを占めているが、観光地として宮崎交通、南国バスの乗り入れもあり至って便利である。また空港行きバスも運行され、空港線道路の整備がすめば、観光霧島の主要運行線として期待される。また省エネルギー時代となり、今後バスによる大量輸送も見なおされる現状である。各交通会社の路線運行状況は左の通りである。

#### 林田産業交通

霧島	—— 鹿児島市	十一往復
〃	—— 霧島西口駅	十一往復
〃	—— 神宮駅	十往復
〃	—— 鹿児島空港（横川経由）	十二往復
宮崎交通		
霧島	—— 宮崎市	四往復
〃	—— 都城市	四往復
〃	—— 小林市	四往復

〃 —— 丸尾 三往復

#### 南国交通

霧島 —— 鹿児島空港（横川経由） 四往復

其の他町内に於けるバスの運行は

霧島神宮駅 —— 持松 —— 中津川 —— 宿窪田 —— 霧島

西口駅

三体 —— 霧島西口駅

溝辺 —— 横川 —— 万膳 —— 宿窪田

霧島を中心として発着するバスは一日約七〇回往復し、特に空港間の発着回数と乗客増加が観光霧島の発展を占うものとして、注目されるが、近年マイカー観光が多くバス利用は少ない。なお年間乗降客は四〇万人と推定される。（昭和五十四年八月一日現在）

#### 四 鹿児島空港と本町

鹿児島空港開設以来、時代のすう勢に伴い航空便の利用が大衆化し、本町においても遠路の旅行はほとんど飛行機によるようになった。空港の調査によれば昭和五十四年現在では、国内線は三百六十三万六千五百人、国際

線は三万四千八百人の記録を見るようになり、一日の発着便は約百四十回に及ぶ。観光客の入込状況にも多大の影響を及ぼすところで、本町としては空港隣接の観光地として特に関心をもつところで、バスによる入込が多数である。尚飛行機便は現在のところ左の通り。

東京	六便	大阪	六便
名古屋	五便	広島	二便
長崎	二便	沖縄	三便
福岡	十一便	種子島	三便
屋久島	二便	奄美大島	五便
徳之島	一便	沖永部島	一便
与論	一便	岡山	一便

(全日空) (東亜国内航空)

牧園から溝辺空港までは、林田バス、南国交通が直行し、約四十分位で行ける。

## 第二節 通 信

### 一 郵便事業の制度と発達

我が国では明治四年の初に東京と大阪間に通信施設が設けられたことが、初めてであるが、次いで明治五年六月の太政官布告によって、一般諸街道、脇街道とも県庁所在地、港、駅等の公私の要所は毎日、隔日或は必要に応じて日に五六度ずつ往復の郵便を開き、道筋近傍の市町にも夫々往復するように布告した。

本県では明治五年七月先ず鹿児島市内大黒町、篠原次右エ門方に県達令によって初めて郵便取扱所を設け毎月六度郵便を往復することとした。最初のうちは駅通寮の役人が県下を巡回して開通事務に当たったが、郵税は書状目方三双以下一錢、四匁以下二錢、六匁以上三錢であつて、別配達(速達)は二錢の増税となつていた。横川街道の郵便はこの時、県許役所から二、五、八の日(月九回)差立であつたが、同じく二月一日から隔日差立と改められた。

郵便切手売下所は各郷一カ所ずつ設けられた。

## 二 踊郷郵便所創始

七等郵便局取扱役、手島藤太其他五等郵便局詰申付候事但  
 当分の内其自宅以郵便局と相称可申事

明治八年三月二十四日

駅通頭 前島 密圍

七等郵便局取扱役、手島藤太為御手当老ヶ月金四拾錢被下  
 候事。但本文御手当之儀者繰替渡金之内ヨリ引出納計表  
 ニ仕組可差出事、

駅通頭 前島 密

踊郷では当初郵便業創始の際には郵便物の数は極めて少  
 く、そのため五日分位取まとめ、小行のうに入れ棒先に  
 束ねて通送人が走ったものである。其の姿は脚絆、わら  
 ぢ、着物の裾をからげ、棒は肩荷にして小走りする。今  
 のように干の徽章はなく一見して見分けられる姿勢で一  
 時間一里を下らない速度を保ち、浜ノ市郵便局に行つて  
 交換した。後に横川郵便局で隔日に手紙の交換が行わ  
 れ、しばらくして毎日行われるようになった。

明治四十一年牧園駅開通後は鉄道輸送となる。

郵便局がまだ出来ず鉄道輸送のできない頃の通信法。

(イ) 踊郷から鹿児島市に急を要する場合は特に人を派  
 遣する。これを使者、又は飛脚と呼んだ。

(ロ) 江戸へ通信する場合は踊郷の役員に書状を頼み役  
 員が鹿児島へ行く序に持参し江戸薩摩屋敷に頼む。

(ハ) 江戸からの返書は右の逆の順序で本人の手許に届  
 く。これらはすべて公用であつて、例えば江戸詰の  
 守衛、公詰滞在に限ったもので私用は不可能であつ  
 た。江戸への普通行程は約五十日内外で、早飛脚も  
 三十日内外かかった。誠に不便であつた。

## 三 電信・電話の発達

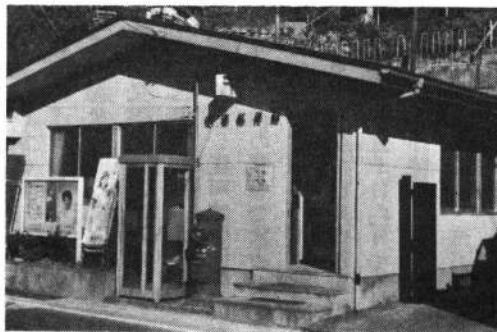
(イ) 電信 安政元年（一八五四）ペリーが二度目、来航  
 の時幕府に電信機を寄贈したのが、わが国に電信機の  
 入った始めでモールズ機が発明されてから十八年目で  
 あつた。安政三年には島津斉彬が藩士に電信機を作ら  
 せて、城内の二の丸と本丸の間に線を引いて実験して  
 いる。明治二年横浜に於いて英人技師によって架線し



牧園郵便局



霧島湯泉郵便局



安楽郵便局

た、横浜灯台役所と横浜裁判所（県庁内）の実験通信から発展して、同年十二月二十五日から、公衆電報も取扱い始めている。明治十年の西南戦争ではその効力が実証されたのである。

鹿児島県では、西南の役がその開通を促進した。

熊本、大口を経て鹿児島市に達したのは明治十年八月であった。それまでは官報のみを取扱っていたが十

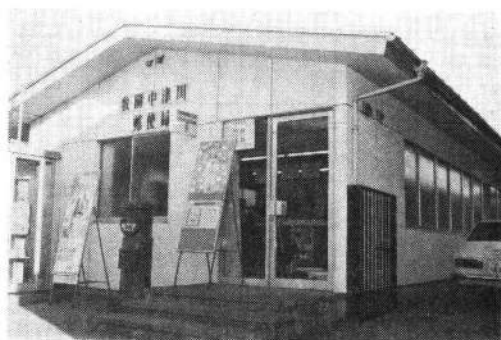
月二十二日から、当時仮県庁のあった加治木電信分局が私線取扱も始めた。

(ロ) 電話 我が国に電話が渡来したのは明治十八年でアメリカのベルが電話を発明した翌年である。当時電話を取扱っていた工部省が研究の結果、明治二十年暮、東京赤坂溜池の工部省と赤坂御所内の宮内省の間に、輸入電信機で通話の実験をしたところ、成功をおさめ

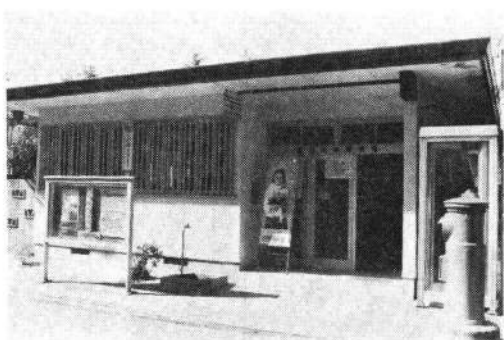
同二十一年一月東京、熱海間、二十一里に往復線を架設し、六月に静岡まで延長した。

電話が個々の家庭に架設されたのは明治二十三年來であった。

電話は最初ハンドルを廻す（磁石式）であったが明治三十六年、京都局が電話機をとりあげるだけで局を呼び出させる「共電式電話機」を採用して、主要都市



牧園中津川郵便局



霧島西口駅前郵便局

はほとんど此の共電式に変えられた。更に大正十五年には交換手のいらぬ「自動式電話機」が東京などに採用され、順次全国に普及された。

我が牧園町に電話が架設されたのは昭和十一年六月の調査で役場、農協、停車場、郵便局、病院、ホテル旅館、一部学校其の他の一部の民間で十一台の僅少であった。昭和四五・六年頃までは麓地区・停車場地区に増設されたが、現在、昭和五十三、四年頃から町内に電話架設が盛に行われ万膳宿窪田高千穂中津川持松に無人式電話交換所が設置され、全国至る所に即時通話が出来ようになり、町内戸数の九五%以上が電話を持っている。昭和五十三年四月の調査によれば町内の電話台数は三、五四七台である。

## (ウ) 町内各郵便局

局名	場所	開 移	転 改	設 築	現 局	在 ま で の 長	取 扱 事 務
牧園郵便局	宿窪田一、三八三	明 明 大	7. 12. 37. 12. 7. 1. 26		松 下 同 山 山 山 山	四郎次 尚吉 代質 安一 雄明 兼明 重明	集 配 郵便貯金 為替小包 簡易保険 電信電話 其他郵便事業
霧島温泉局	高千穂	明 大 昭	35. 11. 2. 1. 25 25. 3. 1		瀬戸口 堀切 堀切 向井	伊平次 清彦 清行 郁男	一般郵便事務 集 配
安楽郵便局	宿窪田四、二五の二	明 同	35. 11. 16 38. 4. 1 昇格		安部 安栖 安久 安久 安久	戸権一 之助 英太 寅郎 敏行	郵便為替 貯金各種 現金受払 無 集 配
霧島西口駅前局	宿窪田	昭 昭	12. 4. 1 14. 2. 1		川西 畦地 松元	袈裟 榮親 榮志	為替貯金 保険年金 無 集 配
中津川郵便局	上中津川三福	昭	21. 8. 1		永田 伊集院 下松	辰三 院正 瀬良	貯金為替 年金電信 無 集 配

## 四 ラジオ・テレビ

ラジオ・テレビの難視聴地域の解消も、県、NHK、

定める、コンターに合致しない点もある。  
テレビの普及は昭和三十八年頃から急速に伸びてい  
る。ラジオはテレビに押されて数少くなつて、テレビの  
補助的な役目になっているがその数量の調査はむずかし

民放、電波管理局等の関係  
機関に要望し情報格差をな  
くするよう努力されてい  
る。また共同施設の推進を  
計りつつあるが、町内には  
無人テレビ中継所が宿窪  
田、下中津川、万膳、霧島  
西口駅前、高千穂の五個所  
に設立されて映像が鮮明に  
うつされている。

航空機騒音、電波障害に  
ついては本町の場合、一部  
エリア内にあるが、航空機  
の大型化、技術の進歩によ  
り騒音は減少する方向であ  
るが航空機騒音防止協会の

いが、カーラジオ等があつて大体テレビと同じ位ではないか。現在テレビの台数は個人用三四〇〇台、公共用一〇〇〇台（ホテルを含む）である。

### 第三節 発電所

#### 一 妙見発電所

##### 沿革 概要

- 1 妙見発電所は大正二年十月鹿児島電気株式会社にて計画

- 2 位 置 牧園町宿窪田四二三三

- 3 発電開始 大正十年五月七日

- 4 認可出力 三六六〇キロワット

- 5 沿 革 大正二年十月六日鹿児島電気株式会社  
社が中津川水利権取得 大正六年五月二十三日、  
天降川水利権取得

大正十年五月七日試運転開始

大正十年九月二十四日正式使用認可

#### 二 塩浸発電所

天降川、石坂川両水系より取水

- 1 発電開始 昭和九年十二月十三日

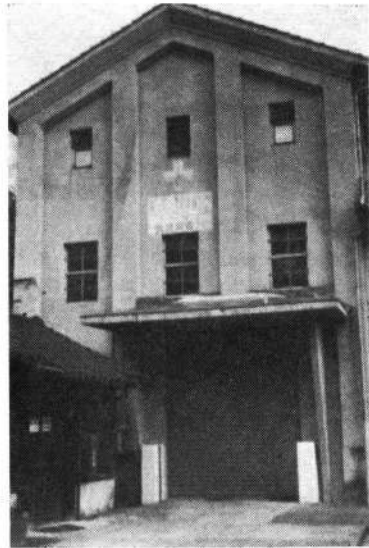
- 2 認可出力 三六八〇キロワット



妙見発電所

### 三 電力現況

塩浸	発電所
妙見	水系
天降川	火力別
水力	最大出力
三六〇	容量
三六〇	KVA
三六〇	電圧
三六〇	電機
三六〇	周波数
三六〇	個数
三六〇	発電量
三六〇	MWH



塩 浸 発 電 所

### 第四節 治安

#### 治安

- 1 牧園町麓駐在所 巡查長一名
- 2 霧島温泉駐在所 巡查 一名（警部派出所）
- 3 霧島西口駅前駐在所 巡查 一名

### 第五節 消防

消防活動は住民の生命財産を災害から守り、安心して生活ができるよう団員が奉仕的に努力している。

本町は国分、隼人、霧島の広域消防組合に加入し、昭和四十八年四月に高千穂区に北消防署が設置され、常備消防署として活動している。

### 第3章 社 会

消防署員の階級別状況（北消防署）

階級 署	司令長	司 令	司令補	士 長	副士長	士	計
北 消 防 署		3	3	7	1	11	25

消防署機械の現有状況（北消防署）

機械 署	ス ケ ノ ー 車	ポンプ車	タンク車	救 急 車	指 令 車	小 ボ ン プ 型
北消防署	1台	1台	1台	1台	1台	1台

牧園町消防団員の階級別配置状況（単位 人）

階級 分団	団 長	副 団 長	分 団 長	副 分 団 長	部 長	班 長	団 員	計	管 轄 区 域
消防団本部	1	2						3	
中央分団			1	1	1	3	19	25	牧園 1.2.3.4.5.6.9.区
駅前分団			1	1	1	3	19	25	牧園 7.8.区
万膳分団			1	1	1	4	18	25	万膳 1.2.3.4.5.区
三体分団			1	1	1	4	18	25	三体 1.2.3.4.区
上中津川分団			1	1	1	3	16	22	中津川 6.7.8.区
下中津川分団			1	1	1	3	16	22	中津川 3.4.5.区
安楽分団			1	1	1	4	16	23	中津川 1.2.区
持松分団			1	1	1	4	21	28	持 松 1.2.3.4.区
高千穂分団			1	1	1	5	25	33	高千穂 1.2.3.4.区

牧園町消防団機械の現有状況

機械 分団	ポンプ自動車	ポンプ付積載車	小型ポンプ	備 考
中央分団	1台		1台	
駅前分団	1台		1台	
万膳分団		2台		
三体分団		1台	1台	
上中津川分団		1台	1台	
下中津川分団		1台	2台	
安楽分団	1台		1台	
持松分団		1台	1台	
高千穂分団	1台		1台	

## 牧園町火災の年度別発生状況

年 度	火 災 件 数				罹 災 棟 数								損 害 額			
	建 物	林 野	車 輻	計	住 家			非 住 家				建 物	林 野	車 輻	計	
					全 焼	半 焼	部分 焼	全 焼	半 焼	部分 焼	計					
49	2	2		4	1					1	2	千円 2,000	46		千円 2,046	
50	5	4	1	10	2		2	1			5	千円 2,652	67	500	千円 6,219	
51	3	2		5	2		1				3	千円 2,950	110		千円 3,060	
52	3			3	1		1	1			3	千円 1,516	—		千円 1,516	
53	2	5		7	1		1				2	千円 950	—		千円 950	



北消防署（高千穂小谷）

## 第六節 厚生

### 一 社会福祉

#### (一) 戦前の社会福祉（福祉なき社会）

明治政府以来国家は先進国に追いつくために、まず富国強兵を最大の目標にして、産業の保護、教育の振興に重点を置き社会福祉のように非生産性のものは、度外視していた。わずか明治七年に恤救福祉制度を設けたが、これはおかみの仁慈によるものにして、労働力のない極度の生活困窮者が一時的に救済される制度で、次いで昭和八年度に制定された救護法も主旨は同じく慈善的制度であり、現在の生活保護法、福祉法など福祉六法の中にある権利として守られたものではない。

第3章 社会  
貧困あるいは疾病、心身障害等により生計を維持できない者は乞食となって各家庭の門口に金品残肴を請い、住む家のない者は神社仏閣の軒下に雨露をしのいでいた。又身心障害者の中には琵琶三絃を弾き、歌舞音曲を催して、金品を乞い、あるいは按摩、鍼灸の施術で生計

をたてる以外にすべはなかった。更にあわれむべきは年のいかない幼少時を歌舞音曲、曲芸などの重労働につかせ、酷使されたものである。福祉優先の現代とは隔世の相違がある。

政府がこのように福祉に冷淡であったので、政府の施策によるものよりも、日赤活動や衛生組合のほか慈善事業或は社会事業のもとに個人や自由団体の手によった実績が著名である。このような政府の方針は終戦まで八十年間もつづけられたので、旧市町村の手になる記録もきわめて少ない。

#### (二) 国民年金

国民年金は厚生年金と並ぶ我が国の二大年金制度として発展している。今や年金なくして老後の生活設計は立てられない程、国民年金に対する期待がもたれている。国民年金は拠出年金と福祉年金の二種類となっており、拠出年金の給付は八種類、福祉年金の給付は四種類となっている。

## (イ) 拠出年金内訳

強制加入者	任意加入者	計	不在被保険者	納付対象者 被保険者
3,567	481	4,048	572	3,476

被保険者 4,048名(昭和54年3月31日現在)

## (ロ) 納付対象者内訳 総数3,476名

法定免除者	申請免除者	所得比例 (任意)	所得比例 (強制)	保険者定額
274	141	206	180	2,675

## (ハ) 拠出年金受給者数及年金額

年度 種類	件数	49年 千円	件数	50年 千円	件数	51年 千円	件数	52年 千円	件数	53年 千円
老齢年金	122	19,283	212	38,266	346	70,849	486	107,410	586	136,793
5年	—	—	183	28,548	209	37,620	205	40,365	206	43,281
通算老齢	—	—	3	103	18	1,434	30	2,749	45	4,128
障害	45	14,698	61	24,366	64	30,195	63	32,490	71	39,046
母子	27	7,643	27	9,328	28	11,477	29	12,923	26	12,346
準母子	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
寡婦	3	177	4	294	2	182	1	101	2	215
遺児	1	279	—	—	—	—	—	—	—	—
死亡一時金	15	239	8	136	17	356	13	305	8	193
合 計	218	42,319	498	101,041	684	152,113	827	196,343	944	236,002

## (ニ) 福祉年金

福祉年金は無拠出制であり現在受給者は総数930名であって受給金額は18,043.2千円で町福祉行政に大きく貢献しているが高齢者の死亡により受給者数は減少している。

## 福祉年金受給者数及び年金額

種別	老齢福祉年金		障害福祉年金		母子福祉年金		合 計	
	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額
49 年	924	千円 766	143	18,617	6	617	1,073	95,875
50 年	858	115,532	173	35,352	5	948	1,036	151,830
51 年	795	120,873	174	39,455	5	1,080	974	161,408
52 年	743	124,741	187	47,160	5	1,194	935	173,095
53 年	734	133,745	200	54,349	5	1,338	939	189,432

### 第3章 社 会

#### (例) 保険の納付状況

区分 年度	印紙による 納 付 額	現 金 に よ る 納 付 額			納 入 額 計
		認定保険料	前納保険料	追納保険料	
	円	円	円	円	円
49年度	36,483,000	3,666,700	4,500	533,800	40,688,000
50年度	50,014,400	18,246,050	353,600	1,564,900	70,178,950
51年度	54,486,800	802,900	0	462,250	55,841,950
52年度	86,146,400	1,746,500	529,720	3,262,950	91,685,570
53年度	109,215,910	5,278,500	0	1,325,400	115,819,810

#### 民生委員

戦前に設けられた方面委員制度は昭和21年に民生委員として出発した牧園町では現在27名が依頼されて生活保護法にもとづいて生活困窮者に対して助成を行い町長の福祉行政に補助的の行為をしている。

#### (例) 母子対策

保健所町医師会助産婦の協力により妊産婦検診3・4ヶ月児検診、1年6ヶ月検診、3才児検診等実施され母子の健全なる育成が行われている。検診の実施状況下記の通り

年度 種別	昭和51年度		昭和52年度		昭和53年度	
	実施者数	実 施 率	実施者数	実 施 率	実施者数	実 施 率
妊 婦 検 診	人 114	% 54.4	人 103	% 53.4	人 142	% 55.3
乳 児 検 診	173	83.2	135	82.3	138	90.8
1年6月検診	—	—	104	89.7	127	85.8
2才児歯科	108	95.0	166	99.1	130	81.8
3才児検診	145	86.2	126	85.1	155	94.5
3・4ヶ月検診	—	—	36	81.8	144	79.1

## (三) 国民健康保険制度

国民保険財政は年々急増する医療費と国庫負担のあり方、給付水準のあり方等の諸問題をほらみ、悪化の道を辿っている。本町の人口流出による過疎化により被保険者は減り罹病率の高い老人層の比率は高まる一方で、過去五か年間を比較して見ると被保険者の老人層は二、一八％の伸び方に対して、医療費は六、八一％と大幅に増加がつづくという現状から国保財政は危機に瀕している。

昭和54年3月31日現在

1	世 帯 数	2,218戸
2	被 保 険 者 数	6,503人
3	医 療 費 総 額	552,418千円
4	保険給付額町負担額	387,320千円
5	受 診 件 数	33,719件
6	保 險 税 課 税 額	115,576千円

被保険者の状況、保険税の賦課状況は上の通りで、保険税の一人額と医療費（町負担）を見ると、納める額よりも三倍以上の医療費を使っていることになる。

## 保 險 税 の 賦 課 状 況

年 度	調 定 額	上 昇 率	世帯割調定額	一人当り調定額
49 年度	48,191,410円	106%	20,961円	6,606円
50    "	57,611,600	119	25,537	8,279
51    "	74,796,870	155	33,257	11,020
52    "	93,311,340	193	41,527	14,052
53    "	115,576,140	239	52,108	17,772

1人当り医療費（医療費総額）は昭和49年度を100とすれば53年度は258となり年々急増する医療費の動向がわかる。

## 年 度 別 医 療 費 の 動 向

年 度	総 医 療 費	上 昇 率	一人当医療費	上 昇 率
49 年度	239,610,482円	100%	32,846円	100%
50    "	290,470,882	121	41,746	127
51    "	397,025,914	165	58,497	178
52    "	447,761,740	186	67,433	205
53    "	552,418,247	230	84,948	258

## 被 保 険 者 の 推 移

年 度	人 口	被 保 険 者	適 用 率	世 帯 構 成
49 年度	12,734人	7,295人	57.29%	3.2人
50 "	12,544	6,929	55.24	3.1
51 "	12,486	6,756	54.11	3.0
52 "	12,509	6,640	53.08	3.0
53 "	12,480	6,503	52.11	2.9

人口は4月1日住民基本台帳人口

53年度は総人口12,480人に対する国保の被保険者の占める割合は52.11%であるが総人口のうち70才以上の（老人医療受給者65才以上のねたきり老人を含む）の者については国保加入率を見ると74.55%を占めている。このように高齢者が多いことは国保適用者の著しい特色である。また老人の療養諸費総額は全体の46.67%を占めており、罹病率の高さを示している。

#### (四) 老人対策

老人が永年培って来た豊かな知識と熟練した技能をクラブ活動を通じて社会に奉仕することによって、生きがいを感じ社会参加の機会を満足させている。現在会員数九一三人、クラブ数二十一（昭和五十四年四月一日現在）である。左に種々な活動を挙げてみる。

##### (1) 老人作品展即売会

町内各校区作業所に於て制作された製品を郡県の展示即売会に出品して好評を博している。又町民祭やその他機会を利用して販売の促進を図っている。

##### (2) 老人スポーツの振興

老人の健康増進、相互親和のための場として最近グートボールがきわめて盛んで地区運動場が町の協力の下で町内のあちこちに作られている。

老人の自由時間を活用して知能を高めるため高齢者学級が設けられている。

##### (3) 老人家庭奉仕員

老衰や身心の障害のため日常生活に不自由な家庭ならびに独り暮らしの老人のため家庭奉仕員制度が設けられて二十七名の奉仕員が町内の各地を廻っている。

(4) 老人福祉電話

一人暮らしの老人に対して電話を貸与して孤独感を解消し、安否確認を地区住民と関係機関の協力を得ている。現在三十台の電話が設置されている。

(5) その他の福祉事業

町単独の事業として七十歳以上の老人を対象として町営温泉の無料入浴券を発行し、八十歳以上の老人には年金が支給されている。

(6) 低所得家庭の暮らしの安定を計るため、失業老齢病弱者に生活保護制度が設けられている。

(7) 老人福祉バス

老人のため福祉バスが購入されて町内又近隣のクラブとの交流及視察旅行等に便宜を計っている。

(8) 老人福祉センター

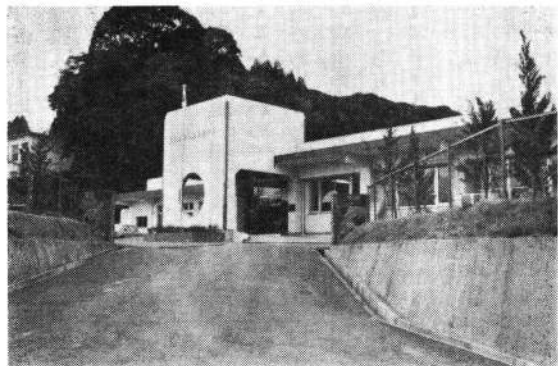
右センターは町内各校区の老人クラブ会長の陳情によって建設された。各会長は左の通り

町連合会長 原田重彦 副会長 池上孝重

牧園校区会長 南郷武吉

高千穂校区会長 田島休一

三体校区会長 中村盛年



老人福祉センター

万膳校区会長 川窪留吉

依って昭和五十年十月二十六日着工し、昭和五十四年三月三十一日竣工、同四月二十八日に、落成祝賀式が挙行された。

施設

場所 牧園町宿窪田七九一番地ノ一

敷地面積 四、三八七、四六<sup>m</sup><sub>2</sub>

建物面積 五九三、一五五<sup>m</sup><sub>2</sub>

構造 鉄筋コンクリート平家建

内容

集会室、健康相談室、会議室、調理実習室、機能  
快復訓練室、浴場二、運動場、温泉は、六二度の  
お湯が湧出する。

### (五) 牧園町老人クラブ沿革

牧園町各校区長寿会結成

長寿会結成の世話人

牧園町社会福祉協議会 会長 原田重彦

牧園町福祉課 主事 前田五一

牧園町各校区長寿会結成

昭和三十七年四月 始良郡社会福祉協議会連合会長

並びに始良福祉事務所長より各町村において長寿会  
を結成するよう通達あり。

右の結果各校区協議の結果役員が選出された。

昭和三十七年十一月十日

万膳校区 会長 西長吉 副 池田兼盛 田島辰二

昭和三十七年十二月十日

中津川校区会長 川西畠助 副 下原勇助 安楽金次郎

昭和三十九年九月八日

持松校区 会長 小原武彦 副 小原重行

昭和三十九年十一月十四日

高千穂校区会長 西村榮吉 副 崎山清志

昭和三十九年十月二十六日

牧園校区 会長 山口亀吉

昭和三十九年十二月十九日

三体校区 会長 原田重之 副 川野義行 三宅シゲ

右の通り役員が選出されたので、連合会を作りその役  
員に左の人々が選出されて、本格的な活動をすすめるこ  
とになった。

牧園町連合長寿会結成 昭和四十年四月

初代会長 山口亀吉

二代会長 平原市次郎

三代会長 原田重彦 副 池上孝重

四代会長 池上孝重 副 南郷武吉

昭和三十八年老人福祉法が施行され老人の自主的な老  
人クラブが生れた。政府の提唱牧園町福祉協議会、民生  
委員の協力により、クラブ結成の趣旨、運営要領により



老人クラブのゲートボール風景

発足した。本町は昭和四十年結成されて、現在単位クラ

ブが二十二団体で、会員は男子三八四名、女子五七一名計七五五名が登録されて、運営計画をたて教養の向上健康の増進及びレクリエーション、他の地域との交流等総合的に活動している。

#### (六) 医療機関

牧園町内にある医療機関は左のとおりである。

病 院	2
診 療 所(医院)	4
歯 科 医 院	2
助 産 所	4
薬 品 販 売 業	6
看 護 婦	20
はり・灸・あんま	14

#### (七) 特殊医療施設

(一) 特別養護老人ホーム

霧島青寿園(社会福祉法人桃蹊会)

所 始良郡牧園町三休堂佐木段二〇〇三

目 場 的 六十五歳以上で身体上、又は精神上著しい欠

陥があるため常時介護を必要とし、かつ居宅に

於てもこれを受けることが困難な者又は寝たき

施設の概要

り老人が、対象でこれの自立更生の意欲を起こさせることを目的としている。

名 称 特別老人ホーム 霧島青寿園  
開 園 昭和五十三年四月一日  
設置主体 社会福祉法人桃蹊会



青 寿 園

開設者 理事長 古江増蔵  
施設長 園長 中島アキ  
施設敷地 一〇、八九〇 $m^2$   
建物 一、四三七 $m^2$

収容人員 五十五名  
鉄筋コンクリート平家建

設備内容

- (イ) 全館冷暖房
- (ロ) 全館ナースコール及び放送設備
- (ハ) 特別浴槽及び機能回復訓練設備
- (ニ) 各室テレビ設備
- (ホ) 非常災害対策設備
- (ヘ) 各室水洗便所設備

環境 牧園町牧場台地の一部を領し温源泉を利用、

南方に錦江湾を望み東北に霧島連山を仰ぐ風光絶佳の地にある。

入所の手続

民生委員、市町村役場又は福祉事務所に相談する。

入所中の経費

本人及び扶養義務者の所得によって全額公費負担、

あるいは一部負担がある。この決定は福祉事務所が行う。

現在在園者

定員五十五名 在園者 五十五名

平均年齢 七十八、九歳

	60 代	70 代	80 代	90 代	合 計
男	4	7	8	0	19
女	3	15	14	4	36
計	7	22	22	4	55

市 町 村 別

市 町 名	男	女	計	町 名	男	女	計
大 国	3	1	4	菱 始	0	2	2
口 分	2	7	9	刈 良	2	2	4
市 市	3	0	3	山 山	1	0	1
治 木	1	4	5	生 生	0	1	1
加 牟	0	0	0	辺 町	1	2	3
牟 吉	0	0	0	霧 島	1	0	1
栗 野	3	6	9	牧 園	2	11	13
横 川							
男 19		女 36		計 55			

## (二) 身体障害者療護施設

霧島青葉園 社会福祉法人桃蹊会

理事長 古江増蔵

場 所 始良郡牧園町高千穂三六一七番地

設立の趣旨 社会福祉法人桃蹊会では身体障害者で日常生活を自力で出来ない方々を收容して必要な介護を行うため、身体障害者療護施設霧島青葉園を設立した。入所される身体障害者はもとより、その家族に福祉をもたらすと共に社会福祉の灯を掲げ、地域に明るさを捧げたいとの念願により設立した。

所 開 園 昭和五十年五月一日

在 園 牧園町牧場の一部を領し温泉源を利用し、南方に錦江湾を望み東北に霧島連山を仰ぐ風光絶佳の地にある。

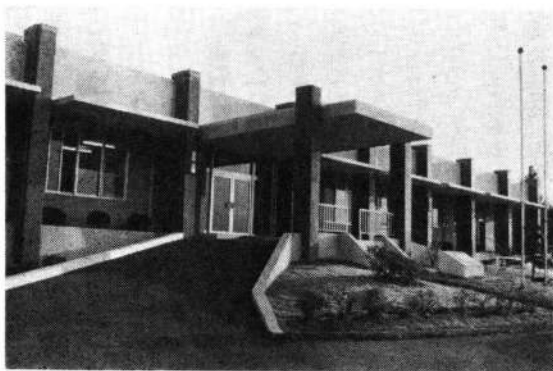
施設の規模

敷地面積 五、六一一 $m^2$

建物面積 一、五四八、八九 $m^2$

構 造 鉄筋コンクリート平家建

設 備 全館冷暖房完備



青 葉 園

その他収容者の健康管理に必要な設備を有している。

収容人員 五十名  
職員数 三十三名

園長 一 事務長 一  
医師 一 看護婦 二 指導員 一  
介護員 五 寮母 一六 栄養士 一

障害別入所者（昭和54年度）

区 分 害 別	男	女	計
脳性小児マヒ	10	8	18
セキ髄小児マヒ	1	1	2
脳卒中後遺症	4	6	10
関節リウマチ	3	6	9
筋ジストロフィ	1	1	2
脳膜炎後遺症	2	1	3
セキ髄損症	1	0	1
セキ髄シュヨウ	1	0	1
遺伝性運動失調症	0	2	2
外傷性セキ髄マヒ	1	0	1
其 の 他	2	4	6

介 護 状 況 別

全介護 (訴え) ない	全介護 (訴える)	一部介護 (身処 辺理)	身 辺 処 理 可	介護全 く要し ない
10	21	22	2	0

入所基準 十八歳以上の身体障害者（一、二級）で常時介護を必要とする者を長期にわたって収容療護する。

入所手続 近くの民生委員、役場に相談し所定の申請書に必要事項を記入の上管轄福祉事務所に提出する。

入所費用 給食費がある程度必要であるが、生活保護世帯に適用される。

調理員 四 事務員 一

帯又はこれに準ずるものは、福祉事務所による食費免除の認定を受けたものは無料となる。

## (N) 癌に就いて

(南日本新聞、昭和五十五年九月)

ガンが脳卒中に代って日本人の死因のトップになろうとしている。高齢化社会や医療の進歩で、他の病気の死亡がグット減ったのに反映して一九八〇年代は「ガンの時代の幕開け」と、指摘する専門家もいる。

ここ数年ガンで倒れる有名人が急に増えている。ガンは今年から(一九八〇年)遅くとも来年中には、日本人の死亡率のトップになるという。日本人がどんな病気で死んだか、一九〇〇年以来厚生省の人口動態統計によれば、ガンで死ぬ人は過去三十年間に二、四倍の約十五万六千四百人で年に五、六千人ずつ死者が増えていると、統計情報部の担当者という。それに引き換えて死因のトップにある脳卒中は年々減る一方である。

「今年中にはガンの死因が第一になるのは確実」と、愛知県ガンセンターの富永疫学部長も発表している。

「ガンの死亡率は本当に増えているのであろうか。老人が増えた分が、ガンが増えたように見えるだけ、死亡率

は実際は横バイ、乃至漸減傾向です。」と、前記富永部長の話、ガンの死亡者の三分の二以上は六十歳以上で、ガン死亡率は四十歳代に比べて十倍に達しているとのこと。一方総人口は二十一年間に十三倍、六十五歳以上の人口は一・五倍に増えている。これで昔よりガンの死亡率が増えたと単純には言えない。国立ガンセンターの平山部長も同じように(男女とも減少傾向、とりわけ女性の減り方は著しいとのこと)。

## (1) 胃 ガン

世界一の発生率と恐れられてきた日本の胃ガンが、治る病気になろうとしている。年七、八万人の患者が発生し、毎年ガン全体の死亡者の約三割に当る五万人が死亡している。だが二十五年前と現在と比べると胃ガンの死亡者数は、胃ガンの多発年齢の四十〜六十九歳で既に半減している。「どんな手術も薬も早期発見には及びません。要するにガン退治のポイントは、より早く見つけて取り除くことです。」(渕上癌研病院検診センター所長)

## 食生活の変化で減少

胃ガン死亡率を減らしたのは、日本人の食生活が主

因です。日本人の胃袋がすっかり変っている。最近三十年間の食生活の変化、特に電気冷蔵庫の普及で塩分の強い干物、つけものなどが減り牛乳、卵、緑黄色野菜の食べ方が急増したことによる。(平山国立ガンセンター)受診者を増やすため、四十歳以上の人特に男性に最低五年に一度は検診を受けるよう、市町村や保健所から手紙を出したり、胃検診手帳を持たせるなどを提唱している。

## (2) 肺 ガン

昭和三十年に、二千七百人だった肺ガンが昭和五十四年には一万九千人の七倍にはね上った。肺ガンも他のガンと同じように、初期の段階に自覚症状が乏しい。しかも自覚症状があつてから病院に行つても手遅れの場合が多い。自覚症状があつて肺ガンと診断された人は、全体の七十五%にも上っている。

目下のところ四十歳以上の男性だけで一日に煙草を二十本以上吸う人で一、四〇〇人の中、八人が肺ガンで吸わないに越したことはないが、五十歳以上になつたら是非禁煙することである。(池田国立ガンセンター)肺ガンのガン年齢は六十歳代、早く見つけて切開

すれば八十%、九十%は治る。肺ガン対策は禁煙と、開業医による地域ごとの早期発見体制の確立にある。

## (3) 肝 臓 ガン

発見しにくくて死亡率が高い。胃ガン肺ガンに次ぐ。一万三千五十人(昭和五十三年厚生省発表)。現在症状が出た時は手遅れであるとのこと。肝硬変から肝臓ガンになる率は八十%であるので、肝硬変にならぬようにする事が先決である。そのため慢性肝炎になったら、徹底的に治療して、過労やアルコールを慎むべきである。

## (4) 子 宮 ガン 乳 ガン

子宮ガンは年間一万五千人(死者五千人)乳ガンは一万一人(死者四千人)ともに閉経期に発生する。これは早期診断が容易である上、ガンの進行がおそく症状が出てからでも手術ができる。放射線や化学療法もよく効く。子宮ガンは集団検診や栄養の向上によって、七割方死亡率が減っているのに対し、乳ガンは患者の増加によって死亡率は五割増になっている。

(5) 患者増加の原因は、肉食、脂肪食、肥満型に多い。ガン予防対策

河内博士（国立ガンセンター副所長）は発ガン予防の対策を発表している。

- (イ) 偏食せずバランスのとれた栄養をとる。
- (ロ) 同一食品を繰り返し食べない。
- (ハ) 適量のビタミンをとり繊維質を多くとる。
- (ニ) 塩辛い物を多く食べない。
- (ホ) ひどく焦げたものは避ける。

以上大半が食生活と関連している。

右に就き同センター平山博士は、

- (1) 毎食、塩辛いつけ物を食べ熱いお茶を飲む人に胃ガンが多く、牛乳・卵をよく食べる人に胃ガンは少ない。

- (2) 毎日、肉や脂肪を多食する人に乳ガン、スイ臓ガン、大腸ガンが多い。

- (3) 加工食品を好み繊維品をとらない人に大腸ガン多し。

- (4) 毎日緑黄野菜を食べる人に肝ガンが少い。

「ガンにならなくなかったら、たばこはやめなさい。」肺ガンの権威平山博士（国立ガンセンター部長）はいう。喫煙者は非喫煙者の死亡率の二倍〜十倍、肺ガ

ン、食道ガン、コウ頭ガン、イン頭ガン、胃ガン、スイ臓ガン、肝ガン、ボウコウガンなど喫煙量が多い程危険率が高い。さらに喫煙と飲酒が重複すると食道ガン、肝臓ガンが、喫煙と高脂肪食が重複するとスイ臓ガンの危険性が高くなる。たばこを止められない人は、年一回は必ず検診を受けるべきと池田博士。

#### (6) 危険信号

- (1) 食欲がなく胃の工合が悪い時は胃ガン。
  - (2) セキが続いて血タンが出る時は肺ガン。
  - (3) 乳房にしこりがあったら乳ガン。
  - (4) おりものや不正出血があったら子宮ガン。
- 少しでもこうした症状があったら専門医の検診を決め手は早期発見にある。
- たばこは諸悪の根元。

#### 九 交通安全対策

今日の車社会は日常生活にとっても必要不可欠のものとなり、生活圏の広域化に伴い目ざましく発展し、主要道路は勿論生活道においても従来の道路整備では、これに追従出来ないような状態になっている。

本町は観光地として交通量が増加し、従って事故も頻

発し、年々増加している。交通安全対策については、昭和四十五年交通対策基本法が設立され、本町も昭和四十五年十二月、交通安全町民会議、企画員等が組織化され、交通安全施設の整備強化、安全教育の徹底等交通安全対策の総合的かつ計画的な推進をはかりつつある。

そのため生活道路網の開拓をすすめると共に正しい交通ルールと、交通道德の普及向上をはかり安全施設の拡充整備を行い交通安全の充実を期している。

県の交通事故の内容を検討すると、幼児と行動力の鈍い老人に死亡者が多い。車の直前、直後の横断、飛び出しは最も危険である。

今後は交通事故に対する対策は左の通り予定してある。

- 1 交通安全思想の普及教育
  - 2 交通指導員の設置
  - 3 交通安全教育器材類の整備
  - 4 広報活動の充実
  - 5 道路交通環境の整備
- (+) 防犯体制の充実
- (1) 犯罪のない町づくり

昭和五十三年度横川警察署に検挙された刑法犯の人員は百十四人で、うち四十三人が少年であり、その他不良行為で補導された少年は横川町三十名、栗野町二十七名、吉松町十六名、牧園町八十名であり、これらは将来非行化に発展する要素があり注目しに価する。又本町に於ても年々産業経済などの問題が急テンポで変化し、これら都市化現象の進展に伴って、更に各種の犯罪が発生することが予想されるので、これらの犯罪を防止し、明るい町づくりを強力に推進する予定が立てられている。

## (2) 防犯活動のすすめ方

- (イ) 実践的防犯活動の組織を確立し、職域団体等の防犯組織の結成を促進するとともに、各部落民の防犯組織加入を促し地域連帯感の結成をはかる。
- (ロ) 関係機関や学校との緊密な連絡をはかり、地域ぐるみで「愛のひとこえ運動」を推進し少年の非行防止活動を強化する。
- (ハ) 青少年をとりまく有害環境の浄化を計る。  
業者等の自粛気運をもちあげ、シンナーポイントの乱用、不良青少年の溜り場等の発見、通報を励行し、有害環境診断の実施と、愛のパトロールを促進

## 車 台 数 の 増 加

	全 国	県 内
昭和51年	30,903,111 <sup>台</sup>	674,306 <sup>台</sup>
〃 52年	32,853,106	723,149
〃 53年	35,000,224	784,425

## 横川警察署管内では

	吉 松	栗 野	横 川	牧 園
免許人口	1,746人	3,385人	2,058人	3,714人
車 台 数	2,385台	4,676台	2,773台	5,566台

急激に増加している免許人口の伸び率をみると男性の3.5%に対し女性が13%となっている。女性のドライバーが増加し、今や車は生活必需品となり、車の台数も一家に2—3台はめずらしくない。

## 県 内 の 交 通 事 故

年 度	件 数	死 者	傷 者
昭和47年度	10,120 <sup>件</sup>	254 <sup>人</sup>	13,237 <sup>人</sup>
〃 51年度	7,052	171	9,155
〃 52年度	6,595	146	8,437
〃 53年度	7,007	150	9,819

## 横 川 警 察 署 管 内

	件 数			死 者			傷 者		
	51年	52年	53年	51年	52年	53年	51年	52年	53年
吉 松	16 <sup>件</sup>	7 <sup>件</sup>	13 <sup>件</sup>	0 <sup>人</sup>	0 <sup>人</sup>	1 <sup>人</sup>	19 <sup>人</sup>	11 <sup>人</sup>	15 <sup>人</sup>
栗 野	35	119	28	1	0	2	50	30	32
横 川	23	14	25	1	1	0	35	15	34
牧 園	41	34	37	1	1	0	58	55	53

する。

(二) 自主防犯体制の強化と、戸締り、鍵掛け運動の徹底をはかり、盗犯の予防活動を促進する。

(三) 防犯連絡所の育成指導の強化をはかり、防犯思想

の普及高揚と広報車による街頭活動を随時適切に行い防犯連絡体制を強化する。

以上の各項目が立てられている。

## 二 失業対策事業

失業対策事業の本来の目的は一時的失業者の再就職までの、生活保全であったが、固定職化して相当な財政負担となっている。また一方では高齢化して能力低下はいなめない。このような中で、それ相当の事業効果を上げ

ねばならないが、この反する面を両立させ、加えて病弱高齢者の労務安全管理、衛生の確保等難問多く今後の事業運営は厳しいものがある。このような状況を配慮し、福祉的要素をふまえ作業の簡易、軽業化、業種の開発維持にため比較的軽易な町道の舗装工事と、資材製造、町道の路傍刈払、公園清掃除草等を主事業としている。

(甲) 事業 公共施設清掃 公園清掃 路傍刈払清掃  
(乙) 事業 道路整備事業 資材製造

道路舗装作業は五箇年計画がたてられている。

備考 失対事業は昭和二十五年八月に事業を始めて現在には四十五名が就業している。(S五十五年十二月)

### 三 町の公共施設

#### (一) 農村婦人の家と生活改善センター

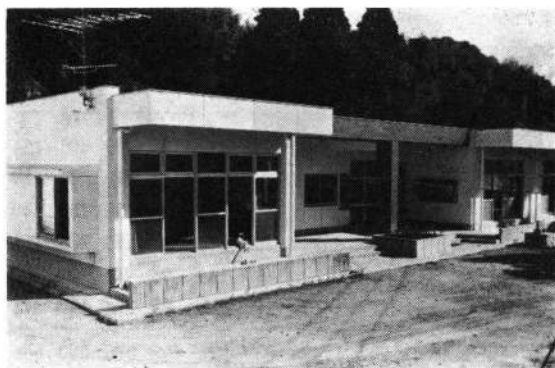
##### A 農村婦人の家

(一) 設置にあたって

霧島の山ふとところにいだかれた、観光と農業の町牧園

町は「若者に夢を、おとしよりに希望を、ご婦人に豊かさを」をモットーに公民館活動を住民運動の主体におき、昔のよさを取りもどし、地域の連帯意識の高揚をめざし、手づくりのふるさとづくりを実現しようとしています。

そのため、昭和五十三年度に万膳地区に農村婦人の家を建設し、軽視さ



農村婦人の家（万膳）

れがちな農村の健康管理、みそ、しょうゆなど手づくりの味をつくる農産加工、毛布、こたつふとんの洗濯など健康で豊かな農村婦人をつくる研修の場として利用していただきます。いと存じます。

今後、この施設の活用で農村婦人

の向上をはかり、健康で明るい村づくりに、一段の努力をはらっていただきたいと考えておりますので、皆様の御指導、御鞭撻をお願い申し上げます。

昭和五十四年五月

牧園町長 今別府 望

(二) 施設の概要

位 置 牧園町万膳七七八番地  
敷地面積 一、一〇三 $m^2$   
建築構造 鉄筋コンクリート、平屋建  
建築面積 三二八、五八五 $m^2$   
工 期 着工 昭和五十三年十一月十三日  
完成 昭和五十四年三月三十日

内 容

(イ) 調理実習室兼食品加工室

調理の学習、大量炊事ができます

大型の圧力鍋 回転釜 蒸し器

フィニッシャー(大型ジュース)

醗酵器など多くの機械を備え各種食品加工

(みそ、しょうゆ、びん詰、節句菓子、缶詰そ

の他)が短時間で大量にできます。

婦 人 の 家 利 用 度 (54年度)

区 別 \ 月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	55年 1	2	3
共 同 学 習	人 15	人 171	人 59	人 277	人 205	人 464	人 135	人 34	人 125	人 339	人 191	人 164
健康管理対策室	—	25	37	79	103	84	56	48	113	19	44	34
健康増進管理室	140	104	172	516	377	742	245	236	303	250	196	243
農産加工室	83	121	73	172	166	211	130	143	56	186	235	161
共同洗濯室	16	51	72	92	89	100	97	114	98	18	42	12
祝 祭	6	172	152	315	172	164	170	356	98	173	182	342
合 計	260	644	605	1,451	1,062	1,495	833	928	899	985	890	956

(ロ) 健康増進室

二 十八畳の和室で す。ゆつくりくつろいだり雑談もできます。

(ハ) 健康管理室

健康のバロメーターをはかる、いろいろな機械を備えいつでも来て、はかることができます。保健婦も来て健康相談などもできます。

(ニ) 共同洗濯室

大型の洗濯機、脱水機、乾燥機を備え、家庭で洗えない大きなもの(毛布、こたつふとん

等）洗濯が楽にできます。

(ハ) 共同学習室 机とイスが入り七十人収容できます。会議や学習会に利用できます。

この施設の利用者は（日曜、祝日は休み）町内は勿論郡内郡外からも来られて、一人の職員ではさばききれない程である。前頁に昭和五十四年度の利用状況を表示する。

## B 生活改善センター

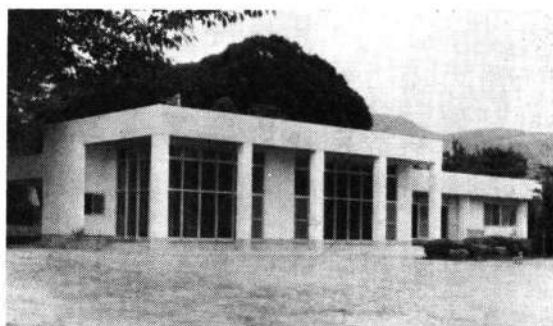
場所 牧園町三体堂 三体小学校隣り

地域コミュニティ活動の拠点、牧園町生活改善センターが三体小学校の隣りに完成した。

地域の人々のコミュニティ（共同）活動や研修などの場にしようと町が、昭和五十四年十一月から工事を急いでいたが、昭和五十五年七月十二日に落成式祝賀会を開いた。

建物は鉄筋コンクリート平屋建て四四〇平方米、総事業費四、九八四万二千元（県費一、一四九万円）となっている。

内部には健康増進管理室、共同学習室、農産物加工、調理室、洗濯室などがあり、特に健康管理室にはトレー



生活改善センター（三体堂）

ニング等各種機器が備わっていて健康増進に利用できるほか、調理教室が開かれたり、ミソ作りやジュース作り、大きな物（毛布など）の洗濯に利用できる。又各種研修や集会などに幅広く利用され、地域の人々の連帯意識を強めることなどに大きく役立つものと思われる。

なお同センターの使用料は直接同センターに問い合わせること。電話（六の一四四一）

## (ニ) 持松校区公民館

持松校区公民館は、校区の中央地区にあたる扇迫枝に建設中であつたが、この程竣工し、いよいよ五十六年度から校区民に開放することになった。

。総工費 四、八一五万円

。総面積 三四五、四九 $m^2$ の鉄骨コンクリート平屋建

。内容施設

研修室 九六・〇 $m^2$  会議室 四一・六一 $m^2$

調理加工室 五六・八 $m^2$  洗濯室 二二・八 $m^2$

図書室 二四・〇 $m^2$  事務室 一〇・〇 $m^2$

その他、

ボイラー

室、玄関、

倉庫、ト

イレ等で

ある。

内容施設

は、万膳の婦

人の家や、三

体の生活改善

センターと大

体同じで、ミ

ソ・菓子つく

りの加工機械



持松校区公民館

や、料理講習のできる広い調理加工室。毛布その他の

洗濯のできる最新式の洗濯機が備えつけられている洗

濯室。それに図書室等が設けられており、特に、持松

校区婦人にとっては最大の喜びであり、今後この公民

館を中心にして、校区民一体となり明るい村づくり

に、大いに利用、活用されることであろう。

### (三) 火葬場

昭和五十四年八月伊佐北始良火葬場管理組合加入によ

り、住民の不安が解消された。新たに完成した「ひしか

り苑」は、近代設備を誇るもので広域市町村圏域の一体

的、効果的な運営のありかたとして注目されるところ

で、従来の不安定な他力依存から主体制を確立し、民心

の安定をはかったことに大きな意義があり、現在の人口

規模では、恒久的処理能力の施設である。

### (四) 北始良清掃センター

(年金積立還元融資施設)

所在地 牧園町万膳五八一の二二

(電話 六の九二五六)

管理者 牧園町 栗野町 横川町

北始良清掃センターの完成に当り

管理者 牧園町長 今別府 望

近年経済の進展と共に家庭生活も向上し大量消費時代を迎え、それに伴って排出されるゴミは益々増大し質的にも多様化し、地方自治体共通の悩みとなっておりま  
す。私達の始良郡北部地域も例外でなく、これまで牧園町では霧島温泉街の近くに一日処理能力、六七の焼却炉を持っていましたが、老朽化と移転問題、それに観光客の伸びで年々ゴミの量が増えつづけてまいりました。自然投棄に問題を抱えていた栗野町、横川町もよりよい生活環境を確保する必要性から三つの町が協議をすすめ、広域ゴミ処理場として建設を急いでいたものです。本ここに完成を見ました清掃センターは立地等の条件に恵まれた中に現代技術の粋を結集したもので、将来増設が可能なる余裕も配しており、これを契機に三町の清掃行政は大きく前進すると確信します。

この快挙が環境装置工業(株)の真剣な研究の成果と関係官庁の適切な指導と、そして地元関係者の暖かいご理解とご協力の結実であることを想いますとき、衷心から感謝の念を禁じ得ないのであります。

昭和五十三年二月

北始良清掃センター事務組合

管理者 今別府 望

(横川町は昭和五十四年七月二十二日加入)

施設町の人口 牧園町 一一、八五三人

栗野町 九、三八一人

横川町 六、五五四人

施設の建坪 管理棟 九一 $m^2$  工場 七三三 $m^2$

車庫 七一 $m^2$

職員 六人 内事務二 現場四

施設概要

所在地 牧園町万膳五八一の一・二

敷地面積 七、〇〇〇 $m^2$

工事着工 昭和五十二年一月

工事竣工 昭和五十二年十二月

処理の方法

(1) 搬入——供給

収集車で搬入されたゴミは、トラックスケールで計量されて貯塵ビットに貯留されたのち、クレーンで投入ホッパーに供給されます。貯塵ビットの扉は、油圧で急速開閉ができます。

(2) 乾燥——燃焼

投入ホッパー下部の給塵ブラッシュより、扇形ストーカ上に一定量が自動的に送りこまれます。扇形ストーカは、ゴミのほぐし、かくはんに効果的でストーカ下部よりの予熱高温空氣と併せて良好な乾燥、燃焼が行われます。炉形は逆炎方式で、輻射・接触・乾燥が促進されます。扇形ストーカは全国に八〇数ヶ所の実績を持ち、燃える、その効果は定評があります。

(3) 灰——ダストの処理

焼却後の灰は、灰出傾斜コンベヤにより、灰パンカに一時溜められた後、埋立地に搬出されます。集塵装置で捕集されたダストは、乾式ダストコンベヤにより灰パンカに送られます。

(4) 送風——煙の処理

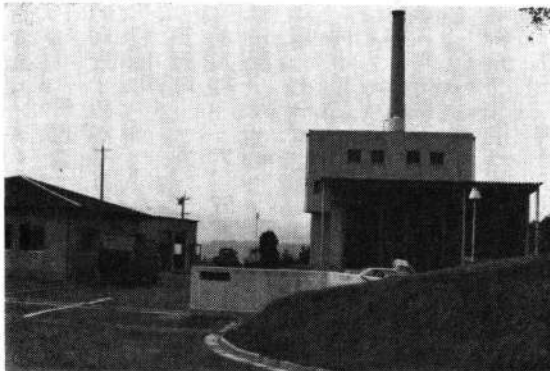
燃焼用の空氣は空氣予熱器により、高温としストーカ下から、炉内に送風されます。一方燃焼排ガスは減温装置により温度を調節されたのち、マルチサイクロン集塵装置で含塵量規制値以下にして煙突より排出されます。

(5) 余熱利用

余熱利用装置（空氣予熱器、温水熱交換器）はともに、ユニット形式で炉ごとに設置してあります。空氣予熱器は、燃焼に必要な空氣を排ガスを利用して高温にする装置でストーカ下から炉内に送って高温燃焼を促進させます。温水熱交換器により取り出される温水は管理棟に送り浴場等に利用しています。

(6) 汚水の処理

プラント  
汚水は中和  
凝集・沈澱・  
汙過したの  
ち、減温水  
（冷却用）  
として再循



北始良清掃センター（万膳）

環利用し、場外への排水はありません。沈澱した汚泥は脱水機で処理して灰パンカに送られます。貯塵ビット汚水は汙過装置を経て焼却炉内で噴霧蒸発させます。

(7) 不燃物の処理

搬入された不燃物ゴミのうち金属類は、吊下げ磁選装置で自動選別され、成形圧縮機により自動的にプレスされます。ガラス類は破砕機により粉碎されコンベヤにより灰パンカに送られます。

(8) 一日の処理能力

可燃物は二十二まで不燃物は七も位処理されます。

(五) し尿処理場

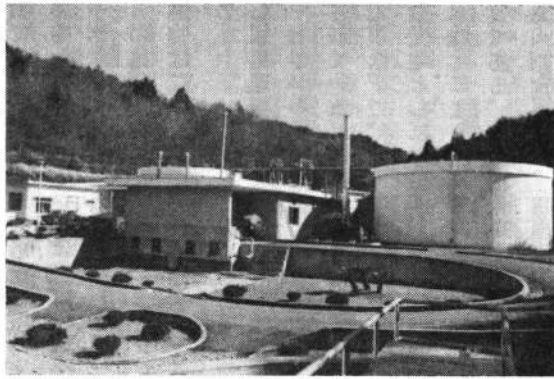
昭和四十七年から牧園・横川両町衛生管理組合処理施設で処理されているが、投入量は衛生思想の普及と農家の土地還元率低下で、増加の傾向にある。

しかし観光地としての旅館、ホテルの浄化槽完備と個人住宅の水洗化により増加傾向とはいえ現在処理能力の五二％程度である。浄化槽人口と施設の増加に依り浄化槽汚泥の混入割合が多く、処理能力の低下が懸念され

最近3ケ年間の処理場における処理実績

町	牧 園 町			横 川 町			計		
年	51年	52年	53年	51年	52年	53年	51年	52年	53年
1 月	台 65	台 77	台 83	台 32	台 40	台 42	台 97	台 117	台 125
2 "	81	63	93	28	31	47	109	94	140
3 "	74	62	82	36	35	45	110	97	127
4 "	70	65	100	31	43	51	101	108	151
5 "	82	81	86	31	36	32	113	117	118
6 "	91	85	108	41	42	49	132	127	157
7 "	84	90	94	51	64	59	135	154	153
8 "	89	92	93	28	44	47	117	136	140
9 "	88	103	84	31	46	50	119	149	134
10 "	78	91	87	38	40	45	116	131	132
11 "	70	79	89	30	47	39	100	126	128
12 "	95	103	95	55	48	40	150	151	135
計	967	991	1,094	432	516	546	1,399	1,507	1,640
1日平均処理場の処理台数(2t車換算)							4.5	4.8	5.2

る。汚泥処理は三〇%混入以外は埋立処理しているが、地下浸透、生活環境保全からも問題があり、新たな浄化槽汚泥処理施設の併設が必要である。また錦江湾ブルー計画による排出規準率の強化に依って、下流公共用水域の浄化をはかるため高度処理（三次処理）施設を設置し、より住みよい生活環境の保全をはかる。



し尿処理場（宿窪田）

牧 園 町 公 共 施 設 図



## 第七節 保 育 所

児童福祉法により保育に欠ける児童（両親共働き、母親病氣など）を入所させ、児童を親に代って保護養育することを目的としている。

### 保育所の保育方針

園生活を通じてひとり立ち（自ら学びとる自主の芽生えを伸ばす）仲間愛、協調性、忍耐力、根気等を学びとってゆく能力、伸び伸びと遊ばせ、その遊びの中から養い培っていくことを目的としている。

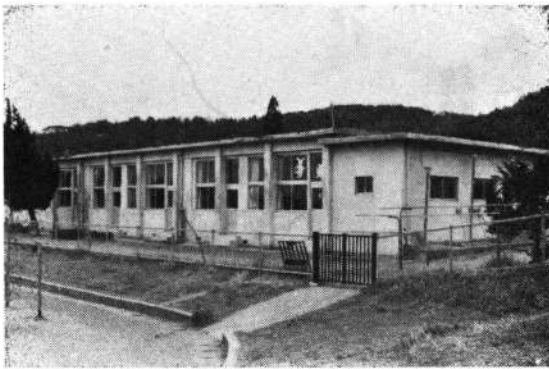
### 保育所に入るには

入所申請書に必要な事項を記入し、お母さんが働いている場合は就労証明書か、内職証明書等、病気の場合は出産証明書、診断書等、病人看護の場合は診断書か、地区民生委員の証明書など必要事項をそえて出すこと。四月入所の場合は、一定の時期と場所を定めて受付を行う。

保育料は、

それぞれの家庭の収入に応じて決められる。例えば生活保護を受けていたり、前年度の町民税が課税されなかった家庭は無料で、前年度の町民税、所得税、固定資産税などのある家庭では、その税額によって保育料が定められる。

### 牧園町の保育所



高 千 穂 保 育 所

### (一) 町立高千穂保

#### 育 所

定員一二〇名

沿革 昭和十八

年九月高千

穂保育園と

して発足

し、事業主

体は種馬所

自彊会で園

長は種馬所

技師、鹿児

島種馬所長

岡井重雄兼

務、職員書記一名（兼務）保母二名、建物は種馬所の施設を使用す。

昭和十九年三月 社会事業法により認可され、四月には常設保育施設により定員三十五名に対し、二十九名保母二名、保育料月一円、保育時間八時間となる。

昭和二十年五月 園長鹿児島種馬所長高柳正男就任

昭和二十一年五月 園長鹿児島種馬牧場長赤塚勝一（兼務）就任、事業主体を鹿児島種馬牧場従業員協同組合とす。

昭和二十三年五月 鹿児島県知事より児童福祉法第七〇条の規定による児童福祉施設として存続認可さる。

昭和二十九年八月 牧園町立高千穂保育所となり、定員五十名となる。

昭和四十一年十一月 定員変更が認可される。

定員六〇名、入所措置児童は、定員の二割は三歳未満児とし、そのうち半数が二歳未満児とする。

現在は園児一二〇名を収容している。（昭55・8）

(二) 町立中津川保育所

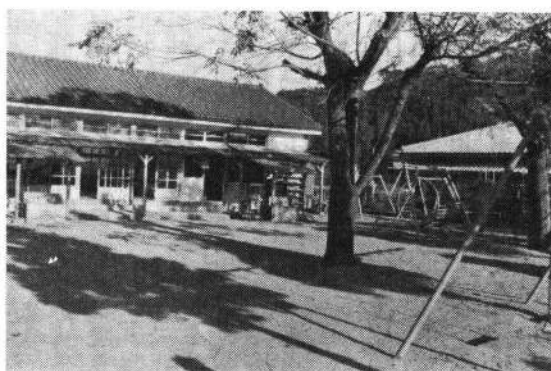
名 称 中津川保育所

施設主体 牧園町

経営主体 牧園町

施設場所 牧園町上中津川

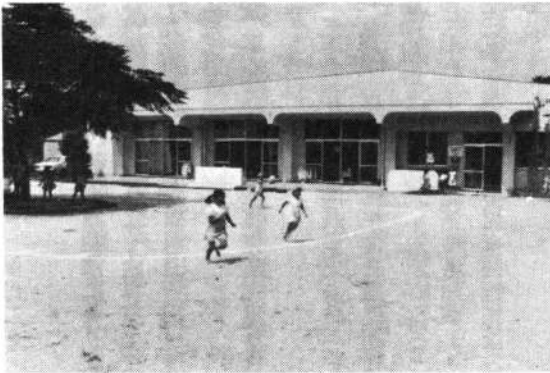
事業開始 昭和四十年四月一日



中津川 保 育 所

運営方法

- 1 定員六〇名 現在四二名
  - 2 保育時間 一〇、五時間
  - 3 職員 六名
- 町立牧園保育所  
名 称 牧園保育所



牧園保育所

(四)

私立薰染保育園

沿革 昭和七年七月 正福寺農繁託児所として開設。

同年朝日新聞社会事業団より優良託児所として記念旗一旒寄贈さる。

昭和十八年六月 皇后陛下御名代として故久邇宮多賀王妃静子妃殿下御成り、之を記念して知事要請により記念事業として常設薰染保育園を開設す。

昭和二十三年五月厚生省より認可される。

昭和二十五年新園舎を建築して現在に至る。

現在 職員 八名

収容園児 六一名

保育時間 七時間

施設主体 牧園町

経営主体 牧園町

施設場所 牧園町宿窪田霧島西口駅の後

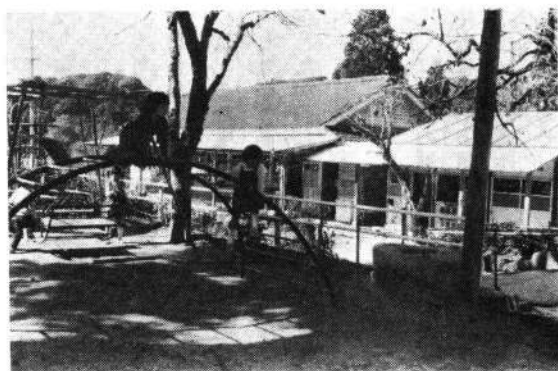
事業開始 昭和五十一年四月

運営方針 1 定員四〇名 2 職員五名

3 保育時間 九時間

# 第八節 上 水 道

住民の日常生活に欠くことのできない水道は、観光地でもあるので、一旦伝染病でも発生した場合、観光客は



薫 染 保 育 園

勿論のこと、住民の健康衛生面に重大な影響を及ぼすことになり、又流水や溜り水、井戸水を朝夕使用することは衛生面からも支障が考えられるので、本町は他町村にさがけて上水道が設置され、普及率も九三％に達している。

昭和二十五年創設以来、三十年の経過があり、麓・駅前地区・中津川・万膳・高千穂・宇都口・三体・浅谷・寺原各地区の八地区に水道施設と、健崎・西霧島地区に飲料水供給施設、それに丸尾地区に雑用水としての供給

## 水道事業の現況

地 区 別	営 業 年	給 水 人 口	備 考
麓 駅 前 地 区	昭二七、七	三、〇九五	高台水量不足
中 津 川 地 区	二八、九	一、四〇二	水量不足なし
万 膳 地 区	三一、九	八八〇	水量不足なし
高 千 穂 地 区	四九、四	三、九六二	水量不足なし
三 体、浅 谷 地 区	三三、三	六六五	季節により不足
寺 原 地 区	三三、三	三二三	右 同
宇 都 口 地 区	三一、五	一二五	良 好
有 村 地 区	三六、三	一八五	水量減少
西 霧 島 地 区	五四、三	七〇	
健 崎 地 区	五四、三	九五	

をなして、各地区の水道工事も着工され現在では町内広く水道が普及されている。

## 第九節 住宅

### 一 町公営住宅の沿革

戦時中は勿論、終戦直後は資材不足のため、家屋の新築は到底望むことは出来ず、住宅難は全国的であったが、その上国内各地及海外植民地からの引揚げにより、人口増加がはげしく住宅難の状態を呈した。

町としては、この現状から早急に住宅事情を好転させたいと努力したが、前記の通り資材及用地等の関係でなかなか実現しなかったが、ようやく資材の好転した昭和二十六年から、引揚用として町公営住宅を八戸建築した。これを最初として、逐次年度を追い住宅建設計画に従い、現在では別表の通り三五〇棟の町営の建物が整備された。住宅は生活上重要な要素であり、それぞれ環境に適合した良好な快適性や、プライバシーなどが確保できる住宅が必要である。又地域の産業、経済環境に及ぼ

す影響も大きく産業振興を計る上でも、重要不可欠なものであり、都市計画とも関連して計画的建設を推進しなければならぬ。

住宅は経済産業の発展につれ、その質も著しく向上し、生活水準に応じ文化的な居住住宅、環境が整備されつつあるが、特に公営住宅、賃貸住宅等は規模設備においてかなりの後れがある。

最近の量から質的向上時代にそぐわないものが多く、今後質量ともに調和のとれた住宅供給をすすめる必要があらぬ。また住宅の持家化もすすめ、住宅金融公庫の公庫貸金財形等による建設も助長し、生活の近代化をはかる農村住宅の改善、建替等の環境改善を積極的にすすめてゆく。

### ◆公営住宅

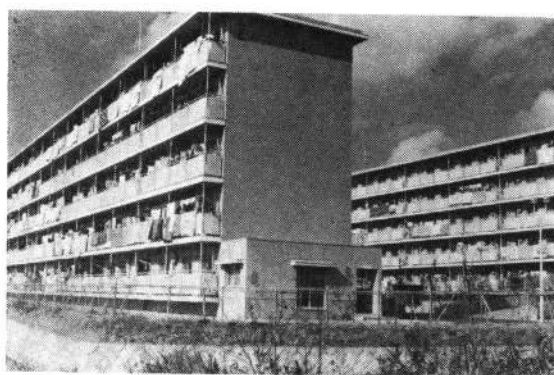
木造住宅においては、耐用年数の二分の一を経過したものが多く、居住環境も劣悪である。国の住宅施策に基づき建替事業の導入推進により整備する。

また高千穂地区においては、雇用促進事業団住宅や、持家建設により入居希望が減少の傾向である。その他の地区においても同じような傾向がみられ、住宅事情は緩

町公営住宅の概況

年 度		26	27	30	31	32	35	37	38	40	41	42	43	44	45	46	47	48	50	51	53	54	計
種別構造																							
公 営 住 宅	第2種公営住宅 木造平家建	3	16	6		17																	42
	第2種公営住宅 簡易耐火構造			12	20	16	4	20	25	20		10	20	33	20	4	12	20	16	5			257
	第1種公営住宅 簡易耐火構造														4	10	8						22
町 住 宅 営 宅	一般町営住宅																					13	13
	教職員住宅										3								1	5	7		16
計		3	16	18	20	16	21	20	25	20	3	10	20	33	24	14	20	20	17	10	7	13	350

和の方向であり、  
今後は質的供給を  
はかるよう推進し  
なければならな  
い。



雇用促進住宅牧園宿舎

温泉地帯をひ  
かえているの  
で、町外からの  
転入者が多く、  
従来住宅事情も  
窮屈であった  
が、雇用促進住  
宅牧園宿舎が、  
昭和五十三年高  
千穂小塚原に建  
設されてから住  
宅事情も緩和さ  
れつつある。

## 二 雇用促進住宅

高千穂校区は、人口三、八一五人（男一、六六二人・  
女二、一五三人）で、町内で人口が一番多い校区であ  
る。

## 第十節 行 事

### 一 町制施行四十周年記念行事

#### (一) 式 典

昭和五十五年十月二十五日、勇壮且つ幽玄な霧島九面太鼓が始まって今別府町長の、四十周年を機会に更に一段の飛躍を期したいと、別表の通りの挨拶があり、四団体、百四十六名に対し一人一人に表彰状及び感謝状の伝達があり、来賓の祝辞があった。翌二十六日には芸能大会があり、講堂一杯の観客をうならせて十九回の芸能発表を終り、公民館では各種製作品の展示即売実演があり盛会裡に夕刻散会した。

町制施行四十周年に当り

町制施行四十周年を迎えた、わたしども牧園町は先輩諸賢のたゆまぬご努力により産業、経済、文化にすばらしい発展を遂げつつあります。四十年という節目は論語にいう「不惑」の年代であり、まさに円熟期として充実した時代でもあります。私はこれまでの町勢

発展の成果をふまえ、豊かな自然、歴史と伝統に培われた郷土牧園をさらに躍進させ、住民生活の躍動する新しい町づくりに、これからも全力を投じて参ります。また、内外の諸情勢をふまえて八十年代の諸指針として策定された総合振興計画の実効性を高め、立地を生かし活力にあふれ、人情豊かで、うるおいのある住みよい町を、すべての力を結集して築かなければなりません。このような大事な秋に町政を預かるものとして一段と身をひきしめ、自治の原点である話しあいを通じて、住民相互の信頼と連帯を深め、明るい、ぬくもりにみちた行政をすすめ、この記念すべき年にあたり、四十年の足跡と町勢の現況と未来の姿を紹介し、皆様のご理解と協力をいただき、明日の牧園町発展のため、なお一層のお力添を賜われれば幸いです。

(昭和五十五年十月 町長 今別府 望)

#### (二) 町民体育祭

体育祭は毎年行われているが今年は(昭和五十五年)町制実施四十年に当る記念行事として行われた。

期日 十月十日体育の日

午前九時三十分開会、十時から競技が行われ三十三

回の種目が盛大裡に午後四時終了した。天候も良く町民の大勢が参加して各種目毎に各校区の応援も盛大で躍動した一日であった。

又、公民館では文化祭があり、各種作品の展示、即売、実演などがあつて盛會裡に夕刻散會した。

### (三) 町民憲章の制定

牧園 わたしたちの町 多くの祖先が 汗で築き伝えた わたしやあなた の ふるさと 水清く みどりあふれるいで湯の町 美しい自然と神話の里 牧園 わたしたちは 更に力を合せて 心豊かで 明るい未来をつくることをねがい この憲章の実践につとめます。

(一) わたしたちはすすんで学び教養を高め  
文化の町をつくりま

(一) わたしたちは互にいたわりあい  
健康で明るい家庭をつくりま

(一) わたしたちは生産のよろこびを胸に  
未来に向けて汗を流しま

(一) わたしたちは雄大な霧島の自然を愛し  
あたたかい心で旅人を迎えます

(一) わたしたちは心を一つにして

活気に満ちた住みよい郷土を築きます

# 牧園町民歌

作詞 竹下景勇  
作曲 土肥寛展  
編曲 竹田 喬

一、 高千穂峰に陽は映えて  
清雲はるか呼ぶところ  
自然の恵み称えつつ  
躍進誓う自治の輪に  
集う 牧園あわれら

二、 霧島山に地を占めて  
せせらぎ流れ行くところ  
いで湯の郷を拓きつつ  
友緩結ぶ觀光に  
挙る 牧園あわれら

三、 みどりの大地うるおして  
平和の虹の立つところ  
豊かな郷土目指しつつ  
生産競う歌こえに  
築く 牧園あわれら

## 《牧園町民歌》

たか ちはみね に ひ  
は - は え て せい うん は る - か よ -  
ぶ - と こ ろ し ぜ ん の め ぐ み  
た た え つ つ や く し ん ち か う  
じ ち の わ に つ ど う ま き ぞ の あ あ  
あ わ れ ら

## まきぞの音頭

作詞 高城俊男  
作曲 土肥寛展  
編曲 竹田 喬

一、ハア 花の牧園 花から明けて  
神代ながらの 陽がのぼる

湯の香花の香 心をぬらす  
ほんにいで湯と 花のまち ソレ

※ さあさ踊ろよ シャシャントドント  
牧園音頭で ひと踊り

二、ハア 駒がいなく 牧場の風に  
姉さかぶりの 茶摘歌

ここはいいの たのしい広場  
旅のつばめも きてあそぶ ソレ

※ くり返し

三、ハア 霧島まいりで 結んだえにし  
宮のもみじも 頬そめる

汗で育てた 稲穂の波に  
祭りばやしも はずみがち ソレ

※ くり返し

四、ハア 結ぶ手と手で 支えたまちの  
人の心の あたたかさ

九面太鼓の とどろく音に  
きょうも繁昌の 虹が立つ ソレ

※ くり返し

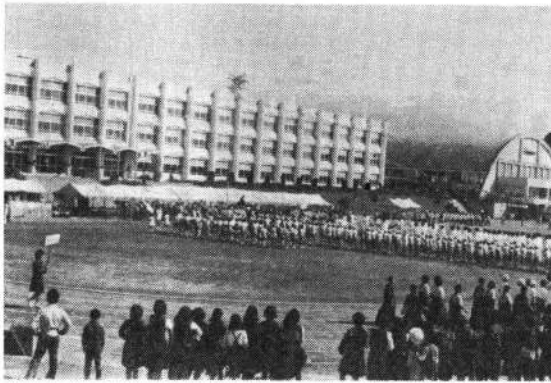
## 《牧園おんど》

はなの まきぞの はなから あけて  
かみよ なが ら の ひかの ぼる  
ゆのか はなのか こころをぬーらす はんに いてゆと はなのまち (ソレ)  
さっさおどろよ シャシャントドント まきぞの おんどー で  
ひと おどー り (ソレ)

代 現 編 第3

(五) 町内一周駅伝競技大会

此の駅伝は町内小学校区の選手が出場して、毎年秋季に行われる快挙で、本年は(昭和五十五年)町制施行四十年記念事業の一つとして、例年以上に盛大に行われ、選手は勿論沿道には一般町民が大半して声援に声をからした。その状況は左の通り行われた。



体 育 祭



町内一周駅伝

主 催	牧園町公民館 牧園町体育協会
後 援	牧園町教育委員会 町政施行四十周年記念実行委員会 南日本新聞社 大霧島観光協会
期 日	十一月十六日 九時三十分スタート
出発地点	ホテル林田温泉前

ゴール 牧園町役場の庭

選手各校区 二〇名 内男子一七名

女子三名

コース 林田温泉前→丸尾→寺原  
→横瀬→持松→下中津川  
→宿窪田→中野→坂下→  
大窪→府島→中福良→芦  
谷原→役場庭

## 二 公民館活動

- 1 公民館事業の充実
- 2 公民館活動の充実促進
- 3 読書活動の促進



明治青年大学の状況

## 4 視聴覚教育の充実

中央公民館を中心に十四のグループにより、各種の芸術、文化講座が設けられ盛んな活動が行なわれている。

- 。油絵教室
- 。コークラス教室
- 。書道教室
- 。料理教室
- 。栄養教室
- 。陶芸教室
- 。園芸教室
- 。牧園町短歌俳句会
- 。文化財保護委員会
- 。レクリエーション教室
- 。押花絵教室
- 。大正琴教室
- 。三味線教室
- 。明治青年大学
- 。企業内学級
- 。家庭教育学級

## 昭和55年度校区公民館開設教室

校 区	教 室 名	員 数	学 級 長	備 考
三体公区公民館	ママさん教室	20名	田 方 千代子	毎週木曜 月2回
	生 花 教 室	11	原 田 幸	
	盆 裁 教 室	19	山 下 尚 志	月4回
	三 味 線 教 室	14	宇都口とよ子	
	舞 踊 教 室	15	原 田 福 恵	
万 膳 校 区 公 民 館	三 味 線 教 室	17	原 田 しづか	週1回
	生 花 教 室	20	山 下 いち子	月1回
	料 理 教 室	26	加治屋 しづ子	月1回
	舞 踊 教 室	11	田 島 静 江	月1回
	詩 吟 教 室	13	池 田 良 熊	月1回
	書 道 教 室	10	坂 元 国 志	月2回
	盆 裁 教 室	10	池 田 良 熊	月1回
	大 正 琴 教 室	11	安 藤 静	月2回
持松校区公民館	民 踊 教 室	25	徳 田 しづえ	月1回
	高 齢 大 学	35	栗 林 茂 行	月1回
高千穂校区公民館	高 齢 者 大 学	20	萩 原 秀代志	月1回
中津川校区公民館	高 齢 者 大 学	30	原 田 重 彦	月1回
	犬飼婦人学級	14	川 崎 めぐみ	月1回
	横瀬婦人学級	18	吉 田 ミ 恵	月1回

## 三 その他

## (一) 歩こう会

一 趣旨 寒さに耐え完歩することにより、たくましい体力と精神をつくり、参加者相互の親睦と健康生活への意慾を高め、町民皆歩の輪を広める。

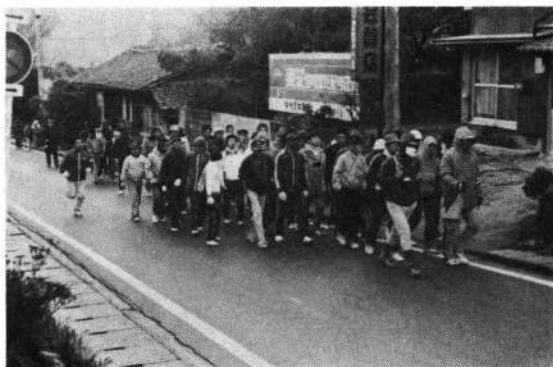
二 主催 牧園町教育委員会 牧園町公民館

あすの鹿兒島をつくる県民運動牧園町推進協議会 町子ども会連絡協議会 町青年団 町体育協会 町各種婦人団体連絡協議会

三 対象者 小学校四年生以上 中学生 高校生 一般スポーツ少年団、子供会、職場団体大歓迎

四 日時 (例) 昭和五十五年十二月六日 (土)

十二月七日(日) 午後八時三十分出発



歩こう会

備考

毎年行われる。

昭和55年12月行われたものは第3回目に当る。

翌日午前六時完歩の予定  
五 持参する物 手ぶくろ 懐中電灯 寒さに耐えられる服装  
六 コース 公民館 霧島西口駅前 有村入口 万膳  
小前 水堀 中野 内野々 保養センター 横瀬  
中津川小 犬飼 公民館

七 備考 事故発生の場合は応急処置以外はできませ  
るので各自充分注意して参加する事  
(二) 町民慰安の夕に就いて

(1) 霧島温泉まつり

町民及び観光客のいこいの夕として、町内各商店及びホテル、旅館、事業所一六〇団体がスポンサーとなって毎年八月に盛大に行われている。昭和三十年代は町をあげて祇園祭を行っていたが、いつのまにか祇園祭は消えて各校區挙って夏まつりと銘うって若者の血を躍らしている。

次に昭和五十五年八月の温泉まつりの状況を記す。

主催者は牧園町、牧園町商工会、大霧島観光協会を軸として十一団体が総力をあげて会の進行に努力し、遠く国分、隼人方面からの観光客逗留の浴客地元の見物人の人達に充分の満足を与えた。

会場を霧島高原国民保養地保養センターにして、八月三日午前九時から始めた。

催し物は少女バレーボール 剣道大会 老人ゲートボール かごかき競争 花火大会 太鼓みこしパレード 霧島学園太鼓 のど自慢 郷土芸能大会 霧島ホテル社員総おどり 町民総おどり ミス霧島発表など、盛り沢

山で大変な盛況であった。

(2) 町内各校区夏まつり

新暦八月十四、五日の両日はお盆で町外に働きに出て  
いる人達が、大挙してふるさとに帰り祖先の墓に詣で年  
老いた父母を慰め、はらからと旧交を温め故友と親密さ  
を取交わす日である。そんな人達を慰め、地元の人達と



町民まつり

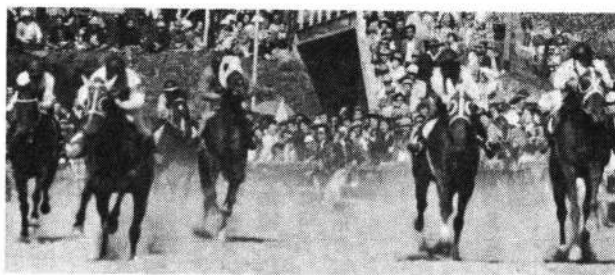


夏まつり

の交りを深くし故  
郷を更に見なおし

てもらいたいとの、念願で町内各小学校区は、挙って盆  
前後に夏まつりが行われて、帰省者及び残留者が一致団  
結して会の進行に当り成果をあげている。

(三) 霧島競馬



霧島競馬

霧島高原国民休養地に設けられている馬場で、桜花咲きそろう四月中旬、名物行事の霧島競馬が開かれます。可愛いポニー種も出場するなど、行事も盛りだくさん。メイインベントは何といつても、軽種馬レースで地方色豊かな鞍馬レースも、また花を添えます。

さらに、郷土芸能や模範馬術なども披露されて、高原は競馬デー一色につつまれます。

## 第十一節 民 芸

### 一 太鼓おどり

太鼓踊の起源は慶長の頃といわれている。島津義弘が朝鮮に出陣し泗川の戦の時、味方の軍勢の勢力を見せる為多くの旗さし物を押し立てて、鉦、太鼓を打ち鳴らして勝因を作ったのが、起因であるといわれているが、しかし関ヶ原の戦の後義弘が江戸に伺候した時コレラが大流行して、江戸の人達のあらゆる努力も空しく悲惨な有様であった。この時太鼓踊をして神に祈ったところが不思議にも、猛威を振っていたコレラがピタリととまっ

た。これを見た義弘は朝鮮凱旋記念の意味も含めて、家臣の山田郷の住人池田千兵衛と加治木岩原の牧之瀬某の両名に命じて、この踊の服装、歌、踊り方を調査修得させて帰らせたともいう。

ところが勇壮で、しかも珍らしいこの踊はたちまち各所に伝わり、盛んに踊られるようになった。

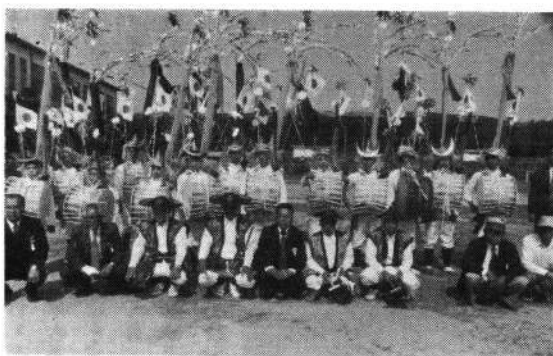
この踊りも時代と共に盛衰があり、長い間踊らないので歌詞を忘れたり、踊り方を忘れたりしたので隣部落や加治木の西別府あたりまで聞きにゆくが、真実を教えてくれない。そこで作り上げたので多少の相違がある。

太鼓踊は百姓の踊と言われているが、踊の体型、及び踊児の服装にしても武士階級らしいところがある。踊の体型の馬場上げは進軍の形であり、庭踊は包囲に移るかまえてあり、馬攻めは包囲完了の形である。このように戦の踊であるが慶福行事や雨乞の祈願にも踊られた。又盛夏の頃、水神や祖先の慰霊のため、稲の虫や大水の害をのがれるためにも踊られた。夏秋のお祭、諸祝典には踊を奉納するのを常とした。七月の盆には町内各六ヶ村は各々精練された太鼓踊が麓地区で競演して非常に賑いを見せた。今はただ特別な行事の外には踊らない。

現在町内には万膳、三体の二団体があるだけで各後援会を作って存続を願っている。

# (一) 三体の太鼓踊

三体校区の太鼓踊は、今から約七十年前明治の末頃、校区の先輩たちが、勇壮活発な加治木の太鼓踊を見て、これを持ち帰り校区に広めたものと聞く。当時は車もな



おどり 太鼓 三体

く、徒歩か馬が唯一の交通機関であったから恐らく歩いて加治木まで行ったものと思われるが、このような複雑な踊を一回位で覚える筈はな

く、何回も往復したであろうと思われる。このように苦勞して修得した太鼓踊も、途中支那事

変、第二次世界大戦と大きな国事の前に途切れてしまったが、終戦後復活し、昭和三十四年三体小学校の校舎落成式に踊ったのを最後に、再び途切れてしまった。

たまたま、昭和五十二年校区公民館活動が始まり、農村振興運動の拠点に校区が指定されたのを機会に、古老や有志たちが、三体に眠っている太鼓踊を再度復活させようと立ち上り、校区内各戸に寄附金を呼びかけ、太鼓や鐘を購入し、その間いろいろ苦難を経て、遂に復活した。そして第一回の披露踊を三体小学校屋内体育館落成式で行い、其の後、町民祭、敬老会、三体生活改善センター落成式等で踊を披露し今日に至っている。

踊りの構成人員は、鐘六人、太鼓十六人で、太鼓の中には、中学生が六名もいる。

## (二) 万膳太鼓踊

明治二十年頃より始まったとの古老の話にある。

島津義弘公の凱旋祝、又その供養のために、おどり始めたとも言われている。昭和十五、六年頃まで、毎年盆や、かんばつ折、或は神社祭典、大きな行事の時には必ず踊を披露していたが、第二次太平洋戦争以来中断していたが昭和二十三年に復活した。

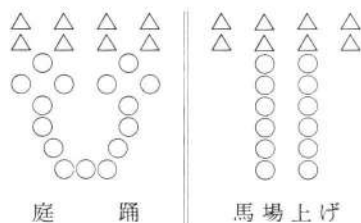
祭、敬老会、温泉まつりなどに出演している。  
太鼓踊は盛夏の頃、水神や、祖先の霊をまつり慰めるため、または稲の虫や、大水の害をのがれるものであった。(小野重郎氏)



万膳太鼓おどり

昔は非常に盛んにおどられて、前記町の競演の際には異彩を放っていたが、現在は踊り児も少く、又装備にしても昔よりも貧弱である。それで後援会を結成して、おどり児募集、基金募集に努力している。  
現在は町の行事や霧島競馬、町民

太鼓踊の体型



(三) 太鼓踊について (万膳三休同じ)

(イ) 人数——鐘打ち 四人

太鼓 一人

ホタ振り 二人

(ロ) 服装——鐘打ち

陣笠 陣羽織 白じぼん  
白足袋 わらじ 黒ずぼん

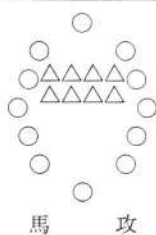
太鼓打 かぶと 白はつぴ 帯

白ずぼん きゃはん 白足袋

(ハ) 用具——鐘打ち

太鼓打ち 鐘打棒 大刀 鐘  
太鼓 矢旗 刀

鐘 鼓  
太



○太鼓踊の唄

初て庭

。細川どのの召したる笠は  
石あみ笠に花かたびらよ

。松は小松のその下に

さまとねるよにその下に

。細川どのの広間を見れば

白木の弓にとび木のそやよ

中庭

。かめまつ殿はだて者でござる  
けさゆたかみをばらりとときやる

。稚児の下緒とわが帯と

結び合せて玉襷

。稚児のあいづと尺八は

夜々吹けどもよりもせぬ

末庭

。笠をわすれたするがの茶屋で  
空がくもれば思い出す

。おゝさて実盛どのこそは

びんひげそめて城に立つ

。青田の中で軍めす

そのとむらいに踊ゆる

返庭

。霧島山にかゝりし雲は

けさ降る雨か夕立曇か

。向の土手に鳴くすず虫は

暑さに鳴くか涼しさに鳴くか

二 九面太鼓

沿革

昭和四十七年、霧島温泉商工会青年部の若者達が、霧島温泉に郷土芸能を作ろうと考え、霧島神宮に伝わる、九つの面、いわゆる天孫降臨の神々に天降りの打法、演舞等基本的な所作をふりつけ、霊峰霧島にちなんだ天孫降臨の神話として創作したものである。

歌詞

その昔アマテラスの命により霧島神宮の御祭神（三人ニギシクニニギシ、アマツヒタカ、ヒコホノミコト）が国ツ神サルタヒコの道案内を得て、霧島山高千穂峰に天降られた光景を、霧島温泉の若者達が、その神話と伝説を後世に伝え残しているものである。

構成

人数 十名 服装（白、薄紫）の装束 面、ハカ

用具  
太鼓一〇個  
ドラ一式  
ホラガイ二個  
マ  
パチ 面九個  
神楽鈴一  
観光宣伝のために舞踊する。



霧島九面太鼓

### 三 棒 おどり

鹿児島県では見なれた棒おどりです。

六尺棒と三尺棒で、ハッシと綾に打ち合いながら踊る一団の踊りは、闘魂そのものの、気迫にみちた立ち合いで激しい息づかいが、じかに伝わる。りりしい白ハチマキに、たすき掛け、白足袋、わらじの肢体も軽く、素朴な歌にのって躍動しながら、常に端正な姿勢をとるのは、芸能といっても、武技の入るせいでもありません。

宙を切る棒の走り、その上げ下ろし、受けとめ、肩に背負い腰で払うなど、鮮やかな棒芸は、一定の型でなしに、きわめて自然な流れの律動をつくっている。したがって見る人を、集団の美しい棒さばきに引き入れて、魅了せずには置かない。

ともあれ勇壮闊達なこの踊りは、いかにも薩摩らしい武の国の風土になじんだ伝承の踊である。

棒にはどこか神と人間と自然との交渉が息づいているように思われる。だから棒は単なる武器ではなく、一種の呪力として、これを打合せることによって悪霊や悪魔



三休堂宇都口棒おどり

の退散がはかれる呪力がこもっている。それで田植えや農耕神事とき、この踊りが奉納されるのは、悪魔を払って豊作を求める生産につながるものがあると思う。

起源は鹿児島神宮の御田植祭で、田植をする者を慰めるためのもので

あったようである。

薩藩の富国強兵策の一つとして、農村の青年達の忠誠心と尚武の精神の養成に役立ったものであったろうが、これは神社と農民との結びつきで生れたものである。

町内では昔は各大字にあって神社の祭典の時は、よく

奉納されたものであったが現在は三休堂宇都口と上津川横瀬の二団体が健在である。

上津川横瀬の棒踊りは、六名一組で六組から成立っていて踊手三十六名で唄手四名、服装は白鉢巻、浴衣、白股ひき、わらじ、たすき、五色ののぼりを立て、部落の主な行事などで踊られ、昔は四月八日に踊られていた。今は年二回程度練習をしている。

#### 四 ザッツ踊り（座頭踊）

上津川健崎部落には、昔からザッツ踊りという、こっけいな踊りが伝承されている。古老の話によれば、この踊りは明治の中期頃から健崎部落で行われていたらしく、一時途絶していたものを、昭和二十二年復活したが再び途絶、昭和五十三年中津川小学校百周年記念を機会に復活したものであるという。

。踊りの構成

人数 踊り役 女役二人 男役七人

三味線一人 太鼓一人 鐘一人

拍子木一人 合計十三人



ザ ッ ツ 踊 り

。服装とあらずじ

1 女役二人出て踊る。服装、長じゅばん。扇子（日の丸）、日傘（竹骨でつくった小さい傘）

一人はナギナタ。一人はくさり鎌をもつ。

2 次に、商人（酒屋）出場、ズボン下、ハッピー、赤帯、フゴをかつぎ、手に扇子（日の丸）を持つ

3 三番目に、覆

面（黒い布）の

武士が出場

黒い着物。ハカ

マ。黒い足袋、

雪駄ばき。

4 四番目に、盲

人出場（伊勢参

りの盲人）

三番目出場の覆

面の武士に金を

奪われ、盲人は

すぐごと帰り

につく。

5 五番目に、黒い着物の武士が出場し、覆面の武士

から金を取り返し盲人に渡す。

6 盲人二人出場、一人はビワを持ち、一人は銭車

（五厘銭を竹につないだ物）を持つ。ズボン下、黒足

袋、ワラジ、竹杖、竹の眼鏡、頬かむりの服装。二

人、関所にさしかかり番人と共に踊り出す。そこに

武士が現われるがこの武士は、前記女二人が探し求

めていた仇敵とわかり、ここでもでたく仇討をする

という筋書きの踊りである。踊りの中にユーモアが

あり、思わず爆笑する。

## 第十二節 民 話

### （一）大浪池の由来

今は昔、此の池の麓、三体堂に金持の庄屋があった。

何一つ不足はないが四十の坂を越えるのに子宝がないのが淋しい限りであった。

或時庄屋が山の池の辺りに行くと一人の美しい娘が石の上で遊んでいた。庄屋はこんな山の中でどうして女の

子が一人で居るか、見とれて居ると忽然と姿を消してしまった。不思議に思つて歸つてその話をするに妻はそんな女がほしいと言ひ出した。それからというものは毎日その山の池に娘を探しに行つたが見当らないので、岸边に立つて神々に子供を賜れかしと熱心に祈つた。程なく妻は身重になつて産んだのが女の子であつた。庄屋夫婦の喜びは大変なものであつた。名もお浪とつけて蝶よ花よと可愛がつて育ててゆくと其の女の子は、庄屋が池のほとりで見た女の子と瓜二つの顔形となつた。

月日は流れて早くも十八の春が訪れて来た。諸処の有力な庄屋の所から結婚の申込が殺到したが、一人娘の爲婿養子でなければならぬ。数多くの若者の中から選ばれた田口村の或る豪農の息子に白羽の矢が立った。しかしお浪は一向に顔をたてに振らないばかりか、その話を聞かされる毎に、淋しく笑うのみであつたが、遂には重い病気の枕に着いてしまつた。

庄屋夫婦の驚きはいかばかりか、医者よ薬よとさわいだが効目があらばこそ、美しかった姿形は今を見るかげもなくやせ細つてしまつた。或る夜のこゝと、娘は急に山

の奥に行つて見たいと言ひ出した。庄屋夫婦は勿論のこゝと親類達もとんでもないことと、この申出をとめたが一向に聞き入れてくれない。泣く兒と地頭には勝てぬと遂に庄屋夫婦は娘の乞うがままに山奥に月光を浴びながら登つて行つた。程なく池のほとりに来た。娘は父のすきを見てザンブと池の中に飛び込んでしまつた。庄屋は氣も狂わんばかりに「お浪、お浪」悲痛な叫びをあげたが、対岸の岩壁にこだまするばかりであつた。

庄屋は泣き叫びながら夜を明かした。太陽はきらきらと池の面を照らしたが、お浪はとうとう二度と姿を見せなかつた。お浪は此の池に住む龍王の化身であつた。庄屋夫婦の切ない願に感応して暫くの間庄屋の娘となつていたのである。

それより此の池の名を「お浪の池」とよぶようになったが、いつのまにか大浪の池となつてしまつた。

庄屋夫婦はついに病床の人となつてしまつたが病床にあるにもいつも「お浪お浪」と呼びつづけたので、人々はこの庄屋を床なみさんと云うようになった。

今も三体堂田方に床波という家があるが、この子孫ではないかと言われて居る。「床次」「床浪」の姓もここに

発したのだと思う。

## (二) 聖神社の由来記

今から約二百年前（明和年間）下中津川村の庄屋高木家にだけに井戸があった。附近の女衆達はいつも集って井戸端会議をやっていた。そこに高屋山から霧島神宮に参拝に來た高屋聖が通りかかった。彼は大変音色のよい



赤銅のリンを持っていた。そのリンを見た下中津川の唐仁原家の子供が、それをほしが墓り離さなかった。の止むなく此のリン原を売ってくれと頼んだが、断わられた。ついに争いとなり聖は相手を負傷させて逃げた。そこで高木、田島、唐仁原の三家

から追手がかり約六kmはなれた持松の聖原まで追いかけて之を殺した。聖原の墓には慰霊塔を建てて、施主として菱刈郷の人達十五人の名がぎざまれている。現在も聖講を明治六年から続けている。

当時の霧島神宮参拝コースは犬飼、田代、横瀬、聖原六方辻、伊勢谷、神宮であった。

この聖は高僧であったので、たたりを恐れて神社を上中津川横瀬板小屋、通称宮跡に時の領主伊集院十右衛門久房によって明和七年十月十二日（一七七〇）建立し、更に大正十五年に現在地に移された。

神社に伝わる板面の表に

明和七庚寅十月十二日（一七七〇）

今上皇帝聖寿無窮

奉恭建立御殿内迄惣開

天下泰平国土安穩

須弥之高無不蓋国斯天之德也大海之広無不事者斯地之德也品類之衆無下惠者斯人之德也而其人無不仰崇者蓋維神明乎越於隅劬踊鄉横瀬仙宮大明神者乃当邑之領主伊集院十右衛門久房恭創建靈社其殿略以円備広其末端者鳥居也豈非為閑耶故当邑之

土氣信男信女発厚志願以与補薦而訟於達上主主亦  
機相投即許之安堪成啐喙同時之再平所請請有徳之  
驗者也嗚呼可尚哉茲歲既具至明和七庚寅秋新造  
功成耳遂墨壽記永留宮室以備万古靈驗者也所願天  
長地久人民歆娛国弘祭紂災殃備与歌唐靈取五代百  
怪早消滅千祥急大来專冀大櫓越伊集院十右エ門藤  
原久房武運益長徳沢弥広賢子賢孫逐日連統新威臣  
士陸時繁昌寿国縁国永保嘉齡門与隆大富金穀今  
善根深厚即後利徳広大國更香倡日国不蔓不枝無等  
匹厚然独露一天地風鷹馬洗幾千回世界壤口口不朽  
願主各敬白

裏は判読出来ず、寄附者名らしい。

又大正年間現在の所に新築したのであるが、板面には  
左のように記されている。

表——奉祀聖神社拝殿新築

大正十五年八月十日 着手

全 八月二十日 棟木揚げ

全 九月廿二日 落成

全 九月廿四日 彼岸中日落成式

裏——拝殿改築並に其の部落

工事委員 本村次助 通山東一 永田鹿右衛門

湯窪源左衛門

大工 深町秀司

区會議員 会長 通山東一

副会長 竹下金助 本村次郎

永吉牛太郎 荒瀬袈裟助

永田鹿右エ門 湯窪源左エ門

末広直一 上村甚兵衛

区長 馬場甚袈裟 改元伊右エ門

通山仁八 笠山敏次郎

氏子総代 通山末太郎

村會議員 板越信輔 野元八之進

牧園村長 富田重治

神主 橋本熊夫郎

工事費 青年貯金 貳百円

区貯金 壹百廿円

他寄附

総計 六百五拾円

### (三) 新湯の由来記

(イ) 新湯の発見

明治十二年六月上旬、桑原郡踊郷下中津川荒田の素封  
家田島源八氏（西南戦役従軍、後郡會議員）が、青年達

を伴い御岳参り（霧島神宮古宮跡）をした折、高千穂河原附近にワラトビ（小積の上に乗せる雨覆）をかぶった異様な男がいたので、好奇心から色々たずねたら、四国から来ている高窪豊造という癩病患者で、二十一日間の「おこもり」をしているとの事であった。青年達は携帯している握飯を与えようとしたが、断食祈願中とのことのでこれを拒絶した。

この事があってから間もなく高窪氏は夢の中に「ここから、西北の方一里許りの小川の中に砒素が燃えているから、その川を堰きとめてはいれ」と嬉しいお告げがあった。高窪氏は大いに喜び原始林を分けて、漸くに目ざす鉱泉を探し当て岩風呂を作り入浴したところ、癩病は日増しに良くなり程なく全治した。これが新湯発見の始まりである。

この噂が世間に広まり伝え聞いた九州、四国方面の癩病患者が続々と集り数年後には五、六百人に達した。このような由來から、この鉱泉を砒素燃湯又はコシキ湯と呼ぶようになった。

(四) 新湯の占領

新湯は国立公園内で大浪池南側の谷間にあるが、発見

当時、附近一帯は人里離れた原始林で東襲山村（現国分市）の内であるか、踊郷であるかが、明瞭でなかった。

新湯が発見されて数年たった明治十五、六年頃税所篤（後正三位、子爵、霧島神宮々司、枢密顧問官）翁が霧島神宮に参拝した折、時の霧島神宮宮司福崎季連氏から砒素燃湯の境界認定願書を受けとり、「これがうまくゆくよう県知事にとりなして頂きたい」との依頼を受けた。

税所翁はこれを承諾し、早速時の渡辺千秋知事に対し「先般発見された砒素燃湯は境界が未確定のようだが、東襲山村を流れる霧島川の上流にあるから、東襲山村内にあると認定して頂きたい」との趣旨の願書を取次いだ。明治の功臣で学識高い税所氏からの斡旋に動かされたのか、渡辺知事は調査もせず其の場で認定してしまった。

この決定を喜んだのは東襲山村民で、早速各戸に布令を出して沢山の村民達が新湯に集って、崖や斜面を削り四十八棟の急造バラック小屋を建てた。

(イ) 湯治小屋の破壊

この事を知った踊郷下中津川の人達は非常に騒ぎ出し

た。「このまま見のがす訳にはいかない」ということで、当時東襲山村と下中津川村との境界が明瞭な縄引帳が残っていたので、これにより調査をすることにした。

東襲山村からは重久の川越親春戸長、踊郷からは永田定介（永田良幹氏の祖父）戸長が立会い検分したところ、本鉱泉は明かに下中津川村内であると確認された。そこで下中津川村から県知事に境界の再調査を願ひ出たが、知事は既に認定済みであったので、

「再調査の必要なし。」と却下してしまった。

当時の下中津川村は寺原、轟木、母ヶ野、栗川、小谷龍石、即ち現在の高千穂を含み合計十二部落、二六〇戸ばかりの世帯数であったが、再調査却下の報に激昂した村民達は一斉に立上り、各戸から鉋一丁宛持ち寄り砒素燃湯に行き、四十八棟の湯治小屋を忽ち切り崩してすべてを焼いてしまった。

## (二) 破壊責任者の投獄

この事件は砒素燃湯に来ていた一湯治者から国分警察署に訴えられ、十二人の下中津川村の総代達が罰せられた。犬飼の田島十次郎、高橋甚兵エ、田代の田島十郎

太、荒田の岩元伝助、改田口の鶴ヶ野五兵エ、其他の人達で各々懲役一箇月を言い渡され、鹿兒島監獄署に投ぜられた。しかし獄内では其の取扱いは大変寛大であった。

## (ホ) 新湯の飯属逆転

十二人の総代達が懲役を終えて出獄すると間もなく、東襲山村から破壊された砒素燃湯の湯治小屋四十八棟分の損害賠償として、二千元を下中津川に支払うように鹿兒島裁判所に告訴された。

当時は、米一升三錢五厘の時代であったので二千元とは大金であった。総代達は村の長老を交えて何回も鳩首協議したが名案は浮かばない。

ちょうどその頃、鹿兒島市内に「踊郷指定旅館」をしていた、前原敬介という人が居た。この人は明治十年の役で西郷方の半隊長をしていたが、戦傷を負い下中津川村荒田の田島源八氏方に特設されていた野戦病院で世話になった関係もあって、此の窮状を見かねて一肌ぬぐこになった。

此の旅館に竹香という人が逗留していて、毎晩渡辺知事の宅を訪れて碁の対手をしていた。前原氏は此の竹香

に策を授けて「新湯の境界は知事が調査もせずに東襲山村に認定されたとのことで、踊郷の人達は大変いかって、大挙して押しかけるとの噂があります。そうなれば知事さんの面目はつぶれるのではありませんかと、無い事、有る事、とり交ぜて碁の合間合間に話した。渡辺知事は大変驚いて「綱引き帳」の通りに境界を訂正させたので、新湯は下中津川村の土地になった。

# (ハ) 損害賠償の裁判

破壊された湯治小屋、四十八棟分の損害賠償として、二千元を支払えという裁判は、前原氏が下中津川村に土地を持ち下中津川村の住民の一人という資格で、十二人の総代達の控えとして裁判所に出頭することになった。

## 裁判官から

「下中津川村の総代達に損害賠償金二千元を支払うよう東襲山村から訴えられているがどうするか」と問われたのに対して、控え席から前原氏が立上り、

「下中津川村の村民の一人として申し上げますが四十八棟分の家は全部元通り作って返します。二千元もかかるものなら、定めし立派な設計書ができていましょう。その設計書を頂きたい。即ち「何処の山から何という木を

何石伐採したか、牛何頭で運搬したか、木挽は誰か、大工は誰が何日かかったか、萱は何処で何駄切ったか、そういう資料に依って元通りの家を作ってお返しします。」と答えた。

裁判官は東襲山村に対して、

「元通りこしらえて返すから設計書を出すように。」と促したが、東襲山村ではここで大いに詰まった。大工は一人も使っていない、木挽も同様で、東襲山村の人達が官山の木や萱を勝手に伐採して、縄やかずらで結び合せている堀立小屋である。設計書など勿論ない、原告の方こそ困って、官林盗伐罪に問われる破目になる、何とも返答出来ず、結局、損害賠償の申立は認められず、原告側の敗訴と決定された。

あとがき

昭和二十九年八月十八日、大きな地滑り（六万三千立方米）があつて、九人の湯治客と共に四つの浴槽や自炊部屋、旅館部も埋没した。

このような災害のため本鉱泉は、自後六ヶ年間休止の状態であつたが、昭和三十五年から浴槽、自炊部屋二棟十六室も復旧し、湯治客も漸次多くなっている。

(四) 愛宕神社の由來記

抑々愛宕神社の由來を尋ねるに、住時島津藩政時代に於ては郷村には必ず一字の愛宕神社あらざるはなし。蓋し祭神は火産神を崇め奉り、御神体は御銚鎮座す。千古の昔より軍神と称す。「火の神と唱え亦荒神と伝う。」とある。

このように愛宕神社は武の神として参拝者は武運長久を祈願するだけで、例えば家内安全のような私事は願わないのが例であつた。

その外女子は八歳に達すれば境内に入ることを許さなかつた。尚士分者の外はみだりに境内に立入ることを禁止されていた。

昔日、事變の發生のときは愛宕山にて一つ貝を吹き鳴らすと、二才衆はただちに馳せ集まることになつてゐた。

明治維新の改革により旧來の制度が改まつてから、愛宕神社の管理、祭祀は自然に衰微して遂に屋根は落ち、戸壁は破れ殆んど傾倒寸前であつたので、一応隣りの招魂碑の傍に遷座し長年経つてから旧の場所に仮宮を建てた。

これとても粗末なもので僅かに雨露をしのぐ程度であり、古くからの参道は荒廢し西南方の山路を廻る程度のもので、誰一人として之を顧みるものはない。

昭和八年十月、時の宿窪田区长西重夫氏は余りの神社の荒廢ぶりを残念がつて、同志と計り区有の補給金で一小宇を建てた。これがしばらく残されていた。

この神社の創建は記録がないので、はっきりしないが古老の話によれば約三百五十年前、慶長年代踊邑を外城とするに及んで建てられたものと推定される。

愛宕神社のあつた所は小高い岡で、三体堂からの道はこの岡をまわり牧園小学校の方に出たものであるが、明治四十三年高千穂街道が開通するため、切り開かれた。それで愛宕神社と招魂碑は、昭和三十三年十月、今の公民館横に移転され跡地は整地されて、老人福祉センター、駐在所及び民間宅地となつてゐる。

(五) 虎 退 治

文祿元年(一五九二)太閤秀吉、朝鮮征伐の折薩摩の大守、島津義弘公は子息忠恒と共に彼の地に転戦手柄を立てられたが、たまたま秀吉公病あつく「薬に用ふる虎肉を送れ」との命令が同三年十二月に届いた。

時に島津勢は唐島（巨濟島）に築城し守備していたが、文祿四年三月八日、忠恒（家久）と共に兵を率いて唐島を出帆し朝鮮半島南部の昌原に到着し、翌九日深山に入つて虎狩を行つた。更に十日兵を繰出し大勢のどよめきによつて一匹の虎が走り出て来たので、島津右馬頭以久の配下の安田次郎兵衛（国分市清水）が追いかけたが、安田めがけて虎は高所より飛びかかるところを、見事に刀を虎の口に突き込み虎を討ちとつた。又外の虎が現われて義弘公父子を襲わんとす。御子忠恒公之をかばい、虎に飛びかかるんとする有様に、忠恒公の舎人、上野権右衛門主人に代りて立向つたが猛虎は之を噛み殺し牙にかけて五間ばかり投げ落とし、いよいよ猛り狂う有様に帖佐又六七という者、三太刀切つたが股に噛みつかれた。之を見た踊の士、福永助十郎と言う勇士が虎の尾をつかまえ松の下枝に引っかけた、その時早く永野助七郎（溝辺町竹子祝儀園、長野氏の先祖）（一説には永野勘十郎の説もある）大太刀を抜いて、虎の右脇より背に向つて突き抜きようやく虎を討ちとつた。

義弘公は、「褒美は望みにまかせん。何なりと申し出よ」と仰せられたが、本人は至つて廉潔の士であつたか

ら「私事三味線を好み候」とまじめに言上したら、望み通り御書付と共に三味線を賜わり、福永氏の家宝として今にも伝わる。（原文虎狩より）。

この伝記は薩摩子弟に広く愛読されたものであるが、その福永助十郎の家系は踊衆中（郷土）の家柄で現在の当主福留氏が田原に現住し同家の系譜によれば「初代助十郎は惟新様（義弘）高麗國へ御渡海之時供奉仕り虎狩ノ節、虎ヲ手取り仕り脇指ニテ指殺シ候。右ノ脇指ハ本田休左エ門ノ曾孫助之進方へ名刀「虎切丸」トシテ今ニ伝受サレタリ、（中略）

助十郎、虎ヲ手取りイタシ、ソノ軍功之為御褒美トシテ惟新公ヨリ御高式百斛ヲ賜フ旨ノ感状ヲ受ケタルモ伏見城攻撃ノ節、助十郎戦死仕り、右感状行衛不明ニナリタリ云々」

当主の話では昔は男田がその知行地であつたとのこととで又拝領の三味線は胴皮張の立派なもので、不吉の前兆があれば夜泣きすると伝えられ、今棹、胴、皮夫々バラバラに保管され、この他銅鏡一本も拝領している。

福永氏庶流系図

助十郎（実名未詳）

藤原姓福永氏上古宗國不伝蓋其先日向之人也。有故来遇干  
当国遂為旗下之臣者矣。

助十郎奉事大守義弘公抽勇為文祿元年（一五九二）

壬辰從軍公干朝鮮國而有功就中四年（一五九六）

乙未春三月十日公及忠恒公俱獵千昌原也有一猛虎齒帖佐  
某服幾死時助十郎身虜其虎而斬殺之播英名干異域普世人  
之稱歎者也。

其虎之刀称虎切丸今伝藏本田休左エ門親由家矣。

慶長二年（一五九七）丁酉復使征伐朝鮮國於是

公師再航海助十郎亦從軍屢々勞軍務。

#### (六) 蛭の居ない里

万膳部落は南北に小高い岡を廻らし中央を万膳川が流  
れている。清く澄み切って魚の泳ぐのもよく見える清流  
がコンコンと流れている。昭和四十六年八月初旬の大洪  
水に堤防が流されて濁流が水田に流出して、稲を押しつ  
ぶし大きな石が土砂と共に流れ込んで、あたかも砂漠の  
ようになった。其の年河川工事が始まり、今は完全に整  
備されている。此の川にスッポンが沢山棲息しているが  
里人は決して捕獲しない習慣が何百年以前から行われて  
いる。此のスッポンと、水田にウヨウヨして居る蛭に関

する物語が今に残されている。

今は化学肥料の關係で蛭も少なくなっているが、昔は  
田に足を踏み入れると何処からともなくウヨウヨと集つ  
て来たものである。今も居ることは、居るが決して喰い  
つかない。この蛭に関する挿話が古老の人々から語りつ  
がれている。

この万膳川のはぼ中央に八幡神社がある、創建は建仁  
年間、北条時政が鎌倉幕府の執権時代で約一千年前で祭  
神は応神天皇、当時万膳に居住していた源弘章が戦捷祈  
願のため、京都の清水八幡宮を勧請して当地に神社を  
創建したと同神社の明細書に残されている。

いつの時代か判明しないが、同神社の御田植祭が盛ん  
に行われた。神田に氏子の若い男女が集まって田植が始  
まった。その早乙女の中に、村一番の器量良しと言われ  
た娘の太股から血が流れているのを見た青年達は、面白  
半分に生理のあるのに神社の田植に出るのは不屈であ  
る、穢れである。神罰を蒙る事は請合ひであると、寄つ  
てたかつて罵しり合った。乙女は顔を赤らめて、蛭に喰  
われて流れた血であると言いわけをしたが、青年達は尚  
更面白がって罵しった。乙女は泣く泣く家に帰った。

此の八幡神社の南東方に広い畠があつて、その片隅に何百年もの大きな櫨の木が四方に枝を張って繁つてゐた。田植祭の翌日一農夫が畠に仕事に出掛け、先ず一服と木の下に行くくと丁度手頃の枝に首吊り自殺をしている乙女を見つけた。びっくりしてよくよく見ると昨日田植祭の折罵られた少女であつた、農夫は驚いて早速親達に知らせ、部落の人達や親族の人達の計らいで野辺の送りをすませた。部落の人達が話し合つて慰霊祭が行われたが、席上において、今後万膳川流域の田には一匹の蛭も居ないように、そのかわりに八幡様の御使いと言われてスッポンは今後一切捕獲しないと言ひ誓ひをたてて神社のお祭をした。その後万膳の田には一匹も蛭が居ないようになつた。今も田植時季に一匹か二匹の蛭を見ることがあるが決して食いつかない。他町村の人達はそれを非常に羨しがっている。

以上蛭とスッポンの關係を述べたが自殺した少女が何処の人か、名前も今は不明又何故万膳の田に蛭が居ないか、この謎は解かれていない。

(七) 庚申さま (資料・かごしま民俗探究)

庚申の夜は持ちのよい嫁の髪

庚申をうるさくおもう新世帯

庚申のあくる日聞いて嫁こまり

庚申の夜に男女同衾することは禁忌だったので、こんな川柳も生まれたのだらう。江戸時代までは、紀年をする場合には干支(えと)が用いられていた。干支とは、十干と十二支の組み合わせのことで六十種となる。十干は、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸で、十二支は、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥で、兩者を組み合わせると、甲子の年から癸亥の年まで六十一日目に同じ干支が巡ってくることになる。庚申は庚(かのえ)と申(さる)の組み合わせであつて、庚申の日は六十一日目に回ってくるから、年に六回、多い年で七回になる。庚申信仰は庚申(かのえさる)の日の禁忌行事を中心とした信仰で、本来は、中国の道教の生み出した三戸説によるものとされている。三戸(さんし)という虫は、人間が生まれると同時に身体の中にいるものと考えられた。この三戸は日夜絶え間なく、その人の行動を監視している。そして、庚申の夜に人間が眠っている間に、そつと身体から抜け出して昇天し、天帝にその人の悪事を報告する。天帝はこれを聞いて、その罪状

によって、重い場合は生命を奪い、また寿命を縮めるというのである。したがって、三戸が身体から抜け出して昇天するのを防ぐために、庚申の日は眠ることなく自心清浄にして、他念なく一心に祈念をすべきであるということになったのである。庚申信仰が日本に伝わって、庚申の行事が行なわれたのは承和五年（八三八年）であるが、当時は御庚申、御庚申御遊などと称して宮中や貴族社会に定着していた。中世になると、守庚申と称して武将たちが参加した。室町時代ともなると、上流社会ばかりでなく、一般庶民の間でも行われるようになった。庚申の信者人口が最も多く、最も盛んだったのは江戸時代である。庚申講はこの時代に始まった所が多く、庚申信仰の特徴の一つは庚申塔の造立である。

鹿児島県の庚申信仰はどうであろうか。県下の庚申塔は約四百基で、九七％は江戸時代造立のものである。このことは、この時代に庚申信仰が盛んに行われたことを物語っている。そして時代が下るにつれて衰退していくが、現在でも庚申講は県下の各地で行われている。

県下の庚申講は、庚申を訓で、カノエサツドン、カノエサイコ、略して、カノエコ、サツドン、カノエノカン

サーと呼んでいる地方（薩摩・大隅兩半島）と、庚申を音で、コウシンコ、コウシンマチ、オコシン、オコシンサアと呼んでいる地方（県中部・北部一帯）とに分けられる。しかし、両地方とも信仰の内容は共通していて、県下全域にわたって、庚申は豊作を祈る神として作神化されていることに変わりはない。ところが、作神化しない、いわば戒律的傾向の強い庚申講が最近まで、または戦前まで存在していた。栗野町北方本村・小屋敷・出水市古市馬場・下大川内・阿久根市山下麓・大口市山野小川内の庚申講である。いずれも、二才教育の修養が目的で、日常の礼儀作法、風紀秩序の反省、部落の公役、農事にいたる生活全般の自治的性格をもつものであった。熊本県球磨地方には約四百基の庚申塔があって、現在郡内の数ヶ所で庚申講が行なわれている。そして、「庚申の晩は人事言うな」「庚申日に出来た児は盗人になる」「庚申児は手が長い。頭が長い」「庚申に生まれた児は疑い深い」「庚申の夜には女にやなべをさせるな」等、特異な伝承を伴っている。庚申と女性との関係は深い。俗に「オコシンサアの餅のごちゃ」といわれるほど小さい餅は庚申講につきものである。牧園町万膳有村部落で

は「コウシンサン」と呼んで年三回庚申講を行なっている。講の座には小餅が二個はいった吸い物がだされ、帰り際には、別に小餅を各戸当り二個ずつ渡される。講の参加者は男女を問わないことになっていて、女性も出会している。だが、この小餅は女性が食べてはいけないことになっていて、特に、未婚の女性は食べると、良い婿がみつからないといわれている。そのほか、庚申様は女嫌いだから、庚申講に女性は出席できないという所もある。三体堂中野部落では年二回行われている。庚申信仰伝播の経過や、どのようにして作神化したのか、その辺はわからない。

# (八) 竜石

竜が想像上の産物ではなく、実在していると考えられていた時代の話である。<sup>(1)</sup>いま高千穂のプリンスホテルの下に展開している山、すっかり造林におおわれ所在も分らなくなっているが、あの頃は一面のスロープ、一面の草原の中に、そびえるようにはっきりと一団の岩塊があった。造林も建物もなかった昔の話である。

この岩塊は、だから何処からでもよく見え、古老はこれが竜の石である。昔天に昇ろうとした竜が、何かの調

子で失敗し、臥竜梅のように空しく地上にのこり、石化したものである。この石を竜石といい、この辺り一帯を「竜石」と呼ぶのだと教えられた。

だからこの附近に明治の頃にできた小学校は竜石小学校と呼び、今のように高千穂とよばれることはなかった。竜石小学校が、高千穂と呼ばれるようになったのは大正十年になってからのことである。<sup>(2)</sup>

注(1) 一八〇四年(文化元年)の十一月に、琵琶湖の西岸にある堅田町の農夫市郎兵衛は、畑を耕しているうちに奇妙な動物の骨を発見した。この発見は、さっそくに、その地域の領主本多侯の耳に入った。本多侯が学者を差し向けて調べさせたところ、それは書物にある竜骨にまちがいないという鑑定であった。本多侯は、竜の骨が発見されたことはまさに吉兆であるとして土地を竜が谷と呼び、祠を建てさせ、発見者の市郎兵衛には竜の姓を使うことを許した。また市郎兵衛には新しく開墾した土地四畝十五歩の年貢を永代に免除して、「私用勝手たるべし」というお墨付きまで与えており、今日なお、当時描かれた竜骨のスケッチが残っている。この骨は象の骨の化石であることが判明したのは七年の後(一八一、文化八年)阿波の小原春造

が「竜骨一家言」を著してからである。然しこの象も自然の歴史の中で位置づけをされたのは、ヨーロッパの進化思想が、明治初年の文明開化のとき紹介せられてから後であった。

(2) 大正十年四月校名改称

九 孝 子 伝

(一) 永 岩 次 郎

今を去る百拾余年前（嘉永年間）飯富神社附近の大園という所（今は田になっている）に永岩次郎という人と老婆が細々と暮らしていた。次郎は農事のかたわら日稼に出る時は母のために薪、水など何くれとなく不自由ないように準備し、冬の寒さ夏の暑さなど気を配り、他家にてふるまわれた菓子餅など食膳に出た物で、母の好物は必ず持ち帰って母の喜ぶのを無上の楽しみとしていた。いつしか母も老衰のため病床に臥するようになり体も不自由になったので次郎は母を背負って御祭や太鼓踊に連れて行って母を喜ばせていた。

或時母の白髪も洗っていた時締方（当時の藩の高級役人）が通りかかり平素の孝行に深く感じて殿様に上申し、賞米数十俵を下賜された。

次郎はこれを私せず、その一部で音川下の泥道に切石を敷いて通行の便をはかった。尚次郎の家は血統が絶えたので、尾谷口の永岩伊之助氏が跡をついだといわれている。永岩次郎の孝子碑が飯富神社の門前に建てられている。

(二) 安 栖 な つ 子、弟 袈 裟 次 郎

水清く湯量の多い安楽の里に安栖なつ子、弟袈裟次郎の姉弟が住んでいた。父新太郎は家計が不如意の上、母と共に永らくの病床生活であったので、この二人が家事一切は勿論、昼夜つきそい父母の看病のかたわら農事に精出していた。貧窮の中から名医を村の内外から頼み高価な薬をつづけたが、其の効もなく母は早く死亡し残った父も起居不自由な身となり、朝夕の孝養をつくすこと前後十余年となった。その孝養が藩主の耳に達して左のような賞米と賞金が贈られた。

一、感 状 地頭、肝付郷右エ門

一、賞米三十石 知政所

一、金子二百疋 地頭副役 重田平四郎

一、金百疋 踊郷分隊長 平山泰介

この賞詞は明治三年十月二日のことであるが、現在安

栖家ではこれら数々の書付と記念の大額が家宝として子孫に伝えられている。

(三) 高橋万左エ門

高橋万左エ門は踊郷持松村の人(今の牧園町字持松)幼時より孝心深く、よく両親に事之其の壮年に至るや孝養の心益々篤く老父母の病重き時、昼夜付き添い看護養生至らざる所なかった。氏の家は笹之段と称する僻阪の地にありて其の部落は大凡人々困窮せる上學問なきを患之相図りて学校を建て己も共に勉学に努めた。其の行状世の亀かんたる旨を以て、明治九年四月十二日、万左エ門四十才の時、時の鹿児島県令より表彰の榮に浴し且つ賞金四円を下賜された。万左エ門には実子なく甥に当る永次郎を養子として現在、孫榮之助の代となっている。

(参考) 表彰状下記の如し

第六十四区 小六区踊郷土族

金四円 高橋万左エ門 四十六

右者大稟孝ニシテ老父宗右エ門六十八年老母モヒ六十六年両親ニ事ヘテ一心孝養ヲ尽ス幼少ノ時ヨリ今ニ至リ數十年一日ノ如ク病氣等ノ節ハ晝夜付キ添ヒ且ツ住所笹之段僻阪ニシテ一帯土民困窮シ文学未開ノ処万左エ門周施

シ五ヶ年前共ニ自力ヲ協セ学校ヲ建設シ殊勝ニ勉強シ渾テ本人行状□中亀鑑トナリ名譽大ニ顕シ候段今般巡ラノ警部ヨリ見聞シ趣旨ニ及ビ奇特ノ者ニ候条為褒賞本行之運下賜

鹿児島県令 大山 経 良印

明治九年四月二十四日

(町勢要覽 昭和二十九年発行より)

(四) 一りん塚

万膳の農村婦人センター入口の路傍に、「一りん塚」と呼ばれる墓がある。紀年はおろか、その名も刻されていないが、何となしに風格があり、いつもさざげられている香花にもやさしい村人の心ねがうかがわれる。今までの墓の由来は知られていなかったが、たまたま称名墓誌に次のような記事のあることが知られた。

一賊塚は、踊郷万膳村にある。洵脇一賊院とよぶ山伏の墓である。年十八、武者修行に出て、甲斐の武田信玄に仕え、宇山無辺助と名のり、各処に功名をたてたが、築城で有名な甲陽軍鑑にある穴山梅雪の手下六人のうちのひとりである。

称名墓誌は文化十一年(今から百七十年ぐらい前)に

鹿児島城下でものされたもので、最近復刻された新薩藩叢書にも入れられている。

この宇山無辺助の名はまた、栗野の松尾城の構築を指導しながら、竣工のあかつきおびき出されて謀殺されたという太田武篇之助という名と酷似しているから、或は同人かと思われる。

またこの称名墓誌には、当時の造士館教授吉田蘭阜の絶句を添えて、この跡への感懐の深さを示している。

人の宇山無辺の墓を賦するをみて

身後の芳名かつて功あり

強梁勇健、膚塵の中

孤碑字なし磨いてみるをやむ

愁いて立てば疎林落日の風

(薩藩叢書(三)より)

## (二) 田の神さあ

頭に米の蒸し器、甑(こしき)のスノコをかぶり、手にはシャモジやスリコギを持った田の神さあが、鹿児島県内の田んぼではほえみかける。田の神信仰は全国にあり、各地とも神社の形をとっているのに、南九州だけでは石像として野にある。

田の神研究をつづける郷土史家は、それには二つの理

由があるという。一つは島津藩の「九公一民」といわれた過酷な農民収奪、第二は彫り易い材料があったことである。シラスに覆われたうえ、多数の武士団を抱えた薩摩藩は徹底して搾った。大昔、蛤良火山や阿多火山の灰が固まってできた、溶結凝灰岩は彫りやすく、農家でも容易に彫れたと言う。

前記のように、九公一民といわれた政策は、農民を苦しめその生活は惨憺たるものであった。米を作る農民が米は食べられず、からいも、粟を常食として、米飯は年に何回かの節句、家作り、葬式などしか食べられず、白飯といわれて尊ばれていた。それで農民は、神にすがって一升でも多くの収穫を願ったのである。

昔は「タノカンコ」といつて年二回、旧暦三月・十月の満月の十五日の夜、郷中の人々が米や野菜を持って当番の家に集まった。当番の家では精一杯の御馳走をつくり、床の間に据えられた田の神像には、顔に小麦粉か米の粉を塗り装を新たに、御馳走を供え、線香をともし、郷中の皆が感謝の意を表し、御馳走をたべて、次の当番の家に「オセロガヤマ」を唄いつつ送って行った。

今はこの行事もすたれたところもあり、残っていると

ころもあるが、町内の各地の現状を調べてみた。

田の神さあは、田の畦に据えつけてあるものと、廻り田の神さあの一通りある。

◆ 持廻り「田の神さあ」

場所・所有者	備 考
横瀬下馬場部落	一月・九月の十四日の夜行う。一月には餅を掲ぎ、九月には握り飯を供えて、次の当番宅まで田の神像を送る。
持松下白崎部落	フランス人形風で、百五十年位前宮崎県から持ってきたものらしい。
三体堂中福良部落	当番の家の床の間にある。
三体堂中郡部落	足のふんばり、顔の表情が実直である。
万膳古屋志部落	ふくよかな顔に、おしろいをぬり、ほほべにをつけ大きなメシゲを持っている。
万膳中福良部落	孫の成長を喜ぶおじいさんの風情がある。
万膳・吉原部落	小柄で素朴で気品がある。メシゲは小さい。毎年一回九月に講があつて、次の当番に送る。
上中津川・健崎	当番の家の床の間にある。大きなバツチヨガサが印象的である。 胸に十字のしるしあり。

◆ 田の畦にある「田の神さあ」

場所・部落名	備 考
折橋・藤田氏宅	段々田のてっぺんに田の神像がある。右手にメシゲを握って、かわいい像である。
中板小屋・下板小屋部落	一月・九月の十四日夜、講をする。
板 小 屋	胸に十字のしるしあり。
上中津川荒瀬越	昔から結婚や新築を招く神として、崇められている。毎年十一月十五日に、講が行われて、抽選で次の座がきまる。
横瀬・湯窪入口	大きなメシゲを持って、落ちついた重みがある。
中津川小学校の上手の田	宝暦十二年（一七六二）四月吉日と刻まれている。今から二一九年前のもので、自然石である。
持松・堅神社の境内	享保二十年（一七三五）七月吉日の銘あり、衣冠束帯の姿は他に類を見ない。町内では最も古く、県内でもその古さは、十番目位に属する。今から二四六年前のものである。
持松・笹の段	堅神社境内の田の神像と似ている。頭がこわれて丸石を乗せてある。
飯富神社の鳥居	崇高な釈迦像の感がする。

飯富神社の参道	小さな祠の中にある。 相当に古いものらしいが、頭は紛失している。
飯富神社前の田	自然石が二つならべてある。 夫婦の田の神か。
田原の小さな広場の隅	だいぶん風化している。文化十一年（一八一四）二月二日の銘あり。今から一六七年前のものである。 ハカマにタスキ姿で、メシゲはこわれている。
下瀬戸口・松下氏宅	俵の上に跨り、稲穂を右肩に、左手にメシゲを持っている。記念碑に彫刻されたもので、大正四年四月四日建設。
麓部落の前田の田の畦道	ウケモチ神社の銘があるので、馬頭観音として信仰されたものらしい。
宿窪田・城ヶ後	ミノ・カサをつけた老人の姿で、大きな自然石に田の神像と、祠をいっしょに彫っている。
万 膳・府 鳥 大型農道下	明和六年（一七六九）の銘がある。今から二二二年前のものである。
高千穂・栗川	

以上町内の田の神を列記した。記載もれのものもあると思うが、南九州の農民たちの心のたたずまいであり、なつかしい造形作品であり、尊い我々の祖先が残してく

れた貴重な文化遺産である。

#### ◆参考までに

鹿児島県が、文化財として二〇個所の田の神さあを指定している。この中で一番古いのは、入来町仲組にある田の神で、宝永八年（一七一）二月吉日、今から二七〇年前のものである。始良郡内では五か所指定されているが、蒲生町漆の田の神が、享保三年（一七一八）で二六三年前で一番古く、加治木町木田の田の神が、明和四年（一七六七）で二一四年前・蒲生町下久徳の田の神が、明和五年（一七六八）で二一三年前・吉松般若寺の田の神が、明和九年（一七七二）・隼人町宮内の田の神が、天明元年（一七八一）で、二〇〇年前のものである。



万膳府鳥<sup>ドリ</sup>の田の神



上中津川横瀬の田の神



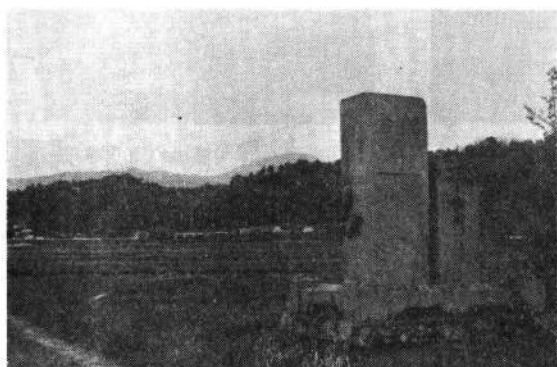
中津川溝口の田の神



芦谷原前田の田の神



霧島西口駅前の田の神



宿窪田前田の田の神



上中津川横瀬馬場の田の神



上中津川荒瀬の田の神



豎神社境内の田の神



妙見・藤田氏宅の田の神



横瀬下馬場部落の田の神

(三) 犬飼の火流し行事

下中津川の犬飼部落では盆の十五日の晩に前を流れる中津川で精霊送りの火流し行事が行われている。

この行事は約三百年の前から行われているもので、昔からのきまりは十四歳の子供頭が、七夕の終った翌日、八日目頃から部落の十歳以上の男の子を集めて、火流しのいかだ作りにとりかかる。

いかだは昔から八尺四方に組み合わせ、馬のクラの下ピラ、豆ガラ、麦ガラなど燃え易い物を高く積み上げて作った。終戦後はモウソウ竹を組み合わせた土台の上に、これらを積み上げて作った。どんどん、たぎぎを燃やして流すので、いかだ作りが始まると年下の者はたぎぎ取りに毎日行かされたものだったと言う。最近では、たぎぎの火の粉が飛んで火事の恐れがあるというので、各家庭から盆ちょうちんを貰って来て、いかだの上にかけ渡し中のロウソクに火をつけて流し、同時にいかだにも火をつける。子供達はいかだの周りを泳いだり、歩いたりしながら、おもむろに下流にいかだを流していく、いかだからは小型花火も何十発もあがる、御精霊様は最後の夜をにぎやかに送られてゆく。ゆらめく火が川面に



火流し（下中津川犬飼）

照り映えて川岸から見物している人々は感動のうちに先祖の霊を送るのである。

火流しはトウロウ流しとも言い他の部落でもしていたが、今は犬飼だけが残っている。昔はお盆がすむと神仏にお供えしたお菓子や果物を、新しく作った木の精霊舟に乗せトウロウに火をともして川に流したところもあった。静かに流れ行く火流しを見ていると幻想の霊界に引

きずり込まれてゆくのである。

### 第十三節 民 俗

#### 一 年間行事

町民は古来きわめて淳朴で祭祀を重んじた。朝起き出ると先ず東方——伊勢神宮、皇居を拍手を打って遙拝し家に入りては家内の神仏に茶飯を供して拝礼し、そして後正座して茶を喫し食事をした。決してみだりな姿勢で食卓に望むことはなかった。水も米も野菜も、天地自然の物はすべて神仏のお加護の物と信じ、感謝して食すべきものと、無言の教育をした。米のめしを粗末にする目が見えんようになつど、と親は子を教育した。

。一月（陸月 むつき）（家内親族友人皆睦まじく）

夙に起き出て若水を汲み、床の間に白紙を敷き、ユヅリ葉（譲葉）ウラジロ（裏白）の上に鏡餅、小餅三つを並べ橙（代々）を乗せて神様に供える。其の他の家内の神仏に小餅ダイダイを供え、農家では農機具にも餅を供え、昨年の苦勞を謝し、本年の活動を祈願す

る。家族揃つて鎮守様に参拝し親類友人宅に年賀に行く。門には松竹と国旗を立て御幣を張り、庭には白砂を撒いて清浄なフンイキを出す。

(イ) 若水Ⅱ古い時代には立春の早朝に汲みとる水を若水といったが、いつの時代からか元旦早朝に汲みとるようになった。昔は桶に小さな注連飾しめかざりをつけた。

（年の始に若水吸めば、万の宝はわれぞ吸みとる）と唱えた。そして桶に白い餅二個を入れ、この水を初茶水として神に献じ初手洗とした。落した餅は串に差して、その年の天気うらないとした。二個とも表を上<sup>うへ</sup>に差されたら兩年、その反対は日年、二つそれぞれ違った場合は半天、半雨と言われた。この餅は乾かして十四日のモチの日に粥に入れて神様に献じた。

(ロ) 若塩Ⅱ昔慶賀の人達が正月二日の早朝に若塩として売り歩いた。各家庭の人達はいくらかの小銭を紙に包んで塩と交換した。その塩は三宝やお膳にのせて床の間に供えた。

(ハ) 六日山Ⅱ生木を切つて来てかまどの上に乘せて、かまどまつりをした。これを山口開けと言つて大

なかしの木を庭先に立てた。

- (二) ホダレ穂垂れ 完全なマカヤの葉を数枚束ね糊をつけてモミガラで稲の穂のようにしてかけて置く。これを苗代を作る時田の畔に立て置き、実のりのよいように祈る。

- (三) ハマ投げ、ネンウチ

正月になれば男の子はハマナゲ女の子はマリ打ちを楽しみ、又タコアゲも盛に行われた。秋の頃になると男子はネン打ちも楽しんだ。

註 ネンとは一尺乃至二尺位の生木の先をとがらして地面に打ち込み相手のネンを打ち倒す遊びで危険を伴った。タコもマリも手作りで今のように買う物はなかった。

- (四) 七草祝 七歳児のお祝いで正月七日に行われた。今年七歳になった子供は母親又は兄姉に伴われて、隣近所の七軒の家を廻って七草粥をもらい歩く。訪問を受けた家ではかゆの外にお祝金を与える。

七歳児の家では親類友人を招いて盛大な祝宴を張る。余りに派手になったので、町教育委員会では合同のお祝を提唱した。各校区の婦人会や自治公民館

が主催して合同祝賀会を催したので、一時は参加者が多かったが近頃又個人別に行うようになった。

- (五) 成人式 満二十歳になった人々をお祝いする。

一月十五日の成人の日に中央公民館で町主催で行われる(外に働きに出て居る人が正月に帰って来るので此の機を逸せず一月の早目に行う)祝辞、記念品贈呈、成人者の感想発表、座談会などが行われるが大変派手になったので、平常服で出席するよう望まれているが男子は背広女子は振袖姿で出席するので簡素化が叫ばれているが、大方県外出稼者で自分で服装は用意して来るので簡素化はむずかしい。

- (六) モツ 十四日十五日はモツと言われている。栗餅を搗いて小さく四角に切って柳の枝にさすと、米餅は白、栗餅は黄であたかも金銀が成り下っているようである。これを家内の神仏の前に供え、墓場にも持って行った。これを芽の餅といって、いつしか十四、十五日をモツと言うようになった。

- (七) ハラメウツ 朶打つ 昨年の正月以降嫁に来た人の所に十五歳以下の男の子達が、木で造った男根を持って行って早く立派な子供を、ハラムようにとの

マジナイでお祝をした。お祝を受けた家では其の男根を床の間に供え、子供達には御馳走をした。

(ヌ) ハッカ正月ハ二十日に餓しい思いをすると一年中餓しい思いをされると言われた。それで当日は仕事を休んで正月の残り物など喰べて腹をふくらめていた。

(ル) 山神祭 山の神を祭る日である。旧正月、五月、九月の十六日は山仕事をする人達が、仕事を休み客を招き酒宴を催す。この日は山の神が狩をする日とか、木種をまく日とか、木を数える日とか又山の神は女神で洗濯をする日とか言われて山に入ることを禁じられている。若し禁を破る人は山で大けがをすると言われている。今は個人的に山仕事をする人が従業員を招いてお祝をする。

。二月(衣更着) (きさらぎ)

寒い月であるので衣を更に着れとの月

鹿児島神宮の初午祭に多くの男女が参拝に行く。

十一日は町内各神社で紀元節祭が斉行される。

各小学校では学芸会がある。

立春の前夜は福は内、鬼は外の豆まきがある。

。三月 弥生(やよい) 動植物が益々生々と栄える。

町内各小中学校の卒業式、高校の入学試験

下旬には彼岸が来るのでヒガンダンゴが作られる。

各家庭とも墓参りが行われる。

三日は三月節句で女の子のヒナマツリがある。都会では、ごうかな雛人形が飾られるが町内では余りない。

。四月 卯月(うづき)

小中学校の入学式、就職者の任地赴任で壮行会がある。

。五月 早月(さつき)

五日は男の子の端午の節句で鯉のぼりを高々と立てる。家庭では邪気を払うために、ヨモギと菖蒲の葉を軒に差す。ちまきハアツマツ、白マツ、クワクワランモチを作られる。

観音祭は四月八日、又五月八日に行われる。牛馬が元気に育つように霧島及寺原の六観音様には参拝者が多く、相撲や踊もあって大変なにぎわいである。又町内各部落でも御祭が盛に行われている。

。六月 水無月(みなづき)

田植の月である。昔は人手であったが今は機械植であるので、たちまち田植も済んでしまう。月末には大祓が各神社で行われる。

七月 文月（ふづき）

七日は七夕まつりで牽牛、織女の星祭、十六日は藪入り。此の月の十六日は虫干をする。

八月 葉月（はつき）

七日は七夕まつり、昔は七月七日に行ったが今は一月後れで行われる。色紙の短冊に文字を書き又女の子は紙で着物を作って長い生竹に提げて庭先に立てて星まつりをした。七日は町内各神社に於いて七夕祭（夏越祭）をする。今年七歳児を集めて茅輪くぐりをして人がたを水に流す。昔は戦没者を弔うために燈籠をともしたので六月燈と言った。（ずっと以前旧暦六月に行った。）

へわくぐり（幣輪）といわれて七歳児にとっては大事な行事である。

祇園祭は商売のまつりである。おみこしを山車に乗せて霧島西口駅前の広場からと、麓地区の両地で斉行された。一時おどりなど特別舞台で行われ盛んであっ

たが今は消えたのは淋しい。

十四日、十五日は一月後れの盂蘭盆会で祖先の霊をまつる。十三日夜は門口に迎火を炊き精霊を迎える。

床の間及仏壇先祖棚の前に新しい提灯をともし供物をして先祖の霊を慰める。昨年盆以後死亡した人の霊はハツジョロと言って特に丁重な取扱をする。県外に出て居る家族も盆と正月だけはと言って帰って来て皆と一緒に墓参りをする。遠く近くの親類縁者と共に霊前にて会食して往時を偲ぶ。

九月 長月（ながつき） だんだん日が短くなって来る。

立春の日から数えて二百十日、二百二十日と厄日が来る。秋分の日の前七日間を彼岸といい、祖先の霊祭があり墓参りが盛んである。

十五日は敬老の日で町内各大字で敬老会がある。七十歳以上の老人を招いて町長が臨席して記念品が贈られ、八十歳以上には年金も交付される。各校区の主催者側は酒肴のもてなしを致し、婦人会などの踊もあって永い間働いて来た老人に感謝の意を表し、更に長寿を誓う。旧八月十五日満月の夜、綱引きが町内各部落

で行われる。十五歳以下の少年達が主催でカシタニセの指揮で部員達がカヤ、ワラ、カズラで青年達の協力で大きな綱を造り、部落員達を呼び集めて月明の下で綱引きをなす。相撲取りも行われる。昔は男の子ばかりの集りであったが、今は女の子も混っている。当夜は各家庭で臼の上に箕を乗せ萩の花やカヤの穂ほか秋の七草を活けた瓶をのせ、カライモ栗の実、柿などを供えてお月様を祝った。非常に情操教育のため良い行事と思われるが、近頃型ばかり残っているのが淋しい。

十月 神無月（かんなづき）

十日は体育の日であるので其の前後に各小学校及中学校の運動会が催される。又町主催の連合の体育祭が行われて各校区の体育協会の選手が競技をきそう。此の月に豊祭―方祭―穂祭が来る。収穫の秋であるので気候も良くなるし、農家では最も楽しい行事である。アマザケ、芋コンニャクを作り、親類縁者友人が集って酒宴が開かれる。毎月の旧二十三夜には、二十三夜待ちがある。殊に正、五、九月の二十三夜待ちは盛大になされた。旧暦は新暦より一月遅いので十月の二十三夜待ちは盛んであった。二十三夜待をする望が叶え

られると言われているので、故郷を離れて他郷に行っている人、又兵隊に行っている家では人々を招いて、酒宴を開き三味線、太鼓で月の出を待った。月が出る到庭に出て、これを拝んで武運長久を祈った。現在はほとんど行われていない。

十一月 霜月（しもつき） 日が短くなり霜が降りるようになる。

十一月三日文化の日を中心にして町公民館では各種団体を集めて文化祭を行う。講演、演芸、各種の製品展示即売会などがある。又此の日町文化に貢献した人々の表彰式もある。

十二月 師走（しわす）

各種団体の忘年会が毎夜のように行われ、旧暦の十一月になると神道を信仰している家庭では、年一回の氏神祭がある。氏を同じにしている人達が主筋の家に集って氏の神、先祖の神、水神、家内のすべての神をまつ。又組合でする所もある。神職を頼んで御幣を新しい物と換え、此の一年間の穢を払い来年の幸福を祈る。祭典後は会食してお互の親密を増し健康を祈る。年末の大事な行事である。

◆ 不特定な行事

1 ホソカンジン（痘瘡勸進）

今はほとんど途絶えて居るが、英国のゼンナーが痘瘡を發明しない以前は痘瘡の患者が出て流行病の爲、これにかかる顔面にデキモノが出来て其の跡が残って見苦しい姿になった。これが流行すると聞くと郷中が話し合つて病氣祈願をしたり、ホソカンジンの一団を作り、一戸から若い人達が必ず入団せねばならなかった。三味線、太鼓を打ち鳴らし若者が変装して踊りつつ他の部落を訪れて、米をもらつて帰り米飯にして食べる。するとホーソーに罹からぬと信じていた。若者達はこれをかえて楽しんで廻つた。

2 庭あがり 農家が秋のとり入れを全部すませた夜は庭あがりとして御祝をした。昔は穀物を広い庭に干して脱穀したので収穫がすむと庭あがりをして夜は家族一同に御馳走をした。先づ自分達が食する前に神様に供え感謝をして外に一膳用意して庭先に「庭太郎どん」と言つて神様をまつた。素朴な農民の心根があらわれて貴重な行事であつた。

3 さのぼり 農民は一作、一作毎に仕事がすんだら「さ

のぼり」と称して御祝をした。殊に田植は大変な労働であつた。田を鋤き返すこと五、六回で雨が降つても牛をたんぼに引き入れて仕事にはげんだ。田植がすむ頃になると人も牛も疲れきつて足先からは血がにじむようになった。植え方も大変で二十名位の人達が田の中に並んで競争で植えた。雨の降る日は大変で身体中、シッポリぬれてしまった。それが自家の田、他人の田と一週間以上も続いた。その田植がすむとホットして「さのぼり」があつた。個人、個人でもあるが、組合で合同でなして慰安日になっている。

語源は「サチのさわり」ではないか。サチと言う「いなだま」をしつかりと田に付着させてもらうために、神にささげた供物を感謝しながら会食することであつたろう。昔はボタモチを作り、野草の交つたシメモノを作つて皆が食べて御祝いをした。現在は耕転機及びバインダーがあつて、昔のように田植も苦しくはないが、農家では年間行事中最も嬉しい行事であり、組合の親密な行事である。

## 二 部落における行事

町内の各部落では、現在どんな行事が行われているのであろうか。五十五年度第一回自治公民館長の研修会の折に調査したものを表にしてみた。回答率六五%で全部落の調査はできなかったが、町内のだいたいの状況はわかると思う。

年中行事	実施している部落名
山 <sup>やま</sup> 神 <sup>かん</sup> 祭 <sup>まつり</sup>	上宇都口・中野下・中野上・下中野・川影・川津原・牧園九区全・板小屋・西下・西上・通山前・荒田・万膳一区・浅谷・持松一区・牧園三区・板小屋・通山前・万膳一区・持松一区・中野上・中野下
庚 <sup>き</sup> 申 <sup>しん</sup> 祭 <sup>まつり</sup>	川影・川津原・牧園九区・通山前・西下・西上・下板小屋・中板小屋・下馬場・荒瀬・万膳一区・万膳三区
田 <sup>い</sup> の神 <sup>かん</sup> 祭 <sup>まつり</sup>	安楽・浅谷・中笹之段・上笹之段・中野上・中野下
火 <sup>ひ</sup> の祈 <sup>き</sup> 念 <sup>ねん</sup>	川影・川津原・元芦谷原・牧園九区・牧園
田植さのぼり	

### ◆ 自治公民館で行っている行事

年中行事	自治公民館名
敬老会	牧園一六区・七区・九区。持松一・二区。中津川一五区・七区・八区。万膳四区。牧園一六区・七区・九区。持松一・二区。万膳一・二区・四区・五区。中津川一六区・七区・八区
区運動会	牧園一六区・七区・九区。持松一・二区。万膳一・二区・四区・五区。中津川一六区・七区・八区
七草祝	万膳五区。牧園一七区・九区
ゲートボール大会	牧園一三区・六区・七区・八区・九区。持松一・二区・三区。万膳一・二区・四区。中津川一五区・七区・八区
十五夜綱引	牧園一三区・五区・六区・七区・八区・九区。持松一・二区・三区・四区。三休二区。中津川一五区・七区・八区。万膳一・二区・四区
ソフトボール大会	中津川四区

日 待 祭	観 音 祭
七区・上宇都口・中野上・中野下・下中野・浅谷・持松一区・万膳三区	中津川六区全
	深谷・戸ノ迫・上荒田・下荒田・万膳三区

### 三 牧園の方言

鹿児島県の方言は、武家政治七〇〇年の間、島津氏の統一権力に属していたから、地域的に多少のニューアンスはあっても、大体同じような方言圏をなし、他県に見るような雑多性のないのが特徴であると言われている。地方によっては、アクセントやなまりで、その地方独特のものもあるようであるが、牧園で使われている方言は、県内で一般に使われている方言と同じで、牧園独特の方言はあまりない。

いまでは、標準語が広く使われ、方言はだんだんすたれつつある。ふるさとの方言で育った者にとって、その方言を愛するのは自然である。鹿児島県の方言には、敬語や古語も多く含まれていて、文化財としての価値も大きい。永く保存していきたいものである。

方言の中には、物がなくなつてすたれてしまった方言もあり、また、今ではもう全然使われていない方言もある。

たとえば、のん(蚤)、しため(しらみ)、キセイ(煙

管)、さしげた(高下駄)、トンコツ(きざみ煙草入れ)、はんづ(水がめ)、ぎったまい(ゴムまり)、ずいや(料理屋)、せっちん(便所)、サコンタロ、などがある。

#### あ

あとじい  
あぐっちゃつ  
あまかせしんまっ  
あけつなっ  
あせくつ  
あっぱつた  
あとぜつがすい  
あつたらし  
あつなか、あつね  
あとんけや  
あばつきらん  
あいたけ

#### い

いじくつ  
いっかすい  
いっもはん  
いっしれんこつ  
いっぐわざえ  
いっぢやがつもなか

かかと(踵)

口を広く開く

大暴風雨

期待が外れる

掻きまわす

てこずる

後から考えてゾットする

惜しい・勿体ない

あぶない

この前の時は

処理ができない

ある限り全部

まぜくる

言い聞かす

いきません

余計なこと

恐ろしい

一文の値打もない

いみし  
いかなこて  
いけんしてん  
いけんでんこげんでん  
して  
いけんもこげんも  
いっきんこめ  
いっこつさつごつ  
いっでんかいでん  
いっつとどま  
いっぺこつべ  
いんまさつ  
いっつとすい  
いたぐら  
いっこぼす  
う  
うじよて  
うつぽがし  
うつとけた  
うつすい  
うてあわん  
うつたいたい  
うどばれ  
うづつ

きびしい・烈しい  
まさか  
どうしても  
どうにかこうにかして・どうでも  
こうでもして  
どうにもこうにも  
早く（一騎も来ぬまに）  
至るところで・次から次に  
いつでも  
いつでも・少しでも  
あっちこちに・一生けんめいに  
先刻  
絶えず・ひっきりなしに  
あぐら  
湯水をこぼす  
大世帯  
大損  
うち倒れた  
捨てる  
かかりあわない・相手にしない  
喜びが重なるさま  
むくみ  
うずく・痛む

うつちやめ  
え  
えさつすい  
えじ  
えしえんこつ  
えかげんに  
えのこそくい  
お  
おつ  
おつきやがつ  
おつとい  
おてちつもした  
おらつ  
か  
がいたくつ  
かかいよな  
かかじつ  
かずん  
かたぐつ  
かたすつ  
かっごんほかじやつた  
が  
かぶしつ  
かめやしな

中止  
挨拶する  
ずるい  
余計なこつ  
いい加減に  
家の小修理  
落ちる  
起き上る  
奪い取る・盗む  
安心しました・ホットしました  
叫ぶ  
叱りつける  
関係するな  
引つ掻く  
嗅ぐ  
担ぐ  
仲間に入れる  
思いもかけぬこと・予想外だった  
叱る  
かじる  
かまってくれるな

かんとくつ  
かたいぐち  
がつつい  
かつとしゅ  
かかあんねこつ  
かんじやつごろ  
がんたれ  
き  
ぎっしい  
きぼせ  
きつしやなか  
きつざまな  
きどつな  
きばつ  
ぎつたまい  
きもがきるつ  
きかんぼ  
きけもん  
ぎいぎいも  
く  
ぐぜこつ  
くそひつかぶい  
くつつ、くつつ、しつ  
おつ

噛みくだく  
交互に  
全く・丁度・ずばり  
大方・あちこち  
途方もないこと  
節約する人・・けちんぼ  
役立たぬ・間抜け  
いっぱい  
心細い  
きたない  
意気地ない  
殊勝な  
頑張る・氣張る  
ごむまり  
思い切りがよい  
云うことを聞かぬ奴  
敏腕家  
ぐるぐる廻る・きりきり舞  
ぐすぐすとくどいことを言う  
いくじなし・臆病者  
食うや食わずの窮屈な暮しのこと

ぐわんたれ  
ぐらし  
くいめだい  
け  
けすいぼ  
けなぶい  
けころだ  
げしかなわんこつ  
けつさるつ  
げった  
けつごんす  
こ  
こじつくい  
こらしもた  
こらのさん  
ごろいと  
ごっそい・ごそつ  
ごんごえつ  
ここいやし  
ごべーさあな  
こそわい  
こしたゆつ  
こだくつ

安物・下等な物  
かわいそう  
来ないだらうよ  
生意気な奴  
人を馬鹿にする  
転んだ・つまずいた  
力のおよばぬこと  
腐る  
変種した  
尻の穴  
小男  
これはしまった  
これはたまらぬ・これはいかん  
ついに・とうとう  
すべて・あるだけ  
大きいお灸・子どもを叱りおどす  
時キカントゴンゴエツヲスユツド  
心やすい  
失礼な  
くすぐったい  
料理する  
小切りにする

ごったん  
こなす  
こぼむつ  
こらゆつ  
ころつ  
ごろた  
こだんきた  
こじれつ  
さ  
さばけもん  
さんもごんも  
さんとうさがい  
さんによ  
さしげた  
さつぱつ  
ざまあなか  
さいがも  
さかしんめ  
し  
四の五のゆつ  
じつどえた  
じもねこつ  
しんそののねこつ

板張りの三味線  
いじめる  
片付ける  
我慢する・こらえる  
転ぶ  
丸太  
小才のきいた  
こじれる  
手際のよい人  
誰でも彼でも  
時期はずれ・ひどくおくれた様  
計算  
高下駄  
肉がこわばる  
みつともない  
ぜひともし・無理やりに  
さかさまに  
なんとでもかんとでも云う  
あきあきするほど食った  
申し訳ない・辞もないこと  
えこひいきのないように

す  
ずいや  
すんくじら  
ずしただつ  
すすくつ  
すもつ  
すわぶつ  
すでぶい  
ずつねわろ  
すもいくせ  
ずんだれ  
すつからかん  
すつたい  
ずるつ  
せ  
せしこた・せしこ  
せずつ  
せむつ  
せつなか  
せつべ  
せつちん  
せくつ  
そ  
そびつ

料理屋  
隅っこ  
ずれ下る  
煤ける  
くすぶる  
しゃぶる・口つけする  
何も持たずに・素手振い  
ずる賢い・油断のならぬ奴  
布など焦げくさい  
なりふりかまわぬ  
からつぽ  
すつかり  
全部・すべて  
あわてた・忙がしく振舞う  
催促する  
攻める  
せつない  
精いっぱい  
かわや(廁)・大便所・雪隠  
はにかむ  
引く・引つ張る

そねばっ  
そっせなこっ  
そがらし  
ぞっぶい  
そげんゆたち

た

たましきつ  
たまがっ  
だまかす  
たまっ  
だれっ  
たっちんこめ  
たかんばっちょ  
ダンがさ  
だつがあかん  
だつもね

ち

ちよかつと  
ちよっしもた  
ちよろまかす  
ちんがらっ  
ちかやね  
ちつとやそつとで  
ちよくらけっ

そり返える  
変なこと  
たくさん  
ずぶぬれ・びっしより  
そう言っても

気の利いた人  
驚く・びっくりする  
だます  
長持ちする  
疲れる  
直ちに・すぐに  
筍皮製の傘  
洋傘・こうもり傘  
埒があかぬ  
だらしのない

不意に・ちよつと・うっかり  
しまった・失敗した  
ごまかす  
こつばみじん  
支障はない  
大概なことでは  
茶化する・からかう

っ

つっこい  
ついだん  
つんげし  
つまし  
つるんたらん  
つんもい  
つがあんねこつ  
つぐろじん

て

てしけはしけくらわん  
てんがらもん  
てのんいく  
てがまし  
てげてげ  
でしなこつ

と

どそつ  
どんじ  
とつまらん  
とつかやす  
とぎめなケガ  
とつどこやね  
とっけんね

大便所

越中ふんどし・ツイダンナ  
ひきつづいてそのまま・すぐに  
けちけちする  
やつとこさで足りた状態  
水など漏れ出る  
とんでもないこと・予期しないこと  
皮膚の内出血・唇の紫色

箸にも棒にもかからぬ  
お伶俐さん・あばれん坊  
連れだつて行く  
手出しが早い・うるさい状態  
ほどほど・いいかげん  
大事なこと

ろうそく  
大きな木櫃  
あてにならん  
ひっくりかえす  
思いがけないケガ  
とりえはない・取るところはない  
意外な・常識はずれ

とほんねこつ  
とめくや、うたん  
どへ  
な  
なんとんしれん奴  
なつちやらん  
なんかつ  
なんでん  
なめつ  
ないどこいじゃごわは  
ん  
なんちゅあならん  
ないすつとよ  
ないすいもかいすいも  
なつぐれ  
に  
にぎい  
にっぎやけ  
にくわさつ  
にげ  
ぬ  
ぬつきやん  
ぬしただい  
ぬぶつ

途方もないこと・見当ちがい  
收拾のつかないこと  
げつぶ  
ろくでもない奴  
間違っている・なっていない  
もたれる・よりかかる  
何でも  
なめる  
何どころでない・ほかのことはか  
まう余裕はない  
何とも言いようがない  
何をするのか  
何をしてにもかにをしても  
泣きながら怒る・泣き狂い  
に  
欲深い奴・けちんぼ  
賑やか  
にっこり・にくわさつ笑う  
にがい（苦い）  
間まのぬけた  
軒のきしたたり・雨だれ  
うめる（湯に水を入れぬるくする）

ね  
ねしゅがよか  
ねまつ  
ねんじゅ さんじゅ  
ねいぼ  
の  
のん  
のさつ  
のんぼい・くんだい  
のさん  
のんくやす  
は  
ばかすたん  
はらかつぽ  
ばつち・でこんばつち  
はあつだめ  
はんぎい  
はまなげ  
ばこ  
ばたぐろ  
はめつくつ  
はらぐれ  
ばるつ

本心が良い  
腐る  
年中・一年中いつでも  
そばと芋のねりもの  
のみ（蜜）  
授かる  
あつちこつち・登ったり下ったり  
こらたまらぬ・困る  
飲んで身代をつぶすこと  
馬鹿野郎  
怒りんぼ  
ももひき（百引）、ずぼん下  
裏溜め  
牛馬の飼料入れの桶  
木の輪をころがして双方から打ち  
返す競技  
奪い合う  
ばたばたする・あばれる  
精出す・はげむ  
じょうだん  
ばれる・露見する

はんとくつ  
 ぼったいいかん  
 はらがきいうえつ  
 はんづ  
 はいと  
 はたつ  
 はしと  
 はちちく  
 ひ  
 ひんじやごろ  
 ひよこし  
 びんだれ  
 ひえくせ  
 ひしてごし  
 びびんこ  
 ひったまがつた  
 ひっちゃえつ  
 ひわるつ  
 ひんぢい  
 ひとばつちいもせん  
 ひめぐい  
 ふ  
 ふゆしごろ

つまずいて倒れる  
 どうにもならぬ  
 腹がたつて  
 水がめ  
 いつも・常に  
 急に  
 力強く・しっかり  
 行つてしまふ  
 貧乏人  
 火吹竹  
 足のついた木製の洗面器  
 生臭いにおい・生魚のにおい  
 一日置き  
 肩車  
 びっくりした・驚いた  
 落ちる  
 ひび割れる  
 肘(ひじ)  
 まんじりともしない・まばたきひ  
 とつもしない  
 柱磨  
 怠け者・不精者

ぶんと  
 ぶつ  
 ふがまつ  
 ふてこつゆう  
 ふんたくつ  
 ふけんねこつ  
 ぶちほ  
 ふつきやつめ  
 ふてめおた  
 へ  
 へんもへんもすい  
 へつ  
 べぶ  
 へがむつ  
 べつぢゆあごあはん  
 ほ  
 ほつけもん  
 ほのなかわろ  
 ほこれ  
 ほたいうつつ  
 ほたいなぐつ  
 ほっじや  
 ほとびい

全然……だめだった  
 泡  
 ほつべた・横づら  
 小言をいう・ぐちを言う  
 踏みつける  
 有りそうもないこと  
 不調法・不器用  
 拭き掃除  
 大へん難儀した・大損した  
 前をうろろする  
 肩こり  
 へ牛  
 減らす  
 別条はない・差しつかえない  
 大胆な人  
 あてにならぬ奴  
 ほころび  
 売つてしまふ  
 投げとばす  
 駄目だ  
 ほとびる・水や湯に長くつけてい  
 るとふやけること

ぼばれ  
 ほめつ  
 ぼぬれ  
 ほがね  
 ほおなつ  
 ほがす  
 ま  
 まくじい  
 まさけ・うたん  
 ましくら  
 まぜくい・たくつ  
 まちつと  
 まってこつて  
 まねけん  
 み  
 みごえ  
 みたかかい  
 みとなしころ  
 みとんね  
 みのきれ  
 みはがす  
 みよざまんなか  
 みつきい  
 みと

お多福かぜ  
 むし暑い  
 むぶぬれ  
 法がない・理窟に合わない  
 なげく・くよくよ泣きごとをいう  
 穴をあける・ヒツボガスも同じ  
 かきみだす・かきみだされる  
 間に合わない  
 真正面  
 混ぜちらす・混乱させる  
 もうちよつと  
 待ちあぐむ・待ち遠い  
 時々  
 難儀である  
 見かけ・外見  
 みつともない奴・不潔な人  
 見つともない・汚ない  
 身内・身より・親類  
 見通す  
 見るにたえない  
 絶交すること  
 夫婦

む  
 むいね  
 むくろいき  
 むかすね  
 むけつら  
 むけめ  
 むでなやつ  
 め  
 めかかつ  
 めしげ  
 めぐいば  
 めつてなごあはん  
 めんどん  
 も  
 もえ  
 もげ  
 もつそな  
 もつちやぐつ  
 ものだけはつちよん  
 ものめい  
 もへ  
 ももじい

可哀想・無理とつかう時もある  
 体ごと・猛烈に  
 向うずね  
 向うづら・顔の正面  
 出迎い  
 たよりない奴  
 目にかかる・見つける・目につく  
 しゃもじ  
 めぐり棒・連枷・ぐるぐる廻して  
 穀物を落とす棒  
 めつたにない  
 面(鬼の面)のような人  
 模合・たのもし講  
 あくどい甘さ  
 猛烈な  
 持ちあげる・人をおだてる場合に  
 も使う  
 腫物のたくさんできている人  
 神詣り  
 最早・早くも  
 もみくぢやにする

や

やせぎつ

やせひぼけつ

やつがね

やちやこん

やんめたる

やまおこ

やんきも

ゆ

ゆくさ

ゆつつらいと

ゆほで・しほで

よ

よいなこて

よのよして

よいけつ

よのいもて

よかあんべ

よつこつ

よんごぎね

よんごひんご

やせた人・ヤセギツチョとも言ふ

やせこける

わけがわからぬ・しつかりしてない・役がないが、もとの言葉

ぼおつとして何も知らぬこと

病氣をしている人

山矛(ほこ)・丸木でつくったにな

い棒・わら束などをかつぐ

しゃにむに・あくまでも

ようこそ・良くこそ

ゆつたりと

言い放題・仕放題

ようやくのことで

一晩中・夜通し

引返す・ふりかえる

夜になる頃・夜の入りもと

良いあんばい・よい気持

寝ころぶ

横ねちをきかす人・さからう人

真直でなく横に乱雑に曲っている

様・ヒンゴがおもしろい

よつごろ

よも

わ

わがえ

わざい

わつぜえ

わやつ

われこつぽ

ん

んだもー

んだはら

んにゃんにゃ

欲ばり

猿

自分の家・我が家

恐しい・イッダグザエも同じ

ひどく・大変に

じようだん・おどけ

悪いことをする坊や・あばれんぼ

女の人が感嘆した時発する言葉・

ンダモンターンとも言ふ

あらまあ・おもに、女の人が驚ろ

いた時に発することば

これは男の言葉で、やはり感嘆し

た時発することば

ホーとか、ヤレヤレとか、ソウ

カソウカとか広く使われる。

また、いやそうじゃない、という

時も使う。その時は、ンニヤとだ

けいい、しかも発音を、みじかく

言う。

四 俚 諺

俚諺とは、「世間に広く行われることわざ」と辞典にある。私たちの祖先が、いろいろな体験から言いだしたことであろうが、これを通して祖先の生活や考え方を知ることができる。すでに迷信として、しりぞけられている諺もあるが、今日われわれが生活していく上に、実にながった教訓的なものが多い。われわれの周囲で、日常使われている諺を集めてみた。

(気象・農事)

暑さ寒さも 彼岸まで  
 朝焼は雨 夕焼けは晴  
 木の葉が光る時は 雨前  
 夜止んの雨は 三日うち来つ  
 梅雨や 雨七日 日七日 風七日  
 梅雨の夕映え  
 十月の裸日和  
 女だまかし(女に、早く冬仕度をせよの警句)  
 岳々は雪 下々は黒ジョカ

一種 二肥 三作い  
 彼岸過つの 麦の肥は効かん  
 遠か上田よつか 近つの下田  
 雪年や 豊年  
 ゴゼムケとシオトシ(取入れ)は、夜のへらんごたい  
 かん  
 竹に実がなれば 飢饉年  
 雨瓜 日茄子  
 出穂見て二十日 出揃て二十日  
 木六 竹八(木は六月、竹は八月が適伐期)  
 木元 竹裏(木は元から、竹は末から割れ)  
 八十八夜は 地の内(大豆の種子まき)  
 柿の葉に 三粒包んがなつ時が時期(大豆の播種)  
 二百十日は 地の内(ソバの播種)  
 ほこれゾマ  
 種苗は タダで貰うな  
 足形は田の肥料  
 梅伐らん馬鹿、桜伐い馬鹿  
 梅は叩け 柿やつん折れ(こうして実を取れば、来年はまたたくさんなる)

谷杉、岡松（杉や松の植林の適地）

野菜も 半世帯

（処 生 訓）

若けうつの難儀は 買てでんせよ

難儀ん時の気張い

大取いよっか 小取い

魂<sup>たまし</sup>使用<sup>し</sup>どつ トンコチャ下げ道具

ビンタ下げにや ゼンないらし

言こちや明日云え うんめもんな今夜食え

ビンは結てん 人事ちや云な

寺は云てん 坊主や云な

一方聞て 沙汰すんな

人ん口には、戸は建てられん

モノゴチャ堅云え 酢味噌はゆるせ

人ん うわさも七十五日

火のなかとこい 煙は立たん

人は人中 田は田中

老人と金釘や ひっこんだうえはなか

世ん中 色気と血の気んなかたおらん

嫁女貰れは、親貰え。嫁女は親見て貰え

鬼も十八 番茶も出花

生つ別れにや嫁てん 死ん後にや嫁つな

嫁に行つた娘が木戸を通つたぶんで、世帯が潰るつ

小糠三合あれば 養子行つな

嫁女ん仲人や 下駄を三足踏んくやす

仲人つすいよっか 逆立つせえ

量と嫁女は 新かほどよか

コツテ牛や死んでん 前田は荒れん

腹は立て損 怪気は し損

短気は 損気

先勝や 糞勝つ

ころざしや ニラン葉

お茶と情は 濃い濃いと

義理と張や 生爪をおけてんせえ

わが子は 荷にやららん

持たん子にや 泣かん

孫頼んよっか 杖たのめ

腹せかん子は 胸がせつ（わが腹を痛めん子は、いろ

いろ心配をして胸を痛むつ）

親下男 子旦那 孫ハチラツ（乞食）

子は親ん 鏡

親ん思な 子せえ

親ん意見と茄子の花は、千に一つのあだもない

キッゲと、マッゲ（間違い）はあいもんじや

冷焼酎と 親ん意見な後からきくつ

二十過ぎてからん親ん意見と、彼岸過ぎてからん麦の

肥は効かん

親類は、二從兄弟づい 三從兄弟は見離せ

遠か親類よっか 近つの他人

馬鹿と 鉄な使けよ

後家<sup>ごけ</sup>にゃ花咲く 男<sup>お</sup>やもめにゃウジが湧く

スヨ（長男）ドンドンに 二男魂

病弱八年

腹八合い 病氣なし

三味線の無か家ああってん 琴（事）ん無か家は無か

有いごつして無かとが銭 無かごつして有つとが借錢

わが家<sup>や</sup>ん米ん飯よっか 隣の麦の飯

仕事<sup>しごと</sup>ちや小皿<sup>せし</sup>で 飯<sup>めし</sup>やドンブイ

大釜<sup>おがま</sup>ん飯 小鍋<sup>こなべ</sup>ん汁

山尻<sup>やまじり</sup>いの カライモン飯

はじめチヨロチヨロ 中ドンドン 子どんが泣てん蓋

取んな（飯をたく時の火かげん）

招宴<sup>しょうえん</sup>は一番招宴 風呂は二番風呂

ダレ（疲れ）馬ん 水クレ（飲み）

屁はひつてん ウソひんな

盗人<sup>どろ</sup>とな付つ合てん ウソヒイゴロとな 付つ合な

男は三年に片類（男はガラゲラ笑うなの意）

泣こかい跳ほかい 泣こよっか ひつ跳べ

猫なで声い 油断すんな

三つ子ん魂や 百づい

戦見て矢作い 盗人見て縄ね

かからん蜂にゃ刺されん 渡らん河にゃ 流されん

よかもん食て 油断すんな

銭取い役目 死ん役目

借つ時のえびす面 戻すつ時の鬼面

立つちよい者な 親でん使え

立つちよつと 馬牛つなつど

アマメが フを笑う

魚ん番に 猫

いかん時や 押つされ

足が四十八本あってん ムカデも転つ  
奥歯い 物はすんだよな 物言

# 五 本町に在る薬用植物

(大体において葉や根をかげ干しにして  
煎じて吞むか、局所につける)

いちじく 緩下剤 いぼ清血剤 痔疾  
うめ 黄痘 鎮咳祛痰 風邪  
ざくろ 下痢止 コシケ 条虫駆除  
なんてん 咳止 吐瀉止 中風 咽の腫物  
もも 小児アセモ  
だいたい 健胃剤 発汗剤 フケ落シ  
しゃくやく 婦人病 解熱 腹痛 腰痛  
たんぼぼ 緩下剤 便秘 胃病  
にんにく 肺病 コレラ 寄生虫予防  
吐血 吐瀉 肝臓病  
はこべ 盲腸炎  
げんのしょうこ 下痢 はれものを洗う  
どくだみ 胃病 皮膚病 アセモ 毒下し

おしろいばな 頑解  
ききょう 祛痰 肺病 其の他胸部の病  
からすうり 便通過多 胃腸の熱 鎮咳祛痰  
月経不順 化粧水  
おおばこ 婦人病 花柳病 胃病 百日咳  
痲氣 赤痢 利尿  
ゆきのした 小児ひきつけ 耳の病  
ちようせんあさがほ 腫孔 喘息煙草  
せんぶり 健胃剤  
ふき 切傷  
あさがお 下痢 リユウマチス  
ぼたん 関節炎 解熱 月経不順  
よもぎ 咳の諸病 もぐさの材料  
やまごぼう 利尿剤 腫物 脚氣  
いのこづち 利尿剤 通経 産前産後腹痛  
ほづづき 寄生虫 解熱 通経  
つばな 解熱 喘息 黄痘 糖尿病 利尿  
おみなえし 腹痛 発汗剤 百日咳  
吐血 産後の薬

## 六 俗 信

いつの時代にか私達の祖先が、このような事を言い、信じる人が居たり信じない人が居たりしたのである。この中には今もなお言われ実行されている事もある。一口に迷信と言えず風俗習慣と名づくものもある。いずれにしても昔の人の暮らしの、或は心の一面にふれてなつかしい。

俗信は主として古代の信仰や呪術が宗教にまで高められることなく、民間に退化残存したものの又宗教の下部的要素が、民間に脱落し退化沈滞した広義の信仰慣行で組織をなさない、雑然たる呪術、宗教的心境現象である。

俗信のうちには現代の科学知識からは不合理なものが多く、それらの中には社会的には、はなはだしい実害を及ぼすものもある。それだけを迷信とよぶ。俗信は昔の人の人生観や信仰の変遷をうかがう貴重な素材として受けとるべきである。(俗信の定義は民族学辞典による。)

左に今も唱えられている、いくつかの俗信をかかげる。

鳥がなくなると不幸がある。

家の上を鳥が鳴いて通るとその家に不幸がある。

軒先につばめが巣を作ると良い事がある。

ふくろうが夜鳴きすると不吉、人が死ぬ。

めんどりが鳴くと不吉になる。

まよい猫が入りくんで来ると幸福になる。

猫にえびを与えるとなんぼになる。

猫をいぢめるとぜんそくになる。

盆の頃のとんぼには人の霊が乗っている。

朝、くもが出て来ると良い事がある。

くもが昼降りて来ると悪く夜降りて来ると良い。

昔話を昼語るとねずみが小便をひっかける。

亀に喰いつかれると雷がならなければはなさない。

柿の木を薪にすると馬が死ぬ。

床の下の方を喰べると一寸法師が生れる。

棕櫚の木が軒までくると不吉になる。

椿の花を神様に上げてはならない。

女がたこを喰べると手の八本ある子が産まれる。

みかんの二袋くっつけたものを喰べると双児が産ま

れる。

黄味の二つある卵を喰べると双児が産まれる。  
米の飯をすてると目が見えなくなる。

珍らしい物を神前に供える前にたべると口がゆがむ。

みそこしをかぶるとできものが出来る。

いろりをきたなくすると病人がたえない。

土用の丑の日にうなぎ、川魚をたべると薬になる。

その日に温泉に浴すると一年中元氣である。

み、うま、の日に田植をするな。

地火の日には植え物をするな。

友引に葬式をする不幸が重なる。

三りんぼうに家の棟上げをする火災になる。

悔みには自分の生れた日に行くな。

山神の洗濯日は十六日だから山仕事は休む。

盆の十六日と正月十六日は地ごくの釜のふたの開く

日である。

耳の大きい人は長いきする。

猫が顔を洗えば天氣が良くなる。

ふくろうが鳴けば翌日は天氣がよい。

頭が痛むと翌日は雨となる。

三毛猫の雄が生れると幸福が来る。

こんにゃくの花が咲くと不幸になる。

幸運の人の葬式の日が天氣が良い。

遠方に旅立つ時二寸角の紙に、賦の字の、のない字  
を書き床の間のナゲシにはりつけ、帰ってから、  
を書き入れよ。

火事の時女の腰巻を振れば延焼しない。

簪に手拭をかけさかさにして置くと長居の客は帰  
る。

雷のなる時仏に線香を立てると落雷しない。

釘を踏んだ時カンナでたよくとよい。

初物は水神様に上げるつもりで川に投げこめ。

茶柱が立つのは良いしるしである。

閏年に墓石を立ててはならない。

大黒様には赤い花をあげるな。

死人の着物は三人で縫う。

人の股の下をくぐると丈が伸びない。

雉が鳴くと地震がある。

東側に便所をたてると家はつぶれる。

東北に分家をたてると本家はつぶれる。

傘をころがしながら歩くと馬鹿になる。

人が溺れて死ぬのはカッパにとられたのである。

葬式の時霊前に供えた御飯は棺といっしょに墓に埋めよ。

にわとりは四羽または八羽飼ってはならない。

六という字はロクでなしだから悪い字である。

葬式に履いて行った草履をそのまま履いて神社詣でをするとは怪我をする。

女が木に登ると其の木は大きくならない。

女が遊びに来ると其の日は客が絶えない。

二人の子供のお祝を一緒にすると一方が死ぬ。

元旦の夜富士、たか、なすの夢を見ると其の年は運がよい。

牛に追われる夢を見るとよいことがある。

牛の角で突かれる夢はよい。

夜明け前に見た夢は当るが、それ以外の夢はさかゆめである。

人が死んだ夢を見ると子供が産まれ、子がうまれた

夢は人が死ぬ。

火事の夢を見ると酒宴あり、酒宴の夢を見ると火事

がある。

梨や柿が沢山実った年は大風がある。

箒星が出たら戦争がおこる。

## 七 町内で歌われている代表的な歌

### 1 大津絵節

はるばると、長の旅、わが土地離れて、親子づれ、道も、はかゆかぬ、女の旅なれば、富士のけしきは、初雪の、いるふるそでは、むすめざかり、かようおかるは、御代の町、小波が心はいそいそと、旅の思いを、ふみわけて、母親が夫のたましいを、もろこしに、いきてものにて、旅をする、山科さしてぞ、いそぎ行く。

### 2 ヤッサ節

ヤッサ節なら、しゆたこつぶれ（尻高く）

前のムタ田が腰かゝる

ヤッサ床取れ、枕はいらぬ

たがいちがいの腕まくら

### 3 すもう取節

4

すもはすんだすんだ すもとやもどせ  
後に残るは、土ひゅ（俵）ばかり

おはら節

見えた見えたよ、松原ごしに

丸に十の字の帆が見えた

花はきりしま煙草は国分

もえて上るは、さくらじま

雨の降る夜は、おじゃすなとゆたどん

ぬれておぢやれば、むぞござる

雨の降らんのに、草牟田川にごる

伊敷原良の、けしよの水

デコン（大根）ばたけで、げんねこつしやんな

人が見ちよつど、われもんど

月のちよいと出を、夜明けかともて

さまを帰して、気にかかる

かはいそうだよ、白歯で身もちや

親のゆだんが、今見えた

ハンヤ節

ハンヤハンヤで半年しや暮れた

後の半年しや寝てくらす

6 神舞の歌

。きりしま

ハンヤハンヤで今朝出た船は

どこの港に着いたやら

「今来た、にせどんよかにせどん

相談かけたら、ハッチコソナにせどん」

(一) 霧島はいくせの神のおわすれば  
これがきりしまと申すなり

(二) 霧島をながむれば  
霧か霞かかすかに見ゆる

(三) 霧島はいざなぎいざなみのみこともちて  
天のさかほこさしおろし

。たちからをのみこと

(一) 神のまゝ神のみちをふむときは  
向うあくまもば——らとちる

(二) われこれ手力男のみこととは、わがことなり  
やいての神は十万五千人の力をえたる神なれば

われこそ十万八千人の力をえたる神なれば  
天の岩戸をさくさんにひきやぶり

おしやぶよりも正ぎよもおがません。

7 四方立歌

(一) 春三月やなぎさくらに ふちの花  
うぐいす きぎすひばり めをなく  
おおこれも東方は むとくの神と  
げんしてさうらう

いかであくまや来るべき

(二) 夏三月うづきうのはなぢうきたつ

朝かりがねに うづらみよなく

おおこれも東方は かとくの神と

げんしてさうらう

いかであくまや来るべき

8 十五夜に歌うニオ（青年）歌

(一) 橋の下からうの鳥がえぶなくわえて飛ぶ心

イヅレオキニハ

(二) 様は涼しのすみ小袖ひとり心のうらみしや

イヅレオキニハ

(三) 今宵ばかりのうで枕あすは舟路のかちまくら

イヅレオキニハ

9 霧島小唄

(一) 春よ春々 霧島山の 峰にゃかすみの薄衣

裾の三里は山桜 天の逆鉾逆鉾さ

春の霧島なつかしや

(二) 夏よ夏々 霧島山のつつじや真盛りどの山も

香る新緑夏知らず 天の逆鉾逆鉾さ

夏の霧島なつかしや

(三) 秋よ秋々 霧島山の すすきやなよなよ誰まねく

夕日火の山紅葉燃ゆ 天の逆鉾逆鉾さ

秋の霧島なつかしや

(四) 冬よ冬々 霧島山の 峰にゃつららの雪の花

麓栄之尾の湯の香り 天の逆鉾逆鉾さ

冬の霧島なつかしや

八 暦の知識

(一) 十干と十二支……えとのはなし……

子・丑・寅……十二支は年賀状の季節になると、さか

んに活躍する。あなたは何年、と遠まわしに年令をたずね

たりするときにも利用されるように、年をあらわすこと

ばとして知られている。しかし、そればかりではなく、

時刻や方角をあらわす場合にも使われていた。例えば

「草木もねむる丑三時」といえば、丑の刻を四等分した第三番目の時、つまり午前三時から三時半をさし、「正午」といえば午の刻の中心、つまり昼の十二時をさすわけである。「子午線」は、子（北）と午（南）を結んで頭上を通る線であり、「都の巽鹿ぞ住む」の巽は、辰と巳の中間の方角、つまり東南をさす。

ところで、「ひのえうま」のように、十二支の「午」の上に「ひのえ」などという語が加えられた表現を聞くことがある。このひのえというのは、甲・乙・丙……とつづく十干の第三番目で、おなじ午年の人でも、昭和五十三年生まれならば戊午、ひとまわりさかのぼった昭和四十一年が丙午、そして二十九年が甲午というように、十干と十二支を組みあわせて呼ぶのが正式だった。十干と十二支を組みあわせると、六〇通りの組み合わせができる。そこで、六十一年目に生まれた年と同じ組み合わせがめぐってくるわけで、これが還暦である。

年はかりでなく、日も何日というかわりに十干・十二支の組みあわせであらわした。しかし、この数え方はやっかいなことなので干支順位表というのができている。

十干

甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸
きのえ	きのと	ひのえ	ひのと	つぎのえ	つぎのと	かのえ	かのと	みずのえ	みずのと

兄弟  
木の  
兄弟  
火の  
兄弟  
土の  
兄弟  
金の  
兄弟  
水の

十二支

子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

十干と十二支の組みあわせ

十干と十二支を順に組みあわせていくわけであるが、第一は甲・子、第二は乙・丑、と組みあわせていくと、第十が癸・酉で、十干の方は終ってしまふ。すると、十干は頭の甲にもどって甲戌、乙亥。そしてこんどは十二支が頭の子にもどって丙子とつづく。

# 第3章 社 会

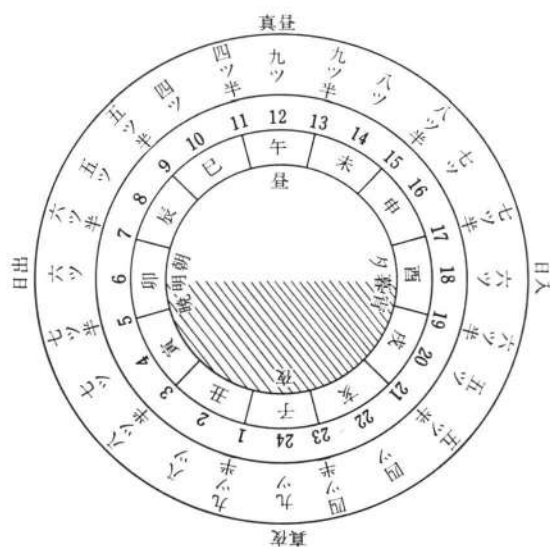
## 干 支 年 代 表

干 支		年 代					
甲 子	寛永 1	貞享 1	延享 1	文化 1	元治 1	大正13	
乙 丑	2	2	2	2	慶応 1	14	
丙 寅	3	3	3	3	2	昭和 1	
丁 卯	4	4	4	4	3	2	
戊 辰	5	元禄 1	寛延 1	5	明治 1	3	
己 巳	6	2	2	6	2	4	
庚 午	7	3	3	7	3	5	
辛 未	8	4	宝暦 1	8	4	6	
壬 申	9	5	2	9	5	7	
癸 酉	10	6	3	10	6	8	
甲 戌	11	7	4	11	7	9	
乙 亥	12	8	5	12	8	10	
丙 子	13	9	6	13	9	11	
丁 丑	14	10	7	14	10	12	
戊 寅	15	11	8	文政 1	11	13	
己 卯	16	12	9	2	12	14	
庚 辰	17	13	10	3	13	15	
辛 巳	18	14	11	4	14	16	
壬 午	19	15	12	5	15	17	
癸 未	20	16	13	6	16	18	
甲 申	正保 1	宝永 1	明和 1	7	17	19	
乙 酉	2	2	2	8	18	20	
丙 戌	3	3	3	9	19	21	
丁 亥	4	4	4	10	20	22	
戊 子	慶安 1	5	5	11	21	23	
己 丑	2	6	6	12	22	24	
庚 寅	3	7	7	天保 1	23	25	
辛 卯	4	正徳 1	8	2	24	26	
壬 辰	承応 1	2	安永 1	3	25	27	
癸 巳	2	3	2	4	26	28	

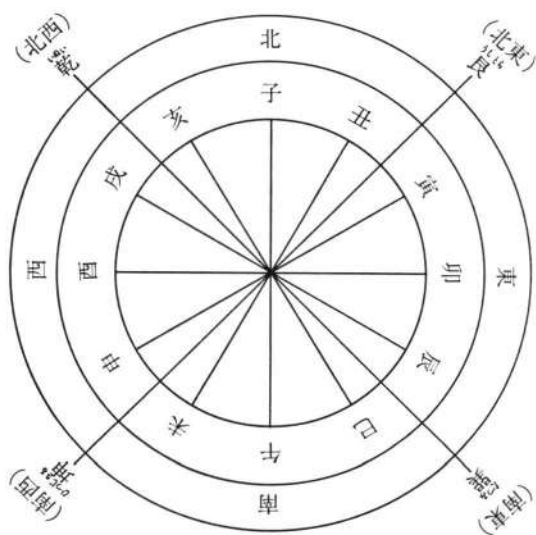
干 支		年 代					
甲 午	承応 3	正徳 4	安永 3	天保 5	明治27	昭和29	
乙 未	明暦 1	5	4	6	28	30	
丙 申	2	享保 1	5	7	29	31	
丁 酉	3	2	6	8	30	32	
戊 戌	万治 1	3	7	9	31	33	
己 亥	2	4	8	10	32	34	
庚 子	3	5	9	11	33	35	
辛 丑	寛文 1	6	天明 1	12	34	36	
壬 寅	2	7	2	13	35	37	
癸 卯	3	8	3	14	36	38	
甲 辰	4	9	4	弘化 1	37	39	
乙 巳	5	10	5	2	38	40	
丙 午	6	11	6	3	39	41	
丁 未	7	12	7	4	40	42	
戊 申	8	13	8	嘉永 1	41	43	
己 酉	9	14	寛政 1	2	42	44	
庚 戌	10	15	2	3	43	45	
辛 亥	11	16	3	4	44	46	
壬 子	12	17	4	5	大正 1	47	
癸 丑	延宝 1	18	5	6	2	48	
甲 寅	2	19	6	安政 1	3	49	
乙 卯	3	20	7	2	4	50	
丙 辰	4	元文 1	8	3	5	51	
丁 巳	5	2	9	4	6	52	
戊 午	6	3	10	5	7	53	
己 未	7	4	11	6	8	54	
庚 申	8	5	12	万延 1	9	55	
辛 酉	天和 1	寛保 1	享和 1	文久 1	10	56	
壬 戌	2	2	2	2	11	57	
癸 亥	3	3	3	3	12	58	

十二支であらわす時刻

外側から十二刻・二十四時・十二支刻



十二支であらわす方角



例えば、

西暦1978年の干支を算出する場合、干支の基本数は10と12であるから、 $1978 \div 10$ と $1978 \div 12$ の2つの式をたて、その余った数を右の表にあてはめれば、簡単に算出できる。

$$1978 \div 10 = 197 + 8$$

$$\quad \quad \quad \downarrow$$

$$\quad \quad \quad \text{戊}$$

$$1978 \div 12 = 164 + 10$$

$$\quad \quad \quad \downarrow$$

$$\quad \quad \quad \text{午}$$

したがって、西暦1978年の干支は戊午となる。

また、西暦2000年は、

$$2000 \div 10 = 200 + 0$$

$$\quad \quad \quad \downarrow$$

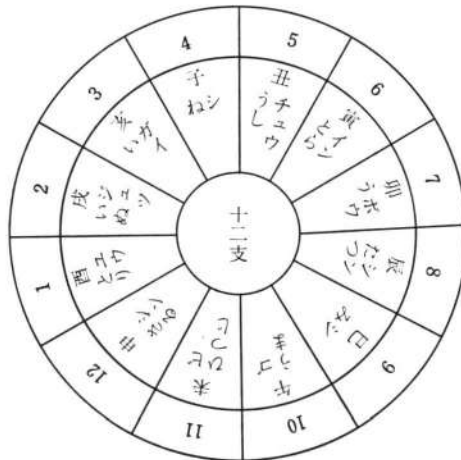
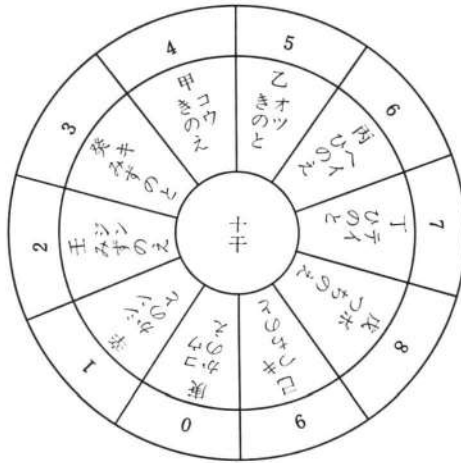
$$\quad \quad \quad \text{庚}$$

$$2000 \div 12 = 166 + 8$$

$$\quad \quad \quad \downarrow$$

$$\quad \quad \quad \text{辰}$$

であるから庚辰となる。



(二) 六 曜 表

日ごろ無頓着な生活をしていても、慶事・仏事となると、改めて大安とか友引とかが問題にされる。これは六曜星とよばれるもので、古くはいろいろな表現があったが、今日では次のように定まっている。

1 先 勝	せんしょう・せんかち・せんかつ	午前が吉、自分から事をはじめれば吉、急ぎの事や訴訟に適するという。
2 友 引	ともびき	何事も引きわけ。葬式をする、一緒にだれかを死の世界につれていくという。
3 先 負	せんぶ・せんまけせんぶ	午後が吉、急用や訴訟を、自分から始めるのはよくないという。
4 仏 滅	ぶつめつ	万事に凶、何事にも手を出さぬがいいという。
5 大 安	だいあん・たいあん	すべてのことに吉という。
6 赤 口	しゃつく・しゃつこう・じやつこう	万事に凶、特に大工にきらわれるという。

六曜星早見表

六曜星は、旧暦の何月何日は何、と決まっているから、何かの時、いちいちその年のこよみをさがさなくても、次の表で間にあうわけである。

旧 暦 の 月	旧 暦 の 日	1	2	3	4	5	6
		7	8	9	10	11	12
		13	14	15	16	17	18
		19	20	21	22	23	24
		25	26	27	28	29	30
		31					
1、7月		先 勝	友 引	先 負	仏 滅	大 安	赤 口
2、8月		友 引	先 負	仏 滅	大 安	赤 口	先 勝
3、9月		先 負	仏 滅	大 安	赤 口	先 勝	友 引
4、10月		仏 滅	大 安	赤 口	先 勝	友 引	先 負
5、11月		大 安	赤 口	先 勝	友 引	先 負	仏 滅
6、12月		赤 口	先 勝	友 引	先 負	仏 滅	大 安



## 第四章 教育文化

### 第一節 教育制度機構の変遷

#### 一 教育委員会の制度と性格

教育委員会制度は、教育行政の基本目標を達成するために、教育行政の民主化、地方分権化及び自主性の確保を図ることを、ねらいとして設けられたもので、地方教育行政に関する独立の合議制執行機関であるが、一面当該地方公共団体の中の、一つの独立した執行機関でもある。

#### 二 教育委員会の発足

##### (一) 教育委員会の成長

教育委員会法は、昭和二十三年七月十五日に公布施行

されたが、都道府県の委員会（七人）と、市町村に地方委員会（五人）を設置することになった。そこで、十月五日に第一回の選挙が行われ、十一月一日から、全国の都道府県・五大市のほか、二十一市及び十六町九村において、教育委員会が発足した。

このときから、昭和二十五年の第二回教育委員選挙までの二年間に、教育委員会制度は着々とその基礎を築いていったのであるが、この時期においてすでに、この制度の重要な要素に触れた検討の必要が意識され、論議されはじめた。その主要な点は、第一に設置単位、第二に委員の選任方法、第三に自治体首長との関係の諸点である。

昭和二十五年十一月五日に第二回の選挙が行われ、新たに仙台市ほか十四市において教育委員会が発足した。同じ年法律第一四五号をもって、委員会や教育長の職務権限の明確化、規則の公布手続等についての規定の整備等、相当大幅な教育委員会法の改正が行われた。このとき同時に、市町村委員会の設置の時期を延期し、市は昭和二十五年か二十七年、町村は二十七年に設置するものと定められた。それから、地教委の全面設置までの間

に、次第にその基礎が固められた。

## (二) 牧園町教育委員会

地方教育委員会の制度によって、本町では昭和二十七年十一月一日、牧園町教育委員会として発足した。教育委員会は、教育の民主化を主眼とし、市町村立学校の設置、管理、廃止、入学、就学、保健体育、教科関係、研修、校長、教員、事務職員の任免、社会教育等を取扱い、教育委員会には五人の委員があつて、合議制とし、事務局に教育長があつて、直接の教育事務に当たつた。

## 三 教育委員会制度の全面改正

教育委員会が、あまり教育行政の独立性を強調しすぎると、地方公共団体の長と対立的存在になり、調和のある行政運営ができなくなる。このような観点から、教育委員会法の改正が問題となつていたが、教育委員会制度の理念は生かしながらも、わが国の実態に合致した制度改革が立案され、教育の政治的中立と、教育行政の安全の確保、一般行政と教育行政との調和、国や都道府県・市町村が、相提携する教育行政制度の樹立を、主な趣旨

とする法律案が、昭和三十一年三月八日の、第二十四回国会に提出された。

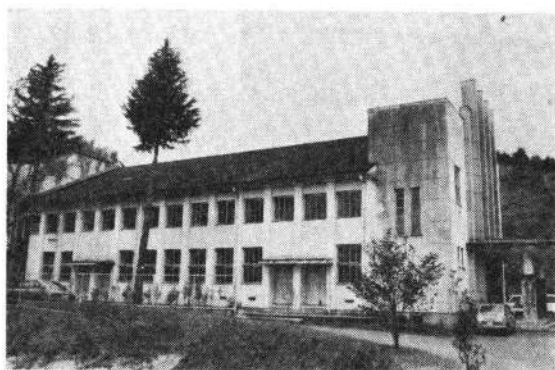
この法案に対して、一部の学者や教職員団体から、委員の公選制を固執して、強い反対が表明され、国会においても激しい論議が交わされたが、昭和三十一年六月に衆・参両院を通過し、六月三十日に、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」が公布され、十月一日から施行されると同時に、教育委員会法は廃止されるに至つた。新法のねらいは、教育委員の公選制を廃して、委員の選任方法を地方公共団体の長が、議会の同意を得て任命する方法に改めると共に、教育委員会と地方教育団体の長の権限に調整を加え、教育委員会の予算及び議案の作成、送付の権限等を廃して、地方公共団体の長にこれを移し、そのかわり、長がこれらの議案を作成する場合には、教育委員会の意見を聞いて行なうことにとどめた。

## 四 本町の歴代教育委員

### (一) 教育委員長

# 第4章 教育文化

- |       |       |       |      |          |            |            |            |            |            |         |            |            |            |           |
|-------|-------|-------|------|----------|------------|------------|------------|------------|------------|---------|------------|------------|------------|-----------|
| 春田 丑雄 | 高橋 才二 | 原田 重彦 | 白尾 平 | (三) 教育委員 | (五代) 佐藤 三郎 | (四代) 笛田 清則 | (三代) 今村 秀人 | (二代) 池田 一也 | (初代) 池田 四郎 | (二) 教育長 | (七代) 今村 秀人 | (五代) 園田 貞雄 | (三代) 池上 孝重 | (初代) 白尾 平 |
|-------|-------|-------|------|----------|------------|------------|------------|------------|------------|---------|------------|------------|------------|-----------|



牧園町中央公民館

- |            |            |            |           |
|------------|------------|------------|-----------|
| (八代) 池田 政晴 | (六代) 池田 政晴 | (四代) 池田 政晴 | (二代) 森 直広 |
|------------|------------|------------|-----------|

## (一) 牧園小学校

明治 四・三 創立、役宅にて教授。

五 文武館と称す、真福院学館と改称。

六・一 第二十五郷校設立、公立学校創立の日。

七 第二十四郷校と改称。

九・四 第四十六郷校と改称。

八 牧園小学校と命名。

一一 十年の役のため休校。

二一 十年の役後はじめて開校。

二〇 牧園尋常高等小学校となる。

茶碓尋常小学校(尋常科)、牧園高等

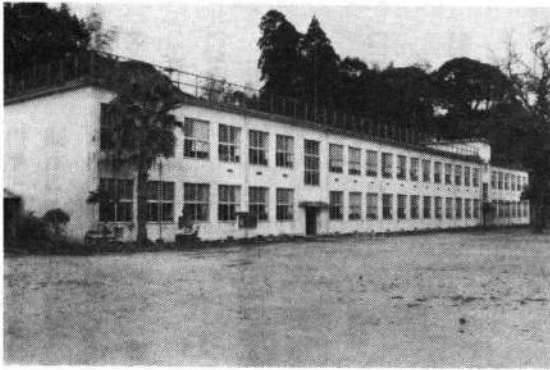
## 五 町内小学校の沿革概要

- |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 種子田景行 | 海江田光男 | 佐藤 薫  | 池田 政晴 | 森 直広  | 上野 輝男 |
| 須崎 春男 | 倉田 一利 | 栗山 輝昭 | 安宅 幸人 | 池田 孝重 | 池田 一也 |
|       |       | 佐藤 三郎 | 園田 貞雄 | 今村 秀人 | 荒田 二男 |

明治三三

大正 三

一三



牧園小学校

小学校（高等科）と改称。

学校移転（現在所在地）

牧園尋常高等小学校と改称。

校舍大修繕。

西校舍増築。

昭和 三

敷地拡張、校

門改造、牧園

公民学校設

置。（青訓充

当）

四

学林地設置、

東校舍増築。

一六・四

牧園国民学校

と改称。

二二・五

牧園町立牧園

小学校と改

称。

昭和二九・一一

三〇

三五・四

三六・九

三七・三

三八・三

三九・三

四〇・二

四一・三

四二・二

四三・一〇

四四・一〇

四五・一〇

四六・一〇

四七・一〇

四八・一〇

四九・一〇

五〇・一〇

五一・一〇

鉄筋校舎竣工。

鉄筋校舎竣工。

第三期鉄筋校舎竣工。

安全教育県指定公開研究会。

保健準備優良校入選。

屋内体育館（牧中）兼講堂落成。

保健準備優良校入選。

学校給食実施。

学校保健モデルスクール入選。

地区図工研究会。

地区図書館研究会。

学校林優秀校表彰。

学校図書館表彰、学校造林感謝状。

仲よし学級開設。

地区理科教育研究会。

学校林優秀校表彰。

体育施設完備。

制服制定。

町連P研究公開。（安全教育）

# 第4章 教育文化

## ○歴代校長

4	3	2	1
曾山 伝作	池田 哲二	山下 盛	山下 時宣
	松下源七郎		
	松下源七郎		
	松下源七郎		
	有川 武利		
	種子田雄介		

四五・二	屋体中学校より移管。
一一	県指定学校給食研究公開。
四六・一一	県学校給食優良校表彰。
四八・八	ブルー竣工。
一一	創立百周年記念式典及び記念事業。
四九・六	県PTA連合会より表彰。
五一・三	蒸気機関車動輪設置。
五二・八	日本少年少女バレー県大会準優勝。
一一	健康優良児日本一。(丸野多恵子)
五三・三	町花一ばいコンクールで優秀賞。
一二	音楽室竣工。
五四・一一	町連P研究公開。
五五・三	アスレチック施設。

## (二) 中津川小学校

10	重久 秀一	19	森山 国吉
11	平山 喜一	20	大迫 雄二
12	川崎 涉	21	楠元 秋雄
13	平隈 寛治	22	大重 光雄
14	迫田 武二	23	油田 光男
15	湯川 重雄	24	井之上 透
16	山崎 定治	25	田中 国雄
17	池田 四郎	26	本司 一典
18	小園 香苗	27	豊釜 豊志
		28	本村 光雄
明治二二・四	中津川小学校創立。(改田口)		
二〇・四	小学校令改正により中津川簡易小学校と改称。		
二五・一一	中津川尋常小学校と改称。		
二七	裁縫室を加設。		
三五・八	校地を中津川湯迫に移転。		
三六・四	校舎竣工。		
四二	義務教育六ヶ年制となり、校地拡張。		
四五・五	校舎増築。		

- |    |    |                         |
|----|----|-------------------------|
| 大正 | 二  | 校舎増築、運動場拡張。             |
| 昭和 | 一一 | 高等科併設。                  |
|    | 一二 | 家事室設置。                  |
|    | 一六 | 校地拡張、校舎増築、中津川国民学校と改称。   |
|    | 四  | 中津川小学校と改称、中津川小中学校PTA設立。 |
|    | 二二 | 宿直室、家事室、保健室新築。          |
|    | 二七 | 鉄筋校舎完成（一期）、木造校舎一部解体。    |
|    | 三一 | 学校林設定。                  |
|    | 三三 | 学校林に植林。                 |
|    | 三四 | 学林地交換。（井田水返還、桃ヶ八重移平決定）  |
|    | 三五 | 二 学校林に植林。               |
|    | 二  | 便所新築。（木造）               |
|    | 三  | 植林。                     |
|    | 三七 | 鉄筋校舎二期工事竣工、木造校舎一部解体。    |
|    | 一一 | 中津川小中学校給食調理室竣工、学校給食実施。  |



中津川小学校

- |    |   |   |                |
|----|---|---|----------------|
| 三八 | ・ | 三 | 鉄筋校舎三期工事竣工。    |
| 四〇 | ・ | 二 | 鼓笛隊楽器購入。       |
| 四一 | ・ | 三 | 校歌制定。          |
| 四  |   |   | 小中PTA分離。       |
| 一〇 |   |   | 体育施設三角ジム設置。    |
| 一一 |   |   | 家庭科室改造。        |
| 四二 | ・ | 九 | 理科室新設。（普通教室改造） |
| 四三 | ・ | 三 | 図書室新設。（改造）     |
| 一一 |   |   | 鉄筋便所増設。（木造解体）  |
| 四四 | ・ | 六 | 体育用具室新設。（旧図書館） |

# 第4章 教育文化

## ○歴代校長

1 松下源七郎

2 種子田雄介

四五・四 音楽室新設。(改造)

九 東通用門設置、自転車置場新設。

四六・七 プール竣工。

四九・二 県委嘱PTA研究公開。

一一 県指定算数研究協力校公開。

五〇・五 教育器材購入。

七 子ども会結成。

九 給食室控室全面補修。

一一 北部地区へき地研究公開。

五一・九 校旗購入。

一一 町教育研究公開。

五二・一 町PTA研究公開。

八 旧講堂撤去。

五三・三 屋内体育館竣工。

五四・四 創立百周年記念式典。

五 サーキットコース完成。

八 アスレチック施設設置。

一一 町体育中心校研究公開。

3 森 直一

4 鑛野新左衛門

5 久保牛之助

6 木場 貞二

7 川村喜与次

8 楠元五左衛門

9 塩川 満英

10 福島助次郎

11 種子島 清

12 小川 健三

13 浜田 清則

(三) 万膳小学校

明治一三・四 万膳小学校創立。

二二 万膳簡易小学校と改称。

二五 万膳尋常小学校と改称。

二八 校舍現位置に移転改築。

三〇・五 修業年限四ヶ年、裁縫科。

三九・九 女子実業補習学校付設。

四〇 義務教育年限延長。

四一・一一 新校舍落成。

14 湯浅 勇吉

15 池田 昇

16 樺山 卓

17 松田 善治

18 奥 貞秋

19 入部 彰

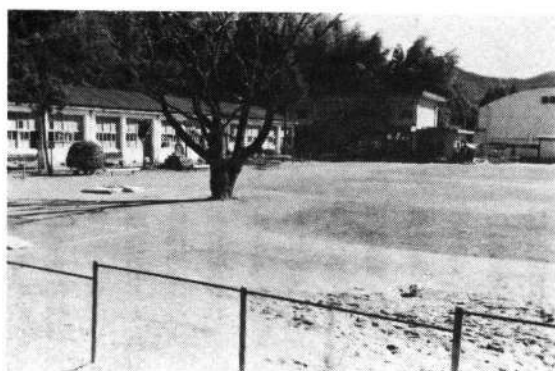
20 武市 利通

21 児玉 節男

22 春田 千秋

23 大保 貞雄

24 西 登司郎



万膳小学校

四二・四 尋常科五年を設置。  
四三・四 尋常科六年を設置。  
大正二・七 校庭拡張。

一〇 万膳尋常高等小学校と改称。  
一三 実業補習学校設置。

一五

青年訓練所万膳支所設置。

昭和四

公民学校設置。  
七・二

学校後援会設立。

一六・四 万膳国民学校と改称。

八

宿直・用務員室竣工。

一〇・五 東校舎二教室移転、敷地拡張工事。  
一二・四 万膳小学校と改称。  
一三・三 PTA結成。  
三〇・九 ブロック校舎建設のため、東西校舎解体、校地整理、地下げ作業、仮校舎で授業開始。

三一・八 現位置にブロック校舎(三教室)設置。  
三二・二 郡学校保健優良校表彰。

三三・三 郡学校保健優良校表彰。  
三五・四 創立八十周年記念式典。

一〇 校歌制定。  
三八・二 高台地下げ、校舎改築。  
三九・九 校門建立。

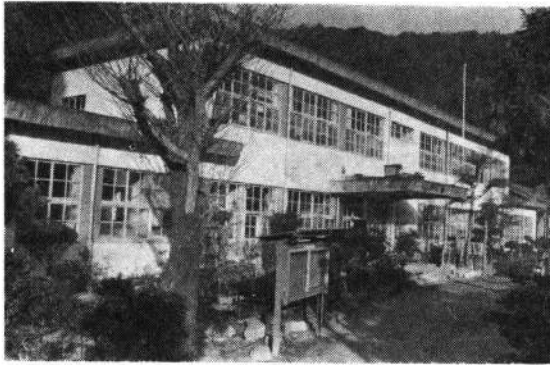
四一・二 給食室落成、プール完成。  
四四・五 鉄筋校舎落成。  
一一 県指定万膳母親学級開設。

四七・七 郡体育研究会。  
四七・七 町PTA研究会。  
八 給食室・教室新築。

# 第4章 教育文化

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	歴代校長			四九・三	体育倉庫完成。
市来	谷岡	塩屋	大内	横山	青木	玉利太郎	下村七郎次	平山	川西新太郎	竜波見一雄	西	平山	佐一		五〇・七	補助プール完成。	
豊国	吉寿	勇男	竜次	盛治	一	介	次	佐一	太郎	一雄	静哉	哉	一		五三・七	児童標準服決定。	
															五四・一一	町教育研究集会。	
															五五・三	屋内運動場完成。	
														五	創立百周年記念式典。		
26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14					
早渕	福迫	大尾	永井	安田	斉藤	西園	岡	古市	有馬直左衛門	楠田	森田	西	秀義				
肅	光穂	純夫	準	立男	政夫	庄吉	新熊	英二		胤生	義雄						

															27	佐土原忠英
															(四)	持松小学校
															明治二三・四	持松に小学校を置く。
															二〇・四	簡易科小学校設置。
															二五・一一	小学校令改正と共に修業年限三ヶ年の尋常小学校設置。
															二七・六	校舎増築、運動場拡張。
															大正二・八	校門移転、桑園設置。
															九・四	敷地拡張、校門建設。
															一五・六	井戸新設。(校舎北側)
															昭和二・八	校舎増築と補修。
															一〇・三	第二運動場開き。
															一六・四	持松国民学校と改称。
															一七・四	高等科設置。(複式)
															一九・四	高等科単式学級編制。
															一二・四	持松小学校と改称。
															一二・六	電話架設。
															一六・六	宿直室改築。
															二七・一	校門位置変更新設、校舎増築竣工。
六																



持松小学校

三五・ 五 創立八十周年記念式典挙行。

六 水道工事完了。

七 第一回理振法適用器具購入。

三六・ 六 養護室完成。

九 校舎裏の側溝工事完了。

三七・ 七

校歌及び持松  
子どもの歌制  
定。

一〇

排水溝完成。

三八・ 一

第二回理振法

適用器具購

入。

七

講堂屋根修  
理。

一〇

委託加工乳給

食開始。

三九・ 一一 第三回理振法適用器具購入。

四〇・ 一〇 鉄筋新校舎起工式。

四一・ 三 鉄筋校舎竣工。

五 JRC加入。

九 家庭科室移転改造。

一二 給食調理室完成。

四二・ 一 完全給食開始。

四 県指定へき地教育研究校。

四三・ 一 第四回理振法適用器具購入。

一一 県へき地教育研究大会開催。

四五・ 二 非常階段設置。

三 耐火金庫設置。

四六・ 一 温室竣工。

八 町P研究会。

二 創立九十周年記念式並びに祝賀会。

一〇 町学習指導法研究会。

四八・ 八 プール竣工。

一一 体育中心校研究公開。

四九・ 一〇 地区図書館研究公開。

第4章 教育文化

五〇・二 プール用水ボーリング。

八 ボーリング水源より給水開始。

一〇 郡へき地教育研究公開。

一一 町PTA研究公開。

五三・六 町水道の導入。

一〇 町教育研究公開。

五五・三 学校緑化植栽。

○歴代校長

1 有川 武利 10 小田原照雄

2 曾山 栄蔵 11 田中 彦衛

3 川村喜与二 12 居福 信雄

4 池上 栄治 13 沖 英一郎

5 福留林太郎 14 藤山 純義

6 長野 俊法 15 有村 正道

7 小原 武彦 16 園田 繁

8 原田 重彦 17 山下 等三

9 大井 実起 18 永田 亀雄

(五) 高千穂小学校

明治三一・五 中津川小学校母ヶ野分教場(三年制)

設立。

四一・三 母ヶ野分教場廃止、現在地に竜石尋常

小学校創立。

四三・三 新校舎落成。

大正 五・九 母ヶ野分教場完全廃止。

七・一 実業補習学校併設。

九 校舎増築、運動場拡張。

一〇・四 高千穂尋常小学校と改称。

昭和 四・四 校舎増築、高等科併設、高千穂尋常高

等小学校と改称。

五 水道施設完成。

一四 運動場拡張、学校温泉設置。

一六・四 高千穂国民学校と改称。

二二・四 高千穂小学校と改称。

二三 大字「下中津川」を「高千穂」と改

称。

二八・三 創立四十五周年記念式典及び記念事

業。

三〇 校門改修。

三一・九 第一期鉄筋校舎完成。

三七・三 第二期鉄筋校舎完成。



高千穂小学校

- 町PTA研究会。  
 四五・九 温泉浴場設置。  
 一〇 郡道徳研究会。  
 四六・一〇 郡国語研究会。  
 四七・一〇 郡理科研究会。

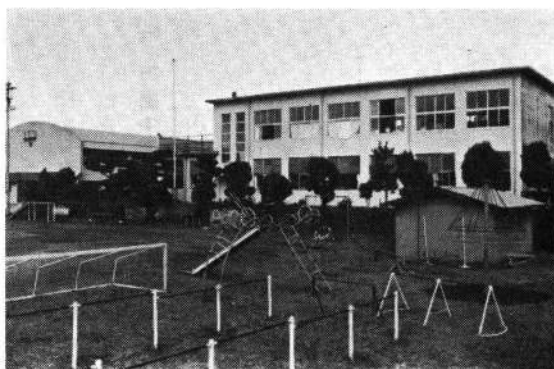
- 三九・三 第三期鉄筋校舎完成。  
 四〇・九 学校給食開始。  
 四三・一〇 町国語研究会。  
 四四・四 プール建設。  
 一一 地区特別活動研究会。  
 一二

- 四八・六 屋内体育館落成。  
 一〇 郡統計教育研究会。  
 五〇・二 新校舎落成。  
 一〇 町教育研究会。  
 一一 校門改修。  
 五一・三 体育倉庫建設。  
 町体育研究会。  
 五三・一〇 町PTA研究公開。  
 五五・一 第二給食室建設。
- 歴代校長
- |          |          |
|----------|----------|
| 1 岩切 三藏  | 11 原田 利光 |
| 2 長野 矢八  | 12 井上 三次 |
| 3 大之上栄治  | 13 小麦田幸男 |
| 4 木場 二   | 14 渕之上栄一 |
| 5 前田嘉太郎  | 15 森山 利  |
| 6 田中 壮吉  | 16 山崎 正成 |
| 7 平原 岩吉  | 17 刀迫 勇雄 |
| 8 寺田重之進  | 18 有馬 純治 |
| 9 窪田 国志  | 19 三浦 寅夫 |
| 10 原口 邦雄 | 20 小段 富好 |

- 21 福迫 薩雄  
22 萩原 兼弘  
(六) 三体小学校  
明治 五 民家で農閑期に夜間読書会。  
一六 田方小学校を作る。  
三二 中野地区に新校舎建築移転。  
三四 牧園小学校の分教場。  
大正 二 三体小学校として独立。  
昭和 一四 電話架設。  
一六 三体国民学校と改称。  
一八 高等科設置、校舎増築。  
二一 各学年単式となる。  
二二 三体小学校と改称。  
二九 校歌制定。  
三二 簡易水道を学校へ導入。  
三四 鉄筋校舎落成、旧校舎本館除去、宿直室、家庭科教室、保健室移転改築。  
三五 築山落成、校舎落成記念植樹、記念碑建立。  
三八 混合乳給食開始。

23 田吹 安雄

- 五一 教育機器利用研究公開。  
五二 町教育研究会。  
五三 屋内運動場竣工。  
五四 屋内運動場落成式。



三体小学校

- 三九 防火用水池造成。  
四〇 給食室落成、完全給食開始。  
四五 制服の決定。  
四八 プール建設完工。  
五〇 PTA研究公開。

○歴代校長

1	樺山 蘇吉	11	山口 定造
2	松下 武人	12	谷口 保
3	赤塚 真男	13	刀迫 勇雄
4	平野 貞一	14	中条 完
5	福森 一二	15	春山 静雄
6	長野 俊法	16	徳田 重志
7	藤井 藤吉	17	竹原 重美
8	河東 宣雄	18	小田原康夫
9	木之上静男	19	西 盛郎
10	浜田市之助	20	木下 高盛

六 旧町内中学校の沿革概要

(一) 牧園中学校

昭和二三・五 開校式(本校分校合同入学式)。

二五・一〇 本館七教室、校長室、職員室及び附属建物落成。

二九・四 万膳、高千穂、三体の各分校独立校となる。

一二 校歌制定。

三七・七 屋内体育館竣工落成。

九 総合グラウンド竣工落成。

一一 ミルク給食実施。

三八・九 完全給食開始。

三九・二 校旗制定入魂式。

○歴代校長

1	樺山 資行	3	前原 幸吉
2	鶴田 末一	4	馬場 清美

(二) 万膳中学校

昭和二三・五 牧園中学校万膳分校として創立、万膳小学校の一部を借り授業。

二三・三 第一卒業式(女子六名)。

六 校舎落成。

七 新校舎に移転。

二九・四 万膳中学校として独立。

三九・九 給食開始。プール、給食室落成祝賀会。

四〇・三 郡委嘱PTA研究公開。

○歴代校長

- |            |            |
|------------|------------|
| 1 樺山 資行(分) | 5 安田 立夫(兼) |
| 2 鶴田 末一(〃) | 6 永井 準(〃)  |
| 3 西園 庄吉(兼) | 7 永井 準(専)  |
| 4 齊藤 政夫(〃) | 8 大尾 純夫(〃) |

(三) 高千穂中学校

昭和二三・五 牧園中学校高千穂分校として創立。

二四 校舎宿直室落成、小使室拡張、水道施設、放送施設。

二九 高千穂中学校として独立。

三二 創立十周年記念式。

三八 理科室建築。

三九 校旗、校歌制定。

四〇 給食開始、校庭整地。

○歴代校長

- |            |            |
|------------|------------|
| 1 樺山 資行(分) | 6 加納 秋夫(専) |
| 2 鶴田 末一(〃) | 7 南 明善(〃)  |
| 3 森山 利(兼)  | 8 樺山 孝吉(〃) |
| 4 山崎 正成(〃) |            |
| 5 刀迫 勇雄(〃) |            |

(四) 三体中学校

昭和二三・五 牧園中学校三体分校として発足。

二三・一二 新校舎建築完成。

二四・二 竣工落成、移転。植林。

二九・四 三体中学校として独立。校章・バッジ制定。

八 校歌制定。

三七・四 技術家庭科教室増築。

三八・八 給食室完工。

九 完全給食開始、産振理振適用。

一一 町内道徳教育公開。

四一・一二 理科室完成。

○歴代校長

- |            |            |
|------------|------------|
| 1 樺山 資行(分) | 4 中条 定(兼)  |
| 2 鶴田 末一(〃) | 5 春山 静雄(〃) |
| 3 刀迫 勇雄(兼) | 6 徳田 重志(〃) |

(五) 中津川中学校

昭和二三・五 開校式、入学式(本校分校合同)。

二四・四 新校舎落成式。

二九・四 持松分校独立。

八 上水道施設完成。

三三・ 三 校舎裏学林地へ植林。

三七・ 五 技術工作室竣工。

一一 学校給食開始。

四一・ 八 家庭科教室建設。

一一 養護室建設。

○歴代校長

1 浜田 清則 5 村上 政雄

2 小坂 秋義 6 宝蔵 保

3 南 綱次 7 加治木 豊

4 寺師 武雄

(六) 持松中学校

昭和二二・ 五 中津川中学校持松分校として創立。

二三・ 五 PTA結成。

二四・ 一〇 校舎落成。

二九・ 四 持松中学校として独立。

三一・ 九 特別教室落成。

三八・ 四 準へき地校指定。

六 技術家庭科室落成。

七 校歌、持松子どもの歌制定。

四二・ 二 学校給食実施、図書館落成。

○歴代校長

1 浜田 清則(分) 5 居福 信雄(兼)

2 小坂 秋義(〃) 6 沖 英一郎(〃)

3 南 綱次(〃) 7 藤山 純義(〃)

4 田中 彦衛(兼) 8 有村 正道(〃)

七 統合牧園中学校の沿革概要

昭和四二・ 一二 牧園町立学校設置条例の一部改正によ

り、町内中学校六校(牧園、高千穂、

万膳、三体、中津川、持松) 統合決

定。

四三・ 四 統合牧園中学校発足、各校教場とな

る。(名目統合)

四四・ 三 新校舎落成。

四 実質統合。

四五・ 一 屋内体育館落成。

四七・ 三 建学精神決定。

四八・ 一一 岩石庭園完成。



牧園中学校

○歴代校長

- 1 馬場 清美
- 2 外園 強
- 3 山元総八郎
- 4 佐藤 三郎
- 5 小浜日出男
- 6 本戸 隼

学校完全給食  
実施決定（町  
へ申請）。

特殊学級開  
設、名称「総  
合学級」。

一〇

四

- 五二・三 植物園造成。
- 五二・九 温室完成。
- 五三・二 理科教材園完成。
- 五四・一 視聴覚教室の設置及び視聴覚機器購入。

## 八 牧園高等学校の沿革概要（含定時制）

昭和二〇・一二 鹿児島県立加治木中学校及び加治木高等女学校牧園分校と称し、開校式。牧園青年学校及び牧園小学校の一部を借りて授業開始。

二二・二 校舎一棟落成。

二三・四 学制の改革により両分校を合併し、県立鹿児島加治木高等学校牧園分校（全日制普通科）及び併設中学校をおく。

町立鹿児島高等学校（定時制普通科）及び別科木材工芸科を併置、旧牧園青年学校の施設を継承す。

二二 校舎一棟落成。（理科教室）

二四・四 木材工芸科廃止、夜間課程（普通科一年生）をおく。

八 県立加治木高校牧園分校を独立し、県立鹿児島牧園高等学校と改称。（定時制普通科はそのまま）



畜産科学び舎の跡



牧園高等学校

- 二五・四 定時制普通科を農業科に変更。
- 二七・四 定時制農業科変更、畜産科設置。
- 一一 畜産科寄宿舎竣工。(牧園牧場)
- 一二 講堂起工式。

- 二八・七 畜産科文部省指定校、備品充実。
- 二九・二 畜産教室等増築着工。
- 三一・三 講堂建築工事落成。
- 一〇 三 実験室着工、寄宿舎増築。
- 三三・一 創立十周年式挙行。

- 三三・一 畜産科実習場敷地、畜舎、家畜を牧場より分譲。
- 三七・一 理科室新築完工。
- 四二・九 新校舎建築着工。(霧島西口駅前高台)
- 四三・四 商業科募集開始。
- 一〇 新校舎へ移転。
- 四四・二 定時制畜産科閉校式並びに記念碑除幕式。
- 四五・二 第二棟商業科特別室竣工。
- 三 屋内体育館竣工。

# 第4章 教育文化

四八・二 校内植樹完成。

四九・三 武道場竣工。

五一・三 ミニコンピュター設置、プレハブ普通教室新設。

九 体育館開放。

五三・一二 プール竣工。

五四・三 第二グラウンド竣工。

## ○歴代校長

1 小松 才喜 8 福中 典男

2 川辺 惟定 9 七尾 猛雄

3 山下 忠男 10 橋口竜三生

4 井島 六助 11 石走 宗則

5 亀甲 優 12 徳永 剛

6 福沢 時良 13 山之口慶三

7 東鶴 敏男

## 九 畜産科の沿革（二十年の歩み）

昭和二五・四 定時制普通科（昭二三・四創立）を農業科に変更。

二七・四 定時制農業科変更、畜産科設置。

七 牛乳処理室その他施設設備。

一一 寄宿舎竣工。（牧園牧場内）

二八・七 文部省研究指定校。

三一・三 農具室兼作業室、肉加工室竣工。

八 文部省指定研究公開發表会。

三三・一 実習場の敷地、畜舎、家畜を牧場より譲受。

木工室及び屠殺室新築着工。

木工室、屠殺室竣工。

一〇 渡り廊下竣工。

三四・一〇 畜舎便所竣工。

三五・三 学林地設置植林。

六 高千穂寮調理室整備。

三七・一 豚多頭飼育舎設置。

三八・四 高千穂寮第二寮を柔剣道場、寮食堂として改造。

一二 旧種付所一帯ブルドーザ整地、運動場とする。

三九・三 オリンピック記念植林。

八 専用電話架設工事完了。

一〇 車庫竣工。

四〇・ 一 孵卵室移転工事竣工。

四一・ 二 生徒募集停止決定。

四四・ 二 定時制畜産科閉校式並びに記念碑除幕式。

## 十 農業大学校並びに青年の家

名 称 鹿児島県立農業大学校

鹿児島県立霧島青年の家

所在地 始良郡牧園町高千穂三五九八の四

沿革

昭和三四・ 三 県議会において、青年の家を農村セン

ター敷地内に設け、両者の一体的な運営を図る方針が決定され、農村センターの建設工事と並行して作業が進められた。十二日に地鎮祭。三十一日に農村センター、青年の家基幹施設竣工。

三五・ 四 農村センター、青年の家同時に開所。

串良の経営伝習農場を、農村センターに統合し、新しく農村センター青年実験農場として再出発。

四二・ 四 女子部（研究科・本科）を設置。

四五・ 七 鹿児島県立霧島青年の家と改称。

五三・ 三 農村センターを廃止。

## 四 鹿児島県立農業大学校開校。

### 設置目的

次代の農業と農村社会を担う優れた農業後継者を育成する。また心身共にうるおいのある青少年を育成する。

### 教育目標

次のような目標の下に、実践的な教育を行う。

(1) 農業技術の高度化、経営の専門化等に対応して、近代的な農業経営を行うのに必要な、生産技術と経営管理能力及び組織活動能力を養う。

(2) 豊かな経営感覚を培いながら、技術の革新や経済の変動に対応できる応用能力を養う。

(3) 近代的農家の主婦として必要な、家庭運営能力を養う。

(4) 農業者として幅広い視野と、協調性を養成し、農村

## 第4章 教育文化

- (6) 霧島の山野を舞台とした、野外活動を促進すること
- (5) 社会の中核的形成者としての資質の向上を図る。  
 急激に変化し進展する社会や、世界の動きに対応できる青少年を育成し、社会人としての人生観・世界観の確立を図る。

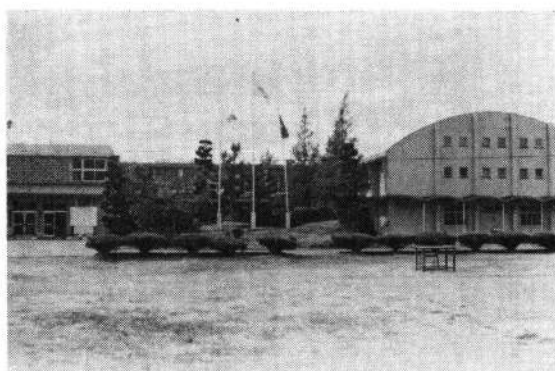
によって、郷土の自然への親しみや、豊かな情操を培うと共に、心身の鍛練を図る。

年次別研修利用者数(延)一覧

	昭50年	51	52	53	54
霧島青年の家	人 11,637	人 12,537	人 14,912	人 16,569	人 17,324
農業大学校	6,246	6,400	5,059	6,216	6,050
計	17,883	18,937	19,971	22,785	23,374

歴代農村センター館長

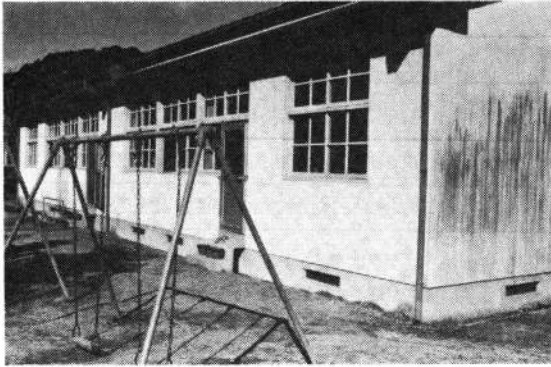
初代	(35. 4. 1)	福永 純	盛記
二代	(38. 5. 15)	松本 友	統
三代	(42. 5. 16)	吉盛	統
四代	(45. 7. 1)	安田	勲
五代	(51. 5. 1)	山下	勇
	農業大学校	長	
初代	(53. 4. 1)	山下	勇



十一 町内幼稚園の沿革概要

(一) 万膳幼稚園

昭和四四・五 施設づくり開始（旧中学校舎利用）



万膳幼稚園

保育室、事務室、休憩室、入口階段、便所改修等。  
六 万膳幼稚園として開園。  
四五・四 牧園町立万膳幼稚園として認可。  
四六・八 台風十九号により園舎使用不能。

四七・ 九 小学校講堂へ移転。  
一 園舎新築工事開始。

四八・ 四 新園舎へ移転。

四九・ 五 パン給食開始。

五〇・ 六 給食に牛乳追加。

五一・ 五 幼児家庭学級開講式。

五二・ 五 家庭教育学級開講式。

五三・ 一 町保育研究会

○歴代園長

1 大尾 純夫

2 福迫 光穂

3 早瀬 肅

4 佐土原忠英

5 加治屋信男

(二) 三体幼稚園

昭和四四・ 六 三体幼稚園開設。

四五・ 四 公立幼稚園として認可。

五二・ 八 二教室内部改装。

五三・ 八 校舎北側の側溝設置。

○歴代園長

1 徳田 重志

2 竹原 重美

3 小田原康夫

4 西 盛郎

第4章 教育文化

5 木下高盛

(三) 持松幼稚園

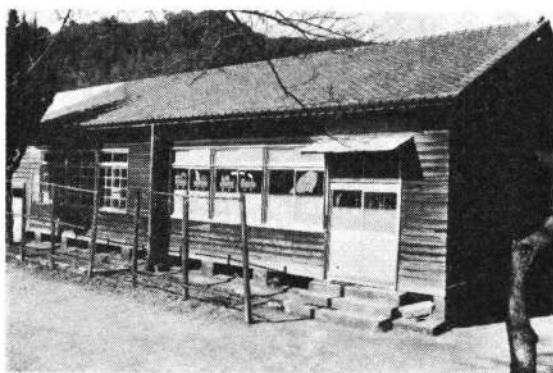
昭和四四・六 持松幼稚園開設。

四五・四 公立幼稚園として認可。

五二・二 幼稚園と小学校連絡用テレホン設置。



三体幼稚園



持松幼稚園

○園長

坂口 定昭

○歴代園長

1 有村 正道

2 園田 繁

3 山下 等三

4 永田 亀雄

(四) 高千穂幼稚園(学校法人)

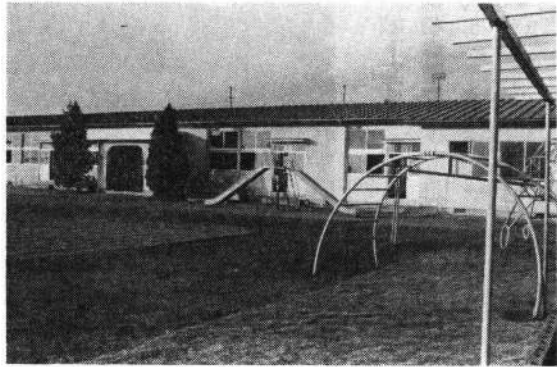
もと、高台寺の本堂で託児所として発足した。昭和四十六年の十九号台風により、国道二二三号線が決壊したため、高千穂三八六四の五(小塚原)の現在地へ移転。

四七・一〇 現在地へ移転。

四八・三 文部省の認可。

四 学校法人高千穂幼稚園開設。

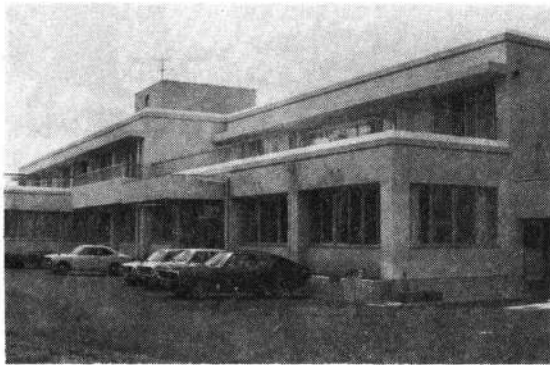
一二二 教室を三部屋に間仕切り。



高千穂幼稚園

十二 霧島学園（養護施設）の沿革概要

明治三八・二 鹿児島市松原町に鹿児島養育院として創立。



霧 島 学 園

- 四二・一 鹿児島市塩屋町に移転新築。
- 大正 五・一一 財団法人認可。
- 昭和 四・一一 始良郡牧園町三休堂鉾投に分院設置。
- 七・一二 鹿児島養育院腐朽のため新築。
- 一四・四 財団法人鹿児島県社会事業協会へ経営移管。

- 二〇・六 本院戦災焼失、以後分院にて業務運営。
- 二三・九 社会福祉法人認可。
- 二八・八 始良郡牧園町高千穂へ移転新築。
- 三六・三 男子寮ブロック改築。

○歴代施設長

初代 佐藤 茂助

二代 河野銆次郎

一二 頌徳碑（佐藤茂助氏）建設。

三七・七 社会福祉法人鹿兒島県社会福祉事業団

へ経営主体の変更。

一二 女子寮ブロック改築。

三八・一〇 施設名を霧島学園と改称。

三九・一二 管理棟ブロック改築。

四九・一 幼児昼間保育開始。

五五・四 園舎改築移転。

○概況

名称 霧島学園

所在地 鹿兒島県杬良郡牧園町高千穂三九一七の七

種別 児童福祉法による養護施設

収容人員 六十名

経営主体 社会福祉法人、鹿兒島県社会福祉事業団

目的 満一歳以上十八歳未満の保護者のない児童、虐待されている児童、その他環境上養護を要する児童を収容して、これを養護する。

三代 大井 紀作 七代 柏原 景盛

四代 本田 義彦 八代 安田 安雄

五代 森山 良作 九代 上田 丙

六代 樺山 卓 十代 中山 立英

※ 敷地は、牧園町有地の無償供与による。

## 第二節 社会教育

### 一 社会教育の概要

社会教育といわれるような形態は、明治時代に図書館令によって、僅かにその形を備え、学校教育の施設外において、通俗平易な教育として運営されるに過ぎなかった。

本県では明治十二年に、鹿兒島磯に博物館が設立されたのが始めである。一方郷中においては、あるいは地域によって婦人会、隣組などの相互教育、また青少年は二才組、子供組を組織して、自発的な奉仕的活動、集団活動が行なわれていた。明治二十年頃には、青年の中に夜

学舎、同志会などの名前で、自発的に学習活動をはじめたところもあった。

大正八年五月、文部省は、普通学務局に四課を置いて通俗教育などに関する事務を掌らしめた。大正十年六月に、通俗教育を社会教育に改め、その事務をとらせた。

大正十四年には、道府県に社会教育主事補がおかれ、地方社会教育職員制が制定せられた。

また、女子教育がとり上げられ、処女会、または女子青年会が結成され、社会教育として実施されたのは、大正年間である。

昭和七年四月には、地方における社会教育委員の設置が勧奨され、社会教育の面に力を注ぐようになった。しかし、明治以後の富国強兵策や、昭和初期からの軍国主義の教育によって、社会教育は自主的活動でなく、上から与えられたものを、国民はそのまま受けて活動することであった。

昭和二十年八月、太平洋戦争が終わり、国内は経済的にも思想的にも、一時は混乱状態に陥った。この情勢の中に社会教育の必要が叫ばれ、社会教育振興の気運はいよいよ高まって、平和国家・文化国家建設のために、大

きな役割をなすにいたった。すなわち、青少年や成人層を対象とする、組織的な展開を遂げなくてはならない必要に迫られたのである。

昭和二十四年六月十日、法二〇七号をもって、社会教育として自主的な、しかも民主的な社会教育が実施されるようになった。

本県でもこの法によって、本格的に社会教育の振興に意を用い、市町村は公民館設置や主事を置くなどして、社会教育目的達成のために、行政的にあるいは組織的にいろいろ工夫し、努力するようになった。

本町の社会教育は、終戦後役場内に社会教育係をおいて、当面の事務を分掌させた。当時は経済的に思想的に混乱の時であり、主として婦人会、青年団の育成指導に当たっていた。

特に青年団活動においては、民主主義の研究熱のために講演会・研究会などが活発に行なわれた。また当時は、青年の政治的な活動や体育的な催しも、自主的に行なわれた。

昭和二十四年六月、社会教育法が公布されるや、町に社会教育係をおき、新に社会教育委員を委嘱し、社会教

育の強化を図った。そして、部落民の生活向上と経済発展への助言をなして、着々とその成果をあげた。

昭和二十九年、中央公民館が建設され、ここを拠点として民主団体の育成や、部落公民館活動の促進に努力した。また、青年団・婦人会等も活発にその主旨に向って行動を起こし、生活改善と知性の向上を目標として、婦人講座及び料理講習、先進地視察等多角的な行動を開始した。また、青年の研究会や体育競技・青年研修会を持ち、文化向上に努力した。

## 二 社会教育の充実

### (一) 社会教育の基本方針

都市化の進行によって、伝統的な地域社会のきずなが断たれたとはいえ、永らく培われてきた心情まで失われてはいない。いま人々は、ものの豊かさの中で、なお満たされないものの本質を見極めようとしている。

社会教育が住民の意欲を喚起するために企画する集合学習は、今や転換を迫られている。多様化する学習活動に対応し、個性ある創造性を高めうる設備を持った、住

民の活動の拠点としての公民館建設が急務となっている。

社会教育が、「常に動く教育」であり、千変万化に対応しなければならぬ教育機関であることを考える時、社会教育関係者の資質や能力の向上と同時に、民間の人材の発掘と、それらの人々を活用することに、積極的な計画がたてられなければならない。

自らの能力の啓発に努め、人間性豊かにして明るい郷土づくりを、主体的に推進できる町民の育成と、学校教育及び家庭教育の有機的な連携を深めながら、地域連帯意識の涵養をめざして、生涯教育としての社会教育を推進する。このため、関係機関団体との連携を密にして、社会教育条件の整備を図り、教育文化の向上発展に努める。

### (二) 重点施策

- (1) 校区公民館及び自治公民館の組織強化と、自主的運営の確立
- (2) 青少年教育の振興・充実
- (3) 社会体育の振興・充実
- (4) みどりの教育事業の推進



学級による指導者育成

- ④ 校区及び自治公民館運営と活動の育成援助

。校区公民館長研修

。自治公民館長研修

。公民館長・副館長・主事研修会

。先進地視察

- ⑤ 社会教育関係団体への積極的指導助言

。各種婦人団体連絡協議会

。町青協

。町婦連

。町PTA連絡協議会

- (2) 社会教育施設の整備及び公民館活動の充実

- ① 自治公民館建設(町より一部補助)

。五十四年度……石坂・府鳥・持松一区

。五十五年度……牧園二区・三区・中津川六区

- ② 農村婦人の家(五十四年四月建設免足)

※ 万膳校区公民館と併用

- ③ 生活改善センター(五十五年七月建設)

※ 三体校区公民館と併用

- ④ 持松校区公民館(五十五年九月起工式)

- ⑤ 中津川校区公民館(五十六年度建設予定)

- ⑥ B & G 牧園海洋センター(五十五年十一月落成開所式)

※ 高千穂校区公民館と併用

※ モデル自治公民館の研究委嘱と活動の推進

- ⑦ 万膳一区・万膳四区・中津川六区・牧園六区

持松一区 (計五自治公民館)

※ テーマ

望ましい自治公民館の組織・運営の推進

⑧ 校区公民館長及び自治公民館長研修会の定例化

。校区公民館長会

。各月の二十八日

。自治公民館長研修会

。年四回(五月・七月・十月・一月)

。校区公民館役員会

。年三回(七月・十一月・三月)

⑨ 公民館における各種学級・講座の開設と学習機会

の拡充

。趣味学級

。趣味学級

三味線(一・二年)、大正琴、陶芸、油絵、書

道、料理

。総合学級（合計二十一）

レクリエーション教室（一）、明治青年大学（一）、

栄養教室（一）、家庭教育学級（四）……万膳幼、

持松幼、中津川保、牧園保、母と子の読書学級

（十三）、農業者大学

。部落婦人学級（合計十二）

中津川校区（二）、持松校区（二）、三体校区

（四）、万膳校区（三）、牧園校区（一）

。校区公民館との共催学級

・万膳校区（六学級）

生花、スポーツ、踊り、園芸、三味線、詩

吟

・三体校区（五学級）

生花、スポーツ、三味線、踊り、園芸

(3) 地域ぐるみ青少年健全育成活動の推進

① 単位子ども会と子ども会育成会の組織強化と活

動促進

ア、子ども会の中に、中学生も入れていく。（五

十五年度を過渡期として、五十六年度からは、

各単位子ども会において入れていくようにする。

イ、中学生の子ども会安全会への全員加入（五十六年度から）。

② 町子連理事会等による連携活動の促進

ア、昭和五十六年一月十三日、育成者研修会を持

つ。

イ、昭和五十六年一月二十五日、町子ども会大会

の開催（新春手づくり大会……たこ上げ等）

③ 学生会の育成とジュニアリーダーの養成

ア、牧園町ジュニアインリーダー研修会（四十三

人出席）

イ、地区ジュニアリーダー研修会への参加（七

人）

④ 少年団体成人指導者の発掘・養成と活用

ア、高校生父母の会の結成及び準備

⑤ 校外生活指導に関する各種団体の連携強化

町青少年問題協議会、町校外生活指導連絡

会、町学校生活指導研究協議会、青少年育成

推進指導委員会等の合同会議を持って、青少

年育成を進めていく。

※ その他関係行事

○町子ども会対抗球技大会

○自立自興関係事業

(4) 社会体育の振興

スポーツ、レクリエーションは、心身を健全に発展させ、健康で文化的な生活を営むうえで、極めて重要であるばかりでなく、地域の連帯意識を深め、明るい地域づくりをする上でも大きく貢献している。このようなことから、体育、スポーツのもたらす効果を再認識して、体育の振興に努めなければならない。

そこで本町においては、それぞれの体力や年齢、地域に応じたスポーツ活動の輪を広げ、町民総スポーツ参加を推進し、お互いに人間的な触れ合いの機会を作る。そのために、運動公園やナイター施設、公民館の活用、町体育協会、社会体育指導委員会等と積極的連携や指導体制を強化する。

① 体育指導委員の資質の向上

体育指導委員の任務は、スポーツ実技指導とい

うよりも、むしろ地域全体のスポーツ振興事業や活動の企画とその推進に当たることにある。本町の体育指導委員は現在八人で、町の体育・スポーツ振興に大きな功績をあげているが、ますます多様化してくる地域住民の体育・スポーツの欲求にこたえるため、体育指導委員の任務は重要な役割を持っている。そこで、

ア、体育・スポーツに理解があり、健康で奉仕の精神に富んだ人材を確保し、後継者の育成に努める。

イ、実技指導に対する報酬の処遇や災害補償について配慮する。

ウ、研修会・講習会の機会を積極的に企画する。

エ、地域住民の体育・スポーツに対する実態のは握に努める。

オ、町体育協会と連携を図り、体育・スポーツ指導者の確保と発掘に努める。

※ 体育指導委員の増員計画

昭和五十六年度に二人、五十八年度に二人の増員を図り、各校区に二人ずつの体育指導委員を設置した

い。

なお、社会体育有志指導者の養成に努め、昭和五十五年より五十九年度にかけて、各年度とも、初級十人、中級五人を目ざす。

## ② 町体育協会の充実

体育協会は、地域住民の多様なスポーツ欲求にこたえ、日常のスポーツ活動やスポーツ行事を企画し、運営し、地域のスポーツ活動を推進していく上に、極めて重要な民主団体である。

ア、機能的な組織・機構を整備する。

イ、運営費の確保に努め、自主的・民主的な運営を図る。

ウ、住民の多様なスポーツ欲求にこたえ、とともに、多くの人が参加できるような行事を計画し、実施する。

※ 町体協長 一名 副 一名

校区体協長 六名 副 六名

陸上部長 六名

## ③ 社会体育施設の整備と活用

日常生活や地域社会の中で、スポーツ活動が活

発に行なわれるためには、利用する施設が不可欠である。しかし、本町における公共社会体育施設は、年次的に整備されつつあるが、スポーツ人口の増加に伴い、施設が十分とはいえない。既存施設の現状は次のとおりである。

### 公共施設

区 分	施設数
町営運動場	一
コミュニティ広場(大)	三
コミュニティ広場(小)	九
弓道場	一
夜間照明施設	二

### 学校開放施設

区 分	施設数
運動場	七
体育館	六
プール	七
夜間照明施設	一

ア、地域住民のスポーツ欲求やスポーツ人口の推移などを勘案し、既存施設の改善と活用を進めながら、長期整備計画を策定して、その実現を積極的に推進する必要がある。また、小・中学校の体育施設の開放を、さらに促進するとともに、公園・公民館・社会教育施設及び広場や野

外活動施設などの活用も、積極的に推進していくべきである。

- ・学校体育施設開放の普及徹底に伴い、開放施設の効果的な利用と、活動内容の充実を図る。

- ・スポーツ活動を中心とした、コミュニティセンターとしての機能を発揮するような複合施設の整備を図る。

- ・スポーツの多様化に対応して多種目を使用できる施設にする。

- ・地域の実情に応じ、コミュニティスポーツ広場の整備を図る。

- ・余暇の増大に伴い、自然環境を生かした野外活動施設（キャンプ場、ハイキングコース、オリエンテーリング等の）整備を図る。

#### イ、体育施設整備計画

- 。昭和五十五年

- ・牧園六区運動場の夜間照明施設整備

- ・万膳校区運動場整備

- 。昭和五十六年度

- ・下中津川和気運動公園整備

- 。昭和五十七年度

- ・町営体育館建設

- 。昭和五十八年度

- ・町営プール建設

- 。昭和五十九年度

- ・総合グラウンド建設

#### ④

スポーツ教室の開設とスポーツクラブの育成  
日頃、スポーツの機会に恵まれない人々に、ス

ポーツの楽しさやスポーツ活動の効果を経験させるために、施設や用具・指導者の整った環境で、

スポーツ教室を開設し、スポーツクラブへ、さらにスポーツ団体の加入へと、発展的な指導を進め、スポーツ人口の拡大を図る。

ア、スポーツ教室の開設状況

。昭和五十四年度は、コミュニティスポーツ振興事業として、県からの補助も受けて、次のスポーツ教室が開設された。

バレーボール教室、バドミントン教室、ソフトボール教室、ゲートボール教室、健康

## 教室

昭和五十五年度から五十六年度にかけて、町単独事業として次のスポーツ教室が開設されている。

卓球教室、庭球教室、バドミントン教室、バレーボール教室、健康教室

## イ、体力づくり

昭和五十四年度から、「体力づくり運動モデル市町村指定事業」として、県の補助を受けて運動が展開されている。五十四年度は「山野を跋涉し、健康な体力づくりと知識の高揚を図る。」ことを目的として、完走歩大会、OL大会、栄養教室が持たれた。五十五、五十六年度は、「各地域の史跡をたずね歩くことで、健康な体力づくりと知識の高揚を図る。」ことで、ふるさとめぐり歩こう会。体力づくりOL大会、栄養教室が実施されている。なお、五十六年度は、モデルランニングコースの設置事業も計画されている。

## ⑤

スポーツ行事の適正化

住民がスポーツ活動を日常生活の中に取り入れ、健康の保持・増進や体力の向上と地域のコミュニケーションが図られるためには、住民に対するスポーツ活動の啓発と、適正な行事の企画・運営を図るべきである。本町のスポーツ行事の場合は、一部の選手だけのものや、ある一定の年齢層の行事も多いようである。地域住民すべてがスポーツ行事に参加することを考慮し、次のようなことに重点を置き、行事・スポーツの適正化を図る必要がある。

ア、家族から部落へ、さらに地域へと発展するようなスポーツ活動の体制をつくる。

イ、全年齢層を対象とした行事を企画する。

ウ、スポーツ競技的なものだけでなく、野外活動やレクリエーション行事を企画する。

## ⑥

スポーツ少年団の結成と育成・充実

将来に向けて、これから伸びていくとする少年・少女たちは、どんな環境にあっても自分を見失わず、力強く豊かに生きぬく力を持つことが必要である。その少年・少女たちが、自ら育てるた

めには、その生活と結びついた地域社会で、スポーツを通して集団生活が最も適している。

本町においては、次のようなことを積極的に推進し、組織を充実するとともに団活動の活発化を図る。

ア、育成の母体となる親や、地域住民の組織する母集団の組織を確立し、自主的な運営を図る。

イ、指導者の資質の向上を図るとともに、指導者連絡協議会を持ち、指導者の相互協力及び関係各団体との連絡協調体制を確立する。

ウ、町内スポーツ少年団の現状

。剣道スポーツ少年団（六）

牧園小、三体小、万膳小、中津川小、持松小、高千穂小

。バレーボール少年団（三）

牧園小、中津川小、高千穂小

。ソフトボール少年団（四）

牧園小、万膳小、中津川小、高千穂小

。スイミング少年団（一）

牧園小

。テニス少年団（一）

万膳小

⑦ スポーツ活動の安全対策の確立

スポーツ活動の推進に当っては、スポーツ傷害やスポーツ事故を未然に防ぎ、スポーツ活動の意義が生かされるような指導と、万全の配慮を促すために、次のような事項に留意し、安全対策の確立を図る。

ア、スポーツ活動の実施に当っては、参加者がその趣旨をよく理解し、積極的に推進する。

イ、実施に当っては、参加対象者の実態に応じたものとし、特にはじめと終りには、徹底した安全指導を行なう。

ウ、常に施設・用具等の整備点検と改善に努める。

エ、指導者に安全対策や救急処置等の研修の機会を企画する。

⑧ B & G 財団牧園海洋センター

昭和五十五年十一月二十九日、B & G 財団牧園海洋センターが、全国で第四十五番目の施設とし



B&G財団  
牧園海洋センター

(事務室、会議室を含む)が建設され、工費は器材費を含めて二億二千万円が投ぜられた。さらに第二年次は、プール施設の建設であるが、これは利用状況を調査・審議して建設される予定である。B & Gプランの基本精神は、「豊かな未来は、

て開所された。B & G財団とはブルーシー・アンド・グリーンランド財団の略称である。建設地は、牧園町高千穂字出口三三一〇で、一六、一六九・五<sup>m</sup>の敷地に一、一〇三・一<sup>m</sup>の体育館

豊かに育てられた青少年の手によって築かれる。といっても、甘やかして育てることではない。体力と健康の基になる筋肉や心臓・肺などは、成長期に鍛えることが大切で、その機会を逃がすと取り返しのつかないことになってしまう。

心の鍛練も同様である。学校教育と家庭教育だけでは埋めることが出来ないすき間を、人々が交流する地域社会の場で満たす必要がある。特に日本ではこの点が欠けている。

心とからだの発育は、切っても切れない関係にあり、両方のバランスがとれた発育が望まれるわけだ、『健全な精神は健全な肉体に宿る。』は、真理をついた格言と言える。心身を練磨する手段としては、海や山といった自然の中で行うスポーツ、レクリエーションが、最も適している。」ということである。

近ごろスポーツに対する意識は、全国的に急速に高まり、本町でも町民の中にスポーツ、レクリエーション活動を生活の中に取り入れようとする意欲が高まって、スポーツ活動への参加者も年々

増加している。このたびの体育館の完成により、さらに幅広く多様な活動が繰り広げられ、地域の人々に貢献できるものと信ずる。

施設の運営委託を受けた町当局では、この施設が真に町民の健康づくりのための広場となるよう、利用しやすい条件を整えることに決意を新にしている。

(5) 芸術文化の振興と文化財保護活用

① 芸術鑑賞及び発表の機会促進

ア、県巡回劇場の開催

。青少年劇場（六つの小学校を二分し、一年おきに開催する。）

・高千穂・持松・中津川

・牧園・万膳・三体

。バレー巡回劇場（中学校）

イ、文化協会の育成及び活用

。町民文化祭への参加

。郡・県芸術祭への出演・参加

。先進地の視察

。文化協会だより発行

② 文化財の調査研究

ア、町郷土誌の編さん

。発刊十年目を迎え、さらに町制施行四十周年を記念し、修正・追加補充して改訂版を編さんする。

イ、町内文化財調査研究及び町文化財指定推進

。文化財保護審議委員会による調査研究

。文化財同好会による文化財探訪

。町指定文化財

昭和五十二年四月十五日付をもって、牧園町文化財保護条例（昭和四十八年三月二十九日条例第二号）第七条の規定により、牧園町文化財として指定

文化財保護法（昭和二十五年五月三十日法

律第二一四号）第九十八条第三項の規定によ

り報告

※ 町指定文化財

○ 名称

甕穴群おうけつ

種別

天然記念物

指定年月日 昭和五十二年四月十五日

河川名 天降川  
所在地 鹿児島県始良郡牧園町宿窪田字馬

込

起点 上流左岸（一、六五五番地）  
終点 下流左岸（一、六五八番地）

所有者又は管理者

二級河川管理者

鹿児島県知事 鎌田要人

○名称 宝きょう印塔 三基

種別 記念物

指定年月日 昭和五十二年四月十五日

所在地 鹿児島県始良郡牧園町三体堂字堂

ケ平

所有者又は管理者

鹿児島県始良郡牧園町三体堂七八四

刀迫勇雄

③ 文化財保護思想の普及

。文化財保護グループの育成と町内文化財の紹介

・老人クラブによる清掃

・案内板の設置

・パンフレット配布

・文化牧園（小冊子）の発行  
・町広報紙による紹介

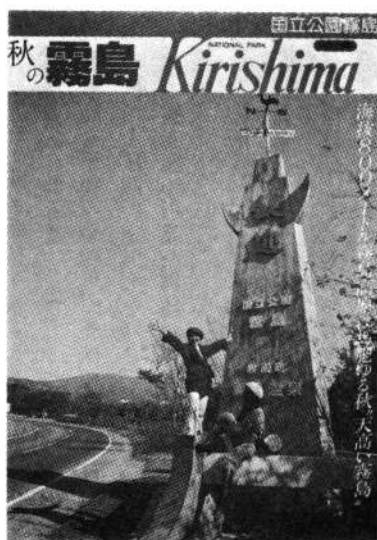
## 第五章 観 光

### 第一節 霧島屋久国立公園

牧園町は観光の町であり、昭和九年三月十六日、雲仙や瀬戸内海とともに指定せられた、わが国最初の国立公園であり、霧島国立公園と称した。

この国立公園は、鹿児島県側は霧島町・牧園町・栗野町、宮崎県側は、えびの市・小林市・都城市の一部にわたる地域で、両県にまたがる東西二十二km、面積二万一千五百六十haに及んでいる。また、昭和三十九年三月十六日、桜島・錦江湾・佐田岬・屋久島まで含めて、霧島屋久国立公園と改称され、その総面積は、五五、二二二haに及んでいる。

霧島山は、わが国南端の高峰であり、洋上はるか見渡す位置にあることから考えると、有史以前、南方民族が北上移住してきたときの、目標になったであろうとも推



測される。そして、まずその周辺、いわゆる薩摩・大隅の地に定着し、ここを根拠地として、原住狩猟民族を圧迫し、あるいは同化し、さらに中央へと広がって行ったことだろう。

比較的に狭い区域内に、主峰高千穂峰をはじめとし、二十三座の典型的な群状火山があり、爆裂火口八、火口湖十を数え、コニーデ型、ホマーテ型、トロイデ型と、いろいろな火山が聳立する中に、満々と蒼色の水をたたえた湖沼の美が、さらに神秘さを加え、山群の中腹八百m附近の緑林・赤松林の中から、白煙をふき上げる数多く

の温泉群の湯けむりは、霞か雲かと見まがうばかり、その恵まれた景観、自然美は世界でも稀であり、登山の人々の目に、強い印象と喜びを与えている。

また、霧島は、その恵まれた自然の景観のみでなく、ミヤマキリシマ、ノカイドウ、イワカガミなどの高山植物から、珍しい昆虫類、鳥類など、学界にも貴重な学術資料も多い。各学界の研究者、文人、歌人等も相次いで訪れ、その名声が高く、天然記念物も多い。

しかし、中央より離れたへき遠の地で、観光的にはよそに立ち遅れていたが、近年、観光ブームの波に乗って、施設も整えられ、道路も整備されてきた。特に、昭和三十四年、道路公団による有料道路が、林田温泉・高千穂河原間に開設され、さらに昭和三十六年十一月に、南北霧島道路をつなぐ中央スカイラインが完工し、えびの・小林間が接続するに至り、がぜん、霧島観光地として脚光をあび、また、昭和四十七年、鹿児島空港の開設と共に、訪れる観光客の数は、年々大幅に増加の一途をたどっている。これに合わせて、牧園、霧島の地元も、宿泊施設その他、観光客誘置のため専念しており、温泉ボーリングの白煙が高くふき上がり、そのにぎわいぶり

は、到底昔日の比ではない。

### ○観光姉妹町の盟約

景勝の地として、昭和九年に霧島国立公園と同時に指定された、長崎県の雲仙国立公園の地元である小浜町と、霧島町・牧園町は、昭和四十四年九月十八日に、観光姉妹町として、盟約の提携をした。

その動機は、霧島・雲仙ともに景勝地として、昭和九年三月、わが国で最初の国立公園として指定されており、「今後、観光の将来性と公益性を正しく見つめ、九州の北と南から、お互いに理解と親善を深め、相協力して観光開発に努め、広域観光圏完成の推進力になろう。」ということ、明治より百年に当たる昭和四十四年に提携した。それ以降、三町交代で十数回の定例会を開き、親善を深めている。つぎに観光面から見た霧島の自然を紹介しよう。

### 一 植 物

南国の特徴として、山々の山腹は昼なお暗い常緑照葉樹を主とする、天然林に覆われている。有名なミヤマキ

リシマをはじめ、天然記念物のノカイドウ、そのほか特殊な植物が多く、登山中にそれらの生態を十分に觀賞することができ。

この霧島は、垂直的には標高三〇〇m附近からはじまり、最高は韓国岳の一、六九九・九mの間を占めている。気温が温暖で、降雨量が多いことと、火山の中腹以下は、火山砂れきが安定して、適潤な風化土壌となり、植物の生育に適するため、合わせて一三八科、五一〇属、一、二五〇種もの多くの種類が生育している。

#### (一) 山麓地帯 (標高五〇〇m〜八〇〇m)

霧島神宮から霧島温泉(林田)附近にかけての地帯で、常緑照葉樹がよく繁茂し、暖帯多雨林の典型的な林相を示し、蔓性植物や着生植物もよく発達している。

主な樹種としては、常緑広葉樹のイチイガシ、ウラジロガシ、アカガシ、タブ、ホソバタブ、イスノキ、ヤブツバキ、ヤブニツケイ、サカキ、ヒサカキ、コジイ、イタジイ、アオキ等が多く、落葉広葉樹では、ミズキ、クマノミズギ、ハリギリ、イヌシデ、アカシデ、ミズメ、ヤマザクラ、ホノキなどがある。また一部には、針葉樹のイヌマキ、イヌガヤ、カヤ、クロマツ、アカマツも

混生し、峰通りでは、アカマツ、モミ等は優生樹として繁茂している。

#### (二) 山腹地帯 (標高八〇〇m〜一、二〇〇m)

この地帯は、モミを優生樹とする下帯と、アカマツを優生樹とする上帯とに区別される。

下帯は、モミのほかにアカガシ、タブ、ヤブニツケイ、シロダモ、カクレミノが多く、上帯では、アカマツのほかにツガ、イチイ、ブナ、ミズナラ、カエデ、ヤマザクラ、ハリギリ、シキミ、ハイノキなどの落葉広葉樹が多く、秋にはカエデ、アカシデ、ミズナラ等の落葉広葉樹が、美しく紅葉して、南国では珍しいほどの美観を呈する。特にこの地帯は、天然のままに保存されている点で、すぐれた美を有している。

#### (三) 大浪池—韓国岳附近 (標高一、三〇〇m〜一、七〇〇m)

この地帯では、モミ、ツガ、ハリモミ、ブナ、ミズナラ、オオガメノキ、ツクバネウツギ、ヒメヤシバブシ、ナナカマド、ノリウツギ等の落葉広葉樹が多く、高度を増すに従って、ドウダンツツジ、ミツバツツジ、ミヤマキリシマが多く、草本としては、ススキ、ツクシゼリ、

イタドリ、オトギリソウ、マイヅルソウ等が多くなっている。また、スズタケも樹下に群落をなしている。

霧島山系の植生は、地形の変化が激しく非常に複雑な森林構成となっており、主な群落は次のように区分される。

(1) ウラジロガシ・サカキ群落

ウラジロガシを主体として、ホソバタブ、ヤブニツケイ、ヤブツバキ、サカキの優占度の多い林分で、五〇〇mから八〇〇mの湿地や、適湿の腐植土の多い谷間に見られる。

(2) アカマツ・ヤマツツジ群落

アカマツを優占種として、ソヨゴ、ネジキ、ヤマツツジなどが強く結びつき、尾根部の日当りのよい乾燥地、岩角地、または尾根の突出部で、標高五〇〇mから一、〇〇〇mの間に見られる。

(3) ツガ・ハイノキ群落

ツガを優占種として、ハイノキ、シキミ、ヒメシヤラを多く含む林分で、尾根の土壌の深い中陰または陽地で、やや乾燥している標高八〇〇mから一、二〇〇mのところに見られる。

(4) ブナ・スズタケ群落

ブナを優占種として、ミズナラ、リョウブ、コハクウソボク、コミネカエデ、ナツツバキを含む林分で、林床はスズタケで覆われている。尾根の土壌が多く、比較的ゆるやかな傾斜面、または上部の尾根にかけて、標高一、〇〇〇m

から一、六〇〇mの高地に見られる。

◎ ミヤマキリシマ

リシマ

あまりに

も有名なこ

のツツジ

は、新燃岳

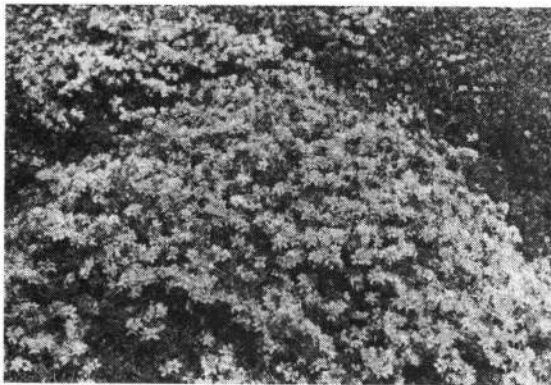
・中岳を中

心として、

火山山頂の

草原一帯に

分布してい



ミヤマキリシマ

て、五月下旬から六月中旬にかけて、紅紫色とりどりのジュウタンを敷く。毎年この季節にはハイカーでにぎわう。「花を愛する心は、平和を愛する心。」だといわれている。かつて、NHK主唱で「郷土の誇りとする花」を全国から広く募集したところ、霧島山に最も多い、可れんな花を開くミヤマキリシマが、郷土の花（県花）として、一九五四年三月二十二日に決定した。

足もとに芝のはうように七〜八cmの芽立ちしているのが、そのツツジである。大浪池から韓国岳の頂上附近にかけてよく繁茂している。花には、真紅・桃色・樺色もあり、中には真白なものもある。また、一本の根から咲き分けするものもある。花時の美観は何ともしたとえようがない。現在は、韓国岳よりはむしろ新燃岳・中岳方面に、広大な美しい花の分布を見る。このツツジは、高山に生ずる常緑灌木で、山頂附近では、高さがわずかに一〇cmばかりで、枝は繁密である。花は小形で長楕円型をなして尖り、毛がある。開花期は五月二十五日から六月十日ごろまでである。花冠は三cmに満たず、辺縁は五裂し、花冠面に細点のある

ものもある。

◎ノカイドウの自生地

ノカイドウは、明治四十二年（一、九〇九）、植物学者牧野富太郎博士によって発表され、大正十二年（一、九二三）三月、農林省が天然記念物として指定した。中国の原産で、わが国でも栽培されているカイドウの変種とされ、霧島火山群のえびの高原の溪流に沿って群生している。

高さは一・五mから三mぐらいの落葉小喬木で、多数の小枝を出し、密に分岐する。葉は倒卵楕円型で鋭

ノカイドウ自生地見取図





満開の「ノカイドウ」

角、鋭脚、細鋸歯縁、花は五月初・中旬、散形花序に二つから五つぐらいの花をつけ、細い柄に白色微紅彩の美しい花びらである。果実は径八<sup>mm</sup>ぐらいの球形で、黄かっ色をしている。

ノカイドウの自生地を見取図で図示すれば、前記のとおりである。

◎その他の有名植物

大幡池東北麓のヒノキの天然林、白鳥温泉附近のツチトリモチの群落、新燃岳のキヨスミウツボの群落など、いずれも珍しいものである。霧島の名を冠せられ

た植物には、ミヤマキリシマ、キリシマシヤクジョウ、キリシマエビネ、キリシマミヅギ、キリシマノガリヤス等がある。

(四) 南霧島の植物

南霧島は、霧島・牧園の両町をさし、その面積は、約六、〇〇〇<sup>ha</sup>で、霧島屋久国立公園の一割強を占める。その植物の概要は次のようである。

。きく科

ノゲシ、フクオウソウ、ツルニガナ、ヤクシソウ、ノアザミ、キッコウハグマ、テイシヨウソウ、センボンヤリ、ヤマアザミ、ハンカイソウ、ツワブキ、ヨモギ、オトコヨモギ、カワラヨモギ、オニタビラコ、ホソバアキノノゲシ、ミヤマアキノノゲシ、オヤマボクチ、オニアザミ、ノブキ、タカサブロウ、メナモミ、オナモミ、ガンクビソウ、サジガンクビソウ、ヒメガンクビソウ、ハハコグサ、ヤマハハコ、ヒメムカシヨモギ、ヨメナ、ヤマシロギク、ヒナギク、シユウブソウ、アキノキリンソウ、ヒヨドリバナ、ヌマダイコン、フジバカマ、アラゲハンゴンソウ、ヒメジヨン、ベニバラ、ボロギク、シュウメイギク、セイタカアワ

ダチソウ。

。ききょう科

キキョウ。

。うり科

カラスウリ、キカラスウリ。

。おみなえし科

オミナエシ、オトコエシ。

。すいかずら科

ハコネウツギ、スイカズラ、ウグイスガグラ、キダチニンドウ、キバナコツクバネウツギ、ガマズミ、ミヤマガマズミ、オトコヨウゾメ、ミヤマシグレ、ムシカリ、サンゴジュ、ニワトコ、ソクズ。

。あかね科

アカネ、ハクチョウゲ、クチナシ、ヤエムグラ、ヨツバムグラ、ヤマムグラ、ツルアリドウシ、ヘクソカズラ、イナモリソウ、シロバナイナモリソウ、サツマイナモリソウ、カギカズラ。

。おおばこ科

オオバコ

。きつねのまご科

キツネノマゴ。

。いわたばこ科

イワタバコ。

。はまうつぼ科

ナンバンギセル。

。ごまのはぐさ科

シラガマギク、イヌフグリ、ミヤマクワガタ、クワガタソウ、アゼナ、ヒメトラノオ。

。なす科

イヌホオズキ、ハダカホオズキ、ヤマホオズキ、センナリホオズキ、クコ。

。くちびるばな科

ヤマハッカ、ヒキオコシ、ヤマジソ、ヒメジソ、アキノタムラソウ、シソバタツナミ、キランソウ。

。くまつづら科

ハマクサギ、クサギ、ムラサキシキブ、ヤブムラサキ。

。むらさき科

ムラサキ、チシヤノキ。

。ひるがお科

ヒルガオ。

。かがいも科

キジヨラン。

。きょうちくとう科

ティカカズラ。

。りんどう科

センブリ、ムラサキセンブリ、アケボノソウ、ツル

リンドウ、リンドウ、フデリンドウ、ハルリンドウ、

オヤマリンドウ。

。ふじうつぎ科

ホウライカズラ。

。ひいらぎ科

モクセイ、キンモクセイ、ネズミモチトネリコ。

。えこのき科

エゴノキ、コハクウンボク。

。はいのき科

タンナサワフタギ、クロバイ、ハイノキ、ミミズバ

イ、クロキ。

。かきのき科

ヤマガキ、シナノガキ、トキワガキ。

。さくらそう科

オカトラノオ、コナスビ。

。やぶこうじ科

ヤブコウジ、ツルコウジ、マンリョウ、カラタチバ

ナ、イズセンリョウ。

。つつじ科

シヤジヤンポ、アシバ、アセビ、ネジキ、ベニドウ

ダン、ヒカゲツツジ、ミツバツツジ、コバノミツバツ

ツジ、ヤマツツジ、ミヤマキリシマ。

。いちやくそう科

イチヤクソウ。

。いわうめ科

ヒメイワカガミ。

。りょうぶ科

リョウブ。

。みずき科

アラキ、ハナイカダ、ミズキ、ヤマホウシ、クマノ

ミズキ。

。からかさばな科

ノダケ、ミツバ、ミツバゼリ、ミシマサイコ、ウマ

ノミツバ、チドメグサ、オオチドメグサ。

。うごき科

ウド、タラノキ、カクレミノ、ハリギリ、コシアブラ、タカノツメ、ヤマウゴキ、ヤツデ。

。ありのとうぐさ科

アリノトウ。

。あかばな科

オオマツヨグサ。

。のぼたん科

ノボタン。

。みそはぎ科

サルスベリ。

。ぐみ科

アキグミ、ナワシログミ、ツルグミ。

。じんちょうげ科

ミツマタ、コガンビ、キガンビ、コセウノキ、ジン

チヨウゲ。

。きぶし科

キブシ。

。くすどいげ科

イイギリ。

。すみれ科

タチツボスミレ、ミヤマスミレ、シハイスミレ、ヒメミヤマスミレ、スミレ、エイザンスミレ。

。おとぎりそう科

オトギリソウ、ヒメオトギリソウ、アゼオトギリソ

ウ。

。つばき科

ヒサカキ、ハマヒサカキ、サカキ、モッコク、ヒメシヤラ、ナツツバキ、サザンカ、ヤブツバキ。

。さるなし科

サルナシ、マタタビ。

。あおぎり科

アオギリ。

。ぶどう科

ノブドウ、ウドカズラ、ツタ、エビズル、サンカク

ズル、ヤブカラシ。

。くろうめどぎ科

イソノキ、クマヤナギ、ミヤマクマヤナギ、ネコノ

チチ。

。あおかずら科

アワブキノキ、ヤマビワ。

。かえて科

ヤマモミジ、ハウチワカエデ、コハウチワカエデ、  
コミネカエデ、ウリハダカエデ、エンコウカエデ。

。みつばうつぎ科

ゴンズイ。

。にしぎ科

クロズル、ツルウメモドキ、マユミ、コマユミ、ニ  
シギギ、マサキ、ツルマサキ、ツリバナ。

。もちのき科

モチノキ、クロガネモチ、アオハダ、ソヨゴ、タラ  
ヨウ、イメツゲ。

。はぜのき科

ヤマハゼ、ツタウルシ、ヌルデ。

。とうだいぐさ科

シラキ、アカメガシワ、ユズリハ、ヒメユズリハ、  
ナツトウダイ、エノキグサ、コミカンソウ。

。せんだん科

センダン、シンジュ、ニガキ。

。まつかぜそう科

ユズ、カラタチ、ミヤマシキミ、キハダ、イヌザン  
シヨウ、カラスノサンシヨウ、フユザンシヨウ、マツ  
カゼソウ、サンシヨウ。

。ふうろそう科

ゲンノシヨウコ。

。かたばみ科

カタバミ。

。まめ科

クズ、キツネノササゲ、ヒメクズ、ミヤマトベラ、  
ヤマフジ、エンジュ、フヂキ、ジャケツイバラ、ハナ  
ズオウ、ネムノキ、メドハギ、スズメノエンドウ、ヤ  
ハズソウ、ネコハギ、タヌキマメ、カワラゲツケイ。

。いばら科

ウメ、スモモ、ユスラウメ、ミヤマザクラ、ソメイ  
ヨシノ、ヤマザクラ、オオシマザクラ、ミネザクラ、  
リンボク、ノイバラ、テリハノイバラ、モミジイチ  
ゴ、クマイチゴ、ナワシロイチゴ、フユイチゴ、ヤマ  
ブキ、ボケ、ワレモコウ、キンミズヒキ、ヘビイチ  
ゴ、ダイコンソウ、キシムシロ、ミツバツチグリ、ク

サボケ、ウラジロノキ、ナナカマド、ウシコロシ、コ  
デマリ。

。まんざく科

マンサク、イスノキ、トサミズキ。

。ゆきのした科

ヤシヤビシヤク、イワカガミ、アジサイ、ガクウツ  
ギ、ノリウツギ、マルハウツギ、ウメバチソウ、ミヤ  
マネコノメソウ、ダイモンジソウ、ジンジソウ、トリ  
アシシヨウマ。

。けし科

タケニグサ、ムラサキケマン。

。くすのき科

シロモジ、クロモジ、カナクギノキ、コガノキ、バ  
リバリノキ、シロダモ、イスガシ、タブノキ、ホソバ  
タブ、クスノキ、ヤブニツケイ、アオモジ。

。もくれん科

マツブサ、シキミ、オガタマノキ、コブシ、モクレ  
ン、ホホノキ、オオヤマレンゲ、タイサンボク。

。つづらふじ科

ツヅラフジ、カミエビ。

。へびのぼらず科

ナンテン、ヒイラギナンテン、メギ。

。あけび科

ムベ、アケビ、ミツバアケビ。

。きつねのぼたん科

ボタンズル、モミジカラマツ、オキナグサ、トリカ  
ブト、シヤクヤク、ボタン。

。やまぐるま科

ヤマグルマ。

。なでしこ科

カワラナデシコ、ハコベ。

。すべりびゆ科

スビリビユ。

。ひゆ科

センニチソウ、イノコズチ、ヒユ、イヌビユ、オオ  
ビユ。

。たで科

ヤブタデ、オオイヌタデ、ミゾソバ、ミズヒキ、イ  
タドリ、スイバ、イヌタデ、アキノウナギツカミ。

。やどりぎ科

。ヒノキバヤドリギ、ヤドリギ、オオバヤドリギ。

。いらくさ科

。ヤブマオ、オニヤブマオ、コアカソ、イワガネ、ミ

ズナ、トキホコリ。

。くわ科

。イスビワ、イチジク、コウゾ、ツルコウゾ、クワ。

。にれ科

。エノキ、ケヤキ、ムクノキ、ハルニレ、アキニレ。

。ぶな科

。マテバシイ、シリブカガシ、イタジイ、ツブラジ

イ、クロカシ、ハハソ、アカガシ、ウラジロガシ、イ

チイガシ、ミズナラ、クヌギ、カシワ、クリ、イスブ

ナ。

。かばのき科

。ヤマハンノキ、ヤシャブシ、ヒメヤシャブシ、ミズ

メ、イスシデ、アカシデ、クマシデ。

。やまもも科

。ヤマモモ。

。やなぎ科

。カワヤナギ、ヤマネコヤナギ。

。せんりょう科

。センリョウ。

。はんげしょう科

。ドクダミ。

。らん科

。カヤラン、ナゴラン、フウラン、ホグロ、カンラ

ン、オサラン、セキコク、エビネ、ミヤマウズラ、ア

ケボノシユスラン、オオバノトンボソウ、ジンバイ、

アオチドリ、クマガイソウ、サイハイラン。

。たんどく科

。ハナカンナ。

。しょうが科

。ミョウガ、ハナミョウガ。

。あやめ科

。アヤメ、カキツバタ、イチハツ、キシヨウブ。

。ひがんばん科

。ヒガンバナ、スイセン、キズイセン、ハマオモト。

。やまのいも科

。ヤマノイモ、トコロ、カエデドコロ。

。ゆり科

サルトリイバラ、ネバリノギラン、オオバジャノヒ  
ゲヤブラン、ヒメヤブラン、バラシ、オモト、ホウチ  
ヤクソウ、ナルコユリ、マイズルソウ、ウバユリ、オ  
ニユリ、ノビル、ヤマラッキョウ、ノカンゾウ、ギボ  
ンシ、ヤマジノホトトギス、シヨジヨバカマ、ノギラ  
ン。

。つゆくさ科

ツユクサ。

。やし科

シュロ。

。ほもの科

シカクダケ、ナリヒラダケ、オカメザサ、メダケ、  
ネザサ、マダケ、ホテイチク、モウソウチク、ハチ  
ク、ホウライチク、ハトムギ、チガヤ、アシボソ、ト  
キワススキ、コブナグサ、シバ、ナルコヒエ、カリマ  
タガヤ、スズメノヒエ、チヂミザサ、ヌカキビ、ヌヒ  
シバ、キンエノコロ、チカラシバ、スズメノテッポ  
ウ、ネズミノオ、ササクサ、ギョウギシバ、ヤマカモ  
ジグサ、メガルガヤ、オガルガヤ、ススキ。  
。さじおもだか科

アキナシ。

。がま科

ガマ。

。ひのき科

ハイビヤクシン、ミヤマビヤクシン、ヒノギ、サワ  
ラ、ヒムロ、アスナロ、コノテガシワ。

。すぎ科

コウヨウサン、スギ、エンコウスギ、コウヤマキ。

。まつ科

アカマツ、クロマツ、ヒマラヤスギ、カラマツ、モ  
ミ、ツガ、トウヒ、ハリモミ。

。いぬがや科

イスガヤ、チョウセンガヤ、ラカンマキ、イスマ

キ。

。いちい科

カヤ、イチイ。

。うらほし科

マメヅタ、ヒトツバ、ノキシノブ、ミツデウラボ  
シ、クリハラン、ワラビ、イノモトソウ、アマクサシ  
ダ、タチシノブ、シシガシラ、ヒノキシダ、ホラシノ

ブ、ジュウモンジンダ、ヤブソテツ、コケシノブ、ウ  
チワゴケ、ウラジロ、コシダ、ツルシノブ、ゼンマ  
イ、コモチシダ。

。いわひば科

イワヒバ。

。ひかげのかずら科

トウゲシバ、ヒカゲノカズラ、マンネンズギ、スズ  
ラン、ヒモラン。

。とくさ科

ズギナ。

。こけ類

ズギゴケ、ムクムクチリメンゴケ、ウチワチヨウチ  
ンゴケ、ミズゴケ、オオシツボゴケ、ゼニゴケ。

。うめのきごけ科

ウメノキゴケ。

。さるおがせ科

サルオガセ。

。くちべにたけ科

クチグリ。

。きつねのちゃぶくろ科

ノウタケ。

。かごたけ科

カゴタケ。

。まつたけ科

ベニテングダケ、テングダケ、マツタケ、モミタ  
ケ、エノキタケ、ヒラタケ、ツキヨダケ、シイタケ、  
シメジ、ハツタケ、ツチカブリ。

。さるのこしかけ科

マイタケ、マンネンダケ。

。こうたけ科

コウタケ、ヤマブシダケ、ホウキダケ。

。きくらげ科

キクラゲ。

。い科

イトイ。

。さといも科

マムシグサ、ウラシマソウ、ヒロハテンナンシ  
ヨウ。

## 二 動物

この公園一帯は、深林や湖沼や暖流に恵まれているため、鳥獣や昆虫などの棲息が多く、代表的な熱帯候鳥といわれるブッポウソウや、八色鳥もここで巢を作る。この地帯が温帯の南限に当たっているので、北方・南方両系のもものが多く棲息している。

### ○哺乳類

キヌウシ、ウシカ、イノシシ、ノウサギ、ムササビ、タヌキ、ムジナ、イタチ、その他極く少数ではあるが、日本猿も生息する。特にイノシシは多く、雨あがりの登山道路附近で、彼等の踏み荒した跡が見られる。シカは、新燃岳からえびの高原一帯にかけて多く、えびの高原ホテルでは、日暮時に宿舎の窓から鹿の姿が望み見せられるという。猿も山麓地帯では時々見かける。

### ○鳥類

山麓地帯には、キジ、ヤマドリ、コジュケイ、カラス、ヒヨドリ、ツグミ、シジュウガラなどが多く、山中には、コンジロヤマドリ、カケスなど留鳥のほか、ウグ

イス、カッコウ、トラツグミ、アカショウビン、ヤマセミなど、夏鳥や、フクロウ、ミミズク、タカなどもおり、珍奇なものとして、八色鳥や、霧島神宮・佐野神社の老杉の空洞で繁殖するといわれる「姿の仏法僧」ミヤガラスがいる。この鳥は、ギャアとかゲツ、ゲツと鳴く。

しかし、霧島にも声のブッポウソウも確かにいる。昭和十五年頃の五月中旬、有料道路の新湯料金徴収所の西方二〇〇m位の地点で、ややうす暗くなった七時半頃、ブッポウソウ、ブッポウソウと二声だけ聞いたという。しかし、姿は見えなかった。永い間、声の正体は分らなかったが、昭和十年になってから、山梨県の野鳥研究家中村幸雄氏が、フクロウ科の一種で、コノハズクという鳥であることを発見し、学界でもそのように認められた。神秘のベールがはがれ、NHKが身延山でコノハズクの現地放送をして、人気を呼んだのもこのころであった。コノハズクとミヤガラスは、共に南方系の渡り鳥と言われ、棲息場所も同じであるところから、古より混同されたのではなからうか。

普通、ブッポウソウといわれる鳥は、東南アジア一帯

に棲む渡り鳥で、日本には五月ごろ飛来し、本州・四国・九州の山間部に棲み、九月ごろになると、ビルマ・フィリッピン・インドシナ方面に帰っていく。この鳥は、警戒心が強く、一〇m以上の大木の幹に穴をあけ、普通つがいにて棲み、五月下旬から六月中旬にかけて巢を作り、三、四個の卵を産み、ひなをかえす。エサは、トンボ、セミ、コガネ虫などである。繁殖期には、巢を作る場所の争奪戦で、仲間同志殺し合うことも多いという。棲息場所は主として霧島神宮から狭野神社附近であるが、五・六月ごろには、霧島温泉附近まで飛来することも往々ある。

なお、冬期静かな火口湖には、マガモ、コガモ、オシドリなどが遊泳している光景も見られる。

### ○魚 類

湖沼はすべて火口湖であって、ほとんど流入・流出する河川がないから、魚類は割合に少く、大浪池には、昔放流したコイ、フナが、六観池にはアブラバエとコイ、霧島川の上流には、ベニマスが棲息している。

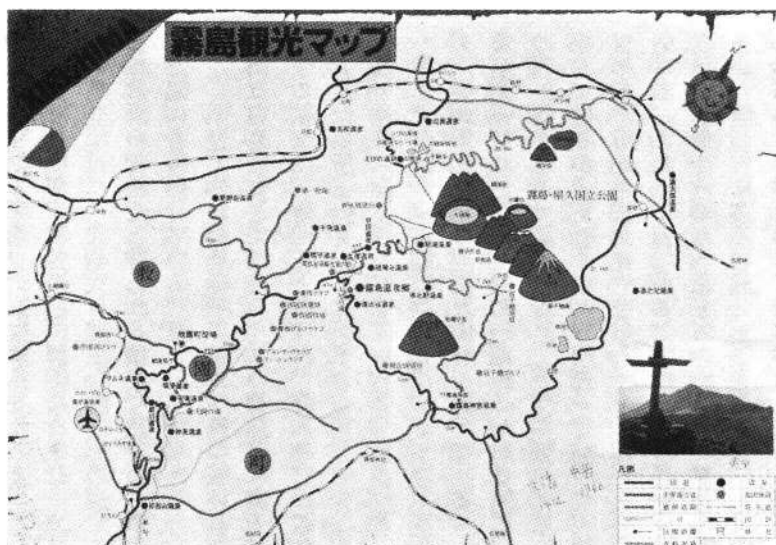
### ○昆虫類

南北両系のものが混棲しているために、興味深いもの

がある。特に珍しいものは、キリシマミドリシジミチョウ、サツマシジミチョウ、モンキアゲハ、ムカシヤンマ、オオダイセコガネなどが多い。特に高千穂峰山頂附近は、気流の関係からか豊富な昆虫相を示している。

### 三 気 象

霧が多いので、霧島といわれるほど霧の発生が多く、頂上にはほとんど霧がかかっている。したがって、年間の降雨量は平均三〇〇〇mmを越え、夏期の七月は、一か月のうち二十日間は雨が降り通しである。天気がよく、春と秋で、なかでも十月、十一月は快晴の日が続く。さすがに南であるために雪は少く、雪の降るのは二月が多く、霧島温泉附近では一・二月に数回、大浪池附近では十二月から三月にかけて、月に十日以上の降雪日を見る。この頃になると、大浪池・韓国岳附近は、水滴が非常に冷たい空気にあって冷却した上に、雪片と混じて樹木や岩石に附着し、同時に空中の水蒸気が昇華作用を起こして、表面に美しい結晶をなし、白珊瑚のような霧水の花園となる。平均気温は、霧島温泉附近で七・八



月の二十二度から二十三度を最高とし、一月の一・八度が最低となっている。年の最高気温は、三十度に達することは珍しく、夏は涼しいので避暑客でにぎわう。

#### 四 観光資源

##### ○主要山岳、高原

・御鉢（標高一、四二〇m、火口底一、一六八m）  
 山体は欠頂円錐型のすりばち型で、火口の様子が、飯びつのようなかつこうをしているので、御鉢と言いつ出したのであろうか。火口の直径は約五〇〇m、深さは約一〇〇mに及ぶ大噴火口があり、今なお、かすかに白いガスが立ちのぼるのが見られる。霧島火口中最後まで噴火を続けた火山で、大正二年十一月から、同三年一月にかけて活動したが、桜島の大噴火とともに衰えた。美しい円錐状をなし、高千穂峰の寄生火山である。円錐丘の外側は急な斜面で、全山火山岩に覆われているため、植物には見るべきものがない。内面の壁は、整然と熔岩の層を表わし、成層火山であることがわかる。昔から、新燃岳と交互に活動する傾向があ

ったようである。火口の底には水をたたえ、これが太陽の光を受けて、五色の色に輝くのはきれいだである。

高千穂登山道は、北側火口壁上を約一km通過するが、ここは馬の背越えと言われる峻路であって、橋南溪の西遊記にも書かれている。幅二・三mもあろうか、右も左も際涯も知れぬ絶壁上の道で、風の強い日など、登山は容易なことではない。この御鉢と、高千穂峰の接する鞍部は、背門丘せどおと呼ばれ、霧島神宮が最初に創建された場所と伝えられている。

・高千穂峰（標高一、五七四m）

霧島火山群の東南端に位置し、ピラミッド型コニーデ（尖頭円錐型）の端正な山容を誇っている。「馬の背越え」をたどり終え、高千穂峰へかかる間に、一つの浅い谷がある。「千里が谷」とか、「天の河原」とか呼んでいるが、正しくは「背門丘」といって、約千四百年前、霧島神宮が建立せられたところだといわれているが、これは不明である。古は、瀬多尾権現宮（霧島神宮の前身）があったところであり、御鉢の噴火のため、麓の方に遷座されたと伝えられている。

瓊々杵尊が、この峰に降臨されたという伝説は著名

で、山頂に「天の逆鉾峰」とも「最初の峰」とも呼ばれる。東に二つ石、西に御鉢の寄生火山を持ち、標高一、三〇〇m以下は、三者合体して広いすそ野を展開していて、その成因にも、噴火口の南の半分が崩れ落ちた残体であるという説と、コンデの山体の上に、トロイデ状に熔岩を盛り上げたものであるとする説の二説がある。ともかく植生は極めて新しく、マイヅルソウ、イタドリ、トアリスシヨウマ、ヤシャブシ、ミヤマキリシマなどが生育するほか、火山れきが大部分を占め、放射谷が山肌を刻み、これが四季おりおりの光線に照り映えて、種々な色彩に染められ、霧島火山群中第一の秀麗な山容とともに、神秘的な美しさを誇っている。

山頂には、気流が影響して、昆虫類が特に多いことも興味の対象である。また、頂上には火口がなく、狭いがやや平坦になった場所がある。登山客が多く、特に一月元旦の夜明け、この山頂から御来光を仰ぐ行事が続けられ、数多くの人が登っている。

・二つ石（標高一、三〇〇m）

旧火口壁の面部が残ったものであるといわれる。山

頂の東端に、その名の起源となった二つの巨岩がそびえている。脚下に、御池や小池の名鏡と、これを包む広大な常緑照葉樹の樹海は特にみごとである。

・中岳（標高一、三六〇m）

御鉢の北西に位置し、トロイデ型火山で、つりがね状をなしている。山頂には、なだらかな噴火口があり、一部は湿原となっている。高千穂河原から西へ登る。霧島火山群中でも新しい火山といわれ、高千穂河原に面した南部は、熔岩が露出し、その下部に、標高一、一二〇mの熔岩が舌状に派出している。山頂から山腹にかけて、ミヤマキリシマ群落の発達が著しく、新燃岳とともに、山中第一の美観を呈する。その他に、ヤシヤブシ、ツクバネウツギ、ウメバチソウ、スキ、ツクシヒゴタイなどが見られ、観賞地として最適である。登山が容易なので、特にツツジの時期には、登山客でにぎわう。

・新燃岳（標高一、四二〇・8m、湖面標高一、二三四m）

中岳の北西に位置し、欠頂円錐型のホマーテ型火山。頂上には、完全に近い円型の、直径七五〇mの火

口があり、そこから、一八六mだった火口底には、直径一五〇m、深さ約三〇mの火口湖があり、青緑色の水をたたえており、とても美しい。また、火口の南部周壁には、「兎の耳」と呼ばれる熔岩突起が二つあり、遠くからの眺望では、ちょうどラクダの背のこぶのようにも見える。中腹は灌木に、山頂は草原に包まれている。山頂から山腹にかけて、ミヤマキリシマの分布が著しく、山頂のものは、気象的な影響から矮化して、地に敷きつめたように、一面に可憐な花をつけて、とてもみごとである。時期には、登山客の絶え間がない。昭和三十四年二月十七日、北西部外壁から噴火し、ミヤマキリシマも相当の損害を受けた。現在でも、山頂外壁には、わずかながらガス状の噴煙があがるのが見られる。この火山も、中岳と同じく霧島火山群中、最も新しい火山である。

・夷守岳（標高一、三四四・1m）

宮崎県側にあり、霧島火山群の東北端に位し、コニデ型の端正な山容を示しており、山群中の名山の一つとされている。山頂には、クマザサ、スキが密生しているが、山腹から山麓にかけて放射谷が発達し、

大森林に覆われ、特に西北麓には、クロマツを主とする珍しい森林が展開している。小林方面から見た濃い緑の円錐型の姿が美しい。「真幸の名山」として、古来評判をとった山である。山容が美しいだけに、登るには難渋な山とされている。日本書紀景行天皇の条に、筑紫の国を巡狩せられたとき、夷守にやってこられたと記されている。

・獅子戸岳（標高一、四二八・四m）

新燃岳と韓国岳の中間に位置し、熔岩や火山砂れきが露出しているところから、またの名を赤崩れともいう。火口は既に破壊侵蝕され、灌木が密生しているが、一帯にミヤマキリシマの分布が多く、それに、ヒカゲツツジが点在して佳景である。ミヤマキリシマの原生地ともいわれている。この獅子戸岳と、新燃岳と、大幡山に囲まれた草原は、殿様まぶしと呼ばれ、むかし島津氏が狩猟を行ったところだと伝えられている。

・韓国岳（標高一、六九九・九m、火口底一、三九八m）

相当老年の山で、地質学上、旧霧島熔岩に属してお

り、霧島火山群中の最高峰である。ちょうど、えびの岳と白鳥山と大浪池火山のすそのを併せたところに当たっている。

西北部を除いては、柔かみのある円頂の山容を示し、山頂には、直径九〇〇m、深さ三〇二mの火口がある。火口壁の西北部は爆破されて、今も凄愴な景観を呈し、火口内壁上部は絶壁、そこにも熔岩や火山砂れきの累層が見られ、また下部は崩壊して、緩斜面となっており、火口底は雨期だけ水がたまる。この山は、二つの爆裂火口をもっていて、一つは爆破された火口壁の北方にあり、いま一つは、東南山腹の琵琶池がそれで、この池は、形が楽器的琵琶に似ているところから、この名が起ったものである。時により、池の水が涸渇することがないとも限らない。山頂部には、ミヤマキリシマの群落のほか、マイヅルソウ、ススキ、ツクシヒゴタイ、ツクシゼリ、トアリシシヨウマなどが生育し、火口壁にはヤシヤブシ、ヒカゲツツジ、シロドウダン、イワカガミなどが見られ、また大浪池からの登山路に沿った山腹は、標高の割合に森林の生育がよく、ハリモミ、ブナ、ミズナラ、クヌギな

どが多く、植物の垂直の分布を、麓の方から上に、段々と見ることが出来る。すなわち下の方から、喬木の森林帯、灌木帯、草本帯となっている。

冬季十二月上旬から三月下旬にかけて、霧氷の美しさも特筆されてよいであろう。なにしろ、霧島の最高峰であるから、山腹の眺望は雄大広濶で、火口や火口湖に富む霧島火山群を見下す眺めや、桜島や高隈山・開聞岳、さては遠く波かとはかりに重なりあう中部九州の山々の展望は、なるほど韓国まで見通せるという意味から、山の名称をつけた故人の機智もしのばれる。

よく、写真などにとってあるのは、この山頂から、新燃岳を前景にして、御鉢、高千穂峰をみた光景である。韓国の見岳の略で、皇孫がはるかに韓国を望みせられたという伝えがあるが、もちろん朝鮮の見える道理はない。山岳熱の盛んなおりから、最近登山客も多く、西北に当たるえびの高原からの登山が容易である。

・大浪池（標高一、四一一・九m、湖面一、二三九m）

韓国岳の南西に位置し、その東麓が、霧島町と牧園

町の境をなす。頂上に直径一kmの火口があり、約一七〇mくだった火口底に、直径六三〇mの火口湖を有し、なみなみと紺青の水をたたえている。霧島林田温泉口から登山するのが普通であったが、昭和三十六年十一月に、道路公団による南北霧島道路を結ぶ霧島スカイラインが開通し、霧島温泉とえびの高原を結んでいるので、現在は七合目附近までバスで行ける。バス停から約四十分で火口壁に到達し、湖面を望見することが出来る。なお、池に伝わる伝説もあるが、池については、湖沼の項でふれたい。

・硫黄山（標高一、三〇〇m）

宮崎県側えびのにある。韓国岳の西方えびの高原にあり、えびの高原からは、登るといふほどの山ではなく、高さ五〇mぐらいの台地といった方がよい。山の半面がダイダイ色の硫黄の華でいろどられ、硫化水素や亜硫酸ガスを盛んに噴出している。硫黄を採取し、近くに精錬所があったが、現在では採取していない。

この山は、一名「賽の河原」といわれ、一面に小石を積んで、仏教にいう三途の川「賽の河原」をしのばせている。

・烏帽子岳（標高九八七・九m）

霧島神宮から霧島温泉へ通ずる国道の右手にあり、この道路はその中腹を走っていることになる。一面森林に覆われている。その山容は、この地方でいうヨボシ、つまり鶏冠に似ているところから、この名がつけられたといわれる。頂上は、火口のアとも明らかでなく、旧態を失った古い火山で、その余勢が湯之野温泉等の地獄にあらわれており、森林のすそは一面の草原で、その山腹を神宮・温泉間の国道が走っているの

・大幡山（標高一、三五三m）

霧島火山群中、唯一の複式火山で、直径約一〇〇m、外輪山は殆んど破壊されて低く、中央火口丘も平坦になって、すこぶる複雑な地形を示している。旧火山口は湿原となり、モウセンゴケやマイヅルソウ・ツクシヒゴタイなどが見られ、山頂草原一帯は草原状態で、この辺にもミヤマキリシマの群落のほか、ススキ、ヤシヤブシ、ツクバネウツギ、アキノキリンソウ、イタドリなどが目立つ。

・矢岳（標高一、一三一・六m）・竜王岳（標高一、

一六〇m）

新燃岳の東方にそびえる火山で、全山密林に覆われ、竜王岳の南麓の溪流沿いに、立木炭化の遺跡が見られる。これは、立木が熱い火山砂れきによって、埋没されて炭化したもので、激しかった噴火当時を想像するのによい材料であろう。

・丸岡山（標高一、三二〇m）

大幡池に続く円丘状の火山で、火口に浅く、矮化した灌木や草木に包まれ、ミヤマキリシマ、クマザサ、ススキが密生している。ここで自慢のヒノキ天然林は丸岡山の東山麓、標高一、〇〇〇mの等高線を中心に、面積六haの地域で、ヒノキ、モミ、ツガ、アカマツなどが混生しているところもあり、ヒノキの樹令はだいたい一〇〇年から三〇〇年といわれ、直径二〇cmから一mに達している。南九州にこの種の天然林が存することは、学術上たいへん興味ある現象で、大正十年十月学術参考林に指定された。

・白鳥山（標高一、二五〇m）

山頂は、えんえんとした原野となっており、山体は複雑で、北側に二つの爆裂火口がある。北部の山腹は

放射谷が発達し、モミ、ツガを主要林とする美林に覆われており、山頂の東南部にビヤクシ池、東に六観音池がある。

・甕岳（標高一、三〇一m）

欠頂円錐型の火山で、山頂には、直径五〇〇mの浅い皿状の火口があつて、水をたたえた湿原となつており、美しい池塘もあつて、ミズゴケ、モウセンゴケ、ツクシゼリなどが見られ、また山頂部は原野で、ミヤマキリシマ、イヌツゲ、ヤシヤブシ、シロドウダン、ヤマアザミ、マイヅルソウなどが混生している。

・えびの岳（標高一、三〇五m）

火口の東北部が崩れて、えびの高原に向つて馬蹄型に開いていて、ちょうど天然の野外劇場のような地形を示している。山頂にも火口内にも、草木・灌木類が生い茂っている。

・佐賀利山（標高七六三・四m）

山体の大部分が、近くにあるえびの岳の熔岩流に埋められてしまった低い山で、山頂部は、樹林に覆われている。

・栗野岳（標高一、〇九四・二m）

侵蝕によつて、ほとんど旧態をとどめていないが、本公園の西北端に堂々とした山容を誇る。同じく山頂までぎっしりと樹林に覆われ、北麓には天然記念物ヒガンザクラの自生南限地がある。

・高千穂河原

御鉢の西、山腹の火山砂れきが押し出して造った扇状地で、鹿児島県が建設した山小屋や、水道の施設や茶店などがあり、霧島温泉・狭野神社・高千穂峰・中岳を結ぶ要衝に当る。また、ここに霧島神宮古宮跡として、古式に則つた祭場がある。

・えびの高原

韓国岳の北西麓、甕岳・白鳥山・えびの岳などに囲まれた海拔一、二〇〇mの広闊な高原で、ススキ、ノリウツギ、ミヤマキリシマ、ネザサ、ノアザミなどが多く、西部は、アカマツ林に覆われており、高原南部の宮崎・鹿児島両県地帯の細流に沿つて、天然記念物のノカイドウが自生している。海棠の原種で、高さ二mから五mの小喬木状となり、五月下旬ごろ、五弁で淡紅白色の花が咲く。それからカサ湯（硫黄泉）、川湯（みょうばん泉）などの野趣に満ちた温泉もあり、

県営キャンプ場や、山小屋の施設、ホテル、バスターミナルなども建設され、将来最も期待される集団施設地区である。また、韓国岳登山口でもある。

### ○湖 沼

俗に霧島四十八池といつて、山岳に似合わぬたくさんの、大小さまざまな湖沼を有している。そのほとんどが火口湖である。

・大浪池（標高一、四一一・九 $m$ 、湖面一、二三九 $m$ ）

霧島火山群のうちで、また、火山国日本のうちでさえ、この大浪池ほど整った形の火口湖は他に見られな  
いとは、一度この地を訪れた人々が、異口同音にもら  
す歎賞のことばである。すなわち、山頂の火口は直径  
一 $km$ もあって、正円型で、約一七〇 $m$ 下った火口底  
に、直径六三〇 $m$ 、水深一一六 $m$ の火口湖があり、紺  
青の水をなみなみとたたえている。火口壁の上部は安  
山岩の絶壁で、下部は、崩れた岩層が緩傾斜を示して  
おり、しかも火口内には、樹木がうっそうと繁り、モ  
ミ、ツガ、ハリモミなど針葉樹のほかに、ヤシヤブ  
シ、ミズナラ、オオカメノキ、ヤマハンノキ、ヒカゲ

ツツジなどが混生して、いずれも清澄な湖面に影を映  
じ、まさに神秘的な景観を織りなしている。火口外周  
は、ミヤキリシマ、ノリウツギ、ヤシヤブシ等の低  
い灌木と、ススキ、マイヅルソウ、ヤマアザミ、リン  
ドウなどの草原で、ここから霧島温泉に下る登山路の  
両側は、そのまま植物生態の観察ルートであり、特に  
標高一、一〇〇 $m$ 附近の霧島特有の肌の赤いアカマツ  
や、さらに霧島温泉に近い常緑照葉樹林は、みごとで  
あるから見のがしてはならない。また大浪池は、一月  
中旬から二月中旬にかけて結氷し、氷厚二〇 $cm$ を越え  
るので、えびのの白紫池が、スケート場として指定さ  
れるまでは、日本最南端のスケートリンクとなり、附  
近の霧氷とともに、ウインタースポーツ愛好家の寵児  
となっていた。大浪池に登るには、スカイラインの大  
浪池登山口にてバスを降り、遊歩道を徒歩で一・五 $km$   
登れば、約四十分で池を見ることがができる。

なお、大浪池にまつわる伝説もある。

・御池（標高三〇五 $m$ ）

霧島山は、火口湖の多いことでも有名であるが、御  
池は、その中の最大のもので、直径一 $km$ 、周囲三 $km$ 余

り、水深一〇・一・五m、火口壁は比較的低く、周囲一帯は、常緑照葉樹林にかこまれ、なお、高千穂峰の秀峰が碧水に影を映じているのは、まことに特異の景観である。湖岸には、松の港、驅瀬港、皇子港、創崎港、荊茅港、柳港、護摩壇港などの七港があり、春から秋にかけて、ボートの利用者が激増する。

しかし、湖棲生物は少なく、アブラバエ、イモリ、スッポンのほか、アユ、コイ、フナ、ワカサギなどが養殖されている。夏は湖辺にキャンプ場も設営される。その昔、性空上人が、護摩をたいて修行した跡と伝えられる護摩壇は、この火口壁の中腹に沿った崖の上にある。湖中でフナが多いといわれる。霧島東神社からの眺望は格別美しい。

・大幡池（標高一、三〇〇m、湖面一、二三〇m）

大幡山の東北に続く単独の火山で、山頂の火口湖は楕円型、周囲二km、水深一三・八m。火口壁は低く、ススキ、ヤシヤブシ、クマザサ、ノリウツギ、シロドウダンなどが生育していて、まことに明るい山の湖水である。魚類の棲息はなく、東北岸に排水口を設け、小林市方面の灌漑用水に使用されている。また、大幡

温泉は、この池の東山腹にあって、古の宇都温泉とも呼ばれ、温度は二十七度、アルカリ性炭酸泉である。この湖は、四季ともに水量は増減しないといわれ、昔、麓の農民が雨乞いに来れば、きっと効果があったと言ひ伝えられている。

・六観音池（標高一、三〇〇m）

えびの高原の北部にある火口湖で、一名御池とも呼ばれているが、直径五〇〇m、水深一四・二m、清澄な水をたたえ、池畔には、モミ、ツガ、アカマツなどの老樹を配し、静寂な環境である。北畔の六観音堂には、牛馬の神が祀っており、その参道の老杉は、屋久杉を植えたものと伝えられ、六観音杉として有名である。昔、性空上人がこの池の畔で、看經苦行を続けていた時、日本武尊の化身が、白鳥となって現われたという因縁で、白鳥権現を建てたと言われる。冬、結水するので、スケートリンクになったこともある。

・不動池（標高一、二四〇m）

えびの高原、カサ湯の北方にある火口湖で、直径二一〇m、水深九・三m、水質は、附近の硫黄山の影響を受けて、強い酸性を含んでいる。現在、えびのター

ミナルより小林へ通ずる道路が、池の畔を通り、バス  
の車窓からその美しい光景を見ることができ  
る。

・白紫池  
びやくし

えびの高原にあり、白鳥山直下の火口湖で、ビヤク  
シ池、または白鳥池ともいい、直径二五〇 $m$ 、火口壁  
は崩壊して、草木、灌木が茂り、水深は極めて浅く、  
湿原状を呈し、深い所で約五〇 $cm$ から一 $m$ である。水  
位は一定していない。池の水は東側の流出口から、六  
観音池に注いでいる。冬季は、水深が浅いので、容易  
に結氷し、最近ではスケート場として指定され、県内は  
もちろん、県外からのスケート利用客も多く、大いに  
にぎわっている。

・小池

御池の西方一 $km$ のところにあつて、湖面は御池より  
一〇〇 $m$ 高く、大きさは直径三七〇 $m$ 、水深一二 $m$   
で、火口壁が高く、常緑照葉樹の密林に覆われている  
ので、不気味なほどの静けさを保っている。

○滝

・千里が滝

霧島山中の飛瀑中最高で、高さ七五 $m$ 、昔から修験

者の修道場として使われてきた。すぐ南に、霧島第二  
発電所がある。

・両滝

新湯から新燃岳に通ずる林道を、約四 $km$ 登ったとこ  
ろにある。この発見は、極めて最近のことである。双  
の滝が存在するところから、この名で呼ばれている。  
ここの周辺の紅葉は、他に見られない美しさを持つて  
いる。

・千滝

霧島神宮の西北約一 $km$ ぐらいのところにある。高千  
穂河原より流れ出る小川が、霧島川に落ちる寸前、侵  
蝕作用による高さ四・五 $m$ に及ぶ大絶壁を流れ落ち  
る。現在この川は、平常水なく、この滝は、絶壁の中  
腹ごろより、地下水が、絹糸のようにせん細な糸状を  
なして、数十条も落ちて美しい。さながら、滝の白糸  
のようで、水芸を見る感じである。雨期になり、河原  
に水が多ければ、川に沿ってこの絶壁を一時に流れ落  
ち、二層の滝となり、その壮観はひとしおすばらし  
い。

・丸尾滝

丸尾温泉地区にあり、丸尾三叉路より霧島神宮へ通ずる国道二二三号線を、約二〇〇m行った左手にあつて、豪壮華麗、そのしぶきと紅葉が映えあつて、こよなく美しい滝である。最近、夜間照明施設も施され、水銀燈に照らし出された滝の美観は、例えようのない美しさを、満喫することができる。

・花草の滝、山城の滝、手洗の滝などもあるが、交通不便のため、あまり世に知られていない。

## 五 霧島に関する詩歌

有明の月は冴えつつ霧島の  
やまの溪間に霧たちわたる

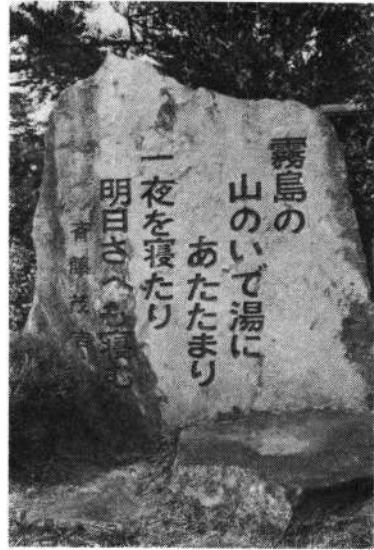
若山牧水



牧水の歌碑

霧島の山のいで湯にあたたまり  
一夜を寝たり明日さへも寝む

斉藤茂吉



茂吉の歌碑

匂えども摘まで来にけり霧島は  
草のひとつはも神しろしめす

与謝野鉄幹



潮五郎の歌碑

霧島は神山なれば谷々に  
湧く雲さへも尊とかりけり

海音寺潮五郎

高千穂の霧来てひびくひよどりの声

水原秋桜子



秋桜子の句碑

のぼりゆく韓国岳の霧のなか  
こまどり鳴いて山静かなり

作者不詳

夏が来たやら霧島山に

御山つつじの花が咲く

野口雨情

牧園へ太鼓踊を見に来よと

便り来りぬ瓜を割るとき

与謝野晶子



晶子の歌碑

## 第二節 霧島温泉の沿革並びに現況

### 一 概 説

一般に霧島温泉と呼ばれているのは、明ばん、硫黄谷、栄之尾、林田、丸尾、栗川等の諸温泉の総称であるが、広義にはこのほか湯之野、新湯、湯之谷、塩湯、手洗、山之城、関平、鉾投、太良、金湯、銀湯など広く霧島山中の諸温泉も含まれているわけである。

霧島温泉地区沿革についての正確な記述は困難であるが、ここでは主として「鹿児島県温泉誌」「霧島火山地域の温泉その一」と、二、三の古老の言に基づいて記述することにした。

これらの諸温泉は、何れも霧島山中の山腹に散在し、いずれも標高六〇〇mから八五〇mの間に位置し、これらを相互に結ぶ道路あるいは霧島山中の旧街道といわれた道路は、熔岩地帯や火山噴出物が堆積して、相当の難路であった。

現在では、これらの旧道は人跡もまれである。昔の旅

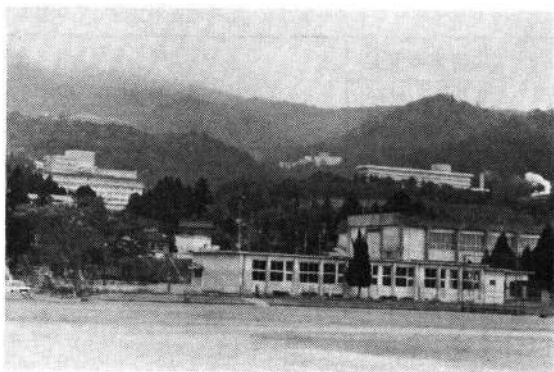
客は湯治を目的とした。自炊客が主で、馬やカゴを主な乗り物として温泉に遊んだのであるが、宿舎、浴舎等も極めて素朴であつたらしい。

その後、登山・参詣客の漸増と、浴客の増加に伴い、次第に道路の一部も改修されるようになり、大正三年牧園、霧島温泉間の道路、昭和八年霧島神宮・丸尾温泉間の道路の開通により、日に増し便利となった。大正年間には、牧園駅（現在の霧島西口駅）・硫黄谷温泉（現在の林田温泉とホテル霧島館との分岐点）間に、定期馬車が運行されたこともある。

さて、霧島温泉の今日をつくった功労者は、初代林田熊一氏（一八九〇—一九五九）である。氏は昭和四年（一九二九）、新たに今の林田温泉を開拓し、同時に、初めて霧島温泉を自動車交通網の中に入れ、足の近代化を図った。

以後三十年間にわたって、霧島温泉の開発紹介、道路の整備、輸送力の強化などについて、氏の貢献はまことに大きいものがある。

その後、時代の推移による、特に終戦後のいわゆる観光ブームによって引き起こされた観光客や、交通量の増



霧島温泉地帯

変わってきたこと、さらに輸送力の強化と団体客の増加のため、その数が激増したことなどのため、旅館の増新が急速に行われ、しかもそれらの大部分は、個人浴客のほか、大浴場、温泉プールなどを設けて、いわゆるデラックス化を図りつつある。

大は、必然的に旅館の数と規模に変化を与え、したがってまた温泉の需要も激増するに至った。

すなわち、国民の生活程度の一般的向上につれて、主な来訪客が、湯治を目的とした自炊客から、観光客に

## 二 各 説

### (1) 丸尾地区

この地区は、温泉地としては古く、ことに殿湯、塩湯、栗川などは、昔から湯治場として知られていた。しかし、ここ二十数年来は、観光温泉地として急速な発展をとげ、小規模の旅館は姿を消し、中規模以上のホテルの新築が続いて行われ、既に温泉街の態を整えつつある。

丸尾温泉の発見は、文政二年（一八一九）と言われ、明治二十七年野島陸軍少将がここに始めて別荘を建設以來、次々に名士の別荘建設が始まった。附近には布引滝、丸尾滝、千疊敷、岩風呂等の名所もある。

また、丸尾滝附近から自然探勝の遊歩道が、谷川沿いに作られている。

表1 丸尾地区代表温泉の沿革

項目 温泉名	温泉の発見			温 泉 の 沿 革										
	年号 (西暦)	発見者	動機											
丸尾温泉	文政二年(一八一九)	横尾権太	狩猟中	横尾権太	→ 迫 明治十七年頃 金次郎・他	→ 萱島政光 明治二十六年頃	→ 高野友吉 大正二年頃	→ 蔵前仁蔵 大正六年以降	→ 蔵前(丸尾旅館)	→ 蔵前(プリンスホテル)	・プリンスホテルへ引湯 ・跡地には、現国に建設されている。			
栗川温泉	文久二年(一八六二)	牧彦八	—	牧彦八	→ 牧家三代経営	→ 山口嘉次郎 明治四十年	→ 愛甲某	→ 大庭侃 昭和二年九月	(備考) 安井息軒が度々入湯した。					
塩湯温泉	—	—	—	→ 谷山久五郎 明治初期前後	→ 石原三八・蔵 明治三五年頃	→ 松下三・四年頃	→ 松下倫子	→ 山口倫久						
殿湯温泉	宝永・享保の頃 (一七一〇頃)	—	—	約250年前、霧島神宮造営工事のおり、開発されたと云われる。			→ 藤井一郎	→ 林某	→ 山崎某	→ 森山某	→ 折田辰次 (霧島観光ホテル) 昭和三年頃			
その他	昭和三十年以降	一二個人 鹿児島県	一二個人 新源泉掘さく 地すべり対策	昭和30年、地すべり対策のため、ボーリング90本実施、一部源泉として利用										

(2) 林田地区（林田・栄之尾温泉を含む）

林田温泉は新開発の温泉で、昭和四年以降のことである。その泉源も、栄之尾温泉の泉源近くであり、およ

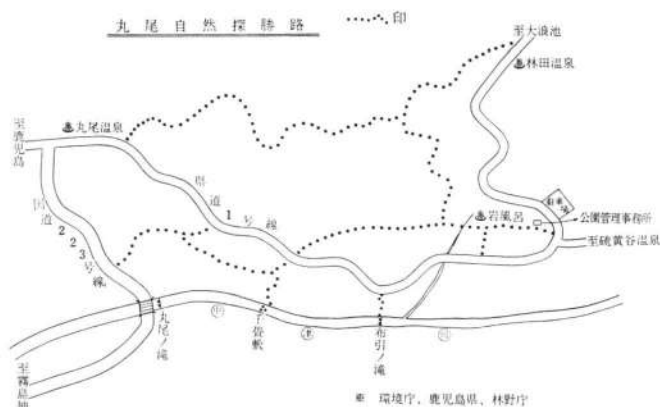


表2 林田地区温泉の沿革

項目 温泉名	温泉の発見		温泉の沿革	
	年号 (西暦)	発見者 見名	動機	
栄之尾温泉	延享元年(一七四四)	安藤 仲兵衛 国広	山中に迷いこみ発見	(ホテル林田温泉へ) 二代 林田熊一(一九五九) →昭和三四年 初代 林田熊一(一九三五) →昭和十年 伊藤 仲兵衛 →とに分つ 島津家と伊藤仲兵衛 →明治十二年(一八七九) 地開設 藩主島津忠義公避暑 →文久元年(一八六一) で開発 安藤仲兵衛 国広自費 延享四年(一七四六)
林田温泉	昭和四年(一九二九)	初代 林田 熊一	と判断 近代的温泉経営適地	(ホテル林田温泉) 旅館業経営 二代目 林田熊一 →建設 (林田旅館前身) →私設道路・三州館 初代 林田熊一 昭和四年(一九二九)

そ五〇〇m引湯して利用している。

榮之尾温泉は比較的古く、安藤仲兵衛国広が延享元年四月（一七四四）山中に迷い入って、所々熱湯の湧出するのを発見し、藩主の許可を得て、同四年五月自費を投じてこれを開き、文久元年（一八六一）藩主島津忠義公はここに避暑地を設けた。明治十二年の地租改正と共に谷川を境として東地一帯を民有とした。明治十三年高野新太郎と言う者がこれを借地して、温泉業を開設し、その後幾多の改良を加え、また管理人の異動があった。

大正のはじめ、富田重治氏が直接経営することとなり、屋舎、浴場の改築を行って面目を一新した。両者とも、現在はホテル林田温泉の経営下にあつて、広大な施設を有している。

(3) 硫黄谷地区

この温泉は正徳四年（一七一四）、旧踊横瀬の飯田喜八氏の発見したものであつて、子孫がこれを経営し、文政二年（一八一九）鹿兒島の住人桑原某がこれを譲り受け、明治十年ごろ堀切武右衛門がこの温泉地を買収した。

明治二十二年頃、堀切武兵衛が温泉業を開始し、その

表3 硫黄谷地区温泉の沿革

項目 温泉名	温泉の発見			温泉の沿革									
	年号 (西暦)	発見者名	動機										
硫黄谷温泉	正徳四年（一七一四）	飯田喜八		飯田喜八 → 桑原某 → 堀切武右衛門買収 飯田氏子孫がしばらく経営 堀切武兵衛 明治十年（一八七七） 堀切武兵衛 明治二十三年（一八九〇） 堀切末彦 昭和二年二月（一九二七） 堀切達正 昭和二十年八月（一九四五） （備考） 昭和二十四年八月台風被災、現在地へ移転 （昭二六、六）									

後改善を加えて今日に及んだが、昭和二十四年八月十六日の台風時における山崩れによって被災し、その後現在地に移転改築し、さらに改築を加えて、近代的設備を誇るホテル霧島館が出来上がった。また被災時に「硫黄谷温泉よろず覚書」その他貴重な記録は、すべて災害で失われている。

※ 硫黄谷温泉の少し上流の方に、明ばん温泉があった。比較的古くから知られた温泉で、利用客も多かったが、数度にわたる山崩れのため現在は施設もなく、堀切氏の所有で温泉はホテル霧島館へ引湯している。

#### (4) 横瀬地区

横瀬地区は、霧島火山群の西部に位置し、火山群の一つである烏帽子岳と、霧島温泉の一つである丸尾温泉などの南西、およそ6kmのところにある。中津川と、山城川の下流である小谷川との合流点がつくる小盆地に発達した、標高一九〇mの部落である。

#### ○横瀬温泉

横瀬温泉は、慶応元年（一八六五）の発見といわれるが、湯量は豊富で交通至便の地にありながら、温泉としては発達せず、現在は部落民の共同浴場として使

用されているに過ぎない。

#### ○轟温泉

横瀬温泉より約3kmぐらい、小谷川を上った右岸に、ボーリングによって噴出した温泉である。ポンプアップにより約1km離れた国道二三号線の道路沿いにある。林田バス轟ヶ鼻停留所より約一五〇mの位置にあり、交通は便利である。

#### (5) その他の地区

#### ① 関平温泉

町営牧園牧場の北西約4kmの谷間に、こんこんと湧き出る温泉である。昔は切創や刺（クまたはビ）を立てたときは、関平の湯にはいれば治るといわれ、また突きささった刺も出るといわれていた。

近頃護身装備も発達したので、外傷のための治療はあまり聞かれないが、明治末期から大正初期生まれの人で林業に経験のある人は、必ずといってよいぐらい体験している。切創等にも効能はあるが、現在では胃腸病、その他内臓器官の障害に著しい効果があるといわれ、平日でもポリタンクや一升びんを携えて五、六十人の人がお湯くみに来る有様で、日曜、祝日には県内外から二、三

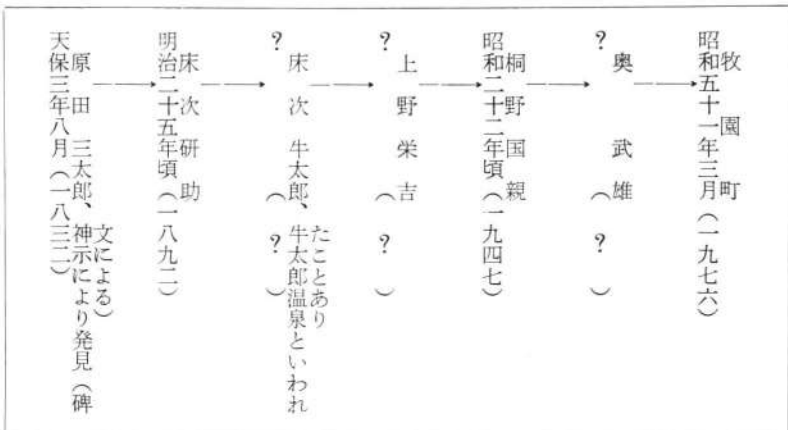
百人の人が訪れるという。

国道二二三号線柳ヶ平停留所附近より、栗野へ通ずる  
 広域農道をしばらく行くと、牧園農協蔬菜集荷場があ  
 る。そこから霧島開発株式会社の道路を上れば、やがて  
 関平温泉入口の駐車場に着く。それからは野中の小道を  
 歩き林を抜け、岩石がゴツゴツと露出している深い谷間  
 への道となる。さらにくだと、谷間の底に小さな橋があ  
 がかっている。この橋の渡り口にお湯の料金支払所があ  
 る。（お湯は、一升びん一本百円。駐車場から約1km）  
 温泉は、清澄な単純泉で、無色透明無臭、普通のお湯



関 平 温 泉

○関平温泉の沿革



※ 1 昭和30年(1955) 3月、国有林野整備措置法により、国有林106haの払下げを受けた。その中に源泉があり牧園町有となった。

2 昭和51年(1976) 3月、奥武雄氏より、立木、施設（本館、湯治小屋、浴場）を含む10,858.875㎡の全部を町で購入し、完全に牧園町有となった。

の味と変わらない。今までに、

。生傷をそのままお湯に浸すと、出血や痛みがとれる。

。手術後の治療に効果があった。

。胃の調子がよくなった。

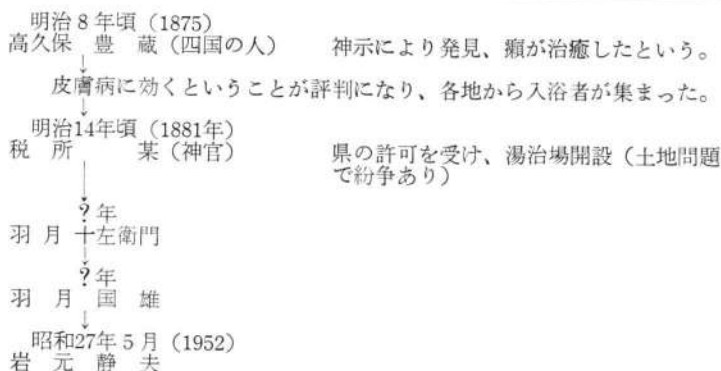
など、数々の効能の例があり、それが口伝えに人々の間に広まったものらしい。

## ② 新湯温泉

霧島温泉群の中にあつて珍しい湯である。林田温泉からさらに上つて、有料道路南ゲートで高千穂河原の方へ右折し、車で二、三分もすると、新湯温泉への入り口の道路がある。舗装されていない林道を五百mほど下つて行くと、赤い地表が白く変色したむき出しの地形のなかに、宿の全貌があらわれる。

旅館部と自炊部の棟が並び、屋外に二つの浴場のある温泉である。その一つが皮膚病などによく効くといわれる乳白色をした硫黄泉で、噴気が浴槽内で泡立ち、気泡泉の役目もしている。この風呂に限って男女の区切りのない混浴で、老若男女がなんのケレン味もなく、各人が硫黄の強いにおいの中で入浴を楽しんでいる。古くから

## ○新湯温泉の沿革（別名 砒霜熱湯又はコシキ湯）



備考 昭和29年8月18日、地すべり事故で壊滅、その後、復旧して今日にいたる。

硫黄泉として知られ、特に皮膚病によいといわれているので、治療仲間という意識もあって、おおらかな混浴ぶりである。

泉質は、硫化水素泉といわれ、その効用としては、水虫、たむし、湿疹、じんましん、うるしまけ、リウマチ、神経痛、高血圧、ぜん息、冷え症などによい。

近代化された霧島温泉群のなかでは、ひなびたムードを充満させている温泉場である。ここから新燃岳への登山も出来る。また、近くに大浪池もあり、なお有料道路も開通されていて、高千穂河原やえびの高原方面へのバスも通っているので、登山や観光にも好都合である。

### ③ 湯ノ谷温泉

昔から狩人は利用していたらしい。明治十三年（一八八〇）修行次郎左衛門が国有林巡視中発見し浴場を開設した（自然湧出）。その後内門権右衛門、野村某（彦蔵又は嘉久馬）、堀切某（武兵衛又は末彦）を経て、昭和十五、六年（一九四〇）頃、馬場重雄氏が経営するようになった。昭和三十六年に三本のボーリングをした。源泉は国有地内にあるため、これより一、二〇〇m下手の湯ノ谷山荘まで引湯して使用中である。

### ④ 銀湯

いつ頃発見されたか不明であるが、高牟礼操氏から井手上重友氏等が経営されたらしい。また、銀湯には、営林署の銀湯事業所があったため、昔は一二〇人位が住んでいて、事業所内の浴場と、共同浴場が設けられていたらしいが、現在はすたれている。

### ⑤ 太良温泉

元文五年（一七四〇）頃発見され、大正三年（一九一四）頃は田代藤内が住んでいたらしい。文献によれば、下宿屋一軒、別に人家なしとの記述あり。昭和十年頃までは、浴槽も宿舎もあったが、昭和十一年（一九三六）田代春美となり、昭和二十五年（一九五〇）十月、十条製紙KKとなっているが、温泉としての利用価値は少ない。

### ⑥ 金湯

明治の初期か中期のころ、万膳の金という人が開拓したものと伝えられている。その後浅田商會が営林署より土地を払い下げ、昭和二十六年に十条製紙KKが土地を買収したが、源泉は浅田商會に属しているという。

### ⑦ 野ノ湯

昔から温泉はあった。大正二年頃（一八一三）浅田商  
会が営林署より土地を払下げ、昭和二十八年（一九五  
三）頃、二十名位で野ノ湯組合が作られた。浴場のほか  
に休息小屋がある。別名常盤湯ともいう。

⑧ 手洗温泉

川野辰之助、佐藤アサの所有を経て、昭和二十年（一  
九四九）二月、初代林田熊一に移り、昭和三十五年（一  
九五五）二月、二代林田熊一所有となる。数多くの地獄  
や噴気等がある。

⑨ 霧島観光センター

昭和二十七年（一九五二）頃、前田正吉硫化鉄の探鉱  
中温泉を発見した。昭和三十七年（一九六二）八月温泉  
源として許可を受けた。同年十一月より霧島観光センタ  
ーに送湯中である。

⑩ 鉾投温泉

鉾投湯、鉾無湯とも呼ばれ、昔明ばんを採取する者が  
発見し、鹿兒島の住人森永某が浴槽を設けたという。  
島津義弘の木崎原の戦い（一五七二）の時に、鉾投の  
源泉に関連のある故伝が伝えられている。

元禄元年（一六八八）新納久辰が増築し、その後浅田

商会と三体堂との共有の時代もあったが、昭和九年（一  
九三四）七月に、牧園町有となった。

※ かつて霧島養育院が置かれていた。またこの温泉の北方  
約一里の所は奥の院があった所という。なお、関ヶ原役の  
出軍傷者が多数湯治に來たといわれている。

⑪ その他

山ノ城地区の温泉源、冷泉、鳥地獄地区の鳥地獄の  
池、及び鳥地獄噴気等があり、現在泉源として利用され  
ているものは少なく、既に廃止されたもの、未利用のもの  
がある。

### 第三節 新川溪谷温泉郷

新川上流で妙見、折橋、安楽、日の出、新川、ラム  
ネ、塩浸、間手ヶ原とそのほか二、三の温泉と、馬込の  
甌穴群を含む約六㎢に及ぶ多数の温泉群と、景勝と、史  
蹟に富む地域である。

妙見、折橋、安楽、緑なす山々と、溪谷に囲まれない  
で湯の里、新川溪谷温泉郷。なかでも、いつもにぎやか



新 川 溪 谷

なのが妙見、折橋、安楽温泉である。窓の下には、さらさらと谷川のせせらぎ、河鹿の澄みきった声が聞こえ、心を和ませる。特に晩秋の紅葉のころ、散りゆく木の葉を眺めながらの入浴は最高である。近年この地区は、自炊設備も整い、県外からの湯治客も多く、長期滞在者もある。また、近くに犬飼滝、和気公流譚の際入浴せられたといわれる和気湯、そのそばに腰掛石と称せられるもの、さらに一段上ったところに、和気神社等の遺蹟名勝がある。湯治客のなかには、これら名勝・遺蹟を訪れる人も多いので、地元では遊歩道や休息所を整備されてい

る。また、遊歩道の要所には、犬飼滝までの距離を書いた案内標柱が、六ヶ所建設されている。妙見・安楽温泉から、二km以内の近距離にあるため、晴れた日の午後には、遊覧客でにぎわっている。

安楽温泉を過ぎ、二二三号線を上れば、左下に炭酸ヘルセンター。さらに少し行けば、もうそう竹林に囲まれた静かな新川温泉があり、さらに上れば日の出温泉、紅葉と杉木立に囲まれたラムネ温泉があり、国道が右に折れ、石坂川沿いに上れば、町営塩浸温泉センター、鶴の湯がある。それから国道に沿って上れば、一・五kmぐらいの右下側に、間手ヶ原温泉がある。

### 一 新川溪谷温泉の沿革並びに現況

新川溪谷は、遠くえびの岳の麓に源を発した三体川、手洗川が宿窪田で合流し、さらに、横川町山ヶ野金山附近に源を発する通称金山川（新川上流）と、塩浸発電所附近で合し、河川の浸しよく作用によって生じた美しい溪谷である。いずれも河川は、比較的急流で、瀬を作り、たきを作り、大きく蛇行した部分もある。

(別表)

温泉発見年代

間手ヶ原温泉	明治34年	西暦1901
塩浸温泉	文化3年	1806
ラムネ温泉	明治38年	1905
日の出温泉	文化8年	1811
山ノ湯温泉	嘉永3年	1850
新川温泉	不詳	
安楽温泉	康治元年	1142
妙見温泉	明治13年(以前)	1880
折橋温泉	宝暦2年	1752
和気温泉	不詳	

この温泉群を上流からあげてみると、間手ヶ原、塩浸、ラムネ、日の出、山ノ湯、新川、炭酸ヘルスセンタ1、安楽、妙見、折橋、和気などで、これらのほか河床あるいは河川沿いの地点で、炭酸ガスを伴った温泉が、未利用のまま自然湧出している箇所もある。

これらは、医治効能を高く評価されてきた温泉が多く、施設・設備も、近年面目を改め、逐次近代的に脱皮しつつある。ただ、折角風致的にすぐれた景観・環境、温泉等を荒廃させないように、充分な配慮がなされるべきである。

当地区内の温泉発見の時期は、別表のとおりである。

この地区の温泉の性質が、いずれも重炭酸泉に属しており、新川(天降川)水系に沿って、温泉の位置が上流から下流になるにつれて、重炭酸土類泉から、含食塩重炭酸土類泉となり、さらに含土類重曹泉と変わっている。

なお、温泉は、自然湧出または浅い掘さくによって自噴しているものを、そのままか、あるいは簡単な工事を行ない、機械揚湯して利用しているが、源泉の場所が河川敷であるケースも多く、この傾向は、今後温泉量需要の伸びとともに、増加するものと思われる。

しかしながら、あまり進むと地区によっては、相互間に干渉がひきおこされる可能性もあり、また今日でも、多くが出水時などにたいへん苦労している実状であるので、将来なんらかの形の温泉集中管理機構を作り、思いきった施設で、現在未利用のまま放流されている河川敷の、豊富な自然湧出温泉をも利用することを考慮に入れて、集湯配湯を行なうといったような構想を、考究しておくことが必要であろうと考えられる。

#### (一) 間手ヶ原温泉

明治三十四年(一九〇一)の発見といわれる。国道

一二三号線沿いの間手ヶ原にあり、交通は便利であるが、近くに有名温泉が多いため、浴客は多くない。また、噴出口が低所にあるため、電力を使用して揚泉している。

### (二) 塩浸温泉

昔、鶴が傷をいやしたというので、鶴の湯と言われていたが、その後、川ぶちの岩に塩かきのついているのを見つけ、塩浸温泉と称するようになったという。

その後、安政年間のころ、浴場を改築し、家屋を建て、浴客勧誘の宣伝をしたが、幾年を経ずして放棄された。

慶応三年ごろ、福山郷の岡元助八氏が湯守となり、浴場等の改築を行い、大いに宣伝した。時あたかも戊辰の役の負傷者の治療に大いに効能があったので、県下に広くその名を知られるようになった。

この名声が藩主の耳に入り、島津家からの使者が派遣せられ、時の横目付永田与右衛門に計らい、山道を開き、浴槽並びに民家を建て、温泉場とした。そのころから、塩浸温泉と称するようになった。これからその名声が遠近にとどろき、鹿児島はもとより広く県外からも浴

客が集まり、ますます名温泉となった。

塩浸温泉場は、慶応四年（一八六八）以前、藩庁工事前は、温泉湧出口の土砂を上げ、僅かに数人を容れるぐらいの湯つぼであって、屋根は雨露をしのぐ程度の構造であった。また、東方の坂道は危険で、一部分ようやく一人ぐらいを通すほどの道であったので、時の踊郷役員からの申請によって、湯守支配人は小額の運上金（地料）を藩庁に納めていた。

この間の経緯は「平山泰介事蹟」に詳述されている。その一部を挙げれば次のとおりである。

其ノ温泉効能ハ切創、梅毒ニ著名ナルハ広く伝ワル、故ニ藩庁ハ明治戊辰役出軍負傷者ノ療養所トシテ、藩主御手許金ヲ以テ大工事営マル。石工権太郎（近在小野村住人）ニ命ゼラレ、数十名ノ石工人夫入り来リ、河川堤防東側ノ坂道切石ヲ以テ築キ上ゲ（現存スル）、鹿児島方面往来道中ノ内嘉例川新道七曲坂開サク及ビ家二軒新築修繕十一軒湯壺三ヶ所改造橋架設等其ノ費用多額ヲ要セラレシト言フ。為ニ境内外共面目ヲ一新シ、従ッテ負傷者及ビ同行者多数入り来リ頓ニ繁栄ス。依ッテ温泉場ハ旧習ヲ改メ、藩庁直属トナリシモ、元来收入目的ニアラズ。従前踊郷ニ於テ

ハ、其ノ収入利得ハ、貧民救助即チ貧民者ノ農馬購入補助費ニ充當シ、来リタル關係上、明治九年九月宿窪田村ニ払下以前ニ於テモ幸ニ踊郷ニ收入シ得タルナリ。尚廃藩置県後、收入全部ヲ牧園校經費ニ繰入レタリ。尚塩浸温泉場無償私下願ハ次ノトオリデアル。

郷内供有地之願、踊

一、木屋二十一軒

内 二軒

右老行慶応四辰年旧藩會計局ニテ新造立

十一軒

右老行同年同計ニテ本木屋修車取繕

二軒

右老行所計ニテ造立

六軒

右老行当支配人秋山嘉一郎先支配人ヨリ附屬併新造立

温泉三坪

但慶応四辰年旧藩會計局ニテ修甫

右者当郷塩浸温泉場ノ儀、弘化年間ニ取計ヲ以開立本行内書ノ通木屋造建仕其砌ヨリ諸人入込ニモ相成場所ニ御座候〇〇旧藩代御手ヲ被相付尤支配人木屋木屋モ御座候

右ノ通ニテ是迄所役員ヨリ依申立支配人被召替去明治五

年壬申春ヨリ向フ十ヶ年季ヲ以テ秋丸嘉一郎へ支配人被仰付置年々金拾参円拾五錢七厘九毛宛所方へ差出シ来リ候処今般地租御改正被仰出候ニ付テハ諸温泉場ノ儀宅地ニ可取調旨御達ノ趣承知仕右ニ付テハ塩浸温泉場ノ儀右之通ノ場所ニ御座候ニ付キ誰ソ一人特ニ可被仰ハ場所柄ニモ有御座間敷吟味仕依之郷内供有地ニ被仰付度尤外温泉場ニ相替是迄郷内救助筋ニモ相成場所柄ニテ誰ソ一人へ地主被仰付候テハ右式難有用途モ失ヒ、殊ニ当郷内学校保護ノ見込別段良法等無御座右温泉ノ儀外温泉十有余箇所第一ノ場所ニテ仮令地租相掛候テモ相応ノ余勢ハ可有御座候ニ付願ノ通御聞届於被成下ハ当分ノ振合ニ倣ヒ嚴重取扱仕学校資本ニ備置候得ハ一統難有次第商議仕候何卒郷内温泉場右旁々ノ御取訊ヲ以テ奉願候通供有地御許可被仰付被下度此段奉歎願候也。

但鹿図面相添差上申候。且ツ願通り被仰付テハ旧藩代御造立木屋之〇輕キ貸申受被仰付度

副戸長  
区戸長

泰介は先の踊郷地頭の椎原国幹（西郷翁の叔父）に依頼して、その尽力によって目的を達しようとし、時の大山県令に伝達方を頼み、前六回に亘って役員交替

で払下陳情した。その結果ようやく明治九年九月払下が確定した。その全文は次の通りである。

其郷塩浸温泉場処分ノ儀向出趣有之及指令置候処、右ハ取消更ニ左ノ通可相心候事。

塩浸温泉之儀ハ其村共有地ニ取調湯壺ノミヲ丈量求積可致支配人年限中ハ是迄ノ通ニテ地租差出儀共相対可為熟談尤年季明ノ上ハ所中ヨリ支配可致事

但明治五年壬申春ヨリ已年迄拾ヶ年秋山賀一郎支配。

同丑年ヨリ卯年迄向拾ヶ年堀之内勘五右エ門支配

旧藩計算所計造立湯木屋ノ儀ハ其村共有地宅地ニ取調支配人年限中ハ前条同断タルベキ事。

但旧藩計造立湯木屋ノ儀ハ無代価払下申付候。

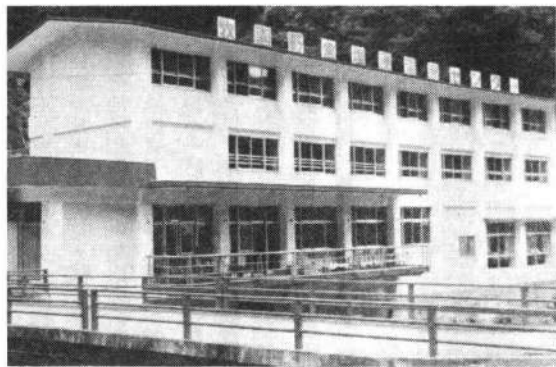
当支配人私有ノ家屋設置地ハ其村共有ノ宅地ニ可取調事。

但建物ハ支配人交替ノ節売渡候カ又ハ解毀候共所有主可勝手事。

九年九月 鹿児島県参事 田畑常秋

● 塩浸温泉払下の経緯

当時の踊戸長平山泰介は、藩所有の塩浸温泉場及び城山の無償払下げを計画し、願書をたびたび提出したが、塩浸温泉は旧藩庁時代に多額の費用をかけて修理した関



塩 浸 温 泉

係もあって、容易に許可されなかった。

そこで泰介は、先に踊地頭であった椎原国幹に依頼することを思い立ち、その事情を述べて大山県令に尽力方を頼んだところ、椎原氏は未だかつて大山県令に願い事を取り次いだことは一度もなかったが、泰介の願いをこころよく引受け、県と交渉した。

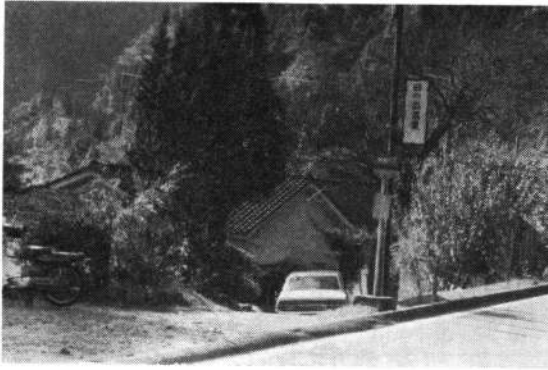
その結果、明治九年九月、同温泉の土地建物共々、無償で時の鹿児島県参事田畑常秋の名で払下げを受けた。

塩 浸 温 泉 の 治 革

契約年月日	賃 貸 人	賃 借 人	治 革
安 政 の 末	郡奉行 周 八 伊集院	国分町 栄右衛門 丸 山	湯守の許可を受け、浴場を改修し、浴客を引く計画をしたが、幾年もた たないうちに放棄した。
慶 応 元 年		万勝村 友右衛門 岡 田	上の後を受けて営業をしたが、湯銭は取らず、茶店や、中食の業の求め に応ずる程度で、2年後に放棄した。
慶 応 3 年		福山郡 助 八 岡 山	賃借人が湯守となり、浴場、家屋の改築をなし、大いに宣伝に努めたところ、次第に入浴者が増加した。その頃、戊辰の役で多くの傷病兵が帰還したので、藩公は、この効能卓絶した温泉を療養所にあてるため、御内務金を支出して一大工事をし、奨励されたので面目を一新した。時の作業奉行が、川河の岩角に塩動が附着しているのを見つけ、塩類温泉であると思 い、新に「塩浸温泉」と改称した。
明治 5 年		鹿児島西田 賀一郎 秋 山	明治5年壬申春より向う10ヶ年間、支配人を命ず。借賃金、年13門15銭 7厘9毛宛、明治12年4月まで師郷学校方へ年々税金20門宛
明治 9 年 9 月	鹿児島県参事 秋 田 畑 常	郷 村	秋山賀一郎に明治15年12月末まで、翌年1月より明治25年12月まで、堀之内助右衛門に、これまで通り、1ヶ年金100門宛、当牧園小学校へ差出し、学資金とすることを条件に、師郷に無償払下げの許可あり。
明治16年 1 月		堀之内 直 治	(助右衛門改名) 湯守となる。
明治18年			稀な暴風雨があった。大洪水で、堤堰が崩れ、家屋はおおむね倒壊し、大損害を受けたが、回復の見込みがないとして、売却の議が起こったが、一大奮発し再興したが、風水害に加えて、一般的に不景気のため、浴客は衰退した。
昭和35年 1 月			塩浸温泉「河鹿荘」オープン
昭和44年 7 月			塩浸温泉「河鹿荘」は、国道223号線の改良工事のため、取り除かれていたが、町ではこれを再建するため、川向かいに鉄筋3階建ての施設を建設し、牧園町営塩浸温泉センターとして開館した。

(三) ラムネ温泉

国道二三号線沿いにあり、新川渓谷中でも最も渓谷の美しいところである。紅葉の頃は、カエデの植込みによって、一層景色を引き立たせる。近くには、伝説の熊襲の穴もある。泉質は、天然炭酸ガスを多分に含有しているため、酸味を有し、飲み易く、多量に飲用しても障害はない。胃腸病によくきくほか、じん臓、糖尿



日の出温泉

尿病にもよいと言われている。宿泊設備もあり、自炊施設も整い交通の便もよい。

(四) 日の出温泉

この温泉は、文化八年（一八一）に踊郷有

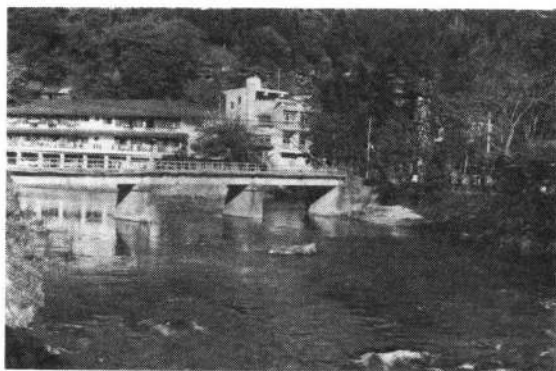
馬武太夫の発見したもので、文化一四年（一八一七）から温泉経営に着手した。切創、皮膚病に特に効能が顕著であったので、将来の有望性が認められ、明治三十年三月、有馬氏から牧園村が買収した。もと、平落温泉ひらおと称していたが、明治三十七年から現在の名称となり、昭和二年湯槽の改造をし、続いて昭和四年に自炊家屋の大改築を行い、更に新国道二三号線の開通により、面目を一新して今日に及んでいる。

(五) 安楽温泉

湯治客でにぎやかな安楽温泉は、妙見とならぶにぎやかさである。安楽温泉は、三国名勝図会には、「この地より温泉出づべし、安楽に居住し得ん云々」とあり、それ以来、この里一帯を「安楽」と言うようになった。気候は温暖で、泉質豊富、附近は旅館をはじめ自炊客業、民宿を営む十数軒があつて、多いときは四〇〇人から五〇〇人ぐらいの湯治客がいて、平均の滞在期間は一週間ぐらいとか。宿泊施設も多く、「人間回復」にはもってこいの温泉である。

(六) 妙見温泉

妙見温泉は、明治二十八年（一八九五）に、田島十郎



見 温 泉 妙

次氏によって発見され、早速浴槽を作り一般に試浴させたところ、諸病に卓効があるのに驚き、妙見神社の旧跡より湧出するの因み、妙見温泉と命名した。明治四〇年（一九〇七）来、営業を開始し、今日に至ったも

のである。  
妙見ラムネ温泉（今の雅叙園）は、大正七年（一九一八）田島休次郎氏が発見したもので、妙見温泉とともにロイマチス、神経痛その他諸病に卓効を見るので、四季を通じ入浴客の絶えることがない。

最近では旅館・ホテル数も多くなり、各般の設備も充実

し、着々と近代化への歩みを整えつつある。

#### (七) 折橋温泉

この温泉は、宝暦二年（一七五二）に、折橋左門氏によって発見された。鉄湯・明ばん湯等、種類や泉量に富む温泉である。明治十年、薩軍の傷病兵が来浴し、その偉効を宣伝してから、その名が世に広まったと言われる。明治十二年（一八七九）久木田五介氏が買収して、内外の設備を整え、やや面目を改めたが、なお遺憾な点が多く、久木田五郎氏の経営に移ってから施設も大いに進み、今日の盛況を見るに至ったものである。自炊設備も整備され、多数の自炊客を収容することも可能である。内湯施設も完備。なお鉄湯は、外科的治療に効果がある。

#### (八) 鶴の湯

塩浸温泉の上流約一〇〇m余のところにあつた。明治四十二年に出水町の土屋清人、山下朝憲が共同して岩壁をくだき、辛うじて百坪余（約三〇〇 $m^2$ ）の平地を開き、浴場を建て、約一〇〇m上方の道路わきに、二階建ての旅館を建造し、浴客を引こうとしたが、時宜に適合せず、失敗に終わり、当時数万円を投じた観光事業も、つ

いに放棄した。現在国道二三号線の開通により、浴場は旧形を止めていないが、お湯は現在塩浸温泉場に引湯してあり、利用客も多い。

# (ウ) 坂本龍馬のハネムーン

幕末の志士坂本龍馬が、恋女房のお竜を伴い、この地に遊んだのは有名な話。今でいえばハネムーンのハシリだろう。絹ごしのようにさわやかな空気、清らかなせせらぎ、美しい自然、そして心あたたまる人の情……それらすべてが龍馬の心をとらえたのであろう。姉



に宛てた手紙の一節に、「塩浸（しおひたし）には、十日許りも止まりて遊び、谷川の流れにて魚を釣り、ピストルをもちて鳥をうつなど、実におもしろかり……（略）」とあり、龍馬夫妻は、飛沫飛び散る犬飼の滝を訪れ、さらに神話の地高千



穂の峰まで足をのばして、天の逆錐を見て、「その形、たしかに天狗の面なり。二人大いに笑いたり。……」とユーモアのある面をのぞかせている。

この年、龍馬の奔走により、西郷、大久保、木戸と会い、ここに薩長同盟を成立させるという大役を果たしている。お竜というのは、有名な「寺田屋事件」の寺田屋の養女で、寺田屋は薩摩藩の船宿であった。勝海舟の使者として、西郷と会った龍馬は、その後薩摩藩の保護を受け、西郷とは公私共々の交際をするようになった。また、高千穂峰に登ったとき、硫黄谷温泉にも泊ったとい

それから、日当山、塩浸、栄之尾を経て高千穂峰に登っている。  
文中のピストルは、寺田屋で幕吏と死闘の際に使用したものであるという。



う。

付記

坂本龍馬

夫妻がこの

地を訪れた

のは、慶応

二年三月の

ことで、二

人は大阪か

ら蒸気船に

乗り込み、

長崎を経て

十日に鹿児

島に到着。

新川溪谷自炊部施設

氏 名	所 在 地	室数	収容人員	通 称
鬼塚 フメ	宿窪田	3,703	3	20 日ノ出温泉
安栖 重樹	〃	4,123	24	100 塩 湯
境 田 貞雄	〃	4,179	8	30 炭酸湯、鉄湯、安楽湯
安栖 チエ	〃	4,155	13	50
鎌田 一郎	〃	4,235	14	50
竹ノ内 実宜	〃	4,125	10	40 高塩湯
富田 辰雄	〃	3,606	8	30
賀来 ツヤ子	〃	4,168	12	30 部落湯
安栖 ヒデ	〃	4,151	13	50 塩 湯
安栖 良盛	〃	4,180	5	20 高塩湯
安栖 伝次郎	〃	4,183	10	40 〃
安栖 武彦	〃	4,187	8	30 〃
鶴ヶ野 吉左衛門	〃	4,221	20	50 つるの湯
安楽 悟	〃	4,193	7	25 明ばん湯
安楽 文吉	〃	4,192	10	25 安 城

タンサンヘルス センター	宿窪田4,139の21	6	20	ラムネ湯
田 島 ト キ	〃 4,236	43	160	妙見田島本館
久木田 亀 子	下中津川 2,234	24	100	折 橋
田 中 大	〃 1	20	80	妙見温泉センター
古 賀 猛	宿窪田 3,681	26	100	ラムネ

## 新 川 溪 谷 観 光 宿 泊 施 設

名 称	経 営 者	所 在 地	室数	収容 人員	備 考
折 橋 旅 館	久木田 亀 子	下中津川 2,234	13	50	
妙見荘たじま旅館	田 島 ト キ	宿窪田 4,236	5	30	
安 楽 荘	大 田 吉 盛	〃 4,194	15	50	
新 川 旅 館	蘭牟田 清 仁	〃 4,125	12	40	
せ せ ら ぎ 荘	岩 元 正 男	〃 3,889	8	20	
妙見温泉センター 田 中 会 館	田 中 大	下中津川 1	20	80	
雅 叙 園	田 島 健 夫	宿窪田 4,230	6	30	
町 営 塩浸温泉センター	牧 園 町	〃 3,620	12	40	

## 二 名 所

## (一) 犬 飼 の 滝

蒼くそびえる高千穂の峰を背景に、静寂の空気を  
ふるわせて、虹色の飛沫をあげる犬飼の滝。かつて  
和氣清麻呂公がここで遊び、明治維新の立役者坂本  
龍馬も、この滝をながめたという由緒あるもの。高  
さ三六m、幅一八mの純白の帯は、まさに壮観。今



犬 飼 の 滝

では滝近くまで遊歩道が開かれ、近くには清麻呂公ゆかりの和気神社、和気湯がある。

## (二) 和気湯

中津川の下流に、露天風呂で知られる和気湯がある。奈良時代、一僧侶でありながら、天皇と等しい実権を握ろうとした野心家道鏡と争い、この地に流された和気清麻呂公ゆかりの地で、日頃公はこの温泉に入浴され、浴後公が腰掛けられたという腰掛け石も現在残っている。山峡の湯けむりが、当時をわずかに偲ばせている。



## (三) 馬込地区の甌穴群

牧園町中央公民館前のバス停から、県道牧園・宮之城

第一図 甌穴群位置図



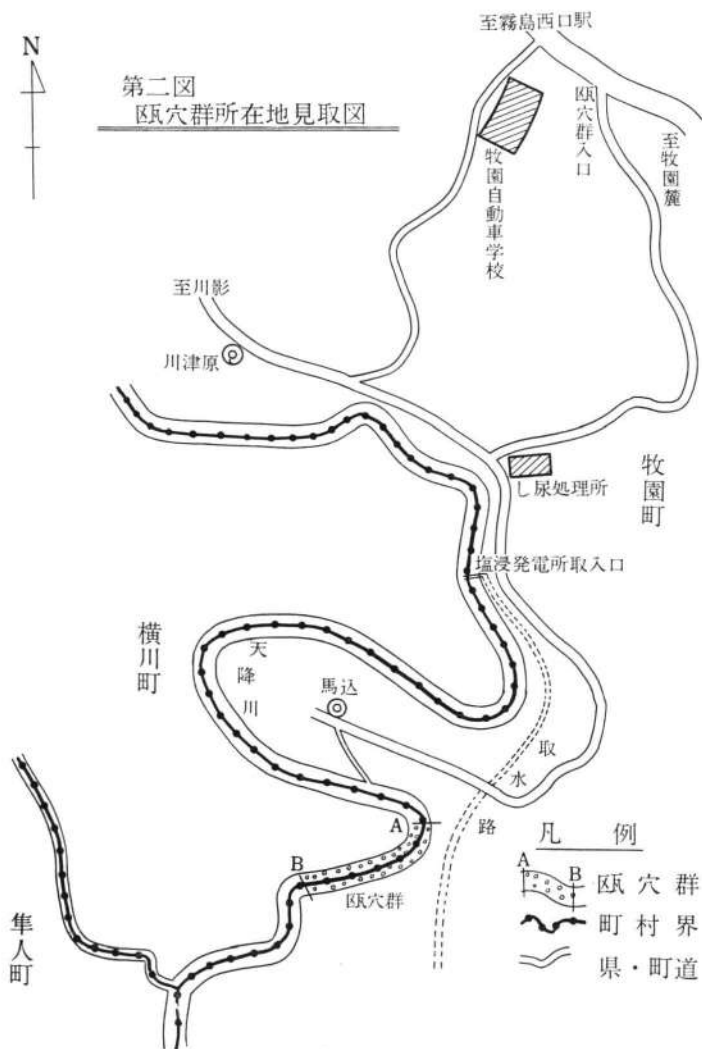
線を霧島西口駅の方へ約二五〇mぐらい行き、ひばりヶ丘の住宅が見えはじめるところから、山手の方へ左折する道路がある。その分岐点に、天然記念物(名勝)馬込地区甌穴群入口という道標が建てられている。この甌穴群の壮観な様子は、他に例のない名勝地として、昭和五十二年四月十五日町文化財に指定された。

起点上流左岸の大字宿窪田一六五五番地(字馬込)より、終点下流大字宿窪田一六五八番地(字馬込)に至る間、長さ約四三四m、面積一二、二五七m<sup>2</sup>である。対岸は横川町になっている。

昭和五十一年五月十二日、鹿大教授理学博士石川秀夫先生の調査によれば、塩浸発電所の取水口下流にあるた

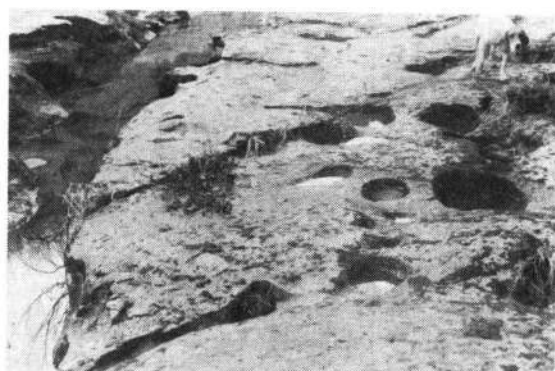
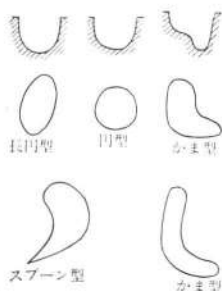
め、河水が少なく、河床をくまなく観察することができる、典型的な甌穴が豊富である。それが、シャープな姿で保存せられ、その河床は、霧島山系に属する溶結凝灰岩で、甌穴のできやすい岩盤である。長年月にわたり浸食せられたため、兩岸のかなり高いあたりまで、甌穴が存在している。

甌穴の散在は第



二図のA、B二点間が最も多く、長さ約四三四m、幅の広いところは四六mにも及んでいる。甌穴は、軟弱な岩

第三圖  
斷 面 図



馬 込 の 錨 穴 群

盤の河床に、軽石や安山岩、礫などが、水力で回旋し、岩穴を形成することからはじまり、円型・長円型などの錨穴が出来るが、その穴がいくつかつながって、溝型になることもある。中には形がゆがんで、第三図のようになり、スプーン型や鎌型になったりする。馬込地区には、これら

の型が判然としているものが、多数存在している。ここは、規模も大きく、かつ錨穴の形容も判然としていて、まれに見る錨穴群で、観光的にも価値の高いところである。

しかし、錨穴群観光はいつでもよいというわけにはいかない。上流の水田に水を引く時期の、乾燥期が最適である。九州電力も必要以上の水は取水しないので、水量の多い時は見られない。土地の人の話では、二、三日から一週間ぐらいは見られないことが、往々あるという。

牧 園 町 内 の 温 泉 の 泉 質 と 効 能

地 区	泉 質	浴 用 適 応 症	飲 用 適 応 病
林 田 地 区	硫 黄 泉	慢性関節リウマチ、慢性筋肉リウマチ、神経痛、神経炎、糖尿病、皮膚病、動脈硬化症、その他	常習便秘、リウマチ、糖尿病、胆石病、その他
硫 黄 谷 明 ば ん 地 区	単純泉化水素泉	慢性関節リウマチ、慢性筋肉リウマチ、神経痛、神経炎、糖尿病、皮膚病、動脈硬化症、その他	常習便秘、リウマチ、糖尿病、胆石病、その他
	硫化水素泉	尿病、皮膚病、動脈硬化症、その他	
	単純酸性泉	慢性関節リウマチ、慢性皮膚病	
丸 尾 地 区	単純硫化水素泉	慢性関節リウマチ、慢性筋肉リウマチ、神経痛、神経炎、糖尿病、皮膚病、動脈硬化症、その他	常習便秘、リウマチ、糖尿病、胆石病、その他
	単純硫黄泉	尿病、皮膚病、動脈硬化症、その他	
	単純温泉	慢性関節リウマチ、急性リウマチ後遺症、神経炎、外傷、小児麻痺、動脈硬化症、慢性皮膚病、その他	慢性胃炎、アトニー
	弱 食 塩 泉	慢性関節リウマチ、慢性筋肉リウマチ、神経痛、神経炎、糖尿病、皮膚病、動脈硬化症、その他	常習便秘、リウマチ、糖尿病、胆石病、その他
妙 見 地 区	含土類重曹泉	創傷、火傷、皮膚病、神経痛、リウマチ、その他	慢性胃炎、胃潰瘍、その他
安 楽 地 区	含土類重曹泉	創傷、火傷、皮膚病、神経痛、リウマチ、その他	慢性胃炎、胃潰瘍、その他
	含土類炭酸土類泉	リウマチ、神経痛、創傷、婦人科疾患、その他	慢性胃炎、胃潰瘍、その他

## 第四節 今後の観光開発計画

### 一 基本方針

霧島屋久国立公園を擁する町として、観光は町産業の主要な地位を占め、所得、就業構造においても大きな比重を持って発展してきている。最近の経済、社会情勢は厳しく、単なる自然景観や温泉観光のみでは、多様化する観光客の志向を充足し得ない環境となってきた。つまり、新しい時代に対応する観光地への脱皮が要求されている。

しかし、今後とも国民の観光需要は、所得の向上と自由時間の増大、生活意識の変化にとともに、根強く支えられ、自然景観及び資源の確保と、交通基盤の整備がなされ、しかも今後の観光動向に即応する施設の整備が進めば、長期的には増大していくものと思われる。最近の観光動向は、レクリエーション的時間消費型と、海外旅行志向が強く、本町の観光にも影響を与えるものと思われるが、本町は、天与の美しい自然と、すぐれた火山や

温泉、植物の群落など、変化に富んだ自然公園を有し、高原の健全な国民的国際的保養温泉地として、総合的な観光レクリエーション地を目ざし、資源保全と調和のある開発、施設づくりを進め、交通基盤の整備、観光客への物的・人的サービスの充実によって、霧島のイメージアップを図り、魅力ある観光地づくりを促進する。

### 二 現況と課題

観光客の動向は、時の経済の好、不況によって左右され、特にエネルギー不足に比例して、マイカー流入の減少が懸念される。本町観光にとって、今後の経済、社会、世界情勢の変化は大きな関心事である。

また、現状のまま推移するとしても厳しいものがあり、今後の観光需要に即応するため、斬新な発想による転換が必要となり、財政硬直化のなかで、どう対処するかが大きな課題である。行政及び観光産業当事者が、町民と一体となり、新たな時代に即応した観光のあり方を考えるべきである。

魅力ある観光地づくりを進めるため、自然景観の保全と、施設の充実を図り、個性ある町づくりと、町ぐるみの心のこもった受入態勢と、さらにそれに伴う適切な広報、宣伝活動の展開を図る必要がある。また、新たな観光ルートの整備促進、物産の開発等、他の観光地でない自然と、人的物的なものの創造を進めなければならない。

### 三 計画の内容

#### (一) 魅力ある観光地づくり

。観光資源の保全と調和のとれた開発整備

本町の観光は、自然を基盤に存立している。その歴史的遺産である美しい自然環境、人文資源の保護育成を図り、地域の特性を生かし、新たな調和のとれた資源の開発と、加えて志向の変化にも対応し得る観光、レクリエーションの諸施設の整備を進める。

#### ① 自然景観と施設整備の方向

##### ア 霧島地区

霧島は、国立公園として昭和九年に、わが国最初

の指定を受け、昭和三十九年八月には、錦江湾や屋久島を含めて霧島屋久国立公園となり、その歴史は半世紀に及び、五五、一三二haの面積を有する。霧島は二十三座の集成火山、暖帯多雨林、特別天然記念物であるミヤマキリシマの大群落を有し、山容も雄大秀麗である。霧島火山群の高千穂の峰には「天の逆錐」があり、神話でいう天孫降臨の聖地、日本発祥の地として有名である。この自然公園は、鹿児島・宮崎の両県にまたがり、霧島火山帯の主要部を占め、韓国岳を最高峰とし、東西二十二km、南北十八kmの狭い地域に、二十三個の独立した火山が噴出したもので、大浪池をはじめとする多くの典型的な火口湖を有し、千古の幽静、神秘とロマン、幾多の伝説を秘め、山麓部の常緑広葉樹林、上部のモミ、アカマツ、山頂部のミヤマキリシマの大群落などの植生を有し、火山地形と一体となり、まさに天下一のすぐれた景観を構成している。この霧島火山群の雄姿は、数多くの単式火山と、一つの複式火山が密集した火山群であり、学術的にも貴重なものとされている。

また、山峡のいたるところに温泉が湧出し、美しい景観とともに、昭和三十四年五月には国民保養温泉地に指定され、多くの観光客を集め、四季を通じて美しく、誰でも登れる山として親しまれている高千穂の峰、韓国岳、新燃岳、中岳、獅子戸岳など、どの山頂からも眺望はすばらしく、まさに大自然の大パノラマである。一帯は、特別保護区に指定され、原生林、野鳥、ノカイドウ等の動植物も保護され、わが国の誇りとして現世に受けついでいる。また、山麓の温泉群と、近代的な旅館・ホテルが、湯煙のなかに静かな自然とのコントラストを描き、広々とした国民保養地、ゴルフ場、牧場と高原保養地を形成し、眼下に展開する錦江湾、桜島と、美しい景観は限りない天恵であり、これを享受し、この大自然を後世に受けつぐことこそ我々の使命である。従って、本町観光の起りと基盤をふまえ、今後都市化が進行するなかで、観光の志向は、ふるさと志向が強く自然に帰着するものと予想され、また、保養、スポーツ、レクリエーション的要素が高まるものと思われる。霧島のイメージとして、「清らか

で、明るく、のびのび活動できる」国民的、国際的保養地としての位置づけをし、保護と同時に調和のとれた開発、発展策を推進する。

#### イ 新川溪谷温泉地帯

霧島温泉地区に次いで、新川溪谷温泉地区も昭和四十二年十月二十日に、国民保養温泉地の指定を受け、大衆的保養療養地として親しまれ、その素朴さ、家族的雰囲気と、溪谷の緑、紅葉、あゆ漁と変化に富み、県内・県外の温泉療養地として利用されているが、利用客の利便を図るため、駐車場、和気公園、犬飼滝の整備を進め、長期滞在のいい、活動の場の提供を積極的に進める。

#### ウ その他の地域

霧島山麓に散在し、湧出する多種多様の温泉群並びに景勝地、遺跡、文化財があり、この開発を促進し、新たな資源としての活用を図る。

#### ② 観光施設の整備

観光施設として、公共事業により逐次整備されてはきたが、新たな時代に対応する施設整備を計画的に進める。特に、昭和五十九年は国立公園制定五十周年に

当たり、諸機関や行政・民間企業の団体等が、一体となった記念事業の導入を積極的に進め、大霧島国立公園の飛躍的發展を図る。

#### ア 高岡山アドベンチャーランド建設

年間一八〇万人の観光客の回遊状況は、えびの高原と霧島神宮に流れ、町内施設が乏しいため滞留も少ない。一泊温泉観光から脱する施策を進める必要がある。神話と伝統の地としても、具体化したものが少なく、イメージも低いので、国民休養地と併設した高岡山の開発を図り、神話の里、伝説の村、さらに冒険心をかりたて、古代に接する生活体験、資料館、自然歩道、展望台、アスレチック、自然植物園、クラフトセンター等の設置を、自然と調和させながら進める。

#### イ 国民休養地の整備（総合公園）

現在の休養地に、運動、レジャー施設を整備し、高原リゾート地域として対応しうる施設整備を図る。

体育館（集会場兼用）、温泉プール、ゲートボール、テニスコート、遊戯施設等の整備を促進し、霧

島温泉街の庭園または遊園地としての役割を果たすよう、都市計画と併行して充実を図る。

#### ウ フラワーランドの建設（柳ヶ平丘）

ミヤマキリシマ（つつじ）、生駒高原のコスモス等、定期的に素通り観光となり、霧島温泉、国民休養地附近は閑散として、入り込みが少ないので、自然の景観とマッチする、四季を通じての花の植栽、修景を図る。

柳ヶ平の町有地に、一大フラワーランドを建設し、人工の美を加えて霧島観光の付加価値を高める。県のフラワーランドラインの事業導入を図り、開発建設を進め、周年観光を確立する。

#### エ 和気公園の整備

新川、安楽、妙見地区は、お年寄りを中心とした湯治客が主であるが、今や老人といえども温泉だけでは、長期滞在や観光にはつながらない。歴史的遺跡をもつ和気神社は、立派な観光資源である。従って公園化を図り、犬飼滝と結合させ、温泉保養地として楽しめる、総合運動公園の整備を図る。ゲートボール場、ソフトボール場、遊歩道、駐車場、休憩

所、便所、水道等を整備し、遺跡の保存と、観光や地域の社会体育の場としての開発を推進する。

オ 高岡山附近の開発

雄大な霧島連山と噴煙を上げる桜島を遠望し、脚下には緑の高原を眺め、スリル満点の空中散歩で、柳ヶ平のフラワールランドと高岡山アドベンチャーランドを結ぶロープウェイを建設し、新しい名所の開発を図る「動く」、「遊ぶ」、「冒険する」といった体験行動型が増加する傾向にあり、このような施設が必ず求められるものと思われる。民間及び第三セクターによる建設誘致を進め、また、柳ヶ平に計画されるメモリアルパークの建設とも関連して、一帯の開発が期待されるので、合わせて推進を図る。

カ 大集会施設

観光客誘致のための大集会施設は、観光の町として、関係者並びに町民の待望久しいものがあり、あらゆる角度からの検討がなされてきたが、諸施設、諸事業の導入により、将来の維持管理とシーズンオフの効率的使用を考慮し、総合的で多目的の使用のできる会館の建設を促進する。

キ 文化人によるアトリエ村の誘致

霧島の魅力を広めるため、大自然と夏の避暑・冬の避寒に適し、交通機関の利便をキャッチフレースに、中央文化人の別荘、アトリエ村を誘致する施策を進め、都会的センスの導入を図り、観光地のイメージチェンジをねらい、新しい余暇時代のリゾート観光地として、長期滞在でのびのびとくつろげる霧島の宣伝に努め、その対応策を推進する。

ク その他の資源開発

天降川の願穴群、熊襲穴、かくれた滝等の資源発掘を行い、新たな魅力の創造を図る。

・ 特に願穴群については、町の文化財としても貴重であり、河川を利用した青少年キャンプ場や遊歩道を開発し、ハイキングコースを設け、公園化をすすめる。安山岩礫の堆積による霧島火山の生きた教材であり、自然とふれあう憩いの場を流域に建設する。

・ 関平温泉は貴重な町民の資産である。最近マスコミやロコミにより広く知られるようになったが、効能・運営には慎重に対処し、将来を見

きわめ、ひなびた山の湯としての存在価値か、開発による付加価値を求めるか論のあるところである。しかし、観光資源として、附近の眺望を含め適応の開発整備は当然すすめるべきである。

・ 今後開発されるべき地域として、大型農道から栗野岳に至る大霧地区（霧島第一牧場附近）周辺が考えられる。えびの高原から栗野岳に通ずる道路の開発、さらに大霧から音なし池を経て丸尾に通ずる道路の整備がなされれば、一層クローズアップするところであり、大自然の中で地場産業と密着し、加えて夏の冷涼・眺望等新たな角度からの資源としての開発を進める。

・ 丸尾、牧場周辺は、商店街・温泉街として、情緒ある開発整備がなされるべきで、核となる施設が必要であるが、土地条件の制約があり、長期的な展望から、温泉神社・九面太鼓を中心とする常設神楽殿、バスターミナルを含む総合的な観光案内所、特産土産品販売施設、自然探勝路、丸尾滝を回遊し、長期滞留に対応できる

施設の整備を、関係機関及び地元が一体となって進める。

・ 文化財、郷土芸能の観光資源としての開発も積極的に進める。特に、観光宣伝としての九面太鼓の育成、万膳・三体の太鼓踊、座頭踊、棒踊等の保護、町内に散在する諸文化財の活用、新しい祭の創造と育成を進める。

・ 観光と農業は密接な関係にある。それは、もともと自然を基盤としているが、性格的に内容は異なる。大都市周辺の観光と農業は、それなりの相互関係において成立しているが、本町のような観光地においては、なかなか困難な点が多い。結果的に本町の観光と農業は結合しにくい状況である。今後接点を求めるなら、町ぐるみの作物体系の改善、例えば果樹園の植栽を図り、また、見せる茶園（グリーンベルト）等の設置によって、産地として宣伝しながらその効果を高める施策を進め、その相互依存関係を強めるべきである。

## (二) 町ぐるみ心のこもった受入態勢づくり

観光の町としては、受入態勢が一番重要である。ルート  
の整備、案内、情報の提供、心のふれ合うサービス、  
地域ぐるみの理解と協調、観光産業の連携と組織の強  
化、施設・環境の整備など、自然景観にもまさる心のこ  
もった受入態勢づくりを進める。

# ① 観光ルートの整備

ア 航空機利用による観光客の増大とともに、鹿児  
島空港から霧島までの道路整備が最も重要であ  
る。早期完成を目ざし、関係町村と協力して積極  
的に進める。

イ 九州縦貫道の完成は、観光の流れを大きく変え  
るものと思われる。横川インターチェンジ及び栗  
野インターチェンジからの入込みのため、主要地  
方道の宮之城から牧園までの道路の改良促進、大  
型農道の早期完成を期し、観光ルートの整備確立  
を促進する。また、沿線の修景、路傍植栽、グリ  
ーンベルト造成を積極的に進める。

ウ 九州新幹線の早期着工を期す。  
エ 鹿児島―長崎空港線の増便と、中国―長崎間航  
空路の開設による西九州と南九州の、航空機ルー

トの確立を図る。

オ 霧島スカイラインの開放無料化を進め、宮崎県  
からの流入ルートの確立を図る。

カ 大浪池から高千穂河原間の自動車道の建設を進  
める。

キ 国道二二三号線の整備を図り、観光客の入込み  
の円滑化と、町道犬飼・横瀬・牧場線を整備し、  
地域整備と同時にバイパス的充実を図る。

ク 観光情報の交換や収集に努め、関係機関、団体  
特に、観光姉妹町四地区観光連絡協議会（鹿児島  
市、指宿、桜島、霧島）との観光市町村、大都市  
県駐在事務所等との連携を図り、情報の交換誘致  
を進める。観光案内についても、本町の歴史、文  
化、産業、特産品等を紹介し、外国人案内にも対  
応できる総合案内、観光センターの設置を図る。  
案内標識についても、空港、志布志湾、宮崎県側  
等について検討し、充実したものの設置を図る。

ケ 観光協会の育成充実を図り、本町観光の基礎を  
確立する。観光産業各自が、その自主性と協調に  
より、認識を新たに一致協力し、町民総ぐるみの

推進体制を作り、心のこもった観光地づくりを進めるため、地域に立脚した連帯関係を築き、時代の流れに対応できる観光協会を育成する。

コ 観光客をあたたく迎える運動を、町民総ぐるみで展開し、観光従事者については、洗練され、しかも心のこもったサービス提供ができるように、接遇研修を重ね観光客の再来頻度を促し、また、くちコミによる宣伝と、心のふるさととして慕われるような観光地づくりを進める。

### (三) 霧島の魅力を広めるために

霧島の魅力を広め、観光レクリエーションの需要を喚起し、より多くの観光客を受入れる対策を、各機関・観光団体・業界が一体となって進める。

ア 大都市圏における観光物産展の開催、ポスター、パンフレット等によるPRのほか、サンシャインルート（宮崎、鹿児島、沖縄広域観光ルート）、亜熱帯観光ルート（人吉、えびの、溝辺、霧島、鹿児島、指宿）等について、関係各県・市・町と一体となった広域的な宣伝活動を進める。また、テレビ、新聞、雑誌を媒体とする広報

活動を積極的に展開し、観光客の誘致に努める。

イ 伝統芸能と独創的民芸を育てるため、神話と伝説の地を具体化する施設の開発を図り、郷土芸能九面太鼓の幽蔽・神秘性を高め、霧島の魅力の宣伝活動に努める。

ウ 観光姉妹町との連携をなお一層深め、相互の交流を図り、合同宣伝に努め、国際盟約加入の検討を進める。

また、霧島山を囲む山麓市町（えびの高原、小林、都城、吉松、栗野、牧園、霧島）の、環霧島山観光連絡協議会等の設立を図り、地域団体としての観光浮揚を図る。

エ そのほか、国鉄主要駅、列車内、空港、船舶等の額面、中張りポスター、掲示、主要道標識の設置、マスコミ取材に対する協力等、積極的に対処し、諸行事の開催、諸大会、競技会等の誘致を、観光協会及び業界一体となって進める。

## 第5章 観 光

### ○観光客入込状況と推移

#### (1) 観光客の入込客数

(単位：千人)

年度別	霧島温泉地区	新川渓谷地区	計	対 前 年
年				%
48	1,523	213	1,736	112
49	1,590	202	1,792	103
50	1,461	198	1,659	98
51	1,639	193	1,832	110
52	1,544	187	1,731	94
53	1,546	167	1,713	99

※ 48年度を100とした場合、53年度は99%となっており、新川渓谷地区は78%と大幅に減少している。霧島温泉地区については、102%とやや伸びている。

#### (2) 観光客入込計画（推計）

(単位：千人)

地区名 年度別	霧 島 温 泉 地 区			新川渓谷地区		計
	一 般	修学旅行	自 炊	一 般	自 炊	
53	1,297	234	15	37	130	1,713
54	1,362	246	16	39	144	1,807
55	1,430	258	17	41	151	1,897
56	1,502	271	18	43	159	1,993
57	1,577	285	19	45	167	2,093
58	1,656	299	20	47	175	2,197
59	1,739	314	21	49	184	2,307
60	1,826	330	22	51	193	2,422
61	1,917	347	23	54	203	2,544
62	2,013	364	24	57	213	2,671
63	2,114	382	25	60	224	2,805
64	2,220	401	26	63	235	2,945

※ 霧島温泉地区、新川渓谷地区における観光客の増加を、年平均5%増と見込み推計した。観光客数は延人員であり、県内客も含む。

## ○ 観 光 宿 泊 施 設

## 1 宿 泊 施 設

## (1) 霧島温泉地区ホテル・旅館

宿泊施設数	室 数		収 容 人 員	
	洋 室	和 室	一 般	団 体
23	532	1,214	7,269	8,152

## (2) 新川溪谷地区旅館

宿泊施設数	室 数		収 容 人 員	
	洋 室	和 室	一 般	団 体
9		115	385	425

## (3) 合 計

宿泊施設数	室 数		収 容 人 員	
	洋 室	和 室	一 般	団 体
32	532	1,329	7,654	8,577

※ 政 府 登 録	7
国際観光旅館連盟加盟	8
日本観光旅館連盟加盟	16
温泉のあるホテル・旅館	31

第5章 観 光

○ 霧島温泉地区のホテル・旅館案内  
新川溪谷

(1) 霧島温泉地区

ホテル・旅館名	洋 室	和 室	広 間	一 般	団 体	備 考
ホ テ ル 林 田 温 泉	240	220	11	2,000	2,000	
霧 島 ホ テ ル	33	157	5	700	860	自炊あり
霧 島 国 際 ホ テ ル	45	180	10	800	1,020	
さ つ ま 荘		11	1	36	45	
きりしま山脈ホテル		24	1	112	150	
つ ね よ し 荘		23	2	85	100	
公 園 荘		8		30	35	
牧 水 荘		26	2	80	120	
カリシマ第一ホテル		94	7	411	450	
松 苑		11	1	58	70	
ホ テ ル 静 流 荘		31	2	145	150	
霧 島 観 光 ホ テ ル	33	157	5	700	860	
霧 島 山 上 ホ テ ル	48	67	2	491	580	
池 呂 林 荘		12	1	48	60	
湯 之 谷 山 脈		15	1	30	40	自炊
霧島プリンスホテル		55	2	260	300	
ホ テ ル 小 谷 園		32	2	133	150	
新 燃 荘		11	1	40	40	自炊あり
関 平 温 泉		11		30	30	自炊
霧 島 民 芸 館		11	1	40	50	民宿・自炊
松 風 荘		7		20	20	
ホテル霧島キャッスル	133	42	4	1,000	1,000	
大 浪 荘		9		20	22	

## (2) 新川溪谷地区

旅 館 名	洋 室	和 室	広 間	一 般	団 体	備 考
折 橋 旅 館		12		32	40	自炊あり
妙見温泉センター		27	1	108	120	自炊あり
田 中 会 館		5	1	20	25	
雅 叙 園		19	2	65	70	
安 楽 荘		6	1	20	20	
炭酸ヘルスセンター		15	1	40	45	
新 川 旅 館		10		25	25	
せ せ ら ぎ 荘		9		27	30	自炊あり
ラムネ温泉		12	2	48	50	自炊あり
町営温泉センター		24	3	120	120	自炊施設
塩浸温泉センター		15	2	40	40	(別)施設
妙 見 館						(別)
田 島 本 館						(別)

## 全国植樹祭

全国植樹祭は、国土緑化運動の中心行事として、毎年行われているが、昭和五十九年五月に開催される第三十五回全国植樹祭のメイン会場が、始良郡牧園町高千穂の出口に決定した。

鹿児島県での開催は初めてのことであるが、これは、昭和九年に霧島が国立公園に指定されてから、ちょうど五十年に当たることであって、その記念事業の一環としても意義深いことである。天皇・皇后両陛下の御台臨を仰いで、町有牧園牧場内にある行幸記念碑附近において実施される。

そこで、三か年計画で記念の森(・迷いの森 ・造形の森 ・彫刻の森 ・思索の森 ・体力の森 ・散策の森 ・天狗の森 ・杏アンズの森 ・栗の森 ・ストロベリー苺の森 ・さくらんぼの森 ・薬草の森)やヘリポートなど、緑の大公園化構想を含み、青少年の緑化思想の啓発や、健全で魅力ある観光開発にも、大きく役立つことが期待される。まさに、本町にふさわしい事業として、町はもとより、県をあげて歓迎するところである。

## 第六章 神社・仏閣・史蹟

### 第一節 神社

#### 一 飯富神社（大字三体堂字登迫六六一番地イ）

祭神 倉稲魂命 天照大神 天兒屋根命

合祀社（憶神社）

祭神 伊邪那岐命 伊邪那美命

例祭 三月二十日 九月二十九日

夏越祭 七月二十九日

#### （一）由緒

飯富神社は、大字三体堂字登迫にある神社である。社説には延喜（九〇一年～九二年）応和（九六一年～九六三年）の頃の建立であったという。現在は何等社説の類はない。一五七四年（天正二年）の棟札があったというがこれも現存せず、一六八四年（貞享元年）の「三体



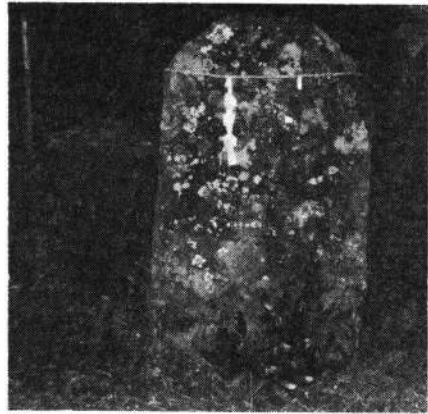
飯 富 神 社

堂壺所衆加精之人数」という奉加帳（板）が現存している。藩政時代は谷川氏が祠官としてこれを管理して来た。

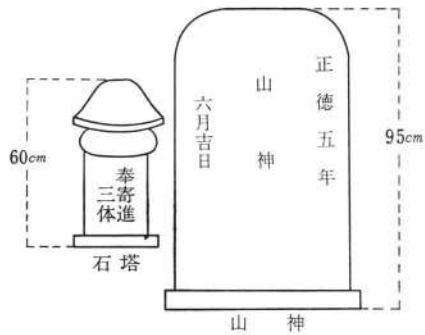
尚社殿のうしろ左側に一七一五年（正徳五年）の銘のある山神がある。これは今から二六六年

前三体堂領主、新納氏の時代に建立されたものと思われる。

山神の左側に「奉寄進」と書いてある小さい石塔が建っている。これは裏面に寛文六年（一六六六年）から三一五年前」と書いてあるから山神に奉寄進したものでなく飯富神社に奉寄進したものと思われる。



石 塔 山 神



また神社の入口に次の境内神社がある。

若宮神社 祭神 応神天皇 由緒不明

門守神社 祭神 八衢比古命 八衢比売命 由緒不明

不明

二 八幡神社 (大字方膳新改八〇六番地)

祭神 応神天皇 桑田大明神 六ノ宮大明神

兵道御本尊

由 緒

「建仁二年(一一二〇二年)の比叻<sup>ひふ</sup>郡三百五拾町ノ内  
上三体堂ノ内、万膳越後守源弘章居住候節大平等申所へ  
源氏ノ氏神石清水正八幡宮ヲ崇奉ル由、古帳ニ有之候」建  
仁二年隅州桑原郡踊万膳に越後守源弘章と云う人居住の  
節肥後の国竜藏寺隆信故ありて合戦に及び此の戦に勝利  
を得るが為に越後守遙々と京都に上り石清水正八幡宮の  
御本尊三体を勧請して帰り而して戦勝祈願を懸けたる上  
更に御神体を奉して隆信と合戦を致せし処武運強く遂に

例 祭 三月二十八日

御田植祭 六月十五日

七夕祭 八月 七日

豊 祭 十一月十日

神社宝物貴重品

太 鼓 一張

三種神器 一組

神舞面(木製) 二面

境内神社

若宮神社 祭神及び由緒不詳

門守神社 右に同じ

図



八幡神社

隆信の首を打取り引き揚げたり。故に越後守はその後八幡宮を氏神として祭りたる後天明二年（一七八二）頃に至り社を建て次て土地の名を取り大平八幡宮と符して祭りたり。之が即ち万膳八幡神社なり。（万善家系

一 氏神正八幡大菩薩（万膳家の氏神）

山州石清水仁王五十六代清和天皇即位貞観二年己卯（八六〇）豊前国宇佐八幡を遷男山鳩峯号正八幡仁王十六代応仁天皇霊社也。



伊邪那岐神社

三 伊邪那岐神社（大字下中津川字後迫四二七番地）

祭神 伊邪那岐命 伊邪那美命 倉稲魂命

春日鷲命

例祭 春祭 三月二十二日

お田植祭

六月十日

夏越祭

七月二十九日

方祭

九月二十九日

霜月祭

十一月十日

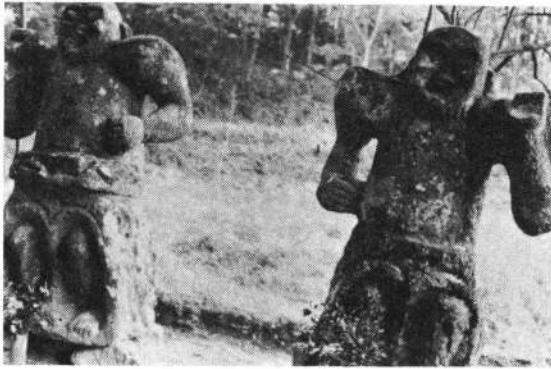
七月二十九日

の夏越祭には七才の童子が真茅を奉納しこれにて千の輪という輪を作り七才児の

お祓いをした。尚この行事は元龜二年（一五七一）より実施されている。

(一) 由緒

建立の年月不明、永享九年（一四三七年）税所介敦武が社殿新設の折りの棟札、元龜二年（一五七一年）社殿修営の棟札（地頭伊集院下野入道久通）があったという。



像 王 仁

最初妙見崎に

鎮座されていたがその後今の社地より南西約一〇九mのところに遷座になったが天正十三年六月七日の夜の大雨で社殿が砂石に埋まったので現在地にうつしたという。藩政時代は上原氏が社司として管理

した。

この神社は元妙見神社と呼ばれていたが、明治の始め廃仏毀釈、神仏分離の趣旨で伊邪那岐神社と称したものと思われる。

(二) 境内の仁王像

神社境内の入口右側に高さ各二mの巨像（石造）が二体並び立っている。左の像の裏側に寛文八年（一六六八年）三月吉日の銘あり。像は彫りがあらく、いかめしい顔面をした石像である。

四 堅神たてがみ社（大字持松字前田、一六番地）

祭神 思比売命 市杵島比売命 天太玉命

高津比売命 天児屋根命 於加美姫命

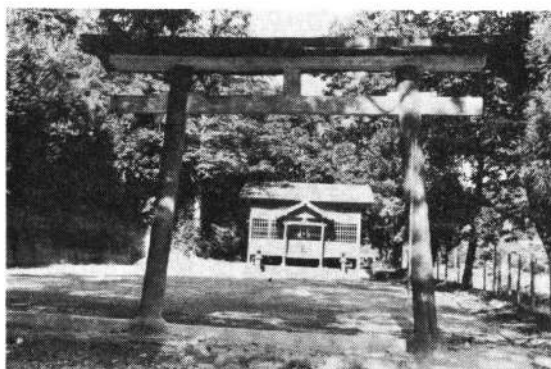
於加美神

祭祀 例祭 三月二十四日

(一) 由緒

従来霧島神宮末社

天文二十一年（一五五二年）北郷讃岐守忠相、尾張守忠親が造立したという棟札があったという。正徳二年



堅 神 社

義弘及び義久公御嫡女於加美姫の三人当所に御宿泊中の助勢を待ち堅神社の建立なり、於加美姫又深くこの神を信ぜられしを以て後当社に合祀するという。

明治四年四月管轄庁より持松村神社として定められる。その

(一七二二年)信徒協力を以て改造し宝暦十一年氏子協力し復々改造す。これが現在の社宇である。維新後も氏子より少々の修理あり(以上霧島神宮保存明細帳写)

天正四年八月島津義久公同義弘公より三原遠江殿を御使として当神社に豊後大友御退治の立願あらせられ、次後百六十九年怠なく御祭神料御供用あらせられ、後義久



温 泉 神 社

祭神 大穴牟遲神<sup>オホアナヌチノカミ</sup> 少名毘古那神<sup>スナナヒコナノカミ</sup> 伊弉册尊<sup>イサノミコト</sup> 配祀、国狭土<sup>クニサツチ</sup> 神

祭祀、例祭 春、秋彼岸入りの翌日

(一) 由緒 一五二三年(大永三年)にかかれた社説には、次のように

後昭和三年八月氏子協力して本殿、拝殿を改築する。

(二) 境内神社

山神社 祭神 大山祇命 由緒不明

五 温泉神社(大字宿窪田安楽四、一九一番地)

書かれていたという。

即ち、康治元年（一一四二年）一人の聖、熊野権現を笈かに入れ負い来りて、岩上に安し此地に一宿し、明日笈を拳こぶしんとせしに動かずして重き事磐石の如し、時に神、潜に告て曰く此地に温泉出べし、安樂に居住を得つべしと。是において、即ち権現を岩上に建立す。今にその大岩、当社の右にあり、其後、聖本邑の女子と縁を結び夫婦と成てここに居住せしに、果して権現の冥助ありて温泉湧出す、因って安樂と名づけしとぞ、代宮司を奥村阿波と呼び、権現を守りし聖の子孫という事になっていたようである。一五八二年（天正十年）肝付彈正が社殿を修造した時の棟札が伝えられて来たというが現存せず、ただ一八〇五年（文化二年）建立の石灯籠形式の石碑があり、これには次のような碑文が記載されている。

桑原郡踊郷安樂之温泉之傍在宮社謂熊野大權現何年□人不  
知造建也天正十年肝付彈正謂復□□□之而不詳審諸  
国雖多所温泉出治病之効□□□夫温泉之為効哉助氣  
温体安血通滯□□□宜軔皮膚明眼目弘上氣治諸病  
脾□□□内者可□之温泉之性不<sub>レ</sub>等一如是温泉氣味柔順而  
無所咎障而治病甚速也以此考之必可依神之氣瘥□予文化二

乙丑暮秋来於此地浴温泉功驗□証明也  
亦其功能人々□所称譽温泉之功驗記

其事刻石建石奉神前  
于時文化二乙丑暮秋

西藩元蘭阜記オランダ



温泉神社石碑

## (二) 境内神社

伊勢神社（祭神、豊受須壳神）

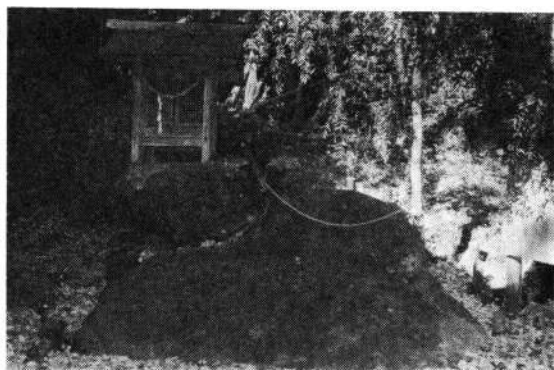
御神靈を奉し各氏子中を一年間巡駐祭祀した。大正十三年境内に社殿を建て奉祀す。なお、祭祀儀式の折海中砂を御塩と称し秋分の日の祭典に神饌に供した。

趣  
旨

祭神 和氣清麻呂

# 六 和氣神社（大字宿窪田三、九八六ノ乙）

最近安栖武二氏が掘出したものである。



安楽神社 お石さま

## （三）お石さま

自然石五角形

量四、五枚位の

大きな石なり

由緒の聖、笈

をおろしたる石

なりと伝えられ

る。

## （四）磨崖仏

温泉神社の西

方三十mの山中

に高さ七十七cm

の磨崖仏（座像）

がある。これは



和 氣 神 社

和氣清麻呂公は神護景雲三年（七六九年）道鏡のために大隅国中津川即ち牧園町下中津川稻積の里に流されたことは史実に明らかである。牧園町民ならびに公の崇敬者間に遺跡顕彰および和氣神社創設の聲が広く起り昭和八年十月牧園村会において和氣神社創設に関する案が議決され、翌九年には県議会において同案に関する建議案

が満場一致で採  
択された。

昭和十二年四月現在遺跡に建設されている和氣祠堂、昭和十四年四月肇国精神修養道場が何れも公の崇敬者の自発的浄財によって竣工され、また、中津川小学校生徒による、健児団、

中津川婦人会による和氣婦人会が結成され、和氣公の精神を学ぶべく、和氣祠堂、道場に集い来る者が多くなった。

かくて度々の陳情、請願の結果遂に昭和十七年五月六日をもって、和氣公遺跡に、和氣神社創建の許可が県知事より下り、昭和十八年十月十三日に地鎮祭が行なわれ終戦後の二十年十一月二十五日に宏大、壮麗な社殿が完成し翌二十一年三月十八日に鎮座祭が行なわれたのである。

## 第二節 仏 閣

### 一 正福寺（大字宿窪田二、二八六番地）

名称 高照山正福寺

宗派 浄土真宗本願寺派（西本願寺）

創立 正平年間（一三四七〜一三五七の間）

開基 懷良親王

浄土真宗帰属

天和二年（一六八二）



正 福 寺

第一世住職 慶山法師 以下血脈相統にて、第二世円智 第三世恵山 第四世不明 第五世廻照院恵嶽 第六世恵観 第七世得証院恵発 第八世智光院恵明 第九世靈超 第十世遍照院智燈 第十一世浄照院靖之 第十二世一樹院尚道と相承し現在第十三世禮之住職 正福寺縁起

正福寺の縁起を案ずるに、後醍醐天皇第九皇子懷良親王、南朝の征西大將軍に任ぜられ、四国、薩摩を経て、肥後八代郡高田御所に在す時（正平二年一三四七〜正平十二年一三五七）父帝（後醍醐）建武四年（

一三三九、吉野にて崩御の菩提を弔い給わんが為に、八代郡宮地村の勝地を卜し、悟真寺外十六ヶ寺の禅刹を創建し給う。本寺はその一にして、親王薨去（弘化三年

一三三三）の後、南風競わず、従って寺亦漸く衰う。

降って元龜天正の戦国時代を経、寛文延宝の頃に至りては、唯僅かに正福寺の古跡を存するのみ、天和二年（一六八二）僧慶山、空しく古跡の煙滅せんことを慨き、浄土真宗に改めて再興を出願し、同年六月十一日政庁の許可を得たり（現存す）依て堂宇を建立し、旧観を改む。

爾来嘉永二年に至り、（第九世靈超）七月十三日晚、祝融の災に罹りしを以て、更に再建復旧せしが、明治十年（第十世智燈代）西南の役の兵燹に遭い、堂宇古文書、為に烏有に帰せり。茲に於て第十世第十一世の二代に亘り、更に本堂、庫裡を再建（明治二十年）せしも、門徒僅少の爲維持困難を増し、遂に由緒ある古跡の廢滅を恐れ、熊本県当局の許可を乞い、明治三十七年五月十二日付許可を得て当村に移転し今日に至った。

又現在の寺院、境内地の沿革は、次の如し

踊説教所創立願 明治十三年四月三日

本願寺別院受付許可 明治十三年四月十二日

#### 説教所建設願

戸長 山口直左エ門受付同年四月三十日県令岩村通

俊 聞届 第六八一号

明治十三年五月七日付、を濫觴とする。

明治十四年、本山より方便法身尊影御下賜

同年三月二十五、六の両日、遷仏法要並開所式

その後数名の布教員を経て、明治三十三年より瀨本某布教員、三十五年、村井得忍開教使が駐在、明治三十六年二月十二日開教使、西藤靖之師着任、明治三十七年五月十二日、正福寺の寺号、及び住職がそのまま移転す。

明治四十三年、本堂及び書院完成

大正九年 宗祖聖人六百五十回忌厳修

昭和三年一月十四日、第十一世靖之遷化

同年四月六日 第十二世尚道住職拜命

昭和五十三年三月三十一日、第十二世引退

同年四月一日 第十三世礼之住職拜命

#### 法宝物（主なもの）

一、蓮如上人御真筆名号本尊 一幅

一、阿弥陀如来立像 一駄 正徳元年造

一、宗祖親鸞聖人御影一幅 寂如（一六六二）一七二五

間)上人御判

一、聖徳太子絵像一幅 寂如上人御判付

一、七高僧連座御影一幅 寂如上人御判付

一、蓮如 広如御連座御影一幅 明如上人御判

是等は全て八代正福寺より将来したもので住職の私せるものではないが、西藤家と共に伝えられたものである。

教義その他は宗派の定める所、教化組織は、仏青、仏婦、仏壯、又幼児保育の薫染保育園がある。

## 二 高台寺(大字高千穂三、八六四ノ五)

名称 浄土真宗興正寺派高台寺

宗派 親鸞聖人を宗祖と仰ぎ本山興正寺を中心とした宗教団体法人

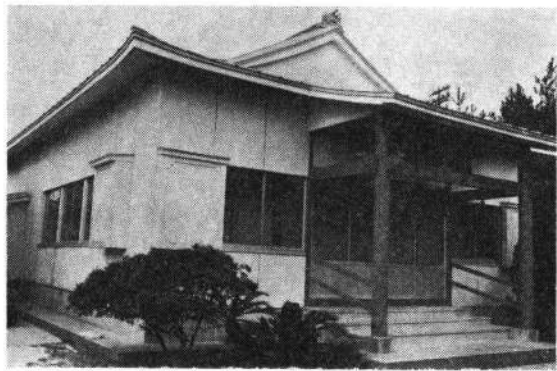
教義 真宗教学教義を伝導し教養と人格の養成に

勉め説教、講演、文章伝導を主とする。

布教

。恒例布教

定例により之を行う。青年会、婦人会、日曜学校等



高台寺

。臨時布教

随時

。特殊布教

学校、官公庁、

会社、工場等

創立

大正十一年三

月二十六日

当時奈良県宇

智郡病合部村

樫辻専崇寺住

職坂口昭門師

は本願寺布教

師として熊本

県下の布教の序に当霧島温泉地が紹介され硫黄谷の堀切清彦氏の紹介で丸尾館主蔵前仁蔵氏(亡)を引合わせられ、この地が聞法不便の地の故をもってぜひここに寺を開基するよう要望された。

。先ず信徒七十九名をもって真宗興正寺派の説教所として認可

。大正十二年八月二十六日霧島会館設立並に落成式  
。大正十三年三月十九日霧島説教所  
。大正十四年九月二十二日高千穂説教所設立並に落成式

。昭和十五年三月二十日高千穂布教所  
。昭和二十二年七月二十八日高台寺号認可  
。現在二代住職 坂口定照師

### 第三節 その他

#### 創価学会九州研修道場

所在地（大字三休堂字鉾投一、八二四—九）

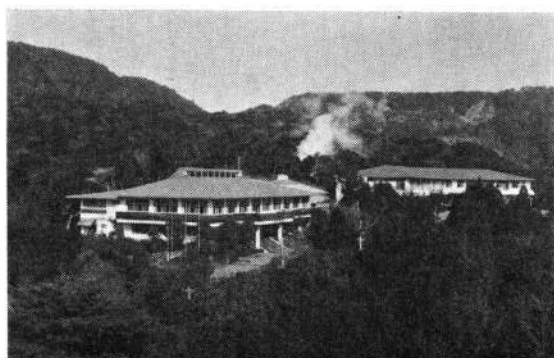
名称 創価学会九州研修道場

宗派 日蓮正宗（総本山、大石寺）

設立年月日 昭和四十七年九月六日

経過

九州研修道場は、全九州の会員の心からの願いと真心の結晶として、昭和四十六年十月一日に着工し、翌年八月二十三日に道場本部が完成、同年九月六日に落成式



創価学会研修道場

（開所 入仏式）を行なっている。創価学会の研修道場の中ではもっとも大きい研修道場である。同研修道場は、付近に石坂川が流れ、カシやクスなどの林、豊かな緑が広がる景勝の地に立ち、晴天の日には錦江湾、桜島などの雄大な展望も楽しめる。また敷地内には、数多くの動植物が自然と和合して生息し、まさに自然を呼吸する研修道場との表現がピッタリである。

この霧島の大

自然と見事に調和した同研修道場は、九州広布を担う法友の、信仰練磨の道場として、幾多の人材輩出の機能をフルに発揮してきた。なお、昭和五十年

十一月に、創価学会創設の恩師、牧口常三郎初代会長の遺徳を後世永遠に顕彰するため、池田第三代会長の提案により「九州牧口記念館」が設置され、また、昭和五十三年八月には、会員待望の「九州広布記念館」が完成している。現在まで同研修道場を利用した会員は、およそ十六万人を数えるに至っている。生命の尊厳を訴える日蓮大聖人の仏法を土壌としながら、新しい人間文化を築いていく—という会員の願いが、この火の国の大地から幾重もの共感の輪となり、拡がっていくことを心から期待し、今日も勇躍前進して広布の活動に汗を流している。

#### 施設の概要

主な施設は次の通りである（完成順）

- ① 道場本部
- ② 火の国道場
- ③ 牧口記念館
- ④ 青年道場
- ⑤ 旭日道場
- ⑥ 九州広布記念館

#### 活動内容

創価学会の礼拝施設である同研修道場は、九州を中心にして、会員が本尊に勤行、唱題し、日蓮大聖人の仏法教義を研鑽し、信心の団結のきずなを強めるため、グループ単位で自主的に行なう研修会の用に供することを主な目的としている。

### 第四節 史 蹟

#### 一 古 蹟

##### (一) 南洲翁宿营地の跡

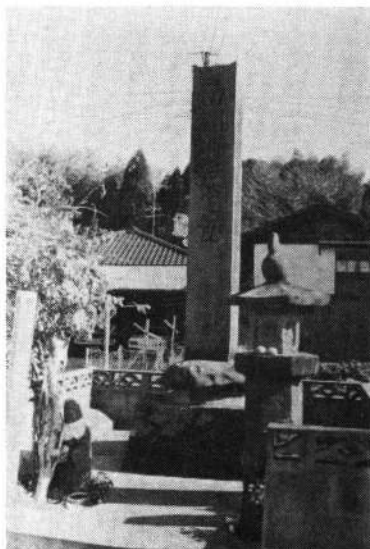
牧園駅（現霧島西口駅）から、東北約一〇〇mの所にある。その碑文に次のとおり記してある。碑文の文字は、陸軍中将古海巖潮の書によるものである。

明治十年、薩軍利あらず進んで日洲長井村に集中す。

官軍の攻撃甚だ急なり。翁八月十八日選兵約五百を以て松崎可愛嶽の嶮を突破し祝子川鹿川を経て二十一日三田井に進み夫より更に七山神門眼鏡村所上槻木小林を経て馬関田に達し三十日横川に向う会々官軍の遮る所となる。依りて一隊を留めて之を扼せしめ転進して踊郷宿窪

(二) 笠取の戦跡

宿营地より東南約2kmの所である。(現在のひばりが



南洲翁宿営之跡

田に到り前田萬兵衛の家に宿す。此処即ち其の宅跡なり。時に官軍と宇笠取に於て衝突し銃火を交ふる事数時間、翁は三十一日未明宿所の下金山川の浅瀬を渡り間道を経て蒲生に到り九月一日鹿兒島に着し翌二日城山に入り以て二十四日に及び。回顧すれば翁逝て五十年追慕の情転々禁ずる能はず。依つて記念の為碑を建て翁の宿営由来の大事を録し我村に於ける其の遺蹟を表す。大正十五年十二月建立、牧園村教育会。



笠取戦跡

丘住宅・自動車学校附近)。笠取戦況によれば、八月三十日午後二時頃、薩軍宇笠取に向うや、官軍は今の笠取堀切東側老松木（今はなし）を中心とした右上に配列す。薩軍は、市塚堀切の並木にたてを取り西北に展開し、西方の谷間を隔てて茲に戦闘は開始せられたり。時に午後二時過なり。兵数兩軍共に各々百人内外にして、

何れも援兵の望なきを以て、断続的に戦闘し、双方共数名の負傷を出せり。遂に夜に入り休戦篝火を焚き各陣地を守りたり。薩軍は笠取を突破するも、踊街道は国分に迂回せるを以て、翌三十一日午前三時頃当村荒武馮

輔を先導とし、蒲生を経て鹿兒島に向へりという。

(三) 和氣清麻呂公謫居の遺跡

肥薩線隼人駅より北方約九km余、同線霧島西口駅より東南約八km、牧園町大字下中津川にあり、和名抄に大隅国桑原郡稻積とある地は、この地のことである。

清麻呂公が、奸僧道鏡の怒りにふれて、大隅国に流されたことは史上有名な事実ではあるが、公謫居の期間、は、称徳天皇の神護景雲三年より、光仁天皇の宝亀元年まで、約一年間のことであり、里民の口伝も漸く減び、かつ文献も乏しいので、その遺跡は永く明らかにならな



忠烈和氣公之碑

かったが、英主島津斉彬公がこれを慨き、八田知紀にこの調査を命じてから、はじめてその遺跡が世に顕われたものである。

ここにある「忠烈和氣公の碑」は、明治三十四年秋、子爵税所篤等の建設にかかるものであり、この地北方遙かに高千穂の霊峰に対し、近くには犬飼の瀑布もあつて、景観すこぶ

る大である。この碑の附近に、

照国公手植松の碑、及び義人稻積翁の碑がある。両碑とも大

正十四年一月十六日、薩藩史研究会によって建設されたものである。

(四) 義人稻積翁の碑



牧園町史跡案内

奈良時代の末期、隅州旧桑原郡稻積里に義人あり。稻積翁と云う。当時、会々和氣公清麻呂の竄<sup>ぐん</sup>せられてこの地に至るや、翁は公の忠烈を宗敬し、身の貧苦を忘れて奉仕する所あり。また、公と力をあわせて中津川の河伯祭の陋習を禁絶し、更に水利を興して灌漑に便し、以て衆庶<sup>しんきやう</sup>を賑給しその流沢、今に尽きざるものあり。因て一碑を公の忠烈碑の傍に建て、この義人の遺跡を天下諸民に告ぐと云爾<sup>しかい</sup>。



義人稻積翁之碑

(五) 熊襲穴居跡

宿窪田塩浸温泉の下流にある。昔、熊襲穴居の跡と称

せられる。内部は岩石に囲まれ、数十室に分かれ、太平洋戦争のときは、附近の住民が避難居住したこともあり、奥深く続き、その全部を踏査した者がない。

また、古代の英雄日本武尊が、天皇の命令で熊襲を討ちとった、武勇伝にまつわる洞窟でもある。日本武尊が熊襲の首領川上のタケルを退治するときに、女装したところと言われ、またの名を嬢着の穴とも言われる。岩壁にボツカリと口を開いた洞窟は、大人でも立ったまま中にはいることが出来るほどの大きさである。

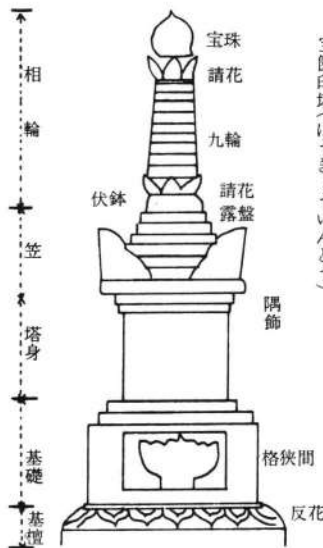
(六) 宝きょう印塔（伝曾我どん墓）

三体堂中福良七八番地刀迫勇雄氏宅の上方、山の中腹に、昔から「曾我どん墓」と呼び伝えられてきた三基の石塔がある。

いわゆる曾我どん墓と伝えられてきた遺跡は、各地に残されており、母の発願により、日本の国々に建てられたとも伝えられるが、薩藩では、土風振作と孝行をすすめて、随所に建てられたともいわれている。しかし、おそらく盲僧琵琶の物語りの中に、曾我物語が含まれて、人口にかいしゃしたものと思われる。日向の国を根拠とした伊東氏は、祐経の子孫であるので、ここには曾我墓

は存在しない。これと角逐した島津の領内には、その数が多いともいわれる。この墓を代々みとってきた井手上氏は、伊東氏（曾我の一族）の出で、近在からのお詣りもあったという。

宝篋印塔（ほうきょういんとう）



しかし、この石塔の形状は、明らかに宝きょう印塔である。宝きょう印塔の形式は古いものであるが、鎌倉時代から室町時代にかけて、武士たちは明日をも知れぬ生命の不安におびえて、五輪塔や板碑宝塔などを建立して、来世の冥福を祈った石造建造物の一つであるから、これがたまたま曾我どんの墓と信ぜられ、伝えられてきたことは、どちらも中世武士の時代のものと考えられた

点で、偶然一致していて面白い。

この宝きょう印塔を調査された古石塔の研究者、故黒田清光先生は、南北朝時代に、人吉より北隅に進出して活躍した相良の一族永留氏が、供養のために建てたものであると断ぜられた。（文化牧園第二号所収）

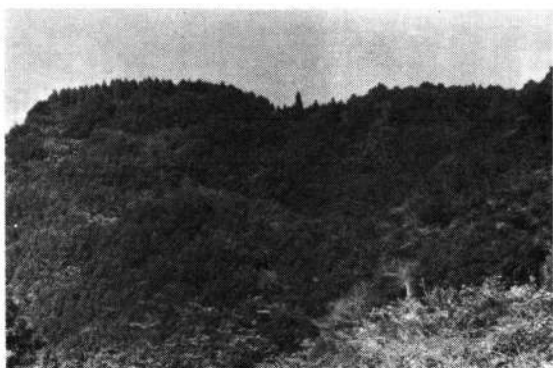
※詳細については、中世の「牧園の古石塔」の項を参照のこと。

#### (七) 踊城跡

踊城は、巢窪田村にあり、当城本丸を新城という。二の丸を中之丸といい、三の丸を内城という。

東の方は、野頸にして平地に接す塹の跡あり。南より西北は深谷にして、急流の山川、城下を繞る。即ち金山なり。金山川は、横川邑と日当山邑との分界にして、両邑の地域西に接す。川水深くして渡るべからず。山上より仰ぎ望めば、石壁数十仞、直立して天陰なり。土人の伝に、昔日敵軍来りて攻めしことありしに、陥る能はず。城中要害堅固なるを恃み、金鼓を鳴らし、舞踊をなして楽しめたり。之より踊城といいしとぞ。古は横川氏、税所氏、北郷氏、北原氏等の所管となりて沿革一ならず。

廓庵主」と記され、「元和七年辛酉五月二十九日」と紀年があり、裏面には「正徳六年二月改之」と記され、右側面に「島津源七郎忠直」と刻されているから、これは第十八代藩主島津義弘の弟家久の子で、重虎とも忠直ともいった人で、その晩年、少なくとも慶長十九年より、その没年の元和七年まで、三代堂村（今の三体堂）など



踊 城 跡

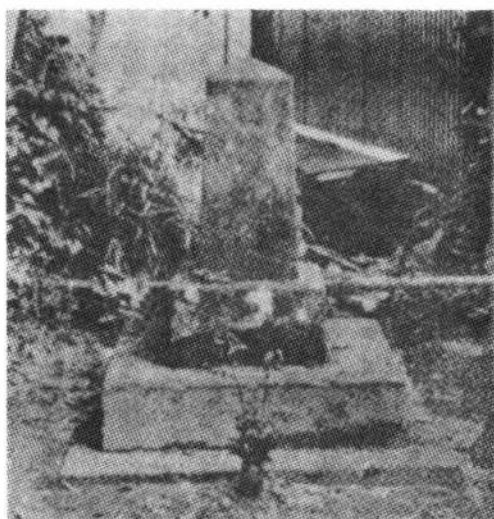
永禄五年、北原氏の將白坂佐渡介、当城を以て島津大中公に降る。（地理纂考）

# (ハ) ツゴドン墓

牧園町宿窪田、田原のタツガ迫には墓地が多い。その入口にある墓には、正面に「然叟清

七百十四石の領主として、この地に陰栖した人の墓である。正徳六年は、その没後より八十五年（約百年）を経過した年に当り、この時はじめて現状に改められたらしく、そこに何らかの原因が介在したということが想像されよう。

本藩人物誌（県立図書館蔵）によれば、忠直は家久と樺山善久の女との間に、天正二年に生まれ、三歳のとき



東郷重尚の養子となった。重尚は、永祿十二年、川内の渋谷氏が島津氏に降ったときに共に行動し、東郷、水引、湯田、京泊の地を納れ、ひきつづき東郷の地を与えられた人である。

島津氏が霧島山の東にまで勢力を伸ばし、伊東氏と相對峙したのは、大永、天文年間以後久しかったが、最後にその根拠地を伏滅したのは天正五年である。その後、天正七年以後家久が佐土原のまもりを固めたので、忠直も父のもとに住み、天文十五年、豊臣秀吉が来攻したとき、すでに父を失っていたが、東郷の城を守っていたのは、その老臣たちであった。秀吉の本軍は西九州を南下したが、別働の豊臣秀長の軍は、大分を経て南下した。家久はこれと交戦の間に毒殺せられ、その間島津氏との和議がととのい、佐土原は依然島津氏の領有をみとめられた。

その後五年を経て起った文祿の役には、兄豊久とともに朝鮮に渡り、従軍の途上義弘の命によって島津氏に復帰、重虎を改めて忠直と名乗った。時に年十八歳。

しかし、由来病弱の生れで、間もなく佐土原に帰り、姓も東郷に改めている。

時あたかも文祿検地が進捗し、その検地と終了後の新規土地配分に、主力を握っていた都城の伊集院忠棟のひごのもとに、文祿四年九月菱刈本城の地五百七十余石が与えられ、つづいて十二月には、宮崎県田尻村、山野などが加増せられて、合せて一千石を領した。

その後約十年、慶長五年関ヶ原の合戦には、時代が急転直下した。兄豊久が討死したのに、忠直はその女に、喜入忠統の男をめあわせ、自らは慶長九年に引退した。三体堂に來たのはこの年ではないにせよ、慶長七年に伊集院忠棟が誅せられ、にわかに都城を中心として起った庄内の乱が、彼にとって甚大な不利となったものと考えられる。

彼の住んだ佐土原は、伊集院忠棟の領国と境を接し、彼は若くて伊集院は考巧の士、薩藩きっての文治派の雄であり、豊臣中央との交渉の深い関係にあったのであるから、忠棟なきあと、一向宗掃蕩の名目で、武断派に排斥せられても、仕方のない立場にあったのである。

土地の人たちの伝説によれば、彼の邸に夜襲がかけられたが、白い雉がときを告げて、彼の危急を救ってくれた。それから土地の人は、白いにわとりを食べないと言



われている。この伝説は、あるいは「かやかべ」の人たち  
に言い出された、霧島信仰から起ったものとも考えら  
れるが、いずれにせよ、彼の身辺、一向宗の信仰に関係  
づけられることには変りがない。

⑨ オイッサマの墓

ツゴドン墓入って、かなり離れた路傍に、オイッサ

マの墓と呼ばれる墓がある。墓に芋石は置かれず  
に、台石の上に、板石にほられた阿弥陀様の像が  
置かれている。陶製のすり鉢がかむせられている  
ので、その像は真あたらしい光明さを感じられる。  
この墓石の傍には、

次のような副碑が立てられ、ことの詳細を物語ってい  
る。

花林長春大姉 父は島津中務大輔家久 母は樺山安芸  
守善久の女 永祿九年生。

はじめ根占大夫重張に嫁し、離別の後、質となり都に  
上る。洛にあること十四年。慶長五年郷に帰る。日州高  
岡、隅州本城等に移住し、後公命に依り隅州加治木に移  
る。元和七年四月二十二日卒。年五十六歳。本城氏輝澄

謹誌

(原漢文)

オイッサマは、前掲源七郎と同父母の姉弟で、戦国以  
来の宿敵として、島津氏に容易に降らなかった根占氏に  
嫁ぎ、若くして夫と離別、秀吉来攻の天正十五年、島津  
降服の人質の一人として京洛に上った。二十一歳の時で  
ある。居ること十四年、たまたま慶長五年関ヶ原合戦が  
突発し、脱出、兵庫沖において戦破れて帰国途上の義弘  
に遭遇、手に手をとって日向細島に上陸、佐土原に帰っ  
た。慶長六年、佐土原は公領として没収せられたため、  
弟源七郎とともに知行所日向の田尻に移り、のち菱刈の  
本城にうつり、慶長九年三代堂村に移ったものと思われ  
る。

この頃のことと思われるが、京都から光明仏という僧が来たのを、この人は豊久であると称して、これが布教の手助けをしたということが、本城家文書の中に記されている。長春大姉は、上洛中に、当時一向宗と呼ばれた真宗に帰依していた結果、こうした事態が生まれてきたのであろうが、これはいたく藩のおとがめを蒙る結果となり、問題の光明仏は、当時刑場のあった鹿兒島の南林寺村洲崎において、斬首せられた。文書には彼を呼んで「氣違ひもの」と記している。このため質となっていた在洛の功績に対し、おくられていた知行五百石は召し上げられ、義弘の住む加治木に移住させられた。おそらくその行動を逐一監視して、光明仏の再現を警戒したものであろう。

義弘が始良町の塾居から加治木に移ったのは、慶長十二年のことであるから、この出来事もそれ以後のことであろう。この事があるから、本城家の相続者に内定していた忠直の子徳丸（後の内蔵助忠頼）の議も、取消されているから、オイッサマと同時に、忠直も処罰の対象となっていたものと思われる。

薩藩で、一向宗の禁止が始まった原因については諸説

あり、秀吉来攻のときに、その軍を誘導したのが一向宗の僧侶であったためとも言われている。しかし、慶長二年に朝鮮遠征におもむくに当たり、隈之城役人宛に、義弘が書き残した捷の中に、

一、一向宗の儀、先祖以来御禁制の儀に候の条、かの宗体になり候もの、曲事たるべきこと。

とあって、その由来を記しており、この頃に始まったものと思われる。ここにいう「祖法」も、この年作られた日新菩薩記の中に収められている。

魔の所為か 天眼 おがみ法華宗 一向宗に 数寄の小座敷

の歌であるといわれている。ここにいう「天眼おがみ」はキリスト教のことである。慶長七年、徳川幕府の安堵を受け、島津氏が急いで藩制を整えることとなったため、この義弘時代の政治体制は、寛永年間に幕府の切支丹対策が進み、鎖国という大方針がとられるにつれて、薩藩では一向宗禁止の方針もいよいよ固定し、これが検断のためには、キリシタンとならんで、「宗門手札」を発行することとなった。この「札改め」は、五年毎に行われる掟で、ほぼ二百五十年、明治九年まで続いた。信

徒たることが発覚すれば、番役に呼び出され、厳重な拷問を受け、血判の誓詞を提出させられるならわしになっていた。

こうした藩の方針の固定化に伴い、オイッサマの葬儀も、正規のものが遠慮せられ、没後百五十年にして、ようやく事の進められた次第が伺われるが、それかあらぬか、先ごろ長春大姉の位牌が薩摩郡鶴田町において発見され、事の次第を如実に物語っているかに思われる。

## 二 古社の跡

### (一) 霧島神社（さんかく堂）

三体堂中郡にあり、昔は老樹が茂り、中に三角堂と称する堂があったという。今は個人有の土地となり、山は樹木が伐採されて、殆んど腐蝕した鉄鉾一本が残されている。古老の言によれば、当堂は霧島神宮の祭神である瓊々杵尊の御母命を奉祀したところという。

祠堂は朽ちて、その形状もなくなっていたが、昭和五十五年四月、区民一同の浄財を受けて再建された。



霧島神社（さんかく堂）

は、老樹の根周辺から多くの素焼土器が出土したが、当時はその何であるかを知る者もなく、子供の玩具として与え、今は一物もないという。

## 三 仏閣の跡

### (二) 徳神社跡 とくじ

三体堂飯富社の南、約三〇〇mのところに櫛橋がある。この辺は、昔から老樹が茂り、林間に徳神社があったが、無格社の故をもって、

廃社として飯富神社に合祀し、社跡は田に開墾した。その当時

(一) 真福院の跡

慈峯山長久寺真福院と称し、今の牧園小学校東隣にあった本府大乘院の末にして、真言宗なり。

本尊聖観音（座像長六寸日州佐土原周防入道作）十一面観音新作兩軀を安置す。開山忠実法印（遷化年月伝わらず）松齡公の開基なる由言い伝えあり。本邑の祈願所なり。

(二) 東光寺の跡

日峯山東光寺といった。今の牧園小学校の南隣にあった。

「本府神昌寺の末にして曹洞宗なり。本尊薬師如来（座像二尺二寸定朝作文禄四年乙未九月安置）を安し、開山を喜冠和尚（神昌寺十六世）という。開基年月不詳、当邑の菩提所なり。寺内に貫明公の御霊牌あり。施主の故なりと記せり。

(三) 釈迦堂の跡

三体堂川畑氏宅附近にあり。仏寺にて、釈迦如来の尊像を安置し、庭前には榎の太木が茂っていたという。明治初年の廃仏毀釈の折、ここで仏像仏具を集めて焼いたという。この寺についた田を釈迦田といって、その名が

今に残っている。

(四) 観音堂の跡

飯富神社の一の鳥居前方高地にあり。由緒は詳かでない。こと、三角堂・釈迦堂をあわせて三体堂という村名の由来という。また一説には、三体堂とは飯富神社に三体の神を祭るゆえ、その名が出たという。

(五) 音川山玄龍寺跡

三体堂櫓橋の東方の山中にあったという。今はその跡に三体堂村旧領主新納氏の墓地あり。一墓碑に、明正年間新納市正久珍大口より来り、踊三体堂村領主となりし」とある。のち、山崩れのため堂ヶ平に移したという。

(六) 久習山一雄院跡

上中津川板越の坂上にあったという。

四 御展望所聖蹟記念塔

牧園町高千穂の町営牧場の一角に、御展望所聖蹟記念塔が建立されている。次にその記念塔碑文を掲げる。

鹿兒島種馬所ハ明治二十九年五月創設セル九州種馬牧場ノ

後ヲ承ケ同四十年八月改メ称ス其地原野広闊背ニ高千穂連  
峰列峙シテ前ニ錦江湾ヲ隔テ海門桜島諸山ト対シ煙山浩渺  
風光雄麗ヲ極ム

昭和十年十一月聖上陛下鹿兒島宮崎二県ニ於ケル特別大演  
習御統監ノ後地方行幸ニ移ラセラレ十六日当所ニ行幸シ具  
サニ業務ヲ覽サセ給ヒ次テ便殿ヲリ御愛馬白雪ヲ丘上ニ進  
メ江山ノ勝ヲ矚シ更ニ玉鞭ヲ揚ケテ城内ヲ馳驅シ実況ヲ巡  
視シ給フコト多時ニ及フ

此日天氣爽朗四望豁然龍顏特ニ愉色ヲ拝シ奉ル由來薩隅日  
三州ハ牧野ニ富ミ書記ニ日向ノ駒ノ御製アリ良馬ノ産史伝  
ニ証スヘキモノ少カラス天文中島津貴久あらひや馬ヲ輸入  
シ放牧孳殖具改善ヲ加ヘ勁駿威容ヲ具フト称ス恭シク惟ル  
ニ陛下親シク辺陲ニ幸シ牧場ニ臨御シ給フハ洵ニ空前ノ威  
儀ニシテ恩榮ノ大ナル感激措ク能ハサル所ナリ

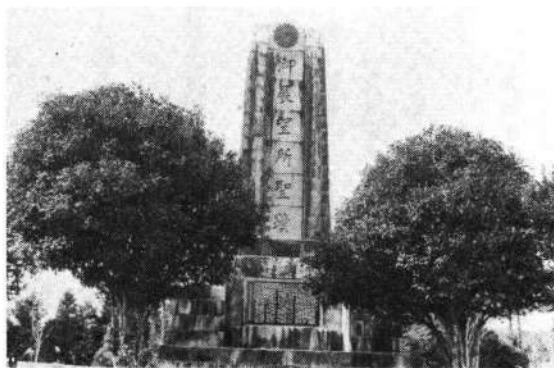
夫レ国民精神ノ作興ハ報本反始ノ誠ニ原ツキ国体ノ明徴ハ  
皇国肇基ノ源ニ溯ラセル可カラス今ヤ時運ノ蘊ハ民風ノ振  
張ヲ促シ国防ノ急ハ馬政ノ發展ヲ要ス宜シク馬産ノ拡充ヲ  
図リ国勢ノ興隆ニ資スヘシ

況ヤ皇祖発祥ノ地古來兵馬ノ精強諸州ニ冠タルニ於テヲヤ  
翼ハクハ益祖業ヲ継キ孜孜事ニ従ヒ以テ報旨ノ万一ニ答ヘ  
奉ランコトヲ茲ニ同志相謀リ塔ヲ聖蹟ニ建テ以テ報效ノ哀

ヲ表スト云爾

昭和十一年十一月十六日

行幸記念事業期成会



御展望所聖蹟記念塔